
彼が異世界でたどる道

ムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼が異世界でたどる道

【Nコード】

N7808P

【作者名】

ムー

【あらすじ】

ゲルマニアのとある小国の嫡男として生まれ変わった人間のお話。

第一話

人は死ぬとどこへ向かうのか。

少なくとも、かつての僕は、その問いかけに対する答えを持っていなかった。それは今でも同じだけど。

しかし、どこへ向かうのかはわからなくても、今いる場所くらいはわかる。

結論から述べてしまえば、僕は一度死んだ人間だ。これは比喻でもなんでもなく、文字通り、僕は一度命を落としているのである。

その詳細な内容については、ここで語る意味はあまりないだろう。この世界で生きて行くには、まったく関係のないことだから。

そんなわけで、前世のことについてはあまり拘ってはいない。ただ、同一の人格を持って“異世界”で生きていく、というのはなんだか興味深い。

単純に生きられるというものはいいことだ。ろくな死に方をしなかったからね。

……さて。

そんな僕が“新たに”生まれたのは、ゲルマニアという国の北部にあるホルシュタイン公国のキールという港町だった。

ゲルマニアはかつてばらばらだった諸侯が寄り集まって出来た国。皇帝という戴冠者を頂いてはいるけれど、実際にはお飾りのようなものだった。

ホルシュタイン公国も、そんな諸侯たちの中の一国に過ぎなかったのだ。

公国という名の通り、国を治めているのは公爵家だ。それが僕の

生家でもあるホルシュタイン・ゴットルプ公爵家である。

この家は、ホルシュタイン公国と、その北にあるシュレースヴィヒ公国の君主でもあった。

そう。この家はどういうわけか“隣り合った別々の国”の君主なのだ。理由はいろいろとあるけど、どうも北のゲルマニアに参加していない国とのいざこざが関係しているらしい。

実質的には、シュレースヴィヒ公国の大部分で我が家の統治は及んでいないとか。

まあ、僕が公爵位を継いだときにでもなんとかして両者を合同させればいい。時間はまだまだ、何十年とあるのだ。

キールは、ゲルマニアの北部に造られた長大な大運河の終点に位置している。この町の港から北東海に出て漁をする船も多い。

気候的には南西のトリステイン王国に比べて、やや寒いくらいだろうか。冬ともなれば、町は真っ白な雪景色に覆われる。

ただ、今は春だ。夜は冷えるから毛布が必須だけれど、昼間ならばその必要もない。

その日も、僕は屋敷の日の光がよく当たる場所で本を読んでいた。家庭教師のヴォルテール先生から読めと押し付けられた彼の自著だ。

僕は先日杖を貰ったばかりなので、本当は魔法の練習でもするべきなのだろう。しかし、こうして本を読んでいる方が好きだったりもする。

父のように、立派で強いメイジになりたいという想いも、当然抱いてはいるけどさ。

きっと、メイジという単語には耳覚えがあるだろう。そう、ここは魔法のある世界だったのだ。

もうここがどういう世界なのか、あらかたその見当はついている。ただ、まだ確証がない。なにせここは物語の舞台からはあまりに離

れているからだ。

確かめようがないし、本当にあの世界だったとしても……。

いや、いちいち考え始めるときりがないな。それは後にして、今は本に集中しようか。

……そうして、しばらくして本一冊を読み終わると、今日はもうすることも特に無くなってしまった。

僕は一人っ子だ。兄弟は一人もいなかった。

残念ながら、ゲルマニア皇族出身の母はとうの昔に亡くなっているし、父はこのところ起きているゲルマニア北東部での内戦に付きっ切り。

一般的な転生者とは違って、屋敷のメイドたちに手を出すなんて度胸は僕にはなく、ただ毎日を一人でだらだらと過ごしている。

将来的には小さくとも国の主となるのだから、今のうちは学業に励むべきなのだろう。

少なくとも、僕は『虚無』やら聖地やらとは無関係なまま生涯を送る。そう考えている。

それも良いだろう。僕は、新しい故郷となったこの町が好きだ。何も無理やりに隣国のトリステインなどに行きたくはない。

せいぜい、物語には記述されないだろう小領主のまま、この新しい生涯を精一杯終えてやるさ。生まれ変わる前は早死にだったからね。長生きしたいものだよ。

そうやって勉学に励むばかりの日々を送っていた、ある日の事だった。

つい先日終了したばかりの内戦の後処理を終えた父が、ようやくキールへと戻って来たのである。

父のカール・フリードリヒは、ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世の即位前からの側近であり、また友人だった。それ故か、今では帝国軍の大將にまで登りつめている。

皇帝は疑り深い人間で、父の仲間たちも多くが粛清の憂き目に遭ったらしい。

それでも、父だけは皇帝の信任を今になっても失う事がなく、今回の内戦でも討伐軍の司令官に任じられるほどだった。

父がやって来る頃には、僕が先頭に立って、その後ろで使用人たちが頭を下げている。よくあるお出迎えの風景だ。

「ただいま戻ったぞ、息子よ」

「お帰りなさい。お疲れ様でした、父上。大戦果の報はこのキールまで届いております」

「うむ」

僕の顔を見るなり、疲れた様子も見せずに父は頷いた。

父は、生まれや華々しい軍歴とは相反する、腰の低い壮年貴族だ。もっとも、戦場ではかなりの荒々しさを見せるらしいけど……。

少なくとも、僕にとっては優しい父だった。母を早くに喪っていたのも、もしかたしたら少しばかり関係があるのかもしれない。

「息子よ。今日は少し、お前に頼みたいことがある」

「頼みたいこと？」

「ああ。少しばかり厄介なことになっていてな。私は今からウィンドボナへ向かわねばならん。その前に、ある少女の身柄をこの屋敷に置いておきたい。世話を頼む」

帰ってくるなり、一体なんだろうと思えば……。ここにきて、女の子の世話をしろなどと始まってしまおうとは予想外だった。

僕のいぶかしむような表情に気が付いたのだろうか。ごほん、と喉を鳴らして、父は言いにくそうにする。

そのうちに父の乗ってきた馬車の一台後ろの馬車の扉が開いて、中から一人の少女が姿を現した。

小さな女の子だった。僕よりもずっと年下なのだろう。おぼつかない足取りで、不安を滲ませた様子で歩み寄ってくる。

「……この子は？」

「うむ。彼女の生まれた家は、“少しばかり厄介なこと”の根本原因に近くてな。さる方の命で私が身柄を預かったのだ」

なるほど。つまりは、人質ということだろうか。

今回の内戦は、アルブレヒト皇帝の即位に反発する東部諸侯と、かつての肅清を免れた皇帝の親族が結びついて起きた事象だった。

つまり、この子はその諸侯か、あるいは……。いずれにせよ、かなり厄介な人物であることに変わりなかった。

まあ、ここで預かるくらいなら良いだろう。僕が実際に世話をするわけでもないのだろうし。

「うむ。助かるぞ、息子よ。何かあれば伝書フクロウを飛ばして報告せなさい。それでは、またな」

「はい。お体に気をつけてください」

わずかな再会だ。よほど急いでいるらしく、父はきびすを返して馬車に乗り込んだ。僕はひらひらと手を振る。すぐに、馬車は屋敷を出て行った。

もうちょっと話をしたかった気持ちはあるのだけど、仕事ならば仕方がない。諦めよう。

ちなみに、実質的な公国の統治は、父の叔父が行っている。父は軍人だから、あまり領地にまで手が回らないのだそうだ。

……さて。この場に残されたのは、メイドの方々と僕、そして父に連れられてきた少女だった。

まだ幼い（僕も十二歳を過ぎたばかりの子供だが、それ以上に）女の子が、どういった理由で生家からこんな場所に連れて来られてしまったのだろう。

見た限りでは元気がないようだ。少し長めの亜麻色の髪を自分の指で弄びながら、ちらちらとこちらを窺うように視線を飛ばしてくる。

身なりは良い。つまりは、それ相応の生まれであるということの意味する。

「やあ。僕はカール・ペーター・ウルリヒ・フォン・シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン・ゴットルプ。きみの名前は？」

「エリザベート。家名は……ありません。家が無くなったから」

これは、思っていたよりもハードな人生を送っていたらしいな。家というのは、恐らくは貴族としての彼女の家のことなのだろう。ゲルマニアの港町でのんびりと暮らして来た僕では、彼女のこれまでは想像するのも難しい。

まあ……とりあえず。いつまでなのかわからないけど、彼女は僕と暮らすのだから、なんとかしてあげたいとは思っただけだ。

「そっか。よろしく、エリザベート」

「……」

うう、沈黙が痛い。僕自身あまり社交的な性格じゃないから、こういうのは辛いんだよね……。どうしたものだろう。

まったく、穏やかに暮らしたいよ。

エリザベートが屋敷にやって来てから、もう一週間が過ぎ去ろうとしていた。

ちなみに、この世界での一週間は八日間である。つまりはそれだけの日数、僕はろくに彼女に話しかけられなかったのである。

しばらく休暇を取っていたヴォルテル先生に「溜めていた分」と言われて、課題を山のように出されたのも原因だったりする。

……いや、それでも、やっぱり自分の性根が一番の原因だったのだらうけど。

彼女の世話は執事さんやメイドがしてくれるので、僕は自分から関わろうとしなければ、それこそまったくエリザベートと関わることがなかった。

僕は、いわゆる“へたれ”であると自認している。今まで、自分から女の子に積極的に話しかけたことなんて、ただの一度もない。自分でわかっているからといって、すぐに生来の気質をどうにか出来るわけでもなかった。そこが辛い。

……だけど、いつまでもこうしているわけにはいかない。覚悟を決めよう。

一週間前にも思ったけど、同じ屋根の下で暮らす以上は、せつかく知り合えたのだからなんとかしてあげたい。

それを彼女が望んでいるのかは、少し不安があるけど……。いつまでも屋敷に籠っていたって、ろくなことになりはしないのだ。

そういうわけで、僕はエリザベートを連れてキールの町へ出よう

と、彼女の部屋の前へ足を運んでいた。

護衛は僕の侍従のミスタ・ヴルムにお願いするつもりだ。頭の固い部分がある人だけど、なんだかんだといって僕のことを守ってくれる良い人だし。

そんな想いを胸に抱きながら、軽くドアをノックした。

……けど、いくら待っても返答がない。ここにはいないのだろうか。

「エリザベート？」

念のために呼びかけてみたけど、相変わらず反応がない。なんとなくドアノブを回してみると、鍵がかけられている。

どうやら彼女はここにいないらしい。一体どこへ行ったのだろう。少し、捜してみるか。

キールの屋敷は、実は建物自体はそれほど大きくない。もっとも、僕の感覚でいえば豪邸でしかないのだけど……。

世の大貴族は、もっと豪華な暮らしぶりをしているのだ。ホルシユタイン・ゴットルプ家はむしろ家格に見合わない生活をしている。過去に父の付き添いで連れて行かれた、ベルリンやウィンドボナにある宮殿を目の当たりにしたときには、それこそ本当に度肝を抜かれたし。

そんなことを考えながら歩いていると、そこへ使用人の一人が通りかかった。今年で六十になる、古株のお婆さんだ。

「ああ、ちょっと。エリザベートがどこに行っただのか知らないかい？」

「これはこれは、坊ちゃん。あの子なら、先ほど中庭の東屋で絵本を読んでいるのを見かけましたよ」

「そうだったのか。ありがとう」
「いえいえ」

屋外にいるのか。この数日はまるで顔を合わせていないけど、最初の二、三日はずっと気落ちした様子だったから、部屋にいればかき思っていた。

まあ、それならそれでいい。さっそく中庭へと向かうことにしよう。

そうして、東屋へ通じる渡り廊下を歩く。東屋は中庭の小さな池の中央に建設されている。母が存命の頃は、そこがお気に入り場所だったようだ。

そして、エリザベートはその東屋の中にいた。転落防止の柵から池を眺めて、なんだか物憂げな表情をしているのだ。

……なんだろう。彼女のような幼い少女が見せる表情のように、あまり思えないほどに達観しているというか、老けているというか……。

「エリザベート」

僕が呼びかけると、彼女は一瞬びくっと体を震わせた。そうしてこちらを見やる。キール峡湾の水のように青い瞳が、僕を捉えているのがわかった。

彼女は、何か逡巡するように視線を足元に落とした後……、すぐに顔を上げた。やはりまだ浮かない表情をしている。

年齢でいえば、まだ小学校に上がるかどうか程度くらい年だったのに、やけに大人びて見えるのは何故だろう？

そんなことを考えながらぼうつと突っ立っていると、驚くことに、彼女の方から声をかけてきた。

「カール、さんと言いましたよね」

「うん」

「……そうですか」

……なんだろう。また黙り込んでしまったんだけど。

彼女を見ていると、なんだか母のことを思い出してしまう。ずっと前に亡くなった彼女も、生まれのせいかな、いつも暗い表情ばかりしていたし。

そりゃあ、ね。“あの”アルブレヒト三世の妹だから。肅清の嵐のときはまだ幼くて、性格も大人しかったから免れたらしいけど……。

政略結婚で、好きでもない側近の嫁にされて早死にしちゃったんだから、なんだか可哀想な人だったな。

それでも、僕のこととはたった数年でもかなり可愛がってくれたけど……。やっぱり自分の子供は可愛いのだろうか？

「……カールさん？」

「え？」

物思いに耽っている間に、エリザベートが僕のすぐ近くまでやって来ていた。不思議そうにこちらを見つめる様子には、先ほどような気配は微塵も感じられない。

……僕の勘違いだったのだろうか？　こんな幼い女の子を見て母親を思い出すなんて、僕も焼きが回ったのかな。

「ああ、いや。なんでもないよ。それより、これから町へ行かないかい？」

「町？」

「うん。この町はゲルマニアでも有数の港町なんだ。海軍の軍港もある。せっかくここへ来たんだから、一緒に見て回らないかい？」

やはり逡巡するような、悩むような仕草を一瞬だけ見せたけど、それでも彼女はすぐに首を縦に振った。

「……はい、わたしも町を見てみたいです」

「よし、決まりだね。支度をしよう」

そう言って、僕はエリザベートの手を引いた。結構な勇気がいることだったが、異性というよりも妹のように扱うことでなんとかした。

……さて。どこを案内してあげよう？

下町でヴルスト（ソーセージ）を買うのもいいし、植物園をゆっくり見るのもいい。オペラハウスは……少し、早いかな？

よくよく考えてみれば、僕がこうして年の近い誰かと町へ出るのは初めてのことだった。少しでも目から汗が出たけど、決して悲しいわけじゃないんだ……うん。

第一話（後書き）

というわけで始まります。更新は不定期。予定は未定。

第二話

僕はエリザベートを連れてキールの市街地までやって来ていた。後ろには護衛のミスタ・ヴルムの姿もある。

キールは、ハルケギニアではそれなりに大きな港を抱えた都市だ。昼間人口もそれなりに多く、僕らが歩いている大通りも人で賑わっていた。

街角のパン屋、魚屋、行商人が開いている露店……。ソーセージが軒先にぶら下がっている精肉店なんかもあるね。

通りを行く人々の階級も様々。大多数は町民や漁民、それに商人。僕のような貴族や、警邏に当たっている騎士はたまに見る程度だ。

この近辺は収入が安定している人間が多いせいか、治安はそれほど悪くない。もっと東の開拓地区だとまずいことになってるみたいだけど……。

つと。僕が観察するばかりじゃ駄目だな。今回は、エリザベートに少しでもこの町のことを見せてあげたかったから連れてきたつのに。

なんとなく、隣を見やる。隣とはいいのだけけれど、僕の方が頭二個分ほど背が高いので、彼女を見下ろす形になった。

……うん。思っていたよりも、周囲の商店や露店に興味を持っているらしい。きよろきよると辺りを見回している。

「何か食べたいものとかあるかな？ あれば言ってごらんよ」

「えっと……」

つい今の今まで楽しげにしていたのに、僕の顔を見るなり表情が曇ってしまった。そんなに不愉快な顔をしているのだろうか、自分

は。

名家に生まれた割に、僕の顔は十人並みである。もっとも、そこまで凶悪だとか醜悪だとか、そういうことはないと個人的には思うのだけど。

おっと、それよりもエリザベートだ。

彼女は、ほんの少しだけ逡巡するように視線をさ迷わせたあと、目の前にある何かの屋台を指差した。

「あれが食べたいです」

そういう彼女の指の先にあるのは……、ソーセージを出す屋台だった。軽食としては非常にポピュラーな部類の食べ物だ。

「いいのかい、あれで？」

「はい。わたしの好物なんです」

ふむ、好物か。ならば仕方あるまい。とりあえず買ってあげよう。そう考え、僕はズボンのポケットに手をつ突っ込む。小銭くらいなら自分で持っているのだ。

この世界の貨幣は基本的に硬貨だ。紙幣が無いので、大金になると重量も恐ろしいものになる。一枚一枚はそんなに重くないんだけどね。

屋台の主人は、どうもバイエルンの方からやって来たらしい。白いソーセージが店先に並んでいた。

……これってものすごく痛みやすいんだよな。お店なんかに置いておいて大丈夫なんだろうか。見ている方が不安になった。

まあ、それは今は置いておく。僕は串に刺された一般的なソーセージを二本注文すると、それを受け取って待機していたエリザベートの元へ戻る。

ミスタ・ヴルムはいかにも「いらない」とでも言いたげな顔をしていたので、今回は彼の分はない。というか、いつも彼は任務中は外食をしないのだ。

ソーセージを手渡すと、それまで浮かない感じだったエリザベートの表情が一気に明るくなった。色気より食い気、とはよく言ったものだ。

立ち食いもなんだからと、僕たちは歩いてすぐの場所にあるキール市の中央広場へと向かった。

少しして、中央広場へと到着する。その周囲には、市庁舎や騎士の詰め所がある。真ん中には大きな噴水が設置されていて、定期的に水が噴出す仕組みになっていた。

僕とエリザベートは、そんな広場の隅っこにあるベンチへと腰を下ろした。ベージュの塗装が施された真新しい物である。

少し時間が経ったせいだろう。ソーセージは食べやすい温度にまで冷えていた。さっそく、それに口を付ける。

ぱりっとした皮の歯ごたえ、皮を突き破るのと同時に出てくるたくさんの肉汁。うん、やっぱりゲルマニアに生まれた以上は、これを食べなくちゃね。

ふと隣を見れば、エリザベートも同じようにソーセージをくわえ込んでいた。……食べ方が少し引かかるけど、気にするのは野暮ってものだろう。

「おいしい?」

「はいっ。とてもおいしいです。びっくりしました」

顔を見ればわざわざ問いかける必要もないと思うけど、僕はあえて声をかけてみた。それに答えてくれる彼女ときたら、今まで見たこともないような笑顔だ。

……うん。もっと早く、こうしていればよかったかもしれない。

思わずそう考えてしまうような、そういう笑いだった。

そうして軽いおやつを食べ終えた僕たちは、今度はキール港へ向かうことにした。

中央広場を抜け、再び大通りを北進する。そのまましばらく歩くと、ゲルマニア有数の大運河がその姿を現すのだ。

運河はキール峡湾へと繋がり、そこから北東海へと通じている。また、西のユーラン半島へ向かうことも可能だ。これはかえって陸路よりも早いかもしれない。

今だって、見ているだけで何隻もの船が運河から海へと出て行くところだ。ただ、今は昼ごろなので、漁船は岸壁につけられたままである。

港に沿うようにして、僕たちはしばらく海沿いを歩き始めた。海を眺めて育って来た僕は見慣れた光景だけど、いつ来ても飽きることはない。

「とても良い場所ですね」

「そうだね。ここで生まれ育ったから、鼻根目に見ているのかもしれないけど」

「いえ、わたしの生まれた場所なんて……。土地は荒れ放題で、ただただ寒くて、民衆の心も荒む一方の領地でした。それに比べたら、ここはまるで天国のようです」

うかない声で、幼い少女は憂鬱を滲ませながら口を開いた。

ゲルマニアは、地球でいうベラルーシの辺りまで勢力を伸ばしている。まだ正確な統計は取れていないだろうけど、領土はハルケギニア最大の国家のはずだ。

もちろん、人口は一千五百万のガリアに比べるとずっと少ないはず。にも関わらず、領土だけはほとんど東進しているんだ。

無理な拡張がたたって、東部の諸侯には大きく疲弊するものも出ていたらしい。ウィンドボナがそうした連中を切り捨てたのも、内戦の遠因だといわれている。

ということとは、やっぱりこの子は……。

「……どうしました？」

「あ、うん。なんでもないよ」

いけない、僕の悪いくせだ。考え事を始めると、会話の途中だろうと何だろうと、周囲が見えなくなってくる。この癖は直さないと……それにしても、なあ。子供の口調じゃないよな、エリザベト。やっぱり落ち着きすぎているっていうか……。

僕も大概変な子供だろうけど、この子はそれに輪をかけて変わっているように思う。あまり妙なことになるかいいけど。

「もうそろそろ帰ろうか。今日はけっこう歩いたし……」

「そうですね。ミスタ・ヴォルテールも若様のご帰宅を待ち望んでいることでしょう」

……っぐ。この騎士め、こんなときばかり口を挟んでくるとは。さっきまでまったく口を利かなかったくせに。

まあ、いいか。少しはエリザベトと話をすることも出来たし、まるで収穫が無いわけではなかった。無駄じゃなかったんだ。

そう思い込むことにして、僕はエリザベトの手を引いた。二度目ともなると、ずいぶんと気が楽になるものだ。

「じゃ、帰ろうか。今日は一緒にご飯を食べよう。いつも別々じゃ寂しいからね」

いつもは課題を終えてからご飯を食べるから、この子と食事の時間が合わないんだよな。これからは少しだけ予定を変えようか。

とまあ、そんなことを考えつつ、僕らは屋敷への帰路についたのだった。

しばらくして屋敷へ戻ると、僕の部屋では歴史書を携えたヴォルテール先生が待ち構えていた。

ちなみに、彼は元々トリスティンの出身だったらしい。しかし、現地で散々王家の批判をやらかした咎を受けて、他国へ亡命せざるを得なかったらしいのだ。

本名はフランソワ・マリイ・アルエというらしいのだけど、僕としては馴染み深いヴォルテールの方で呼ばせてもらっている。

ペンネームみたいなものらしいけど、まあ気にしなくてもいいだろう。

歴史を学んでいると、僕の生家のホルシュタイン・ゴットルプ家の名前が結構出てくる。後はアンハルツ・ツェルプストー侯爵や、ハルデンベルク侯爵家……。

そういえば、僕はゲルマニアに生まれたというのに、今までのキュルケの顔を見たことがなかった。

まあ……。トリスティンの上級貴族でも、魔法学院に入学するまでは面識が無かった、なんて人たちが多かったみたいだし。

気にしてもしようがないだろう。ここから彼女がいるであろう領地までは、結構な距離があるしね。

会ってみたいって気持ちがないわけではないけど……。肉食系の彼女と自分じゃあ、まるで相性はよくないだろうなあ。

そんなこんなで。僕は父の帰りを待ちつつ、いつもの通り平凡な日々を送っていた。

エリザベートは、大抵の場合は中庭の東屋で本を読んでいる。どうにも、彼女はあの場所を気に入ってしまったらしいのだ。

心なしか、その表情はここへやって来た当初よりは明るくなっている。段々と心が落ち着いてきたのかな。それなら良かったんだけど。

ヴォルテールさんは例によってどこかへ飛び出してしまった。彼は、家庭教師のくせに生徒である僕を放り出してよく諸国漫遊に出してしまうのである。

父のコネで作った、ゲルマニア政府発行の身分証が大いに役立っているのだそうだ。

……先生がいなくなってしまうと、僕のやれることは読書か魔法の練習くらいしかない。

いつもいつも本ばかり読んでいるのも問題かな。せめて、ウィンドボナの魔法学院に入るまでには、ドットくらいにはなっておきたい。

だから、今日は魔法の練習でもしよう。ごく基本的な魔法は使えるけど、それ以上のまともな魔法はまだ駄目なんだ。

各種の魔法のルーンが記された指南書を手にして、僕は中庭に立った。遠くの東屋では、相変わらずエリザベートが本を読んでいる。実のところ、自分の系統が何なのかすら僕はまだ理解出来ていな

かった。あまり真面目に練習をして来なかったせいもあるのだろうけど。

どの系統が自分にとってもっとも望ましいのかな。どれも一長一短な気がするけど……。

火……はあんまりそれっぽくない。水は割りと近いかもしれない。風は僕には無理だろうなあ。土はやっぱり何か違う。

そうになると、やっぱり水になるのかな。『凝縮』はもう出来るから、次は『ヒーリング』でもやってみようか。

「『イル・ウォータル・デル』……」

ルーンを唱えつつ、杖の先を自分の腕に向ける。なんだか明るい光が出たような気もするけど、特段変わった様子はなかった。

ちなみに、これは祖父から引き継いだ杖だ。なんでも、うちの一族はずっとこの杖を使ってきたらしい。父は新しい軍杖を使っているけどね。

「うーん。よく考えたら、怪我もしていない部分に『ヒーリング』をかけたって、効果があるのかわからないな」

実際には“かすかに”自分の腕に変化があったように感じられたのだけど、それについて確証が得られたわけじゃなかった。

練習あるのみなのかな。優秀な父の血を引いているからといって、僕が怠けていてそうなれるとは限らない。やるだけのことはやらな

いと。

そんなことを考え、僕がもう一度魔法を唱えようとしていると……。こちらに気が付いたのか、エリザベートが東屋から歩いてきた。彼女はまだ杖を貰っていないのだろう。魔法を使うのがものめずらしいのかな？

それにしても……、どうにも危なかった。大丈夫だろうかと考
えていたら、案の定彼女は盛大にずっこけた。

ああ、痛そうだ。膝を擦りむいてるな。

「ううっ……。痛い……」

「どれ。見せてみなよ」

地面で座り込んでしまったエリザベートの片足を立たせる。むき
出しになった膝には、土と血がこびりついていた。また、手のひら
も若干擦れてしまっている。

せっかくだし、魔法で治してあげよう。まずは『凝縮』で水を集
めて……。出来上がった水の球体をばらして、膝の土を流してしま
って……。

少し染みるようだったけど、それでも彼女は何も言わずにじっと
耐えていた。そうしてくれると、こちらとしてもありがたいものだ。
次に『ヒーリング』をかける。さっきと同じように、杖の先を膝
に向けてルーンを唱えた。

すると……。

自分でも驚くほどの速さで、みるみるうちにエリザベートの傷が
ふさがっていった。次に、同じように手のひらにも『ヒーリング』
をかける。

すると。あっという間に、すっかりと彼女の傷はどこかへ消え去
ってしまった。

彼女が着ていた真っ白なワンピースはちょっと汚れてしまってい
るけど、まあそれは仕方ないだろうな。

「……すごいです。もう痛くありません」

エリザベートは、しばしじっと自分の両手や膝を見つめていたけ
ど……、すぐに、春に咲く花のように可憐な仕草で微笑んだ。

それはもうやたらと可愛らしくて、こんな表情も出来るのかと思わされたわけで。やっぱり、年相応の女の子なんだと思ったわけで。なんだかそんなことを考える自分が、どうにもこっ恥ずかしくなる。

僕が間拔けな顔をして突っ立っているからだろうか。不思議そうな表情を浮かべながら、エリザベートが問いかけてくる。

「魔法の練習をしていたのですよね」

「ああ、うん。とりあえず、水魔法からやってみようと思って試してたんだ。まさかこんな早くに役に立つとは思ってなかったけど」

「ありがとうございます」

「いや、いいんだよ。それより、服が汚れてしまっただろう。使用人に頼んで新しいのを出示してもらおうといい」

「……そうですね。そうします」

そう言い、エリザベートはとたと軽い足跡を弾ませながら、屋敷の勝手口へと向かって行った。やっぱり危なっかしい背中だ。

さて。そろそろ魔法の練習を再開しようか。『ヒーリング』は出来るとわかったから、水魔法は他のものもある程度出来るのだろう。なら……次は土魔法かな。『鍊金』が使えるといろいろと捗りそうだ。もつとも、僕の場合は趣味くらいにしか使えないだろうけどさ。

そうして、僕が土魔法でも初歩級の『アース・ハンド』のルーンを詠唱しようとした、そのときだった。

「坊ちゃん坊ちゃん。大変でございます」

慌てた様子でやって来たのは、普段から屋敷の管理をしてくれて

いる父の執事のアドルフだった。

普段は割りと冷静で、今日のような様子を見せることはなかなかない。最後にこんな顔を見たのは、母が亡くなる前に、庭で倒れた時くらいだろうか。

「どうしたんですか？」

「ええと、それが。旦那様から『フォン・ツェルプストー侯爵を屋敷を迎える。大至急歓迎の準備をされたし』という内容の……」

「なんだって？」

なんだそれは。一体どういう風の吹き回しだっていうんだ、まったく。あの家とゴットルプ家は決して仲が良いというわけでもなかったはずなのに。

まったく、面倒なことになりそうだ。僕自身が関わりたくなくても、厄介ごとが向こうから来てしまうってことか。

……いや、別に、同じ国の貴族だ。そこまで深刻に考えることはない。厄介ごとが越境したわけでもないし。

うん、そうだ。僕はちよつと余計なことまで考えてしまっていたようだ。

とにかく、今は相手方を迎える準備を整えなくちゃならない。僕自身は何をするわけでもないけど、一応身なりくらいは整えないとね。父に恥をかかせるわけにはいかないし。

屋敷へと戻っていくアドルフの背中を思案顔で見送りつつ、僕はこれから出会うであろう少女のことに想いを馳せた。

第二話（後書き）

一話10kb強で進行。ここはレイアウト的にスクロールが多くなるので、分量はこのくらいかなと。

第三話

ツェルプストー侯爵らを連れた父がキールへと戻って来たのは、ウル月の初の事だった。

夕刻、礼装を身につけた僕は、屋敷の玄関前広場で彼らを出迎える事となった。当然ながら、執事のアドルフと侍従のミスタ・ヴルムの姿もある。

恐らくはトリステインとの国境付近にある領地からやって来たのだろう。何台もの大きな馬車が屋敷前に乗り付けた。

そのうちの一台から父が降りてくる。久方ぶりに目にするホルシユタイン・ゴットルプ家の当主は、これといって変わった様子もなく元気そうだった。

続いて、後続の馬車から一人の壮年の男性が現れた。恐らくは彼がフォン・アンハルツ・ツェルプストー侯爵なのだろう。

そして……、最後の馬車のドアが開かれ、赤い髪の少女が降り立った。実際に目の当たりにすると、燃え上がるような赤髪という表現がぴったりの髪の色だ。

彼女こそがツェルプストー侯の愛娘キュルケなのだろう。なるほど、なかなかお目にかかれないレベルの美少女だ。

あと、どうもここへやって来たのはキュルケと侯爵本人だけのようだ。少しばかり理由が気になるけど、あまり勘ぐっても仕方ないだろう。

父は二人を連れてつかつかと歩み寄ってくる。僕はアドルフらと共にそれを直立不動で待ち構え……、ある程度まで距離が詰まったところで、頭を下げた。

「お帰りなさいませ。父上。そして、ようこそおいでくださいまし

た。ツエルプストー侯爵どの」

……ふう。事前に何度か練習した通りの身のこなしがなんとか出来た。ボロが出たらどうしようかと考えていたけど、杞憂だったようだ。

父も僕がきっちりと挨拶をこなせたことに満足しているらしい。上機嫌な声で、自分に続くツエルプストー侯爵に声をかけた。

「卿。これが私の息子のカールです」

「ご紹介に与りました。初めまして、カール・フォン・ゴットルプです」

「クリステイアン・フォン・ツエルプストーだ。これは娘の……」

ツエルプストー侯爵が前へ出るように促したのだろうか。先ほどまで後ろにいた少女が、前へと進み出てくる。

「……キュルケ・フォン・ツエルプストーですわ。よしなに」

やはりというか、僕の目の前でロングスカートを指で持ち上げているのは、“あの”キュルケだった。

最低限の装飾具しか身につけていないというのに、彼女は、恐らく僕と変わらないだろう年齢には似つかぬほどの“色気”を放っていた。

瞳の色は、髪と同じ色だった。きらきらと輝く様は、まるで大粒のルビーがそのまま眼球にはまっているかのようだ。

やや日焼けをしているのだろうか。肌は健康的な小麦色をしていて、それでいてなお艶があるのが一目でわかった。

先ほど挨拶を交わしたときに見た限りでは、腕も脚も驚くほどに長い。将来的には間違いなくモデル並みの体型を獲得することだろう。

というか、現時点でモデルとしてデビュー出来るかもしれない。顔立ちは若干幼さが残っているけど、それはあまり大した問題にはならないはずだ。

思わず見とれそうになってしまったけど、そこはぐっと堪える。いくらなんでもそんな状況じゃあない。

あくまでも客人を出迎える態度で。背筋を伸ばして、しっかりと地に足をつけた。

「うむ。なかなかに見所のありそうなご子息ですな、公爵殿」

「そう言ってもらえると私も鼻が高いな。よし、さっそく屋敷をご案内しよう」

ふと違和感を覚える。褒めるような言葉とは裏腹に、ツエルプストー侯爵の目が異様に鋭いような……。まるで品定めをする商人のように真剣な目つきだったからだ。

キュルケはキュルケで、なんだか僕に敵意を持ったような目をしている。これは一体どういうことだろうか？ まさか、一目で嫌われたのだろうか？

……なんだろう。嫌な予感がひしひしと伝わってくるような……。いや、まさかね。僕の勘違いだと、そう思いたい。

その日の晩餐会は、いつもよりちょっと多い人数で催された。

とは言っても僕と父、エリザベートにツエルプストー親子の五人ばかりだ。いつもは二人きりだったりもするから、それから考えることが多いけど。

なぜかツエルプストー侯爵はエリザベートについて何か知っているらしく、特に異論も挟まずに彼女の同席を黙認していた。

家柄からしてもっと奔放な人を想像していたんだけど、意外と落ち着いた雰囲気の人であるようだった。

この場にいるのは皆（恐らくはエリザベートも含めて）上級貴族の生まれだ。食事の風景もやたらと落ち着いていて、やはり自分は貴族なのだと実感させられる。

僕もテールブルマナーというものはきっちりと躰けられている。最低限のこれが出来ないと恥をかくことになるからね。

しかし、キュルケは本当に上品な食べ方をするなあ。今の彼女は、僕が今まで抱いていたイメージとはずいぶんとかけ離れている。

曲がりなりにも侯爵家の令嬢であることを、再認識させられる一件だった。

ちなみに、今日のメニューはザワークラウト（キャベツの漬物）、ブライトカトフェルン（ジャーマンポテト）、シュニッツェル（カツレツ）、アール・ズッペ（うなぎのつみれ汁）etc. . . いろいろとある。

まあ、内容はゲルマニア料理における定番メニューそのものだ。

あまり貴族の食卓らしくはない。

僕は好きだからいいけど、父はわざわざガリアから料理人を呼んで食事を作らせている。今日はたまたまこういう編成になったのだろう。

ご飯の美味しい国といえば、まず挙がるのがガリアだ。次にガリアと食習慣の似ているトリスティン。次にロマリア。

ゲルマニアはその次くらいで、もっともご飯が不味いとされているのがアルビオン。あそこは本当にろくでもないものばかり食べているらしい。

まあ、土地の都合もあったのだろうし、一概に論うのもどうかと思うけどね。

……と。建前を述べるのはこのくらいにして、今は食べることに

集中しようか。

最初の晩餐会は特に滞りもなく終わった。何かある方が珍しいと思うけど……。

その後に聞いた話では、一週間ほどツェルプストー親子はこの屋敷へ滞在するらしい。

その目的は僕には知らされていないけど、きっと大人同士で話すことがあるのだろう。無闇に首を突っ込む問題でもないし。

ちなみに、父にエリザベートのことを尋ねると「彼女については現状維持とする」という返答があった。まあ、それなら別にいいんだけど……。

そして、ツェルプストー親子の来訪の翌日。つまりは二日目。

僕は、中庭のテラスでキュルケと白いテーブルを囲んでいた。辺りは紅茶の香りに混じって、甘いお菓子の香りも漂っている。

どうしてこんなところに僕たちがいるのかといえば。父に「せっかくだから二人でお話でもして来なさい」と勧められたからだ。

中庭では、様々な花々が己の存在を誇示するかのように、悠々と咲き誇っている。鮮やかな色だったり、淡い色合いだったり……。

どれも綺麗な代物だった。もっとも、一番美しい花は同席しているキュルケ嬢であるのかもしれない。

……とまあ、冗談は置いておくとして。

とりあえず、僕は彼女にこの土地の印象でも尋ねてみることにした。他に良い話があるのかなかったものもあるけど。

「ミス。どうですか、このキールは」

「そうね。とても良い土地だと思うわよ。ここに来るまでの街道は

きちんと整備されていたし、町も活気に満ちている。うちの領地よりもずっと進んでいるわね」

「いえ、そんな。たまたま立地が良かったただけだと」

「……立地よねえ。侯爵領といえは聞こえはいいけど、うちの領地はただの田舎ですものね。まして向かい側は時代遅れのトリステインだし」

そんな他愛のない話を続ける間、向かい合うキュルケの表情はあまり読めなかった。にこにことしているような、そうでもないような。

けど、どこか苛立っているのがわかる。十三歳という年齢を考えると、もしかしたらそういう日なのかもしれない。迂闊な真似は控えよう。

とまあ、そんな下世話なことを考えていると。紅茶の注がれたカップを手にしたキュルケが口を開いた。

「そういえば。あなた、魔法の習熟度はどのくらいなの？」

「僕は水のドットになったばかりです」

「そう。わたしは火のラインよ。最近『フレイム・ボール』を撃てるようになったの。火を二つ重ね合わせる。素敵な魔法よ」

さきほどまでの不機嫌そうな顔はどこへ行ったのか、彼女はどこかうっとりとした表情で己の系統に想いを馳せている。

に、しても。もうラインか。この間ドットメイジとして安定したばかりの僕にとっては、それこそ何年も先の話になりそうだ。

……もしかしたら永遠にドット止まりかもしれないが、そうならないように努力はしないと。

「……ねえ、ちょっと。聞いているの？」

「あ、はい」

「じゃあ、今わたしが言ったことを反芻してみなさいな」

「ごめんなさい」

「あ、あなたねえ……」

まただ。また悪い癖が出てしまった。いい加減改善しないといけないってのに、どうしてこう僕はうっかりが多いのだろう。これじゃこの先生きのこれないな。

キュルケは、間抜けな面を浮かべる僕を呆れた様子で見つめていたが、すぐに「はあ」とため息をついた。

「今度はよく聞いてね？　ゲルマニアという国を代表する属性といったら、なんだと思う？」

「火、かな。本当はロマリアが本家だけど」

「そう。ロマリアはこの際どうでもいいわ。わたしたちゲルマニア貴族にとって、『火』の魔法はとても重要な意味を持っているの」「そうだろうね」

「ええだから、あなたも火の魔法を使えるようになりなさい」

「なんだって？　そりゃないよ」

僕に火の魔法を覚えろって？　そんな無茶な。ようやく水の魔法に慣れたっていうのに、なんで正反対の系統である火を使えるようにするのか。

別に練習が嫌だからそう考えているわけじゃない。何度も練習はしたんだ。それでも駄目で、火の系統と僕の相性は最悪に近いと結論付けた。

ここ最近では、どうにか得意になれるかもしれない水魔法の練習をしているのに……。

「文句を言わずにやりなさい。わたしが監修してあげるから」

「……人には相性ってものがあるんだ。きみは火が得意だから良い

んだろうけど、僕は火は大の苦手なんだよ」

「だめ。とにかくやりなさい」

いくら拒否しても、キュルケは頑なに僕に火の魔法を覚えろと要求してきた。……どうしてここまで言ってくるんだろう。

それ続けるうちにずいずいと体を寄せてくるものだから、もうほとんど彼女の顔が間近にまで迫ってきていた。

端整な造りの顔の美しさといい、年不相応に発達した胸の当たる感触といい、微かに漂う香水の香りといい……。どうしようもない。ここまでされたら断るのも難しい。そういうわけで、仕方なく僕は火の魔法の練習を始めることにした。

……とまあ、三日ほど火の系統魔法の練習を続けてはみたのだけど。

成果というか、結果だけいえば、結局は非常に威力の低い『ファイヤー・ボール』が出せただけだった。

それこそ『着火』に毛が生えた程度の、本当に火力の低い魔法だった。さすがのキュルケも、それを見て僕に火の魔法を覚えさせるのは諦めたようだ。

それと同時に、自分に割り振られた部屋に引きこもるようになってしまった。……これ、どう考えても僕のせいなんだろうな。

彼女がなぜ僕に火系統の魔法を使わせようとしたのか、その理由は皆目見当つかない。まったくもって不明だ。僕が知りたいくらいである。

娘が引きこもってしまったというのに、ツェルプストー侯爵はた

だ冷静な表情を崩さないまま、この状況を見守っている。

うう。どうしてかわからないけど胃が痛い。無言のプレッシャーが胃壁に穴を開けそうだ。というか、もう開いているかも。

とにかく、僕が火系統の魔法さえ使えれば、もしかしたらキュルケが部屋から出てきてくれるかもしれない。

そう考えた僕は、ひたすら『ファイヤー・ボール』を詠唱し続ける練習を始めることにした。

もちろんドット程度の精神力ではそれほど使えるわけがない。何発か撃てば弾切れになってしまい、とてもではないがツエルプストー親子の帰宅には間に合いそうにない。

次第に僕の脳裏に焦りが浮かび始める。

せっかくキュルケと出会えたのに、わけもわからないまま、こんな形でお別れになるのはごめんだ。いくら僕とはいえそれは許しがたいのである。

一日中魔法の練習を繰り返したせいかな、僕はすっかり精神力が切れてしまつてふらふらだった。だけど、それでも相変わらず成果は上がらない。

父とツエルプストー侯爵は、そんな僕を遠巻きに眺めるだけだ。

何か話し合っているようだけど、やっぱりキュルケのことなんだろうか。

「大丈夫ですか？」

なんとか屋敷の勝手口までたどり着いたとき、エリザベートが濡れたタオルを持って来てくれた。

それを受け取り、汗ばんだ顔や首を一気に拭いていく。そうすれば、先ほどまでの不快な汗の感覚はどこかへと消えていった。

「ありがとう、エリザベート。助かるよ」

「ふふ。いえ、どういたしまして」

……気のせいだろうか。少しずつだけど、彼女の表情が柔らかくなっているような。最近はまだ暗い顔をしなくなったし。

いろいろと自分の中で整理をつけたのかな。それにしても、彼女の幼さでそれが出来るっていうのは、ちょっとばかり信じがたい事だったりする。

でもなあ。今見せた笑顔はやはりこの年頃の女の子のものでしかないし……。少し頭が良すぎるだけなのかな。

「どうしたんですか？」

「あ、ううん。なんでもないよ。中へ入ろうか」

あまり深く考えても仕方ないだろうな。今は休息をとろう。明日こそはキュルケに見せられるくらいの魔法を使えるようにならないと。

やめるという選択肢はなかった。一度始めてしまった以上は、なんとしてもまともな『ファイヤー・ボール』を撃てるようになりたい。

……そう考えていたのだけど。

まさか。この翌日に、彼女が誰にも黙って屋敷から飛び出してしまっうなんて。この時の僕は、微塵も思っはいなかった。

第四話

翌日も朝から『ファイヤー・ボール』の練習を始めることにした。いつもより少しだけ早く起きて中庭へと向かう。

さて、今日こそはキュルケに納得してもらえるように頑張らないと。……まあ、実際のところあまり自信はないのだけど。

あくまでも水メイジである僕は、対極に位置する火系統の魔法はぎりぎりで見えろという程度でしかない。まったく、難儀なものだね。

歩きながらそんなことを考えていると、いつの間にか中庭へとたどり着いていた。太陽はまだまだ昇りきっておらず、辺りは若干の薄暗さに包まれている。

目の前にある池の水面は今日も静かだ。ときおり吹くとても小さな風で、やはり小さな波紋が浮かび上がるくらいだろうか。

早起きの鳥のさえずりもたまに耳に届く。木の葉の擦れる音もまばらに聞こえる程度……、集中するにはもってこいの環境だろう。よし、さっそくやってみようか。

そうして、僕はそれから一時間ほど『ファイヤー・ボール』の詠唱に集中し続けた。

とはいっても、ただただ無闇に連発するのではなくて、一発一発にかなり時間をかけている。ルーンを唱えるときにイメージを膨らませているのだ。

何故かといえば、ここ数日練習を続けてきて、ただ闇雲に詠唱を繰り返すだけでは駄目だということに気が付いたからだった。

魔法は“呪文によって得られる効果を術者が明確にイメージすることによって、形として生み出されるものだ”と僕は思っている。

普段は無意識にそれをやっているのだろうけど、僕はそれをあえ

て意識してやってみているのである。

そうすれば、もしかしたら苦手な火系統の魔法が上手く出来るかもしれないと思ったからだ。

……とまあ、そんなふうに思い通りにいけば苦労はしないんだね。

案の定、入念にイメージを重ねていても、僕の『ファイヤー・ボール』の威力は木の葉に火を灯すことすら出来ないレベルの代物だった。

難しいなあ。生まれ持ったの相性を覆すには、数日間の付け焼刃の練習じゃどうしようもないってことだろうけど……。

やっぱり、ガリアのオルレアン公のような人は規格外なんだろうな。十二歳で複数系統のスクウェアって。凡人じゃ一系統を極めるのも至難の業なんだろうし。

……いや、そうやって諦めていたら始まらないな。

成り行きでこんなことになっちゃったけど、一度やると言っってしまった以上はやる。それだけだろう。

ただ、少し疲れてしまったかな。休憩を取ろう。疲労が溜まって倒れでもしたら、それこそ洒落にならないからね。

僕は一度練習をストップして、近くにあるテラスへと向かう。そこにある椅子で休むんだ。

そこでふと視線を前へ向けると、テラスに先客がいるのが見えた。亜麻色の髪の少女……とくれば、それはエリザベートその人以外にはいない。

傍らには最近エリザベートとよく一緒にいるメイドが立っていた。彼女のすぐ近くには、何かが入れられているだろうバスケットが鎮座している。

きっと朝食を用意してくれたのだろう。そういえば、もうそろそろ食事の時間だったような……。まあいいか。

「若様。ご朝食はいかがですか？」

「そうだね、貰おうか」

僕が魔法の練習をしていると父は知っているはずだ。こうやって食事を持ってくるように指示したのも、恐らくは父なのだろう。

椅子に腰掛けると、向かい側に腰掛けていたエリザベートがわざわざこっちまでやって来てタオルを差し出してくれた。そうして、そのまま隣に席を移す。

魔法の練習は思っているよりも精神力を消耗する。それが体に跳ね返ってくるから、ただ突っ立っているようで意外とハードだったりするのだ。

その分お腹も減るのである。もっとも、これは僕が起きてから水しか口にしていないというのもあるのだろうけど。

「……カールさん。練習の進捗具合はどうですか？　なにか掴めましたか？」

パンにスライスしたソーセージを挟んだ軽食を口にしていて、横で同じように軽食に手を伸ばしていたエリザベートが問いかけてくる。

「うーん。残念だけど、今のところはなんとも」

「そうですか……」

嘘をついても仕方が無いし、彼女はいくらか僕の練習風景を見ていたのだろう。やはり、といった表情を浮かべてまた軽食を咀嚼した。

さて、まだまだバスケットの中はたくさん軽食で埋まっているんだ。もったいないから全部空にしてしまわないと。

しばらくしてから食事を終え、僕は魔法の練習を再開することにした。そして杖を持って席を立とうとした、そのときのことだった。

「カール！ ツェルプストーのご令嬢はこちらに来ていないか？」
「？ いえ、僕は姿を見ていませんけど」

どうしたんだろう。父が血相を変えて慌てることなんて、一年に一度あるかないかってくらい目にしたことがないのに。やけに慌てているじゃないか。

それに今の台詞、キュルケがどこかへ行ってしまったのではないかというふうに取れるんだけど……。いや、あくまで僕の解釈だけどさ。

「そうか、わかった」

「どうされたのですか？ 彼女が何か？」

「お前は、いや。今朝からツェルプストーのご令嬢の姿が見えないのだ。今は手隙の使用人に屋敷の内部を捜させているが、恐らくは……」

なんとまあ、嫌な予感が当たってしまったらしい。よりによって招いた侯爵家の子女が行方不明になってしまうなんて。大失態じゃないか。

「わかりました。僕は町の方を見えます」

「……なにを言っておるのだ。捜索は他の者に任せておけ。お前自ら出る必要などない」

「いえ。行かせてください。僕が不甲斐ないせいで、彼女が嫌になっ

って出て行ってしまったのかもしれないし」

父は渋っているけど、ここは強行突破でもなんでもして行くべきだ。

正直なところ、僕が行って彼女を見つけ出せるなんて思えないけど、何もしないで屋敷で待ちぼうけをするなんて冗談じゃない。

心を決めた僕は、父の隙を見て『レベテーション』を詠唱する。風系統の魔法だけど、これは比較的初歩級の魔法なので僕でも扱えるのだ。

呪文の詠唱と同時に、僕の体が重力のくびきから開放され、一気に宙へと躍り出る。何度か使った魔法だけど、この一瞬で肝を冷やすんだよなあ。

「こ、こら！ なにをしているんだ、戻れ！」

後ろから父の大きな声が聞こえてきたけど、今は無視するしかない。戻ったら捕まるのは目に見えてるからね。さて、キュルケを捜さないと。

——キュルケが屋敷を脱走してから、少し経った頃。

キールの市街地へと続く坂道を下りながら、僕は周囲をきょろきょろと見回していた。もしかしたら近くにいるかもしれないからね。勢いで出てきてしまったけど、実際のところ当てなんてなかった。僕はキュルケ個人のことはまったく知らないからだ。本で読んだうろ覚えの知識で、人となりを知るなんて無理だ。

僕も、もうちょっと思慮深くなった方がいいかもしれないね、うん。キールの町の地図は頭に入っているから、迷うようなことはまずないのだけが安心できる点かな。

しかし、どうにも腑に落ちないことがあるんだよなあ。

なんでキュルケが必死になって、僕に火系統の魔法を使わせようとするのかとか。脈絡が無さ過ぎてまったく理解に苦しむよ。

父が突然ツェルプストー家の二人を連れてきたのだって、正直言
って理由が皆目見当が付かないし。わからないことだらけだ。

……おっと。

周りを見ずにそんなことを考えているうちに、街中へとたどり着
いてしまったらしい。さて、彼女はどこへ行ったのやら。目立つ頭
髪だから近くにいればわかると思うんだけど……。

キールはゲルマニアでも有数の良港で、海軍の基地にもなってい
る……というのはゴットルプ公爵の台詞だったかしら。

確かに良い所ね。“こんな形ではなく”、ごく普通の旅行で来る
ことが出来ていたら、そしてこの海を眺めることが出来たら、きつ
とわたしの心は雲ひとつない快晴だったでしょう。

でも、現実はその都合がよくない。父が珍しく領地に客人を連れ
て来たと思ったら、それがゲルマニアでも指折りの大貴族だったな
んて。

そして、その大貴族の子供とわたしが婚約させられることになる
なんて。

まったくおかしい話だわ。まさか、この年で結婚の話なんてされ
るとは思っていなかったわよ。

だってそうでしょう？ ツェルプストーは恋に生きる一族。それ
が満足に出来ないうちに、どこか知らない家に嫁がされることが決
まっているなんて。

……ま、無理もないかしら。お父さまは、お祖父さまたちと違って色恋が得意ではないみたいだし。

ごくごく一般的な、敬虔なブリミル教徒ってところかしら？一族ではかなり珍しい性格の人みたいね。

ホルシユタイン・ゴットルプは皇帝の覚えの良い家。現当主の息子は皇族の血を引いていて、噂では次期皇帝位にも近いと目されている人物なの。

いきなり結婚させられることになって驚いたけど、それほどの地位の人ならしょうがないって考えたわよ。

所詮わたしは貴族の娘。家のために売り飛ばされるくらいはよくあること。それは理解しているわ。いくら家訓に反するようなものでもね。

……そう。相手が相手だから仕方ないと思ってたわ。

でも、なんなのかしらあの子。カール。期待はずれもいいところよ。

婚約者を前にしているのに、地味な格好しかしない。少しも身だしなみに気を遣ってくれないの。

おまけにまだ水のドットだというじゃない。ツエルプストーの“火”とは対極のしょうもない系統。治癒魔法の価値は認めるけど、やっぱり殿方は熱い方でないといけないわ。

彼のお話はまったく面白くなくて、ただ退屈させられるばかりで、わたしが少し表情を曇らせると、困ったように薄ら笑いを浮かべるばかり。きっと女性の扱い方がわからないのね。

正直言って、かなり幻滅させられたわ。

あんなのと結婚させられるなんて冗談じゃない。けれど、いくらお父さまに抗議しても受け入れては下さらなかった。

それはそうよね。なにせ、家柄だけはツエルプストーを遥かに凌ぐ大貴族ですもの。そんな家へ娘を送り込めれば……。

思わずため息が出てしまうわ。せめて婚約者として扱ってくれればいいのに、なぜかあの人はそんなそぶりを微塵も見せないし……。せめて、火の魔法を使えるようになってもらわないと困ると思っ
て練習させたのに、本当に才能が無いらしくてまるでだめ。

幻滅するしかないわ。ああ、わたしにはもっと良い出会いがあったはずなのに。つまらない殿方の妻になって、機械のように世継ぎを産むだけの人生なんて。

『結婚は人生の墓場』という言葉は本当だったのね。しみじみと感じるわ。

「はあ……。いっそのこと、あそこに浮かんでいる船でどこか遠くへ逃げてしまいたい気分だわ」

「お、姉ちゃんもそう思うか。いいぜ、俺たちが遠くへ運んでやるよ！」

……何かしら、この男たち。レディが一人で黄昏ているときに盗み聞きをするなんて下劣ね。趣味が悪いわ。

というか、身なりも最悪ね。三人くらいいるのかしら。皆顔に傷があるし、服はぼろぼろで、なんだか体臭がここまで漂ってくるじゃない。

「ちょっとどこかへ消えてくれないかしら。ほら、目の前の海なんてどうかしら？ 汚れた服を洗濯できるし、お魚さんの餌にもなれて一石二鳥よ。飛び込んでしまいなさいな」

「ああ？ 舐めてんのか、このガキは！」

「まあ、待て。落ち着けよ。……お嬢さん、きみはどこか遠くへ行きたいとおっしゃっていたね」

「ええ。そうね。でもあなた方には関係のない話よ」

「いや、そうでもない。俺たちはあそこにある船の乗組員だ。これから北東のケーニヒスベルクへ向かう。遠くへ行きたいというなら、

うってつけだぜ？」

ケーニヒスベルク……。プロイセン王国の都市ね。確かに遠いけど、そんなところに行っても仕方ないわ。

こうやって海を眺めているのだって、ナイーブな気持ちを静めるためにやっているのだし。本当にどこかへ行くつもりなんて微塵もないの。

自棄になってお屋敷を出てきたのを反省したところだし、もうここに留まる理由もないわね。

「お断りさせていただくわ。生憎ながら、わたしは貴族なのよ。あなたたちと戯れている暇は無いの」

「そうだろうな。雰囲気でわかったよ」

「ふうん。それじゃ、またね」

「いや、そうはいかないな」

「きゃっ!？」

ちょ、ちょっと! なんなの、この人。いきなりわたしを突き飛ばして……。あら、杖を奪われてしまったようね。

……これは結構重大な問題よ。相手は屈強な船乗りが三人だから、杖もないわたしが素手で立ち向かえる相手じゃないもの。

先頭に立っているちよつといい男以外は、二人ともオーク鬼みたいな醜い物体で、力だけは本当にありそうに見えるし。これはまあいかもしれないわ。

「船員たちも長旅で疲れが溜まっているんだ。どうかな? 人の上に立つ者なら、下々の者たちの不満を解消するのも仕事だと思うが」「冗談じゃないわね。あなたたちじゃ、恋の練習相手にもならないわよ。面倒なことになる前に、杖を置いて立ち去りなさい」「けっ、そんなことを言って足が震えてやがるくせによう」

「本当だな！ 小心者のくせに口だけは達者なことだなあ！」

……かなり頭に来るわ。実際に震えているからどうにもならないんだけど。杖さえあれば、あのドレッドヘアーをもじやもじやにしてあげるのに。

そろそろ、じりじりと後ずさるのも限界に近づいてきたようね。もう半歩も踏み出せば、わたしの体は海の中に一直線。いっそ泳いで逃げようかしら？

倉庫の影になっているから助けは望めないし、案外海へ逃げるというのもアリかもしれないわ。船乗り相手に逃げ切れる遊泳技術はないけど。

「へ、もう逃げ場はねえぜ。観念するんだな」

すごい顔で迫ってくるわね。こういう下品な人は嫌い。視界に入れるのも不愉快になるわ。どうにかならないかしら？

……どうしてかしらね。こんな状況なのに、妙に冷静でいられる自分が不思議だわ。一周回って、怖さもどこかへ飛んでいってしまったし。

もう目の前の船乗りたちとわたしの距離は一メートルもない。手を伸ばせば、きっと容易に届いてしまう距離。

逃げ場はなく、後ろは海——どう見ても詰んでいるわ。そう、
“誰もこの場に現れなければ”。

今この瞬間、わたしの視界に映りこんだ人間が現れなければ、きつと船乗りたちの勝ちだったのでしょうね。

「やめろおとおおっ!!」

この町にやって来てから、もう何度も耳にした声。それでいて普段とは違う覇気のある声。つり橋効果なのかしら？ ずいぶんと…

…。

そう、船乗りたちの上空から降って来て、一人の頭に蹴りを叩き込んだのは……。

「大丈夫かい？ 中々見つからないから『フライ』で空から捜していたんだ。おかげでくったくただよ」

「ええ、大丈夫よ。ありがとう、カール」

突然空から降ってきたカールを目にして、船乗りたちは慌てふためいている。蹴りを食らった人なんて泡を吹いて倒れこんでしまっているわ。

「なっ、なんんだお前は！」

「なんだっていいだろ。……たまに出るんだよな、自分勝手な欲望に任せて犯罪を起こす輩がさ。せつかく平和な町だったのに。さっさと消えろよ」

「ぐ……」

カールは水のドットメイジ。はっきり言って、戦力的にはまるで頼りにならないわ。でも……。この状況なら、あるいは。

あの船乗りたちが、新たなメイジの出現に臆してくればいいのだけれど……。

わたしは、船乗りたちから見えないようにして祈りを始祖へ祈りを捧げ始めた。普段は始祖のことなんてほとんど意識しないけど、今だけは別だわ。

「……聞こえなかったのかい？ そこで泡を噴いているやつを連れて、さっさと立ち去れと言っているんだ。まだわからないようなら……」

「ま、待て！ わかった、わかった！ 杖を向けるのはやめろ！」

祈りが通じたのかしら。昏倒した一人を担いで、船乗りたちが大慌てでこの場から立ち去って行ったの。ご丁寧に、わたしの杖は放り出されていたわ。

……誰かが、カールが来てあの人たちを追っ払ってくれたことに、とても安心している自分がいることに気が付いたような気がする。数日前とは違う、どこか頼もしい背中が見えた。きっとつり橋効果なのだろうけど、彼がわたしを助けてくれたという事実は動かない。

声をかけようと思ったのに、船乗りたちが立ち去ってしばらくしてもカールはずっと杖を振り上げたまま。一体どうしたのかしら？とにかく、お礼を言わないと。心の中で散々こっ酷くこき下ろしたことについても、心の中でお詫びしたい気分だし……。

「カール、ありがとう。あなたが来てくれなかったら……」

意を決して、わたしはカールに声をかけてみるのだけれど、一向に彼が反応をする気配はなかった。……どうしたのだろう。もしかして、無理に火魔法を練習させたから怒っているのかしら。

「無理に火の魔法を覚えさせようとしてごめんなさい。人には相性というものがあるものね。それに、あなたは火のメイジじゃないけど、やるときはや……?」

どうしてかしら。少しくらい返事をしてくれたっていいのに。これってないわよ。もう。

「ねえ、聞いているの?」

とんとん、とわたしは軽くカールの背中を叩く。すると……。彼の体が、何の抵抗も見せずに傾いて海へと落下していった。派手な音と一緒に舞い上がる、海の水。それがわたしの体に降り注いで、点々とした染みを服に落としていく。

「……え？」

このときのわたしは、目の前で起きたことが理解出来ずに、ただただ呆然と呟くことしか出来ずにいたのだった。

第五話

はて。ここはどこだろう。少なくとも外ではないみたいだけど……。

確か僕は……、そうだ。キュルケが屋敷から出て行ってしまったから、捜しに出たんだった。

そして『フライ』で空に上がってすぐ、埠頭の倉庫の陰で、彼女が船乗りらしき男たちに絡まれているのを見つけたから、一気に地面に向かって降下して……。

ああ、そういうことか。やっと思い出した。僕は、緊張しすぎて気絶したんだ。

いくらメイジとはいえ、僕はドットでしかない。

それも一般的にあまり戦闘に適さない水のメイジである。屈強な男たちを前にしたせいかな、どうも体が緊張状態に耐えられなかったらしい。

情けない話だった。こりゃ、魔法の練習以前に精神面をなんとかしなくちゃいけないな……。

周囲を見回してみる。どうやら、ここは見慣れた僕の私室であるらしい。誰かが僕をここまで運び、ベッドに寝かせてくれたのだろう。

一体、気絶してからどれだけの時間が過ぎたのだろうか？ 窓から覗く外の景色は夕焼けに染まっている。つまりはもう夕刻ということだ。

……まだ気絶した当日なのだろうか？ それとも、もしかして何日も気を失っていたのだろうか？ 自分だけではそこがわからない。あまり日数が経っていると、最悪ツェルプストー親子が帰ってしまっているかもしれない。

それでは困る。どうして屋敷を抜け出したのか、その理由を本人に聞いてみないと。

そう思い立ち、僕がベッドから身を乗り出したときの事だ。がちやりと音がして、誰かが僕の部屋へと足を踏み入れる。誰がやって来るのかと思えば、それはキュルケ当人だった。

「目が覚めたのね。どう？　どこか痛いところはないかしら？」
「ああ、うん。大丈夫だよ。……何か怪我をするような事はあったっけ？」

「覚えていないの？　あなた、海に落ちたのよ。すぐに『レビテーション』で陸に上げたけど……」

「そうだったんだ。ごめん、手を煩わせて」
「い、いえ。別に謝ることないのよ」

まさか、いくら気を失っていたからって海に落ちるなんて。なんとも情けない話だ。

助けてくれたキュルケに済まなさそうな顔をさせてしまうなんて、どうしようもない。自分の不甲斐なさに思わず頭を抱える。

視線を戻すと、いつの間にかキュルケが僕のベッドの淵に腰を下ろしていた。ボリウムのある赤い髪がベッドにばらばらと広がった。ふわっと甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「……ねえ。わたし、あなたに謝らなくちゃいけないことがあるの」「謝る？」

「ええ。あなたに、無理やり火の魔法を覚えさせようとしたでしょう？　それがうまくいかなかったからって身勝手に怒って……、周りの迷惑も考えずに屋敷を出てしまったわ」

俯きながら、本当に申し訳なさそうな表情で話すキュルケは、い

つか見た自信に満ち溢れた妖艶な女性というイメージとは、かなりかけ離れた存在だった。

これから数年をかけて、“あの”キュルケ・フォン・ツエルプストーへと成長していくのだろう。

果たして、そこに僕が関わる余地はあるのだろうか。ただ知り合った貴族の一人として、いつか忘れ去られてしまうのかもしれないけど……。

というか、彼女の相手が僕に務まるはずもないんだよな。彼女は僕には高嶺の花でしかないんだ。

「きみは悪くないよ。僕にもっと魔法の才能があればなんとかあったのだろうし……」

「いえ、そうじゃないの。将来、夫になる人に身勝手な要求を押し付けるばかりで、立てて上げられないなんて……」

妙にしおらしいキュルケというのは実に新鮮……、ん？　なんだ。今、聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ。

「夫」？　それ、誰？

「なに言ってるのよ。あなたのことじゃない。わたしたちの親が話し合って、お互いの子供を婚約させるって……。聞いていないの？」

ちょっと待ってほしい。僕は今の今まで、一度もそんな話を聞いた覚えはないぞ。今回の訪問だって、あくまでもただの親善訪問か何かだと……。

いや、少し考えればおかしいことだらけだ。

なぜ親善訪問に娘だけを連れて来る必要があったのか、なぜ何かにつけて二人きりにさせようとしたのか、どうして父とツエルプストー侯爵がずっと二人で話し合ってたばかりいたのか。

思えば、父が帰ってくるときに僕に向けていた表情はどこかおか

しかった。……そうか、そういうことだったのか。
知らなかったのは僕だけだった、と。

「うん、父からは何も伝えられていないな」

「そう。……てつきり、もうあなたも知っているとばかり思っていたわ。とんだ思い違いをしていたのね」

なるほどね。彼女が僕に火の魔法を覚えさせようとしたのは、自分が嫁ぐ人間をある程度の火の使い手にさせようってことだったんだな。

妻よりも魔法の能力で劣っていると陰口を叩かれないようにさせるための……。まあ、そう考えれば納得できないこともない。

さて。どうするべきか。父に詰め寄るのも良いけど、そういう乱暴な手段を講じるのは出来れば避けたいという気持ちもある。

既にこうして事実を知ってしまった以上、今になって糾弾を始めるというのも僕の性分ではないし。

……しかし、これは大変なことになったな。まさか、僕がキュルケの婚約者になるなんて。

確か彼女は、ウィンドボナの魔法学院を退学するまで、そういった相手は存在しなかったはず。どこぞの老公爵と結婚させられそうになったんだっけ。

どこぞの老公爵、か……。どうしてだろう。名も出ていないはずのその人物が、僕にとって決して他人ではないという虫の報せのよきな感覚は。

ま、それは今は置いておこう。考えたって仕方のないことだしね。

「婚約者か。いや、驚いたよ」

「わたしもよ。ウィンドボナから帰って来たお父さまが客人を連れてきたと思ったら、その人がゴットルプ公爵で婚約の話まで持ち込

んでくるなんて」

「……どうしてだろうな」

「お父さまの考えはわからないわ。ただ、お母さまは婚約をかなり後押ししていたみたい。お父さまが婚約を認めたのも、それが要因だったみたいだし……」

どうしてまあ、大人というのはこっちの都合をまるで無視して話を進めてしまうのだろう。

結婚のけの字も今まで考えたことのない僕に、一体どうしろって言うんだか。まして相手は“微熱”。僕の手を負える相手だとは思えない。

「わかった。婚約の話については、よく理解した。少し、父と話し合う必要があるそうだ」

とりあえず、ここは話を収めておこう。まったく。キュルケだって困っているだろうに……。参ったもんだよ。

それから少しの後。僕は、今回の婚約について父に問い質していた。開口一番が「伝え忘れていた、すまん」だからたまったものではない。

「ゲルマニアの皇位継承権は、ここ数年の粛清でかなり変動しているのだ。かつての皇位継承者の大半が土の下だ。まして皇帝の子にも継承権はない。つまり……」

「皇帝の唯一の妹の息子である僕に、玉座が回ってくる可能性がある、と」

「そうだ。わたしはそれを見越して、ゲルマニアでも有数の古い血統である、ツェルプストー侯爵家のご令嬢をお前の妻とすることに

決めたのだ」

父は屋敷の書齋にいた。ちなみに、僕が気絶して屋敷に運ばれてから、まだ数時間しか経過していないらしい。思ったより早く目覚めたものだ。

と。ここで、今までの話をまとめてみる。

現ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世は、即位時の権力争いで親族の大部分を粛清した。生き残った僅かな人たちも、僻地で幽閉されているらしい。

兄弟親戚の大部分が皇位継承権を剥奪され、正妻の子で唯一の男子は、謀反を起こそうとした疑いでやはり皇位継承権を剥奪されたという。

残された皇帝の妹であった僕の母も、もう何年も前にこの世を去っている。その忘れ形見がカール・ペーター・ウルリヒこと僕のことである。

あれ？ これって僕もまずくないか？

……ともかく、そんな人間を下手法な貴族の娘と婚約させるわけにはいかない。そこで、名家であるツェルプストー家のキュルケを婚約者としたらしい。

もしウィンドボナの魔法学院へ通うようになれば、僕に言い寄ってくる女性が多いのだろう。

そういった貴族の連中の、特に下級貴族などを僕が選んでしまう前に、容姿端麗で家柄も申し分ない人物と婚約させる……。理に適っているといえばそうだ。

今まであまり関係の良くなかったツェルプストー家と、婚姻を通して接近できるというメリットもある。

どこまでも打算的だ。まあ、貴族の結婚なんてそんなものなのだろうけど……。

「お前には、状況が落ち着いてからゆっくりと話をしようと思っていたのだがな。既に皇位継承権の五指に入ってしまった以上、そももいかないのかもしれん」

なんですかそれは。完全に初耳ですけど……。下手なことをすれば、とうかしくなくても肅清されてしまう可能性がありますよね。キュルケを奥さんに出来ることに内心喜んでいたのは否定しない。だけど、そういう喜びの気持ちが一気にグングニルで粉碎されてしまったような気分だ。

最高神オーディンから授かった剣を、そのオーディン自身に破壊されてしまった英雄シグムントは、きっと今の僕のような気持ちだったのだろう。

……何が言いたいのかといえば。つまり、僕は神さまから見放されていたかもしれないってことだ。それも生まれた瞬間に。

「父上。今すぐトリステインに亡命してもよろしいでしょうか……」
「まあ、待て。そう早まるな。皇帝はお前にまで手を回しはしない。それだけは間違いないと言える」

「どうしてですか？」

「それは……、お前の母に関わることだ。だが、今はそのことは関係ない。お前は今まで通りにしておればよい」

今まで通りにしていればいいって……、本当にそれで良いのか？
ある日突然、謎の特殊部隊にこの屋敷が襲撃されたりしないよな。不安だ。

とはいえ、これ以上何かを言っても無駄かもしれない。父が難しい顔をして黙り込んでしまったからだ。仕方ない。ここは後にしよう。

これからどうしようかと考えつつ、僕は書斎を出ることにする。いつまでも留まっても仕方ないしね。

廊下をしばらく歩き、いつものように中庭へと赴く。既に日はすっかり暮れてしまっていて、見渡す限り辺りは薄暗さに包まれていた。

……なんて事だろう。今まで、自分の母親の生まれなんてそれほど意識したことはなかったのに。それが、今日になって嫌でも意識させられるようになった。

海沿いにあるこの小さな国でのんびりと暮らす——公爵の子として生まれた時点で、その望みは叶わないかもしれないと思っていたけど……。

よりによって皇帝ときた。今まで関わらないで来られたのが幸運だっただけで、僕が成長するに従い、そちらの方面との接触が増えるのだろう。

はぁ。どうせ生まれ変わるなら、そこら辺の下級貴族になりたかった。かといって、それはそれで困りそうだけど……。

「カールさん？」

池のそばにある大きな石の上に腰掛けて頭を抱えていると、誰かが声をかけてくる。この声はきつとエリザベートなのだろう。

「どうしたんだい、こんなところへ来て」

「……ええと、あなたが外へ出るのが見えたから。もうすぐ夕飯ですよ」

振り返った先にいたエリザベートは、今日も真っ白なワンピースに身を包んでいた。長袖なので寒くはないだろうけど。

季節は夏へと向かい始めているとはいえ、まだまだキールの夜は

冷える。今だって昼間に比べるればかなり寒くなって来た方だ。大丈夫だろうか。

にしても。キュルケの訪問があつてうやむやになってしまったけど、この子のこともまだまだ謎が多いんだよな。

父がどういうつもりでエリザベートをこの屋敷に置いているのか、そもそも彼女はどの家の人間なのか、とか……。いや、そんなことはどうでもいいか。

それを知ったところで、あまり意味はないだろう。彼女に辛い思いをさせてしまうだろうし。

「どうしたのですか？　もしかして、海に落ちたから……」

「ああ、いや。なんでもないよ。気にしないで」

例によつて僕が黙り込んでしまったせいだろうか。心配そうな表情を浮かべながら、エリザベートが僕の額に手を伸ばしてきた。

座った僕に比べても背が低いせいか、つま先を地面につけて背伸びをするような体勢になってしまっている。すぐに、ひんやりとした手が額に触れた。

別に熱なんてないんだけどね。そういえば昔、僕が熱を出したときには、母がこうして額に手を当てるのがよくあったっけ。

懐かしい思い出といえばそうかもしれない。もう何年も……、恐らくはエリザベートが生まれるよりも前に、彼女はいなくなってしまったのだ。

と、そうやってまた考え事をしていると。先ほど僕の部屋で別れたキュルケがこちらへ歩み寄って来た。

「カール。もうすぐ食事の時間よ」

「ああ、うん。ちょうどエリザベートが呼びに来てくれたんだ」

「そう。じゃあ、三人で行きましょうか。せっかくだし」

ちなみに、キュルケはエリザベートが何者なのかを尋ねなかった。既にかなり聡い少女である彼女は、なんとなく事情を察しているのかもしれない。

石から立ち上がり、僕はエリザベートやキュルケと共に屋敷の食堂へ向かうために歩き出すのだった。

――夕食の後。僕が自分の部屋でくつろいでいると、そこへ誰かが扉をノックする音が聞こえてきた。今度は誰だろうか。またキュルケだろうか。

「どうぞ」

「失礼するよ」

僕の予想に反して現れたのは、なんとクリスティアン・フォン・アンハルツ・ツェルプストー侯爵その人だった。

彼はとても厳しい表情をしていた。なんだろう、ものすごく嫌な予感がひしひしと伝わってくるのだけれど……。これは覚悟を決めておいた方がいいかもしれない。

侯爵は、僕に進められた椅子に腰掛けた。相手が相手なので、僕も収納から予備の椅子を取り出して座る。

「前置きも何も無しだ。カールくん。正直なところ、私は今回の婚約には反対だ。色々な事情から今は半ば容認しているが……。もし、きみが彼女の夫に相応しくないと判断したら」

「……婚約は取り消す、と？」

「そうだ。あの子は、目に入れても痛くないほど大切に育ててきた。それを娶るというのだから、きみにもそれ相応の覚悟はしてもらおうよ」

……なんというか、この人はとても娘が大事なんだな。そういうオーラが体から湧き出ているのが分かる。本人も言ってるしね。キュルケ母が婚約を後押しした、というのは本当のことなんだろう。この人がそういうことを容認するようには、とても見えない。どうせならお母さんの方に来て貰いたかった……。

「……妻も来るといって聞かなかったがね。あれが来ると問題が増えそうだから、領地に残してきたんだ」

なんてこった！ 心を読まれてしまったじゃないか！ ……いや、さすがにそれはないだろう。そう思いたい。

「わかりました。僕も将来はこの国の主となる人間です。そのくらいの覚悟はあります」

「そのくらい？ そのくらいだと？ ……いや、なんでもない。私を失望させないよう、これからも努力してくれ」

「は、はい」

「夜分に失礼したね。それでは、また」

最後にそれだけ言って、ツェルプストー侯爵は席を立った。つかつかと歩いて、僕の部屋を後にする。

ふう。なんとかこの場はしのげた……。まったく、夕飯を食べ終えてリラックスしているときに、いきなり襲来してくるんだものな。驚くよ。

対面が割りと短い時間で終わったのが良かった。あれ以上、あの猛烈に鋭い眼光を浴び続けていたらどうなっていたことか。

さて、そろそろ休みかな。それとも、読みかけの小説でも読もうか。フォン・アンデルセンの童話はなかなか……。

「ふう。やつとお父さまがいなくなったのね」

「……ん？」

「はあい。せっかくだから遊びに来たわよ」

今、どこかで聞いたような声が……、と思ってベッドの下へ視線を向けると。なんと、そこから赤い髪の少女が這い出てきたじゃないか！

いつの間に部屋に入って来たんだよ！　　というか、キュルケが手に持っているのは……。それは……。

「どうして『イーヴァルディの勇者』がベッドの下にあるの？　　……きやつ。なによ、これ」

キュルケは手にした本をぱらぱらとめくっていき……。少し文面に目を通した後、やけに可愛い声を出して本をベッドの上に向けて放り出した。

「……ねえ、カール。中身の『バタフライ夫人の優雅な日々』ってなに？　　あなた、こういう女性が好きなの？　　かなり酷い性癖みたいけど」

「いや、それ、は、たまたま、たまたま、メイドが、持っていたから、取り上げて……」

駄目だ。あんなものを、それも同年代の美少女に見られてしまった。僕の中の大切な数値がガリガリと削れていくのがわかる……。色々辛かった。精神的にキツイ事が連続で起きたがために、僕の意識は猛烈な勢いで刈り取られ——意識がどこかへ吹き飛んでしまうのだった。

「こういうのはまだ早いと思うけど、未来の夫の趣味じゃしょうがないわねえ。頑張ってみようかしら……、あら？」

『バタフライ夫人の優雅な日々』を読み終えたわたしが視線をカールに向けると、彼は床にひっくり返って意識を失っていた。

……倒れるときに結構派手な音が出たと思うのだけど、それに気が付かないくらい小説に没頭してしまっていたわ。

もしかして、こういう本を女の子に見られるのって結構ショックなのかしら。だとしたら、後で謝らないといけないわ。

いつまでも彼を床で寝かせておく訳にもいかない。わたしは杖を取り出して『レビテーション』を唱えた。こうすると楽に運べる。

魔法って便利よね。

……それにしても、妙な人よねえ。

ベッドに横たわるカールを眺めつつ、わたしはそんなことを考えた。

水のドットにくせに、火の魔法を使えるように努力するとか、どう見てもまともにもやりあったら勝てないだろう船乗りたちに立ち向かったり……。

それでいて精神面は強くない。気絶して固まっちゃったり、本をわたしに読まれたくらいで気絶したり……。

本当に変わった人。第一印象は、これといって特徴のない平凡な子だったのだけど。今はほんの少しだけ違うように見えないことはないわ。

実のところ、わたしはまだカールを恋愛対象として見ることは出来ない。それはそうよね。まだ出会ったばかりだし、婚約者というだけなもの。でも、決して悪い気はしないわ。

彼はこの先どんな男になるのかしら。それとも、わたしが彼を自分好みにしてしまおうかしら。……さすがに冗談だけど。

……ふわぁ。小説に集中しすぎて眠くなってきてしまったわ……。うう、部屋に戻るのも面倒だし、ここで寝てしましましょう。

あら、質の良い毛布ね。ガリア製かしら。さすが貿易の町だわ……。すう……。

すう……。

第五話（後書き）

第一章のタイトルを変更しました。次回から第二章に入ります。

第六話

季節は夏、アンスールの月。僕はホルシュタイン公国を離れ、ゲルマニアの帝都であるウインドボナを訪れていた。

ウインドボナはゲルマニア帝国の中心的な都市だ。

領土の南部、雄大なドナウ川の西岸に築かれた、虎街道沿いの古代の要塞がこの町の原型であると言われている。

ベルリン、ワルシャワ、ミュンヘン……そのどれらをとっても、長らく帝国の首都であったこの都市を越える威容を誇るものはないだろう。

もちろん、僕の故郷であるキールでは比較にならない。あまりにも規模が違いすぎて、もはや比べるのもおかしいかもしれない。トリステイン人はウインドボナのイメージがあまりよろしくないようだけど、実際には雑多な町だと描写されているトリスタニアに比べて、かなり整備された都市だ。

町並みだけでなく、皇帝の居住するホーフブルク宮殿や、離宮であるシェーンブルン宮殿などは、それこそトリスタニアの王城よりも見事なものではないかと僕は思う。

まあ、実際にトリスタニアを訪れたことはないのだけどね。

さて。なぜ僕がキールから遠く離れたこの町へやって来ているのかといえば。

簡単に言えば、それは僕がこの国の皇帝に呼び出されたからだっ

た。

……初めは本当に焦った。言い方は悪いけど、相手は悪名高いアルブレヒト三世閣下である。いくら自分の伯父だとはいえ、恐怖心の方が先に出てしまう。

断ることは考えたけど、選択肢としては無いに等しかった。会わ

ないということは、それだけで皇帝に不快感を与えてしまうかもしれないからだ。

父に諭されて決心するまで、本当に悩んだよ。もうこうして来てしまった以上、腹を括るしかないわけだけど……。

どうして、今になって皇帝は僕を呼んだのだろう。今まで会ったこともなかったっていうのに。

「どうしたの？ もっと背筋を伸ばしなさいな。皇帝閣下から謁見を許されたのよ、あなた。もっと誇ったらどう？」

「相手が相手だ。緊張するなっていうのが無理だよ」

帝都のメインストリートのと真ん中で青い顔をしている僕を見かねたのか、同行していたキュルケ・フォン・ツェルプストーがそんなことを告げてきた。

……そう。

どういう訳か、今回のウィンドボナ訪問には、彼女も一緒について来ているのだ。こういう理由なのかはわからないけど。

来てくれること自体はとて有難かった。父は公務で来られないし、エリザベートはキールで留守番。

一人ではなんとも心細い。ミスタ・ヴルムやお抱え騎士の一部は同行しているけど、基本的に陰から守ってくれるだけだし、話し相手には……。

キュルケが来てくれるだけで、実はかなり心の負担が軽くなっていたりする。恥ずかしいから表立っては言わないけど。

ちなみに、今日のキュルケは、赤く長い髪を頭の後ろで纏め上げている。身に着けている服はよそ行き用なのだろう。

清潔感のある白いシャツに、同色のロングスカート。なかなか値が張りそうな布で出来ていた。編み上げ靴から覗く素足は、どこか可愛らしかった。

彼女の肌は、やや小麦色をしている。とはいっても黒というわけではなく、あくまでも少々色が濃いという程度だ。

北アフリカや南欧辺りのコーカソイド系民族を思い浮かべて欲しい。キュルケは大体あんなふうに見えるのである。

僕がキュルケと出会って三ヶ月弱、こうして二人だけで街を出歩くのは始めてのことだった。もちろん、影から護衛がついて来ているのだろうか。

というか、エリザベートを除くと、女の子と一緒に町へ出たのは初めてではなからうか。なんとも感慨深いものである。

そして先ほどから、道行く人たちがキュルケをすれ違いざまに横目で観察していく。この帝都でも滅多に見られないような美少女だ。その気持ちはわかる。

同時に「どうしてあんなさえないやつが……」というやつかみの視線を僕が受けるのも、また宿命であると言えるのだろう。

一人で物思いに耽っていると。どこか陽気な笑みを浮かべながら、キュルケが声をかけてくる。

「ま、皇帝が相手だからってそんなに気にすることないわ。大丈夫よ、骨はきちんと一片残さず拾ってあげるから安心なさいな」

「冗談に聞こえないから、勘弁してほしいなあ……」

「ふふっ。明日まで時間はたっぷりあるのだから、今日は久しぶりの帝都をしっかりと楽しまないと」

先ほどから、神経を蝕む悪い予感に背筋が凍るような思いをしている僕を放り出して、キュルケはぐつと背筋を伸ばした。

夏ということもあり、彼女が着ているのはそれほど布が厚くない服だ。つまりは、彼女の実年齢に比べ、やや大きめな双球が存在を主張したりするわけである。

……おおっと。そんなことをしている場合じゃなかった。これじゃただの変態だ。

今日は予定がないとはいえ、あまり迂闊な行動は取らないようにしないと。皇帝の耳に入ったら大変だし。

そんな事を考えていると、キュルケがこちらをニヤニヤとした表情で見つめてきた。手で押さえているが、口がなんだか歪んでいるのは隠しようがない。

「あら？ そんなに見たいの？ 別にいいわよ、だってあなたは……」

「なにをしてるんだ！」

先ほどから向けられていた視線に気が付いたのだろう、キュルケはいきなり服を脱ぐような仕草を見せた。まったく、天下の往来で何を考えているのやら。

僕は慌てふためきながら、彼女のそんな突飛もない行動を止めようとするのだけど……。

「冗談よ。本気にしないでってば。本当、あなたってからかいがあるわ」

とまあ、軽く笑われてしまうのである。天へ向かって上がりかけていた服の裾は、ぱらりと重力に従い元あった位置に戻ってしまうのだ。

……遊ばれてるなあ。いや、僕がいちいち間抜けなだけなんだろうな。きつと。そろそろ耐性をつけないと。

そんな少し妙なやり取りをしつつ、僕たちはウィンドボナの石畳の上を進んで行った。

ここは他の地方都市とは違い、道路の大半がきちんと舗装されているので、実に歩きやすく助かる。さすがは帝都といったところだろうか。

少なくとも、大通りを見る限りでは、整然と整備された綺麗な町並みが広がっている。整備にはかなり手間隙かけたのだろう。

ここ数十年、ウィンドボナでは音楽が盛んであるらしい。先ほどから、町のあちこちで楽器が奏でる音楽が耳に入ってくる。

こうしてみると、本当に秩序のある町だと思う。もっとも、裏で何がどうなっているのかなんてわからないけど……。

そのまま、キュルケと二人で市街地を歩いていくと、やがて目の前に大きな聖堂が姿を現した。

それはシュテファン大聖堂といい、ブリミル教ウィンドボナ大司教区の司教座聖堂である。ごく簡単に言くと、つまりはこの辺りでもっとも大きな聖堂だ。

半世紀以上をかけて建設された南塔は、なんと高さ百メートル以上を誇っていて、ハルケギニアでは随一の高層建築だった。

ちなみに、ゲルマニアの皇帝家の歴代墓所があるのもこの寺院だったりする。とにかく重要な場所なのだ。

せっかくなので、なんとなく二人で内部へと足を踏み入れる。ちょうど内部では礼拝でも行われているのだろうか。辺りは人気もなく、静けさに満ちていた。

キュルケは物珍しそうに周囲を見回し、ため息を吐きながら呟いた。

「どうしてあちこち造りが違うのかしらね。正面入り口の門はロマネスク、外装はゴシックで祭壇はバロックだったかしら」

「長い歴史があるって事じゃないかい？ 時代に合わせて先端の様式を取り入れている……、そう考えれば納得がいくさ」

「そうねえ。ウィンドボナも歴史は長いみたいだし」

あまり長居をしてもしょうがない。一通り内部を見学した僕とキュルケは、とりあえず外へ出ることにした。

この聖堂は、壮大さを感じさせる外観通り、内部もそれなりに広いらしい。

通路なんかも同様で、広い横幅に無数の曲がり角が鎮座するそのさまは、まるで迷路の中に迷い込んでしまったかのようなだった。

迷わないうちにさっさと脱出しないとね。敷地内にはお墓もあるらしいし。もし間違ってそこへたどり着いてしまったら大変だ。

僕たちが聖堂の入り口にたどり着く頃には、礼拝を終えたらしい人々がぞろぞろと出入り口へ向かって列を作っていた。

早く出たいところだけど、ここは並ぶしかないかな。しょうがないに、僕らは途中から目の前の列の中へと合流。ゆっくりと日の明かりが見える方向へと歩いていく。

……と、そんなときだった。

突然、列の後方から怒号が飛んできたかと思えば、数人の男たちが列をかき分けるようにしてずかずかと歩いて来る。

「どけ！ ええい、どけというのがわからんのか！ 下賤な連中が！」

……礼拝に訪れた人々を押しつけているのは、どうやら貴族であるらしかった。おまけに騎士だ。装備からして下級なのだろうけど、騎士がそんなことをするなんて。

よく見ると、騎士たちに前後を挟まれるようにして、一人のぶすつとした顔の青年がいることに気が付いた。

身なりは良い。そうなるとどこかの大貴族なのだろう？ それにしても、そんな人がこんなところで……。

貴族もタチの悪い人たちはたくさんいる。そういった連中が貴族

全体の品位を損ねているのだ。もつとも、僕が品位を向上させているかといえば、それは別問題だけど。

「きゃあっ!？」

「キュルケ？」

その直後、どんという音がしたかと思うと、騎士の一人がキュルケを思い切り突き飛ばした。

彼女の体はなんだかんだと言ってまだ小さい。大柄な男の体当たりなど受けて無事で済むはずもなく、あっけなく僕のいる方へ向かって吹っ飛ばされてしまう。

よろめきながらも、なんとかキュルケを受け止めることに成功した。色々と柔らかい物が触れて嬉し……、なんて言っている場合じゃないな。

僕の腕の中に飛び込んできた少女の表情が、やけに落ち着き払っているのだ。これはまずい。

確か、キュルケは“怒れば怒るほど冷静になる”はずだ。つまり、無礼な仕打ちをされてまったく怒っているように見えないのは……。

この子の場合は、感情と態度が逆転することがあるらしい。普段は陽気に振舞っている分、少しだけ怖いところもある。

「カール。あの人たちに“お話”してきてもいいかしら？」

「それはやめた方がいいと思う」

酷く冷静な顔ながら、その口で物騒なことを言い出すものだ。しかし、それではメイジが攻撃したのだとすぐにわかってしまう。余計な問題は起こさないようにしないと。

明らかに憤っているキュルケをなんとか慰めていると、周囲のひそひそとした小さな声が、僕の耳に届いた。それもあちこちからだ。

「……まったく、皇位継承権を剥奪されたって噂が流れてからこち、礼拝のたびに姿を見るぜ」

「“元”皇太子に、そんな信仰心があるようには見えなかったがな。実際、礼拝堂では見えないよな」

僕は初め、思わず自分の耳を疑ってしまった。皇太子？ 皇太子って、例の謀反の疑いで継承権を剥奪されたっていう……。

さっき騎士を連れて威張り散らしていたのは、この国の皇太子だったのか。仮にも皇族がそんな狼藉を働くなんて、一体どうなっているのだろう。

腐っても皇族ではないのだろうか？　そこまで落ちぶれてしまったというのだろうか。

「ねえ、聞いた？　さっきの人たちが、元皇太子とその取り巻きだって話」

大聖堂を出てすぐ。道である程度人がばらけたところで、沈黙していたキュルケが問いかけてきた。無論、僕はすぐに首肯する。

「うん。さっきのは元皇太子だったみたいだね」

「あれが次期皇帝だったかもしれないなんて、とんでもないことだわ。廃嫡して正解よ」

「ま、まあまあ。そんなに怒らないで。あんなの気にするだけ無駄だよ。それより、そろそろお昼だからご飯でも食べよう」

「……むう、わかったわ」

いまいち納得出来ていない様子ではあったようだけど、それでもキュルケはすぐに気持ちを切り替えることにしたらしい。前を向いて歩き出した。

キュルケを追って歩きつつ、先ほど耳に入った会話を整理する。

元皇太子は、皇帝の手で廃嫡されてからシュテファン大聖堂へと通うようになったらしい。

勝手な解釈だけど、それ以前は礼拝堂をあまり訪れていない。となると、あの聖堂にいる人物か、あるいは何か物が目当てなのだろうか。

……なんだなキナ臭いような。

いや、まだそうと決まったわけじゃない。何せ一度謀反を潰されているんだ。せっかく肅清を免れたのに、そんな身で何か悪事に手を染めるなんて、普通はやらない。

「どうしたのカール？ 早く行きましょう？」

「わかった、今行くよ。この先に『パンノニアの眺め』亭っていう店があるらしいから、そこに入ってみようか」

「あら、下調べをしてきたの？ 予約は？」

「うん。ちょっとだけだけどね。予約は頼んであるよ」

『パンノニアの眺め』亭。大きな建物の上階部分にあって、ドナウ川とハンガリー平原を見下ろせる高級レストランだ。値が張る代わりに良いものを出しやすい。

子供が行くような店じゃない？ でも、あまり変な店にキュルケを連れて行くのもどうかと思うんだ。

貴族っていうのは面倒だね。体面を気にして生きていなきゃいけないんだから……。ま、いいか。

元皇太子のことは、変に勘ぐっても仕方ないだろうな。まずは自分の身を心配しないと。なにせ、数日中に皇帝に謁見を賜るわけであるからして。

そんなことを考えつつ、僕たちは『パンノニアの眺め』亭へと歩き始めるのだった。

第七話

僕のウィンドボナへの訪問も、いつの間にか三日目となっていた。

よく晴れた朝であるらしい。カーテンの隙間から射し込む眩い日の光を受けて、僕は別宅にある自らのベッドで目覚めた。

ゲルマニア皇帝の最も親い臣下の一つであるホルシュタイン・ゴットルプ家は、ウィンドボナ市街地の一等地に専用の別宅を持っているのである。

無論、貴族ともなれば、その国の首都や近郊に屋敷を構えることは多々ある。うちの場合は立地が非常に良いということだ。

僕が滞在しているのは、ちょうどその建物だった。自分がここを使うのは本当に珍しい。十年ぶりくらいだろうか。

父などは、帝都での仕事があるときの多くを、この屋敷で過ごしているようだけど。

さて。誰かメイドが起こしに来る前に、さっさと服を着替えてしまおうか。

下級貴族ならばいざ知らず、公爵家の嫡男ともなればその扱いというのはかなり変わってくる。

それは僕も例外ではなく、一応専属の使用人というか、メイドがいるにはいる。

ただ僕は、自分の身の回りのことの多くを自分でやってしまっていたので、今まで彼女に頼ることはあまりなかった。

なぜかって、そりゃ恥ずかしいからさ。

いくら貴族だからといって、家族でもない異性に部屋を整頓させたり、服の着替えをさせるなんて、出来るはずがない。少なくとも自分はそうだ。

専属メイドも、今はもっぱらキールの屋敷でエリザベートの世話

をしてくれている。

年が近いせいか、以外と馴染んでいるようだった。もしかしたら、エリザベートが比較的早く落ち着いたのは、メイドの彼女のおかげなのかもしれない。

そんなことをぼやけた頭で考えつつ、僕はベッドから抜け出して身につけていた寝巻きを脱ぐ。そして、あらかじめ用意されていた服を手にした。

皇帝への謁見については、本当にならばとくに先方から連絡が入るはずだった。しかし今のところ、その連絡はまったくやってくる気配すらない。

……まあ、相手は皇帝閣下だ。色々と用事があるのだろう。呼びつけておいて待ちぼうけを食らわせる辺りはさすがだけど。

すぐに着替えを終え、今日は一体どうするべきか、しばし考える。またキュルケと一緒に町へでも出ようかな。ブルク劇場のチケットがあるから、そこで時間を潰すのもいい。もっとも、彼女が良いと言えばの話だけど。

ちなみに、キュルケはツェルプストーの別宅ではなく、なぜかゴットルプ家の別宅に滞在していた。

ここのところは毎晩僕の部屋に来て、夜食をつまみながら他愛もない話に興じている。

……もっぱら話題をリードするのはキュルケの方だけどね。僕は、ただ聞き手に回っている方が多かった。

昨夜も同様で、彼女は散々止めたにも関わらずワインを呷っていた。付き合いきれないと感じたので先に寝てしまったけど、ちゃんと自分の部屋に帰ったのだろうか。

しかし、どうしてキュルケはウィンドボナについて来たただけでなく、屋敷にまで来たのだろうか。

僕としては構わないけど……、ツェルプストー侯爵が怖い。

いや、ここはトリステインとの国境地帯から遠く離れた帝都。大丈夫だ。きっと、大丈夫。

過去に受けた仕打ちを思い出してグロッキーな気持ちになりつつ、僕は部屋のドアノブに手をかけようとした。

……と、そのときだった。背後のベッドの辺りで、何かがもぞもぞとうごめくような音がしたのである。

なんだか嫌な予感がする。

刺客に狙われるような悪事を働いたつもりはないのだけど、残念ながら僕は公爵家唯一の跡取りである。抹殺したいと考えている人間も、実のところ少なくない数がいるはず。

そういった状況に対処するために、ミスタ・ヴルムたちのようなお抱えの騎士がいるのだけど……。

「うにゅ……ん」

戦々恐々の状態でベッドを睨んでいると。

不意に、どこか気の抜けたような、妙に可愛らしい声が聞こえてきた。

というか、この声には大いに聞き覚えがある。それこそ、声の主の顔が鮮明に思い浮かぶほどには。

恐る恐る、目標へと歩み寄る。目指すはジャガイモではなく、薄手の毛布がやや膨らんだベッド。……いくら寝起きだったとはいえ、あれに気がつかないとは。

とにかく、この目でこの下に何があるのか確かめないと。

そうして意を決し、勢いよく毛布を持ち上げて取っ払うと……。

案の定、というべきなのだろうか。

真っ白なシーツの敷かれたベッドの上では、僕の“婚約者”が身を丸めて静かな寝息を立てていたのである。

よく見ると、普段の振る舞いからは考えられない、あどけない寝顔を見せていた。

……いつまでも見ていると悪いな。なにせ、なぜか今の彼女は生地が薄いシュミーズ一枚なのである。

おまけに、見た限りでは下着すら着けているか怪しい。まったく目のやり場に困……いや、そうじゃない。

しかしというかそもそも、よく考えたら、なんでキュルケが僕の部屋にいるんだ？

いくらなんでも、彼女と僕の部屋は別々になっている。昨夜だってちゃんと帰れて念押ししたはずだ。それがどうして、こんなことに。

そんな困惑を抱きつつ僕が頭を抱えていると、それまでぐっすりと寝入っていた少女のまぶたが開かれる。

しばらく、呆けた顔で周囲を見回したあと……、僕の手から引いたくするように毛布を奪った。

「……見た？」

「いえ、何も」

「嘘ばかり……」

実際にはばっちりと目撃してしまった訳だが、そんなことを正直に言えるはずもない。もともと、キュルケには完璧に見抜かれているようだけど……。

「こんなこといけないわ。だってわたしたち、まだ婚約したばかりじゃないの。……ああ。でも、もう遅いのね……」

「いや、僕は何もしてないけど」

「そうよねえ。もしなにかされたのなら、何か違和感があるはずだし……」

なんだろう。

毛布で顎の辺りまで隠しながら、上目遣いでそんなことを言うキウルケは、やけに可愛らしいのだけど……、正直な話、彼女の台詞にはついていけなかった。

というか、少し前にも似た状況があったはず。あのときは婚約も破談寸前まで行ったし、僕自身も命の危機に晒されたのだ。まずい、思い出したら体が震えてきた。

「……どうしたの？ そんなに青ざめて」

「気にしないでいいよ……。それより、どうしてきみが僕のベッドにいるんだい」

理由についてはなんとなく想像がつくけど、ここは問わずにはいられなかった。

「ええと……。ほら、昨夜ワインを飲んでいたじゃない、わたし。

あなたが寝てしまった後も何杯か飲んで……。そう！ 眠くなったのよ。だから一番手近なベッドで寝ることにしたの」

「……」

ああ、やっぱりか。なんとなくわかっていたとはいえ、ただ沈黙する他なかった。

そんな僕の気持ちを知ってか知らずか。キウルケは、ベッドの上に散らばっていた自分のシャツを見つけて、いそいそと身につけていく。

僕が不躰にも視線を向けているからだろう。心なしか、少しばかり頬が赤いようにも見える。……ってなにを凝視してるのかな僕は。

なんとか気を取り直そうとすると、なぜかツェルプストー親子のキール訪問時の記憶が呼び起こされてしまった。

確かあのときも、僕が寝ていたベッドにキュルケが勝手に入って来ていたのだ。

いつまで経っても、娘が僕の部屋から戻って来ないことを危惧したツエルプストー侯爵が、自らキュルケのことを捜しに来て……。

駄目だ。そこから先のことは、本当に思い出たくない。そう思っているのに、あの炎の竜の姿が今もまぶたに焼き付いて離れない。

「ちょっとカール……。ああもう、頭なんて抱えちゃって。本当にどうしようもないわね」

そんな声がしたかと思うと。不意に、ふわっとした独特の甘い香りが鼻腔へと飛び込んでくる。

それと同時に、誰かが背中に手を回したのがわかった。そのまま僕の顔が何か温かく柔らかい物に押し当てられ……。ん？

「う、うわぁっ！」

「あっ」

なんとも情けない叫び声を上げつつ、僕はキュルケから大きく飛び退いた。なにせ、目の前にあってはならないものがあったのであるからして。

その勢いのまま床に尻餅をついてしまい、挙げ句の果てにはそのまま引っくり返って後頭部を床に思いきり打ち付けてしまった。

カーペットが敷かれていなかったら、きっとかなりの衝撃が僕の頭部に及んでいたはずだ。ありがとう、名もなき高級カーペット。

……それにしても驚いた。いきなり抱き締められるなんて。どういう風の吹き回しなんだろう。

「うう……。そんなに嫌がらなくなたっていいじゃない。自信なくなるわ……」

「あ、いや、そうじゃなくてさ。驚いたんだ、いきなりだったから」

「……ふうん」

「拗ねないでよ」

「拗ねてないわ」

なんというか、キュルケは少々スキシップが苛烈すぎるというか、ちよつとアグレッシブすぎる。何が彼女をこうさせるのだろう……。

おまけになんだか不機嫌になってしまふし……。ああもう、朝から疲れるなあ。

わたしがウィンドボナを訪れたのは、これで何度目になるのかしら。手の指で数えられるうちには収まっているのだろうか。

ゲルマニアは西のトリステインの十倍以上の面積を誇っていて、おまけにツェルプストーの領地とウィンドボナはとても離れているの。

それこそ移動だけで一週間は覚悟しなくてはならないわ。でも今回は竜籠を使って移動したから、かかった時間はそれよりずっと短いだけだね。

そうそう。

カールは、どうしてわたしがここまでついてきたのか不思議がつているみたい。

それはそうよね。最初にお母さまから同行しろと言われたときは、私自身疑問を抱いたもの。すぐに理由を聞かされて、納得もしたけれど。

——あれは、数日前のこと。キールから領地に戻ったわたしが、屋敷でのんびりと過ごしていた、ある日のことだったわ。

何の前触れもなくお母さまがわたしの部屋を訪れて「婚約者と共にウィンドボナへ向かいなさい」なんて言ってくるのですもの。

「カールについて行くの？ わたしが？」

「そうよ。明日には出発だから、今のうちに準備しておきなさい」
「でも、どうして？」

いくら婚約者だからって、どうしてわたしがウィンドボナへ行かなくてはならないのかしら。そんな疑問を浮かべつつ、お母さまに問いかける。

「あなたの婚約者はね、あなたや彼本人が思っている以上に価値のある人なの。我が家とゴットルプ家の縁談だって、公爵殿が直接話を持ち込んで来なかったら、一体どうなっていたかしら」

「……どういうこと？」

「そのままの意味だわ。今まで彼は自領で、周りの人間によって守られながら暮らしてきたのよ。前回の皇帝による大粛清以来は、社交の場にもほとんど出てこなかったというじゃない。公爵殿は、自分の唯一の子の身边にはいたく気を遣っていたはずなの」

「それって……。当たり前のことでなくて？」

……それと、今回のウィンドボナ行きになんの関係があるのだろうか。少しばかり困惑しつつ、わたしはお母さまの話に耳を傾ける。

「当たり前といえばそうかもね。でも、考えてもみなさい。ゲルマニア有数の貴族で、おまけに今の皇帝家にはない始祖の血を引いて

いて、さらには皇帝の甥に当たる彼が、どんな状況にあるか」

アンハルツ・ツェルプストーは、かつて繰り返されたトリステインのラ・ヴァリエールとの因縁の中で、幾度も公爵・大公クラスの貴族、王族の血を家の中に入れている。

一応、わたしも始祖の血を引いてはいるのよね。ラ・ヴァリエールも元は王の諸子。つまりは遠い親戚ということになるのかしら。

……なんだか嫌な話ね。

……だけど、ゴットルプ家はそれどころじゃない。

発祥そのものが違う。あの家は、まだトリステインが今よりも東の大きな領土を保持していた時代に、王家から分家されて生まれたの。

ゲルマニアでは他にほとんど存在しない、ハルケギニア三王権の正統な分家よ。大昔の騒乱で仲たがいで、ゲルマニア帝国の参加国になったらしいけど。

あくまでも元はトリステインの地方国家だったし、ここ数十年では関係も改善して、トリステイン王家からの嫁入りもあったわ。

元々は山岳地帯の田舎領主でしかなかった現皇帝家とは、それこそあまりにも格が違う。

つまり、お母さまの言いたいことは……。

「わかっているでしょうけど、簡単に言いましょう。カール・ペーター・ウルリヒは、現時点でもっともゲルマニアの帝位に近い人間よ。だって、皇族だけでなく始祖の血統も引いているのですもの。皇帝家の中には、彼よりも継承権の高い人間が何人かいるわ。だけど、その誰もが始祖の血を引いていない。他国に蛮族呼ばわりされる理由の一つね。そうした現状を変えようと考えている貴族も、少なくはないわ」

一息に長々と言葉を吐き出した後、お母さまはふうと息をついた。

そして紅茶を一口嚙下し、再び続ける。

「もし今の皇帝の身に何かがあったら、真っ先に皇位継承権を持った彼を次期皇帝に担ぎ出そうとする勢力が現れるでしょう。そして、それを快く思わない……。排除しようとする人たちも」

「……」

さすがのわたしも、これにはただ絶句するしかなかった。あのちよつとへたれたカールが、それだけの運命を背負っていたなんて。だけど、黙っていても話は進まない。強引に、脳裏に浮かんできた言葉を口にする。

「排除しようとする人たち……。皇帝家の誰か、“形式上”はカールよりも継承順位の高い人たちのことね」

「ふふ。本当、あなたは物分りの良い子よ。……ホルシュタイン公国内なら、公爵殿が自衛することも出来るでしょう。しかしウィンドボナともなれば、勝手は違う。敵の巢の中に飛び込むようなもの。敵は暗殺者だけじゃないわよ？ あらゆる手で彼を懐柔するか、あるいは……」

なるほどね。つまりは、将来的にあの人の妻となるわたしが、“その役目”を果たせということなのかしら。

「……わかりました、お母さま。未来の皇帝の妻、いえ“皇后”として、その責務を果たしてみせますわ」

わたしは自信満々に胸を張ってそう答える。いいじゃない、やってやるわ。“暗殺者ではない敵”も撃退してあげる。悪い虫なんて集る余裕も与えないわ。

「それでこそツェルプストーの女ね。恋に多く生きる。けれど、一度これと決めた相手には生涯の愛を誓うのよ」

「……わたしの場合は、家の都合だけ」

「あら、そう？ 彼のこと嫌いなのか？」

「いいえ。なんていうのかしら、彼。まだ知り合ったばかりだから、恋の対象ってほどじゃないけど……、なんだか放っておけないの。妙に危なっかしいというかなんというか……。なんとなく、お父さまに似ているのかもしれないわ」

「というか、わたしは今まで恋なんてしたことがないもの。現在進行形で家訓を破っているのなんて、うちじゃお父さまとわたしくらいだわ。」

ちなみに、お母さまはお父さまにぞっこんみたい。なんでか知らないけど、二人とも仲は良いのよね。

「私のどこがあれと似ているのかね、キュルケ」

「ううん。一見冷静に物事を見ているようで、実際は次にどんな行動を取るかわからないとか、困ると頭を抱えて思考停止気味になっちゃうところとか、妙にカッコいい時があると思ったらすぐにへたれちゃうところとか、体裁を取り繕ってるけど、実はエッチなところとか」

「……ヨハンナ。私は、キュルケがウィンドボナへ向かうことは絶対に了承しないぞ。今度ばかりは、体を張ってでも止める！ あんな子供など、鼠共の餌にでもなってしまえばいい！」

「あらあら」

……あれ？ 妙に低い声だと思ったら、お母さまじゃなくてお父さまだったの。どうしましょう。かなり好き勝手言っちゃったわ。お父さま涙目だし……。

「いいのよ、キュルケ。この人のことは気にしないで準備なさい。帝都は大変よ？ ……守ってあげてね。あなたの、運命の人を」
「はいっ」

そうね。出発はもうすぐだっていうし、早いところ準備した方がいいわ。なんだかんだといって、まだ水のドットだし。わたしが守ってあげないと。

「待ちなさいキュルケ！ 我が愛しのプリンセス！ 私は認めないぞ！ 婚約は破——」

「あなた。お話があるから、少し静かにしましょう？」

「……はい」

さっそくへたれたお父さまの声がしたような気もするけど、特に気にはせず、わたしは自分の部屋に向かったの。

——あれから数日が経って、無事にウィンドボナへとたどり着いたわたしとカールは、特に問題もなく三日目の朝を迎えることが出来た。

本当のところ、最初は内心かなりびくびくしていたわ。いつ刺客が来るのかって怯えもしたわ。それに、色仕掛けをかけてくる“敵”が現れないかと警戒したり。

あ、毎晩のように彼の部屋に入り浸っていたのは、いつ敵襲があるかわからないからなの。別に怖いからじゃないわ。……嘘じゃないわよ。

……でも、わたしたちが無事なのは、護衛に来てくれているホルシュタイン公国のお抱え騎士の人たちのおかげなのよね。中々姿を見せてくれないけど、後でお礼を言わないと。

朝起きてからの一連のやり取りの最中、どうしてかカールが頭を抱えてしまったわ。

だから慰めてあげようと思って、かなり恥ずかしいけど思い切って抱きしめてあげたの。なのに彼ときたら、嫌がって思い切り後ろに飛んでしまうんですもの。

……駄目だったのかしら。わたしなんかは、お母さまに抱かれるととても安心するのだけど。

なんだか地味に傷つくわ。……きっと、女性に対する免疫があまりないからだろうけど。慣れれば、大丈夫よね。

本当に怒ったようなふりをしていると、彼の顔が困り果てたように歪む。あんまりからかうと可哀想ね。ここは一步引いて譲ってあげないと。

今日はどうやって時間を潰そうかしらね。……そうだわ、ゲルマニアと名高いブルク劇場へ足を運んでみたいかも。

帝都は何度か訪れているけど、結局一度もそこへ入ったことはないし。そうね、今なら大丈夫かしら。

彼にお願いして、劇場まで二人で足を運んでみましょう。

第八話

朝のなんだか疲れるやり取りの後。

僕とキュルケは、ウィンドボナ市街にあるブルク劇場を訪れていた。

ブルク劇場は、ゲルマニア国内に存在する他のどの劇場よりも格式高いらしい。確か、ここを作らせたのは何代か前の皇帝だったはず。

それにしても。ちょうど僕が誘おうと思っていた場所に、キュルケも行きたがっていたというのは運が良かったな。

さて。今日はなにをやるのだろうか。劇場が営業するというのだけわかってはいたけど、細かい事はあまり調べていなかった。

と、そのときだった。余所見をしていたせいか、すぐ近くを歩いていた少年に、僕の体がぶつかってしまったのである。これは謝らないと。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

「……あ、ああ。大丈夫だ、問題ない」

年の頃は、だいたい十代の半ばくらいだろうか？ まだ幼さを残しながらも、とても凛々しい顔立ちをした金髪の人物で、背格好もそれなりだった。

ただ、こういうわけか彼は心ここに在らずといった様子だ。しきりに周囲をきよろきよろと見回しながら、黒いマントで顔を隠している。

おまけに額にはたくさん汗を浮かべていた。どうしたのだろうかと思いつつ、僕はただ突っ立っていることしか出来ない。

「……ほう」

なぜだか彼は僕を軽く一瞥したあと、小さく呟いてさっさと立ち去ってしまった。

……彼の視線に、一瞬だけぞっとしたしたのはなぜだろう。

ホールの方へ向かっているから、恐らくはオペラを見にやって来たのだろう。だけど、どうしてああ慌しいのだろうか。

「ねえ、あなた。今ここを、黒いマントを羽織った男の子が通っていかなかったかしら？　少し焦った様子の」

その直後。人ごみを掻き分けるようにして、一人の少女が現れた。年の頃は僕とそう変わらないだろうか？　今までほとんど見た事がないほどの、とても端正な顔立ちの女の子だ。

ただ、その美貌からは高圧的なオーラが吹き出ている。

つん、とすました態度でプラチナブロンドの豊かな髪を手でかき上げる仕草。本当にどこかのご令嬢なのだろう。まとう雰囲気が違う。

格好としては、やっぱりお姫様のような感じだった。白い手袋してるし。きつと、かなりの上級貴族の……。

「彼なら、さっきホールの方へ……」

「そう。礼を言うわ」

僕がホールの方向を指差すと。やっぱり彼女は傲慢な態度を崩さずに、ハイヒールをつかつかと鳴らしながら歩き去って行った。

ううん。ああいう子は綺麗だけど、プライドも山のように高いんだろうなあ。さっきの少年は前途多難だね。

……と、そうだ、なにをやるのか確かめたかったんだ。すっかり

忘れるところだった。危ない危ない。

ええと、演目は……、モーツァルトという人物の『フィガロの結婚』という喜劇オペラか。

なんだかこの名前、どこか聞き覚えがあるような。まあ、似たような名前の人ならどこかしらにいるんだろうし、気にすることもないか。

「なにぼさつとしてるの！ 置いていっちゃうわよ」

「ああ、ごめん。今行くよ」

演目の書かれたボードの前で立ち止まって、長々と考え事などしていたせいか。もうかなり前に進んでしまったキュルケから、お叱りの言葉を受けてしまった。

キュルケを追って大ホールへと足を踏み入れる。ここの構造は、よくあるタイプの市民ホールを想像してくれるとわかりやすいかもしれない。

僕たちはあくまでも一般客として入場していた。ただ、席は前方だ。生演奏を間近で見られるという意味では利点があるかも。

ふと周囲を見回してみれば、結構な数の人で埋め尽くされている。思っていたよりも人気があるらしい。

「ねえ、知ってる？ 元々の『フィガロの結婚』って、宮廷批判が多分に含まれているそうよ。多分中身は弄っているのでしょうけど、よくこんなところで上演出来るわねえ」

「……そうだね。なにせ皇帝のお膝元だっていうのに。というか、詳しいね」

広々とした座席に腰掛けて開演を待っていると、隣に座ったキュルケがこちらを向いて小さな声で話しかけてきた。

失礼な考えかもしれないが、キュルケが音楽に興味があったとは驚いた。そういえば昨夜もそんなことを言っていたような、そうでもないような。

まだ十三歳のくせにワインなんかかっくらっていたせいかな、どうもへろへろに酔っていたのだ。

……今思えば、もっと強引にでも飲酒を止めるべきだったな。

「ふふ。このくらいは淑女の嗜みよ？ あなたが望むなら、ゲルマニアにおける音楽史の講義をしてもいいわ」

「いや、遠慮しておくよ」

「そう……」

あ、キュルケがしぼんでしまった……。

とはいってもなあ、もうすぐ始まつちゃうし。今度機会があったらちゃんと聞いてあげようか。興味が無いってことはないしね。

ちなみに、音楽を聴くことはわりと好きだ。もっとも、自分でやるのは駄目だけど。スポーツと音楽は観るだけだ。

そうこうしているうちに、準備が終わったらしい。役者が壇上に出てきて、いよいよオペラが始まった。

元々の戯曲がガリアで作られたものであるらしく、舞台は火竜山脈以南のセビリアという場所であるようだ。

ちなみに、オペラは普通の演劇とは違い、登場人物たちが歌うように台詞を繋いでいくのが特徴だ。

……普通に演技をするのも大変だろうに、歌いながらってすごいなあ。

よく見ると、舞台の奥で楽器を演奏している二十代後半くらいの男性がいるけど、あれがモーツァルトだろうか？

若い男女が部屋の中にいるシーン。どうやら、男性の方が部屋の

寸法を測っているらしい。それを見た女性が、これは伯爵の罠ではないかと歌い上げている。

彼らはとある伯爵の召使いたちであるらしい。そして、二人は婚約者でもある。

ところが、既婚者の伯爵が若い女性の方に興味を持ち、一度は自ら廃止したはずの初夜権の復活を狙っているのだそう。

それに憤慨した男性が、自分の婚約者を狙う伯爵への対抗心を露にするモノローグが挟まれている。

……そもそも、平民が貴族に対して対抗心を燃やす、という展開がハルケギニアで容認されているというのは驚きだった。

というか、なぜこの国の最高権力者がそれを許しておくのだろうか？ このオペラを上演するにあたって、当然検閲は行われていると考えるべきだろうし……。知らないとも思えないけど。

とまあ、細かいことは置いておいて。僕たちは銘銘に『フィガロの結婚』を楽しんだのである。キュルケなどはずっと歌や踊りに見入っていたし。

オペラの終了後。僕たちはぞろぞろとした観客たちの列に混じって、ゆっくりと外へと向かって歩いていった。

……と、ここでなんだか尿意をもよおしてきた。そういえば、起床後のごたごたがあったおかげで今まで一度もトイレに行っていなかった。

「ちょっとお手洗いに行つて来るから、きみは先に出ていてくれな
いかな？」

「一人で大丈夫なの？」

「ははっ、心配しないでよ。それくらい大丈夫。すぐ戻って来るよ」
「……もう仕方ないわね。あまり待たせないでよ？」

「わかった」

生理現象のことだから、キュルケも強くは言えないらしい。それはそうだね。

僕はすぐに列を抜け出して、トイレのあるであろう方向を目指して歩いていく。この頃になると、もう廊下も人の姿はまばらだった。ちなみに、ウィンドボナではきちんと下水道が整備されている。ちょうどドナウ川の湖畔に造られた町なので、水を引こうと思えばいくらでも出来るのだ。

水メイジの魔法で処理もばっちり行われている。魔法のおかげで、ハルケギニアの衛生水準は地球の近代以降におけるそれとあまり変わりがない。

もっとも、それはメイジの多い都市部の話だけだね。全体で見れば、未だに農奴制が残っているし、教会領地はかなりの面積を占めているし、結局は……。

って、なんで僕はそんなことを考えているのやら。

用を足して、トイレの個室から出てみると。なんと、そこで先ほどの黒マントの少年と鉢合わせをした。

思いきり目が合ってしまったし、彼がこちらをじっと凝視してくるので、どうも素通り出来る雰囲気ではなくなってしまった。

「あ、先ほどはどうも」

「……きみ、後から来たプラチナブロンド髪の少女に、ぼくの居場所を教えただろう？」

なんだろう。彼の声には僅かに怒気が含まれている気がする。一

瞬で、このトイレの内部がものすごく剣呑な雰囲気になってしまった。

「いえ。僕は方向を指で示しただけで、細かい居場所なんて……」

「そこは知らん振りをして欲しかったな。おかげでこんなところに逃げこまなければならなくなった」

「す、すみません……」

僕が一方的に、かなり理不尽なことを言われているというのはさすがにわかる。しかし、目の前の彼がかなり必死なのは伝わってきたので、どうも反論する気にはならなかったのだ。

うな垂れてしまった僕のことを見た少年は、はっとした顔になって、すぐに謝罪の言葉を述べてくる。

「……いや、すまない。きみは完全に部外者だというのに。これでは八つ当たりもいいところだな」

「あ、いえ。気にしていませんから」

「そうか。ありがとう」

……というか、早くここから出たい。キュルケを待たせてしまっているし、なんだかこの人の向けてくる視線がやけに怖いのである。そんな祈りが通じたのか。誰かがトイレに入ってくる音がした。これ幸いと、僕は黒マントの彼に別れを告げる。

「じゃ、じゃあ。僕はこれで……」

ふう。やっと劇場から出られる。この後はどうしようかな。キュルケと一緒に食事でも取ろうか。それがいいかも。

などと考えながら、トイレの出口にたどり着いた、そのときだった。

出口に陣取るようにして、一人の大柄な男性が立ちはだかつていたのである。厳つい顔をした、言い方は悪いけど、ごろつきのような人だ。

「すみません、ミスタ。そこを通りたいので……」

「そうはいかないな」

「え？」

その刹那。

僕の背筋を、猛烈な悪寒が走った。目の前の大柄な男性が急激に殺気を増したかと思うと、懷から取り出した杖をいきなり振りかぶってきたのだ。

直感的、といえいいのだろうか。僕は後ろへ倒れるようにして飛びのく。それと同時に、直前まで僕の体があった場所を、光り輝く魔法の刃が通り過ぎていた。

杖に魔法の刃といえ……、軍用魔法『ブレイド』だ。取り回しのよさと強い殺傷性を兼ね備えた、とても凶悪な魔法である。

案の定、狭いトイレの出入り口の壁に見事な切り込みが入ってしまったている。

あれを生身の人間でしかない僕が受けたら……。駄目だ、考えたくもない。

くそっ。何がそれくらい大丈夫だ。油断した途端、こうして襲われてしまうなんて……。我ながらあまりにも情けない話だ。

どうする。敵は見た限りかなりの手足れだろう。水のドットで、まして戦闘用魔法をほぼ仕えない僕が敵う相手じゃない。

とにかく、時間を稼ぐしか……。

「どういうことだ。なんで僕を狙うんだ、依頼者は誰だ！」

「そんなこと、俺は知らん。だいたい、依頼者やその内容をそうペ

らぺらと話すわけがあるか」

ですよねー。……なんて言っている場合じゃない。敵はじりじりと迫ってくるし、おまけに『ブレイド』はまだ健在だった。

万事休す。僕は考えることをやめた。

だから、まさか誰か助けが入るなんて、まったく考えることもなかったわけで。

「……父の追っ手かと思ったが、そうではないようだな。お前のような大男が、こんな子供を殺めようなど。恥ずかしくはないのか？」

そこに現れたのは。先ほど別れたばかりのはずの、黒マントの少年だった。彼もまた杖を構え、威嚇するように敵を睨みつけている。

「これは仕事だ」

「そうか。ならば……」

少年の問いに対して、敵が放ったのはただの一言だった。それを耳にした少年は小さく呟き、魔法を詠唱して……。

突如、硬い石造りの床から、巨大な土の拳が現れた。それは土の魔法『アース・ハンド』だ。ただ、大きさが半端ではない。

拳はぐんと伸びて一撃を繰り出し、僕の三人分くらいは体重がありそうな敵を軽く吹き飛ばしてしまったのだ。

杖を構えた少年の放つ威圧感は相当なもので、彼がまったく並みのメイジではないことを意味していた。それこそ、スクウェアアクラスなのかもしれない。

魔法をもろに食らった敵は、トイレの出入り口の向かい側の壁へ大きな音と共に衝突した。それこそ、地響きを思わせるほどのものだ。

あまりの轟音だったせいかな。音を聞きつけた人たちが、わらわら

と周囲から集まってくる。その大半が貴族なのだろう、皆杖を構えていた。ただ、前へ進み出る者はいない。

「お前の負けだ」

僕を庇ってくれているのだろうか？ 黒マントの少年が前に進み出てきて、敵の大柄な男に杖を突きつけた。

「ふん。貴様も相当手足れなようだが、俺の敵ではない。さきほどは油断したが、そう易々と……」

低いうなり声を発しつつ、敵は何かを僕らに向けようとして……。それがないことに気がついたらしい。きよろきよると周囲を見回した。

「うふふ。あなたの探し物って、これのことかしら？」

すると。僕たちを遠巻きに眺めていた一団の中から、赤い髪の少女が進み出てきた。左手に自分の物ではない杖を持って、それを掲げている。

彼女は先ほど別れたはずのキュルケだった。どうも、騒ぎを聞きつけてこの場にやって来たらしい。あの杖は、そのときに見つけたものののだろうか。

そしてそれを自分の杖だと見抜いたのか。敵は、一気にキュルケに憎悪を向け始めた。

「き、さま……！」

「あら、わたしは落ちていたものを拾っただけよ？ あなたに逆恨みされる恐れはないわ。それに、ね」

……まただ。冷静なはずなのに、彼女の髪が逆立ち始めている。
いる。

「わたしの婚約者に手を出そうとするような外道が、そんな口を利いていいと思っているのかしら!？」

ぼっ。

どこか間拔けな音と共に、キュルケの杖先から猛烈な『フレイム・ボール』が放たれた。それも特大サイズだ。縦横二メートルはありそうだった。

大男を焼き尽くそうとして、それは高速でブルク劇場の廊下を駆け抜ける。

……だけど突然、火の玉が何者かによってかき消されてしまった。それをしたのは……。僕の目の前に立った、黒マントの少年だった。

自分の攻撃を無力化してしまったキュルケはいつもの余裕なる笑みではなく、それこそ猛禽類のような笑みを顔に浮かべて、少年に問いかける。

「あら。どうして邪魔をするのかしら、そこなミスタ？ 賊などその場で焼き払ってしまえばいいのに」

「見たところ、きみはかなり名のある貴族のご令嬢なのだろう。淑女が御手を下衆の血で汚す必要などないよ」

……そうか。この人は、キュルケに人殺しをさせないために妨害したのか……。さっきの『フレイム・ボールが』直撃していたら、敵は間違いないとお釈迦になっていただろうし。

そんな、あくまでも冷静な物言いの少年に面食らったのか。ほんの少しの沈黙のあと、キュルケは口を開く。

「……そう。わかったわ。……ミスタ・ヴルム。はやくその賊を捕らえてくださいな。さつきからわたし、気が気じゃないの」

「わかりました」

……あ、ミスタ・ヴルムだ。今までどこに行っていたんだろう。なんだか、体中に傷があるみたいだけど……。

彼は進み出て、壁に背をつけたままの大男を風のロープで雁字搦めに拘束した。そして、遅れてやって来た二名の帝都警備隊の隊員へと引き渡す。

「カール。あなたが中々戻ってこないから、一度様子を見に行こうと思ったの。そうしたら、ミスタ・ヴルムが傷だらけでやって来て……」

「申し訳ありません、若様。警護中に襲撃を受け、戦闘中に敵の策で団員が散り散りになってしまいました。自分だけはなんとか戻って来たのですが……」

「……いや、謝ることはないよ。むしろ、僕がこんなところに来なければ……」

帝都に来て今までなにもなかったから、僕はすっかり油断していた。大丈夫だなんて軽い口を叩いて、結果がこれ。甚だ情けないよ。キュルケが近くに来て慰めてくれるけど……。駄目だ。今は、あんまり……。

「失礼ですが、貴殿は？　かなりの名のある貴族の方とお見受けしますが。私はホルシュタイン・ゴットルプ家に仕える騎士、ヴルムと申します」

「ゴットルプ？　……なるほど、そういうことか。ぼくはフリードリヒ・フォン・プロイ……」

ミスタ・ヴルムの問いかけに黒マントの少年が答えようとした、そのときだった。未だに遠巻きにこちらを窺っている集団から、一人の少女が飛び出したのだ。

それは先ほどのタカビー……でなくプライドの高そうな少女だった。プラチナブロンドの髪を揺らしながら、早足にこちらへ歩み寄ってくる。

「やっと見つけましたわ！　どうして逃げるんですの、フリードリヒ！」

「……っぐ。マリア・テレジア……！」

「そんな他人行儀な！　マリアとお呼びしてくださいと、初めて出会ったあの日から申しているではありませんか！」

マリアという少女は、一生懸命に黒マントの少年へ声をかけるのだけ。当のフリードリヒは、最初の呟き以来まったく彼女のことを見ていなかった。

どこから逃げるか考えているのだろうか。周囲を少し見回したあと、僕に向かって声をかけてきた。

「……カール、といったね。繰り返すが、ぼくはフリードリヒという。この場ではこれでお別れだが、きっとぼくたちはそう遠くなく再会出来るだろう。それでは、また」

「は、はあ。ありがとうございました」

最後にプラチナブロンド髪の少女を嫌そうに一瞥したあと、フリードリヒという黒マントの少年は『フライ』を使い、近くの窓から飛んでいってしまった。

「ああ、また逃げられましたわ。ちょっと！　あなた、どうして彼を引き止めてくださらないの！」

「そんなこと言われても……」

「ああ、もう！」

滅茶苦茶な言い分に僕が言いよどんでいると。マリア・テレジアは、あつという間に僕に関心を失ったらしく、人ごみ目指して走り出してしまう。

まるで嵐のような女の子だ。突然現れて騒いで、またすぐに消えてしまう……。

「……ねえ、なんなの？ あの子」

「さあ？ さっきのフリードリヒという人を追いかけてるみたいだから……」

困惑したようなキュルケの問いに、僕自身もかなり困惑しながら返答する。フリードリヒとマリア・テレジア。よくわからない人たちだ。

「……そうだわ。そんなことよりカール、あなた怪我はない？ なにもされなかった？」

「あ、うん。大丈夫だよ。助けて貰ったから……」

「そう……。よかったわ」

僕がほぼ無傷だったからなのだろう。キュルケはほっと胸を撫で下ろしたようだった。

うん……。心配してくれるのはいいけど、ちょっと近づきすぎな気がする。まだ遠巻きに見ている連中がいるから、ちょっと恥ずかしい。

僕はともかく、キュルケには何もなくてよかった。

「……やっぱり目を離すと駄目ね。ずっとそばにいないと」

「キュルケ？」

「ううん。なんでもないわ」

キュルケがなにか小さく呟いたようだったが、僕はうまく聞き取れなかった。訊いてみてもはぐらかされてしまうし……。一体なんだろう。

かなり慌しく物事が起きたせいなのだろう。思っていたよりも時間過ぎていなかったらしい。

帝都警備隊が本格的に劇場内へと入って来たのは、それからすぐのことだった。

第九話

アルブレヒト三世からの謁見の日程を伝える書簡が僕の元へと届けられたのは、ブルク劇場で起きた騒動から数時間後の事だった。

それによると、午後からウィンドボナ市街地の中心に聳え立つホーブルク宮殿の謁見の間で、僕は皇帝閣下と顔合わせをするそうだった。

なんにしても急な話だ。いくらなんでも、当日まで皇帝の予定がわからないなんて事はないだろうに。一体どういうつもりなのだろう？

まあ、それはいい。そろそろ本来の目的を果たしたかったところだ。このままだらだらと帝都に残っていると、命に関わりそうだし……。

そして、報せから一夜明けた朝。今日も目覚めはそれほど悪くなかった。きちんと睡眠時間を取れたからだろうか。

ここでなんとなく、警戒を織り交ぜながらベッドの上を探る。またしてもキュルケが紛れ込んでいないか確かめるためだ。

そうしてしばらくベッドをまさぐった結果。今朝は彼女がここにいないことがわかり、ふうと一息をつく。

正直な話、あれはかなり心臓に悪い。チキンハートな僕では、何度も繰り返されるとそれに慣れる前にご臨終を迎えてしまいそうである。

……さて。いつまでもベッドの上でだらけている訳にもいかなない。一応着替えておくかな。どうせ後で謁見用のお召し物を着ることになるんだろうけど。

そんなことを思案しつつ。僕が昨日のように寝巻きを脱いだ、そ

の瞬間のことだ。

ドアが大きな音を立てて、それと同時に赤い髪を盛大に揺らしながらキュルケが僕の部屋へと突入してきたのである。

「カール！ おはよ……」

ぴたり。上半身に何も身に付けていない僕の姿を見て、キュルケは一瞬フリーズしてしまったかのように身を強張らせた。

そして、それがほんの少し続いたあと……。今度はドアがかちやりと閉まり、彼女がその姿を廊下へと消したのである。

こうなると入りづらそうだな。さっさと着替えてしまうか。元からそのつもりではあったけど。

少しして着替えを終えた僕が、キュルケの様子を見るために廊下へ出てみると。意外にも、彼女はドアの横で一人を大人しく待っていた。

「気にしてないから、大丈夫だって」

「……あ、うん。ごめんなさい」

「謝ることはないよ。こっちもうっかりしていたし。行こうか」

いつもは、平気で人のベッドに入り込んで来るのに。裸をちよつと、それも上半身を見ただけで気にするなんてなあ。可愛いといえはそうだけど……。

朝食を取るために食堂へと向かう道すがら、僕はそんなことを考えるのであった。

皇帝への謁見には、あくまでも僕一人で行かなくてはならない。キュルケは本来お呼ばれしていないからだ。

同行が許されているのは、ミスタ・ヴルムたちお抱え騎士だけ。

それも昨日の騒動で負傷者が何名か出ているので、実際に来る事が出来るのはほんの数名だった。

ただ、書簡に書かれている限りでは、向こうから迎えを寄越してくれるとのことだから……。

一応、僕が襲撃を受けたことは不祥事に当たる。それがあつたら……、と考えるべきだろうか。

書簡が皇帝の使者から届けられたのは、もう日が暮れてからのことだったからね。

ささやかな朝食の後、僕はあつという間に身支度を整え終えてしまった。基本的に服を着替えるくらいだからね、自分でやることは。そのせいなのか。出発までは、まだまだ時間が余っていた。

なので、一度自室に戻って紅茶を飲みながらゆっくりしていると、目の前で椅子に腰掛けたキュルケが不安げな声音で問いかけてきた。

「本当に一人で大丈夫？ 昨日あんなことがあつたし……」

「今度ばかりは大丈夫だよ。帝国騎士が護衛をしてくれるっていうし」

「そう……」

僕の言葉を受けても、キュルケはやっぱりどこか不安を隠せないようだった。

それはそうだろう。昨日、実際に敵の襲撃を受けたばかりなのだから。

僕自身、不安でないとは言えない。しかし皇帝の命令という拘束力がある以上、今さら断るといふ選択肢は存在していなかったのだ。

それからはお互いに無言だった。彼女も無理に引き留めることはしなかったし、なにより僕が考え事に耽っていたからである。

昨日襲撃を仕掛けてきた男は、まず間違いない僕の名が狙いだった。

たはず。

しかし、暗殺者と考えるにはいささか手段が稚拙というか、正攻法すぎるというか……。もっと確実な方法があったはずだ。

わざわざ別動隊まで用意して、僕とお抱え騎士たちを引き離すことまでしたというのに。何かイレギュラーな事態でも発生したのだろうか？

……どうなんだろうな。そこがいまいちわからない。

そうこうしているうちに、いよいよ宮殿へ向かう時間がやってきたらしい。ドアをノックする音がしたのだ。

「若様。出発の時間となりました」

「ああ、わかった」

この声はミスタ・ヴルムのものだ。僕はそれに返事をして、キュルケと共に部屋を出る。

三人で連れだって玄関前広場へと出た。すると、もう迎えが到着していたらしく、そこそこの大きさの馬車が僕たちの目の前に姿を現した。

馬車の前に立ってこちらを待ち構えていたのは、ゲルマニア国軍の制服に身を包んだ若い将校だ。年齢的にはまだ二十かそこらに見える。

大した任務ではないせいだろうか。あまりやる気が見られないのが問題だけど、宮殿に行くまでなら彼でも大丈夫だろう。こちらの騎士たちもいるし。

「じゃあ、行ってくるよ。遅くても夕方までには帰ってくると思う」

「ええ、わかったわ。……気をつけてね。なんだか嫌な予感がするから」

「嫌な予感？」

僕が訝しげな表情をしていたからだろう。いつもとは違った様子で、俯きながら彼女は口を開く。

「……あ、うん。なんでもないの。わたしのことだから、あまり気にしないで」

「そ、そう……。じゃ、また」

どうにも深刻そうな表情を見せるキュルケ。……嫌な予感がする、なんて言われたら気になるに決まってるじゃないか……。自分で気をつけるしかないけど。

さて。ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世こと僕の伯父は、一体どんな人物なのだろう？

噂や僕が思ってきた通りの人物なのか、はたまた違うのか……。内心、ちよっとドキドキとするものだ。

ホーフブルク宮殿は、ウィンドボナ市街地の中央部に建設された、事実上の主府であった。

歴代の皇帝は皆、巨大な庭園の中央部に聳え立つ大宮殿で政治の采配を司ってきた。もともと、常にその政治権力が全土に及んでいたわけではないのだが……。

敷地内の中心部。色とりどりの花たちが咲き誇る庭園の一角で、一人の少女が花びらで戯れていた。

年のころは十代の前半だろうか。風に揺れるプラチナブロンドの髪は、目映いばかりの輝きを放っている。まるで銀糸のような決め細やかさを持った髪だ。

サファイアをそのままはめ込んだような瞳は大きく、顔立ちは彼女の高貴な生まれを連想させるほどに精緻なものだった。

白磁のごとき、しかし健康的な柔肌を衆目から覆い隠すのは、やはり白亜のドレスである。

全体的に白いその少女は、まるで妖精のように可憐で、また儚げな容姿をしていた。そう、容姿だけは。

しかし、今の彼女はどこまでも不機嫌そうな様子を見せていた。可憐な容姿も、台無しになってしまふほどの仏頂面である。

そんな“美しいであろう”少女のさまを見かねたのか、すぐ近くで佇む壮年の男性が声をかけた。

「どうしたんだ、マリア。そんなに表情を歪めて。『フィガロの結婚』はお前の頼みで上演させたではないか。気に入らなかったのなら、即座に上演を差し止めるが」

「そうではありません。むしろ、あのオペラは称賛されるべきもの。わたしが憤っているのはもっと他の理由です」

男性の不躰な問いかけに、マリアと呼ばれた少女は露骨に眉を顰めた。

なぜならば。彼女が気分を害している原因の九割方は、目の前で突っ立っている男性にあったからだ。

それでもしばらくは堪えていたらしいが、そのうちに我慢が利かなくなったらしい。眉を吊り上げ、彼女は思いきり父を睨み付けた。

「どうしたもこうしたもあません！ わたしにはフリードリヒがいるのに、どうしてゴットルプの男などに嫁げと仰るのですか！ そ

れに、風の噂を聞けばその人物はもう婚約しているとか!」

マリアには、数年来の想い人がいた。会うたびに常に逃げられ、また冷たい態度を取られてきたが、それでも彼女にとっては恋だった。

それを今日になって、「あの家の次期当主と婚約しろ」などと言われて納得出来るはずがなかったのだ。

だがしかし、それに対する返答ときたら。色恋には常に清廉であれと考えている少女にとっては、あまりにも荒唐無稽でしかない言葉だった。

「ならば、彼をツェルプストーの女から奪えばいい。我が家は歴史の中で奪うことによって皇帝家にまで成り上がったのだ」

「……う、奪うだなんて、破廉恥ですわ。わたしはあくまでも……」

「無理を言うな。プロイセンの王子はお前にまったく興味が無い。そのくらいは見ていればわかる」

「……余計なお世話ですわ。お父さま」

父から情け容赦のない言葉をかけられようと、マリアはそれほど意に介した様子も見せなかった。ただそっぽを向くばかりだ。

彼女自身、想い人に避けられている事など、とうに理解していたのだ。それでも諦めずに追い続けているのは……、ある意味で恋に恋しているのかもしれない。

そんな娘の姿を呆れた様子で見やりつつ、この国の皇帝——アルブレヒト三世は、小さくため息をついた。家臣の前では絶対に見せない、普段とは少し違う表情である。

そんな中、皇帝の元を一人の騎士が訪れた。

騎士は壮年の男性で、よく鍛えられたがっかりとした体型をしている。顔立ちはまさに武人を体現したかのような精悍さを漂わせ、彼がただ者ではないことを示していた。

「……ザルツァか。どうしたのだ。見ての通り、余は娘との貴重な時間を過ごしておる」

「緊急の案件です。ご了承ください」

目上の、それも国家の頂点に立つ男に凄まれようとも、騎士は眉一つ動かさなかった。

それはそうだろう。この騎士のそういったところを気に入り、近衛騎士団の要職につけたのは皇帝自身なのだから。

「昨日の襲撃事件ですが、やはり裏で手引きをしていた人間は……」
「やはり、奴か。泳がされているとわかっていないのだろうか？
まったく、我が子ながら酷く出来が悪い愚息だな」

『謀反未遂』に懲りて、今は大人しくしていればよかった。そうしていれば、場合によっては皇位継承者への復帰も考えていたというのに。

決して口には出さずとも、皇帝はそういう考えを持っていた。若気の至りという面を多分に考慮し、クーデターを起こしかけた人間を生かしておいたのだ。

しかし、それに対する答えは自分の従弟に対する暗殺未遂。もう庇う理由などなかった。

「……ザルツァ、奴の処理は任せる。恐らくはバックについているであろう、あの生臭坊主共の始末もな」

「御意に」

皇帝の短い命令を受けた騎士は、まったく表情も変えずにただ頷いた。そしてマントを翻し、この場から去っていく。

そんなやり取りを、プラチナブロンドの髪の少女は不安げに見つ

める。

会話の全てが耳に届いた訳ではない。しかし、昨日ブルク劇場で起きた事件くらいは知っていた。

もつとも詳細に関しては、一般庶民並みの情報しか持っていないのであるが…。

誰が狙われたのだとか、そういうことはわからない。人混みを抜けるのに手間取って事件の一部始終を見ていないし、その後すぐに想い人のことで頭が一杯になってしまっていたからだ。

「マリア。もうすぐゴットルプ家の嫡子がやって来るだろう。お前が出迎えるのだ」

「……わかりましたわ」

本当はそんな気分でないし、好きでもないのに結婚しろなどと言われている相手を出迎えるのは、はっきり言って苦痛でしかなかった。

しかし、彼女にとって父の命令は絶対だった。

突然告げられた婚約の話への反論とて、あくまでも“許されている”に過ぎない。

結果は変わらず、ただ過程でガス抜きを出来るだけ。それがわかっているから、強気に出ていても、ただただ虚しさが込み上げてくるだけでしかない。

まったく、どうして自分が……。

そんなことを愚痴りつつも、少女は歩き出した。恐らくはもうこの宮殿までたどり着いているであろう、少年の元まで。

そして。ちょうどそのタイミングで、宮殿の敷地内へと進入する一台の馬車があった。

第十話

ホーフブルクの宮殿群へとやって来た僕を出迎えてくれたのは、昨日ブルク劇場で出会ったプラチナブロンド髪の少女だった。

ぱっと人目を引く美しい容姿に、つり上がった細い眉。僕の目が節穴でなければまず間違いなく、あのマリア・テレジアであることは間違いなかった。

例によってお高くつんと済ました仕草は、やはり彼女が高貴な、はつきりと言えば他人を慮ったことなどないであろう生い立ちを感じさせるには十分すぎた。

顔を合わせるなり、どちらもお互いの姿を認め合ったまま動かない。

……まあ、このまま睨み合いを続けていても仕方あるまい。挨拶をしないと。そんな風に僕が考えた、その瞬間。

眼前でこちらを見下したような視線を向けてくる少女が、何かに気がつくようにはっとした表情になったかと思うと、急にこちらへと頭を垂れたのである。

「ようこそいらっしゃいました。ゲルマニア帝国第一皇女、マリア・テレジアと申します。よしなに」

「……」

「どうしました？」

「……あ、カール・フォン・ゴットルプです。よろしく願いします」

突然の彼女の豹変ぶりにまったくついて行かない頭で、なんとか返答をすることが出来た。

うーん、昨日の事は覚えていないのかな。まあ、キュルケに匹敵

するか、単純な容姿だけなら恐らくはラ・ヴァリエールのあの方すら上回りかねない美少女だ。

ただの凡庸な人間でしかない僕のことなど、彼女のような人間がいちいち覚えているはずがないよね。

そういえば、例の黒マントの少年ことフリードリヒは今日はいないのかな。どうも彼は皇族では無いようだったけど……。

マリアに案内されながら、僕はホーフブルク宮殿群の中心部にある新宮殿内部をゆつくりと進んでいく。

時の皇帝が心血を注いで建造したからなのか。様式はきちんと統一されていて、内装や調度品も品のある落ち着いたもので揃えられていた。

さすがは、皇帝の居住する本宮といったところだろうか？

のんきにそんなことを考えていると。先行していたマリアが後ろを振り替えり、こちらを見つめてきた。

大きな青い瞳だ。まるで、深淵からこちらを窺う人魚を思わせるそれは、とても青くまた美しいもの。

だけど……、彼女はこちらを一瞥するだけで、実に無念さが滲む表情でため息を吐くだけだった。彼女のような美少女ともなると、憂いを秘めた仕草すらそのまま絵画になってしまいうるのがすごい。

それにしても、一体どうしたのだろう。僕に何か落ち度でもあったのだろうか？ 特に何かをした覚えはないんだけど……。

しかし、それを思案する前に目的地へとたどり着いてしまったらしい。

廊下の突き当たり。僕の目の前には、恐らくは謁見の間へ通じているであろう巨大な門が、その存在を誇示するかのように立ちはだかっている。

皇女の姿を確認したのだろう。門の両脇で佇んでいた門番が一礼

する。そして、彼らが杖を手にしてルーンを唱えたと……。

静かな音を立てながら、とてもゆっくりとした動きで、奥の謁見室へと通じる門が開かれた。

「どうぞ、先にご入室ください」

扉が開ききったとき、マリアがこちらを向いて声をかけてくる。

……なんだか、どこか彼女が不機嫌なように見えなくもない。ここは大人しく従っておくかな。

謁見の間の内部は、とても天井の高い大広間となっていた。赤い絨毯が真っ直ぐ玉座に向かって敷かれ、皇帝がいよいよその姿を現した。

遠目に見えるアルブレヒト三世は、優雅に皇帝の玉座に腰かけ、こちらを観察しているように思える。

僕が謁見の間に入ってすぐにマリアも後を追ってくる。その直後に、扉が少しばかり大きな音を立てて閉じられた。

……逃げ場はないっていうのかな。今さら逃げる気もないけど。

「ホルシュタイン・ゴットルプ公家嫡男、カール・ペーター・ウルリヒです。皇帝陛下。本日はお招きいただき、ありがとうございます」

なんとも取って付けたような台詞に、取って付けたような笑みを浮かべながら、僕は皇帝に向かって膝まづいた。

……さて。あまり出来が良いとは言えないけど。相手はどんな反応を返してくるか。適当に流してくれると嬉しいんだけど。

「そう固くなるな。この場には朕とマリア、そしてきみしか居らぬからな」

予想外の反応だった。もっと高圧的な態度を取られるとばかり思っていたのだけど、意外と皇帝はフランクな口調で話しかけてきたのである。

「ですが……」

「よいのだ。それとも、きみは朕に娘の前で恥をかかせると言うのか？」

「わかりました」

そう。特に威圧感のあるような声ではないのだけど、今まで「アルブレヒト三世Ⅱ強権的で残忍」という認識で育ってきた僕には、それが酷く恐ろしいものに感じられた。

恐らく、アルブレヒト三世に関する悪い噂の大部分は、反対派が作り上げたデマゴークなのだろう。

彼が実際に行っている政策は、皇帝自身と敵対する貴族以外にとってはそれほど悪いものではなく、むしろ好意的に受け止められるものだと言える。

しかし、実際に多くの貴族が、犯してもいない無実の罪で処刑されてしまったという事実もあった。

父の友人の将軍も謀反の罪を着せられて即時処刑されてしまい、そのわずか数日後にまったくの無実であったことが証明されるといふ事件があったのだ。

……だけど、いつまでも俯いている訳にはいかないんだ。

強張る体を強引に動かし、意を決して僕は頭を上げた。

それと同時に体を立ち上がらせる。普段から背筋を伸ばすように父の執事のアドルフから仕付けられているけど、今日はことさらそれを意識した。

「……」

決心……したのだけど。どうしたのだろう。皇帝は沈黙し、無表情でじっとこちらを見つめるだけだ。

それが続いたのはほんの数秒なのか、あるいは一分ほどなのか定かではない。その後、少しの間を置いて、彼は小さく呟いた。

「やはり、彼女の面影があるか……」

彼女……というのは、もしかして僕の母のことだろうか？ まあ親子だし、ある程度似ていても不思議はないはずだ。

ただ、この場合どんな反応をすればいいのだろうか。似ているといえど、そうなるだろうけど。そもそも、この皇帝閣下は自分の妹を偲ぶような人なのだろうか？

こちらが困り果てた様子を見せていることに気がついたのだろう。皇帝は、それまでとは違って変わった穏やかな声音で僕に声をかけてくる。

「きみは、自分がなぜここに呼ばれたのかわかるかね？」

呼び出された理由というのは、あまり検討が付かない。ただ、なんとなく……僕の母方の血絡みではないかという気はするのだけだ。確証はなかった。

案の定、予想された反応なのだろう。答えに窮している僕を見て、皇帝は重々しく口を開いた。

「実を言うとな。今回きみを呼び寄せたのは、ちょっとした案件を伝えるためだったのだから。奴が……愚息が余計な手出しをしおったのだ」

「余計な手出しって、まさか……」

「そう。昨日、ブルク劇場できみを襲撃したのは朕の愚息が手配した者だ。それについては、謝罪させてもらう」

……ということは、あるとき大聖堂で見た元皇太子が僕を狙ったのか。

でも、どうしてだろう。彼がこちらを狙う理由なんて……。いや、あるにはあるけど。リスクが大きすぎる。実行に移すなんて……。

そんな疑問に答えをくれたのはやはり、僕の眼前で玉座に腰かけるアルブレヒト三世だった。

「きみがなぜ朕に、いや私に呼び出されたのか。どうして元皇太子に命を狙われるのか。その答えは、きみの血筋にあるはずだが？」

皇帝の口調は淡々としたものだった。だけど、その淡々とした言葉の羅列の中に、非常に重要な意味が込められていることは間違いなかった。

少し状況を整理してみよう。

……皇帝は僕の伯父である。ということはつまり、その妹の血を引く男子である僕にも皇位継承権はある。だがそれは、箸にも棒にもかからないのではないのか？

父は五指に入るなんて言っていたけど、それは誇大表現ではなかったのか？

いや、そうじゃない。数年前の大粛清、ゲルマニアで採用されている女子への皇位継承を認めないサリカ法、そして元皇太子の行動……。

そこから導きだされる答えは、もう一つしかない。

「ようやく答えにたどり着いたようだな。だが、それを否定しようとしているのもわかるぞ」

「……わかりません。僕には、陛下がなにをお考えになられている

のか」

「そうだな。わかりにくかったようだ。では、簡潔に述べようか」

皇帝がそう口を開いた瞬間、この場の空気が一気に冷え固まった。そして、先ほどから黙って僕の背後にいた、マリアの息を呑む様子が肩越しに伝わってくる。

「きみをここへ呼んだのは、きみを次の皇帝……。つまりは私の後継者とするためだ」

……。

……………。

……………ん？

今、僕はとんでもないことを耳にしたような……。いや、だけど。そんなまさか。ゲルマニアの片田舎で小さな国を統治して暮らして、いこうと思っていた僕が、皇帝？

……父の言っていたことが現実となってしまった。

正直な話、僕は自分が皇帝の候補者だと知っていても、完全にその事実から目を背けていた。自分がそんなものになるわけではない、そう勝手に思い込んでいたのだ。

それは大きな思い違いだった。皇帝の玉座は、自分が思っていたよりもずっと近い位置にあったのである。

「どうして僕が後継者なのですか？ たとえ元皇太子がいなくとも、まだ皇位継承権を持っている人たちは……」

「確かに残っているな。だが、彼らは表向きの地位は残しているが、実権などもう持っていない」

「え？」

表向きの地位は残っているのに、実権はないって。それじゃまるで……。

「私が、自らの玉座を脅かすような地位にいる輩を放置する人間に見えるか？　しかし、あまり表立って有力者を排除すると色々面倒でな。何名かは生かしたまま傀儡としたのだ」

そう告げる皇帝の表情は、まるで悪魔が浮かべる笑みのように凶悪なものだった。いくら即位前は政敵に怯える日々を送っていたとはいえ、人間ここまで冷酷になれるのだろうか。

つまり、本来の継承権で僕よりも上位に來ている人たちは、実質的に存在しないものと考えなければならぬのだ。

順番を飛ばしての後継者指名には、そういった背景もあるらしい。……駄目だ。言葉が出てこない。なにを言えいいのか、それが思い浮かばない。

「……」

そうやって沈黙を続けていると、皇帝はさっさと自分から口を開いてしまう。

「きみは私の甥だ。そして皇帝家とトリステイン王家の血の双方を引く稀有な人物……、それだけで皇帝となる資格は十分にある。どちらにせよ、たった一人の男子を廃嫡した時点で、我が家の男系は私で断絶するのだ。後を継ぐ者がなければ話にならない。いや、きみに継いでもらわねば困る。マリア、こちらへ來なさい」

そんな馬鹿な。この場で起きた事態はもう青天の霹靂であるとい

う他なく、僕はただ呆然と立ち尽くすしかなかった。

すぐ近くを綺麗なプラチナ・ブロンド髪の少女がすり抜け、彼女が発する甘い香りすらまともに知覚する余裕がないほど、ひたすら困惑していた。

だけど、皇帝はまだ僕を休ませてくれるつもりはないらしい。次に放たれた一言は、より驚くべきものだった……。

「我が娘マリア・テレジアをきみの婚約者としよう。もっとも既に婚約者がいるようだが、そちらの話は破棄か、あるいは側室に……」

「ちょ、ちよっと待ってください!」

「なんだね?」

いや、それはないだろう。いくら皇帝だからって、先に決まっていた婚約の話をいきなりひっくり返そうだなんて!

……正直なところ、僕はキュルケに好かれる自信はないし、彼女の夫には力不足だ。だけど、もっと頑張って彼女に認められるくらいの男にはなろうって思っていたんだ。なのに……。

側室だって? ふざけるなど言いたい。僕がどう評価されても、そんなことはどうでもいい。だけど、なんでそっちの都合でキュルケが過小評価されなくちゃならないんだ。

皇帝はゲルマニアの頂点に立つ存在だ。だけど、だからって何でもかんでも思い通りになんて出来るはずがないし、していいはずがない。

「ツェルプストー家との婚約は前もって決められていた事項です。それを今になって……」

「……だが。私の娘であるマリアと婚約すれば、きみは始祖の血統を担ごうとするグループだけでなく、今の私に媚び諂う主流派の支援も受けられるのだぞ? どちらにとっても悪い話ではないはずだ。ツェルプストーとの話も悪くはないのだろうがな、きみにっては」

「だけど……！」

この瞬間のこの場合は、一触即発の雰囲気だったのかもしれない。少なくとも僕はそう感じていた。

突然こんな話を聞かされ、大きく気が動転していたのだろう。僕はどこまでも冷静さを欠いていたし、皇帝も思ったより抵抗する僕に焦りを感じていたのだろう。

だから、僕たちは気が付くことがなかった。出来なかった。謁見の間の扉を破って侵入してきた人間を見て、マリアが大きな叫び声を上げるその瞬間まで。

「お兄さま!？」

謁見の間に押し入って来たのは、廃嫡されたはずの元皇太子だった。彼は少数の手勢を連れているのだろう、扉の向こうで断続的な炸裂音がしているのがわかった。

突然の闖入者。皇帝は突如現れた自分の息子の姿を目の当たりにして、瞬時に表情を怒りに染める。

「なぜお前がここにいるのだ！」

「なぜもなにもないな。騎士をこちらへ差し向けたのはあなただろ
う、皇帝閣下」

「……」

「ま、そこにいるゴットルプの子供を暗殺しようとして、失敗した
ぼくにも落ち度はあるけど……。酷いんじゃない？ 近衛騎士に大
聖堂を襲わせるなんて。おかげでせっかくの根城がパアさ。仕方な
いから、ここであんたに潰されたクーデターの実行と行かせてもら
う。次の皇帝はぼくだ。そこの弱々しいガキじゃない」

なんだ。一体なんなんだろう、今日は。完全に厄日じゃないか…

…。今日だけじゃない、どうしてこうキュルケに「大丈夫」と告げたときに限って……！

元皇太子は杖を僕たちへ向けつつ、ゆっくりと歩み寄ってくる。動けない。こちらが杖を取り出している間に、きつと勝敗は決してしまうだろう。

万事休す。

どうするべきか思案していると……。突然、マリアが髪を振り乱しつつ自らの兄の全面に飛び出した。そして、必死の形相で叫ぶ。

「お、お兄さま！ やめてください、こんなことをしても、お兄さまが皇帝になることなんて出来ませんわ！」

「やれやれ、鬱陶しい妹だ。容姿とプライドだけの女がぼくに指図するな。……ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ハガラース」

発した言葉の通りだった。実に鬱陶しそうに、眉を歪めながら、元皇太子は精神力を魔法へと変換していく。

あれは恐らく、水の魔法『ジャベリン』だろう。みるみるうちに、氷で出来た鋭い槍が成長していった。あまり太さはないらしい。

狙いは僕……ではない。恐らくは皇女と、その直線上にいるであろう皇帝だ。

「安心するんだな、ゴットルプの公子くん。あの忌々しい二人を葬ったら、次はきみの番だ」

憎たらしい者を見る目で、元皇太子は僕に声をかけてきた。その瞳には、どう見ても殺意の色が浮かんでいる。

……どうする。このまま二人を見殺しにするのか？ いや、駄目だ。そんなことは出来ない。二人は杖を出す隙すら与えて貰えず、抵抗する術が無いのだ。

だが。元皇太子の注意は、今なら僕から逸れている。彼は先ほどから、父である皇帝ばかりを睨んでいるからだ。

行動することは出来る。だけど、僕の脆弱な水魔法で強力であろう『ジャベリン』を防ぐ手立てはない。

氷を無力化するのにもっとも最適なのは……。『火』だ。

しかし僕は『ファイヤー・ボール』すら、マツチのともし火程度の威力のものを放つのが精一杯。それではどうにもならない。

「さて、さようならだ。ぼくの家族たち」

ぞっとするような表情を浮かべつつ、元皇太子は己が手にした杖を振りかぶる。氷の槍の向かう方向は……。間違いなくマリアと皇帝のいる場所だ。

……駄目だ、もう悩んでいる時間はない！

皇帝は怖いし、彼の言うことには納得出来ない。そしてマリアにはかなり酷い態度を取られた。けど……。

ここで二人を助けなかったら、僕はこの先一生、父や屋敷の人たち、エリザベートやキュルケに顔向けが出来ない。そんな気がするんだ。

無駄だってわかってるけどね。まったく、今日は本当についてないなあ……。

そんなことを頭の中でばやきつつ、僕は腰に装着していた杖を抜き放った。そして『ファイヤー・ボール』のスペルを詠唱しつつ、全力でマリアの元へと駆ける。

『ジャベリン』が発射された瞬間、彼女の前面に立った僕は、自らも『ファイヤー・ボール』の詠唱を完了。杖を迫り来る氷の刃へと向けた。

「頼む……、頼むから、出てくれええええええ!!」

とにかく必死だった。端から聞いていれば、とんでもなく情けない声だっただろう。でも、そのときは僕は本当に必死だったんだ。

いつかも言ったけど、僕はどこまでもチキンハートな情けない人間だ。それをわかっていても、生来の気質というものは直しようがない。

自分の杖の先から、サッカーボールほどの大きさの『ファイヤー・ボール』が『ジャベリン』目掛けて飛び立つのを見送った直後、僕の視界は闇に包まれていくのだった。

第十一話

今まで一度もまともに成功させたことのなかった『ファイヤー・ボール』の成功と共に、僕は意識を失った。

気絶してしまったのは、僕の弱い精神面が原因だったのだろうか？ それとも、本来の系統である水の対極に位置する火の魔法を強引に使ったからなのだろうか。

いずれにせよ、結論は出なかった。そんなことがわかれば苦労はしないだろう。魔法は、まだまだ未知の要素が強いように思う。

ドットメイジとて、感情が異常に昂ると一時的にスクウェアメイジにすら匹敵する力を出せるようだし……。僕の場合は、それが系統に働いたのだろう。

いわば火事場の馬鹿力のようなものだ。無理にそれを使えば、絶対に体に反動が来る。気を失ってしまったのは、何も緊張状態だけが原因ではなさそうだね。

……さて。僕が意識を取り戻したのは、例によってどこかのベッドの上だった。ただ、今回は周囲に誰もいなかった。

周囲の調度品は、先ほど本宮の中で目にした物に近いように思う。つまり、まだ自分はホーフブルク宮殿の内部にいるのだろう。

そういえば、アルブレヒト三世やマリア・テレジアは無事なのだろうか？ 少なくとも、僕が割って入ったことで時間は稼げたと思うけど……。

どちらにせよ、僕に目立った外傷はないようだ。

ということは、『ジャベリン』の無力化には成功したのだろうか。

後ろの二人に被害は出ていないはず。体を張った甲斐はあったかな。

「おお、目を覚ましたか」

「……」

周囲に誰もいないので困っていると。不意に、部屋の扉を開けて誰かが入ってきたらしい。

それは、この国の皇帝だった。今は皇女の姿は見えないようで、どうやらただ一人で僕の元までやって来たようだ。

「ご無事でしたか？ それに、元皇太子は……」

「うむ。きみが前に出てくれたおかげで、私たちにはまったく傷の一つもなかったよ。奴は……、あの直後にやって来てくれた、きみのところの騎士が捕縛してくれた。なんでも、宮殿に相当数の愚息の手下が紛れ込んでいたようだな。それらを掃討してくれたらしい。さすがは帝国騎士だ」

「そうですか……」

僕のところの帝国騎士——ライヒスリッターといえば、もうミスタ・ヴルムしかないだろう。

ライヒスリッターはもつとも下級の騎士号とはいえ、国から下賜されるれっきとした騎士の証なのである。

何かと影の薄いミスタ・ヴルムではあるが、彼の實力は折り紙つきだったりする。そうでなければ僕の護衛など任されないはずだ。

少しばかり無駄な思案をしていると、ごほんと咳払いをする音が部屋に響いた。顔を上げてみれば、皇帝が口の辺りに握り拳を当てていた。

「……それで、だ。先ほどは話がうやむやになってしまったが、どうだろう。どうしても私の後継者になってはもらえないかね」

「それは……」

彼らが来たときから予感はしていたけど、やっぱりその話になる

のか。……正直なところ断りたいんだけど、どうにも……。僕が俯いたからだろう。皇帝は静かな口調で、ゆっくりと告げてくる。

「今すぐ決める、とは言わん。皇太子になれとは言わないし、マリアをきみの婚約者とするだけでも良い」

「皇女殿下を妃にしてしまったら、それこそ次代の皇帝になることが確定したようなものではないですか」

「む、中々に鋭いな。黙って押し付けてしまおうかと思ったのだが」

……なんだろう。妙に愉快そうな顔をしている気がするのだけど、この皇帝閣下。まるで悪戯を仕込もうとしている子供のようないか。

僕はそう感じたのだけど。

しかし次の瞬間、皇帝の表情が一気に引き締まった。それまでのおどけたような雰囲気は瞬時に吹き飛び、こちらを真剣な眼差しで見つめてくる。

そして、重々しく口を開いた。最初に出会ったときの声よりもずっと低く、猛烈な威圧感を孕ませた声音だった。

「きみはアンナの一人息子だ。私は常々、彼女の一人息子であるきみに帝位を引き継いでもらいたいと考えていた。あくまでも希望だがね」

「常々……」

「そうだ」

「どうしてですか？ 確かに僕は母の子かもしれませんが、」

「理由はある。だが、それは今ここで明かすようなものではない。

……きみがどうしても拒むというのならば、それはそれで仕方ないことだよ。もう一度だけ、よく考えてほしい」

それだけ言って、皇帝はこの部屋から退出する。後には、つかつかと靴が鳴らす音と、ドアが閉められる音だけがいつまでも僕の耳に残った。

最後に皇帝が見せた顔……。どこか悲しげというか、寂しそうだっただけ……。なにせよ、普通じゃないようだ。

母の名前を、アンナという名前を口にするときの皇帝の声音は、それ以外に比べて幾分か威圧感が緩まったようにさえ感じたのである。

……二人に何があったのだろうか？

僕がいくら考えたところで、当事者でもないのだからわかるはずもないけど……。

……さつき窓の方を見て気が付いたけど、どうも今は夕刻を過ぎたばかりの時間帯であるらしい。つまり、それほど長時間気を失っていた訳ではないようだ。

どうするかな。いや、いつまでもベッドの上でぼうつとしている訳にもいかないか。そろそろ起き上がろう。

そう考え、動き出そうとした瞬間だった。再び、誰かによって部屋のドアが開かれたのである。

「失礼しますわ」

今度現れたのは、皇女殿下ことマリア・テレジアだった。例によってきらびやかなドレスに身を包んでいるのだけれど。なんだか、おどおどとした態度だった。

ブルク劇場で見せ付けてくれた高慢ちきな態度は、一体どこへ行ってしまったのだろうか？ 見ようによっては、別人にも思える。

「どうしたんだい？ こんなところに来て」

また面倒な人がやって来たなあ、と思いつつも。僕は努めて冷静にマリアへと問いかける。

だけど、彼女からすぐに返事がやって来ることはなかった。僕らの距離は二メートルも離れていないにも関わらず、だ。

そのうち、彼女の顔が耳まで真っ赤に染まってしまう。かと思えば、今度はふるふる震えながら、小さな唇を動かして言葉を発するのである。

「……て……ください……」

「え？」

「……いて……くだ、さい……」

蚊の鳴くような、かすれるように小さな声だった。なにを言っているのかわからない僕が沈黙を続けていると……。

次の瞬間、驚くべきことが起きた。

なんと彼女、何をどう思ったのか、急に自分のドレスを脱ぎだしたではないか。おまけに、着付けが大変なはずのドレスが面白いように脱げていくのだ。

「え？　ちょ、ちょっと！　なにをしてるんだよ!？」

「……抱いて、くださいまし。今すぐ」

「はああ!？」

「さあ」

なんだよこれ。思わず素っ頓狂な声を上げてしまったよ。冗談じゃないよ。僕にそんな真似が出来るか。

そう考えて逃げ出そうとしたのだけど、生憎僕の体は万全の状態とはいえなかった。まして今いるのはベッドの上。そう簡単に逃げ

出せるはずもない。

ああ、もう！ どう見ても嫌そうな顔してるじゃないか。ちょっと涙出てるし……。大方、皇帝にでもやれって命令されたんだろうけどさ……。

あれだけ一生懸命フリードリヒのことを追いかけていたんだ。急に僕が婚約者になるだなんて、一番納得がいていないのは彼女の方だろう。

ここは断固拒否する。後で皇帝にも抗議しないと。

「無茶言わないでよ。とりあえず服を着なつて。風邪引くよ」

「……」

今度こそ僕はベッドから這い出て、なるべく無言で立ち尽くすマリアの方に視線を向けないようにしながら、彼女のドレスを本人へと押し付ける。

あくまでも興味を持ったなんて絶対に知られないよう、仏頂面をするのは忘れない。

……すると。彼女はそううち、なんだかいたたまれなくなったように体を震わせた。

「……どうしてですか」

「え？」

「あなたといい、フリードリヒといい……。これだけの美少女を前にして、まったく興味の欠片も持ち合わせないなんて。そっちですか？ あなたたち、そっちなのですか？」

「そっち？ そっちってなに？」

「っ！ そんなこと、わたしに訊かないでください！」

……わからないからただ尋ねただけなのに、なぜか逆切れされてしまった。前から思ってたけど、難儀な性格の子だね。

それにしても、自分で自分を美少女と言っただけで済ませようとは思ってはいない。もっとも、容姿に裏打ちされた自信があるからなのだろうけど。

「とにかく。皇帝陛下がなんと言おうと、僕はきみを婚約者にするつもりはないよ。きみ自身、フリードリヒのことが好きなんだろうし」

そう告げると、マリアは一瞬だけ固まった。それは本当に一瞬の間であつただけけれど、確かに彼女の時間が止まったことは間違いない。

「……そうですわね。わたしが心に決めたのは、あのお方ただ一人。あなたのような情けない人間なんて、好色なツェルプストー女の尻にでも敷かれていればよいのです」

うわっ、酷い言い草だな。ツェルプストー侯爵がこの台詞を聞いたら、たとえ皇女殿下でも容赦なく切り捨てそうだ。

というより、さっきからドレスを押し付けようとしているのに、肝心のマリアが受け取ってくれないな。仕方ない、無理にでも押し付けてしまわないと。

そう考えて僕は目を瞑り、彼女がいるであろう方向に手を差し出した。

「ま、それはいいから。とにかく服を……」
「服を、どうするの？」

ん？　なんで今さらそんなことを訊かれるんだろう？

「いや、どうするって……。着てもらうんだよ」

「へえ。その子に？　あなたが着せてあげるのかしら？」

「その子？　着せてあげる？　一体何を言って……」

なんだか不穏な気配を背後に感じると共に、先ほどから言葉をやり取りしている相手が、恐らくは眼前の少女でないことに気が付いた。

恐る恐る目を開いてみると……。目の前にマリアの顔があった。しかし、彼女の視線は僕の肩を通り越して、部屋の扉の方向を向いていたのである。

まるで、部屋の空気が凍ってしまったかのような寒気すら覚えた。それほどに、僕の背後にいる存在からの視線が痛いのである。

猛烈に嫌な予感がする。

かの物語の中で、凶悪な竜に立ち向かったときのイーヴアルデイの如き勇気を發揮して、僕は“彼女”に声をかけた。

「……キュルケ？」

「ええ、そうよ。将来カールを尻に敷く予定の好色女ことキュルケですわ。でもねえ。あなたも、好きでもない殿方に肌を晒してるじゃない……。それじゃまるで、好色を通り越してただの痴女よ。ゲルマニアの皇女さま？」

「な、なんですって！？　たかだが侯爵の娘が、なにを！　だいたいい、わたしだって好きで……！」

「あら。あなたの家は元々山岳地帯の小領主だったでしょう。皇帝になどならず、お山の大将でも気取っていればよかったのに。ねえ、“痴女殿下”？」

「あ……。このっ！　ううう……。人の気も知らないで！」

「知りませんもの。わたしは痴女殿下にはなれませんし」

「ち、ちち痴女って言うなあ！」

あれ？　いつの間にか、僕は完全に蚊帳の外になっている気が……

…。よし。なにか誤解を受けてしまったようだし、ここは戦略的撤退を――

「ねえ、カール。まだ“お話”は終わってないの。次はあなたの番よ。心配させた分、しっかりお灸を据えてあげるから」

撤退どころか、僅かに体を動かしただけでキュルケに肩を掴まれてしまった。残念ながら逃走は不可能のようだ。作戦は失敗に終わった。アーメン。

「大丈夫よ……。ね？ この子と一緒に、“お話”するだけだから」

とても優しいげな、まるで聖母のような笑みを浮かべながら、キュルケは僕に告げてくる。

だけど……。

僕にとって、その笑みは決して聖母のものではなかった。それは僕をヘルヘイムに引きずり込もうとする、冥界の女神さまのものだったんだ……。

――その翌日。

ウインドボナからの帰り。

キールとツエルプストー領への中継地点に当たるニルンベルクへと向かう道すがら。竜籠の内部で、僕は空を眺めていた。

あのときキュルケが現れたのは、ミスタ・ヴルムからの報せを受けて、宮殿まで飛んできてくれたからなのだそうだ。とてもありがたいことだ。

さて。とりあえずは誤解も解けたし、なんとか僕は無事に帝都での日程を終えることが出来た。

マリア・テレジアの僕らに対する印象は最悪だったろうけどね。結局皇帝への答えもちゃんとしないうちに、逃げるように出てしまったし……。

でもなあ。皇帝になるなんて、僕にはやっぱり無理だ。それこそもっと適任者はいるだろうに。継承権でいえば、もう駄目みたいだけど。

昔のように、選帝侯の選挙で皇帝を選ばいいのに……。今となつてはもう選帝侯もお飾りになりつつあるみたいだから、それも厭しいのかな。

……あ、そうだ。せっかくだし、あれをキュルケに見てもらおう。

「キュルケ。ちょっと見てもらいたいものがあるんだけど」

「なにかしら？」

僕が杖を取り出しつつそう言うと、なんだか疲れきった様子でキュルケはそう返してくる。

「魔法を見てもらおうと思って。昨日、やっとまともな『ファイヤー・ボール』を打てるようになったんだ。それで『ジャベリン』を防いだんだよ」

「……へえ。本当に？」

「うん。せっかくだからきみにも見てもらおうと思ってさ」

苦節三ヶ月弱、やっと火のドットスペルがまともに使えたんだ。これはぜひ、きっかけをくれた彼女に見てもらいたいと思うものがある。

……不安がまったくないと言えば、それは嘘になる。だけど、いくらなんでも火のドットスペルくらいならば、一度きちんと使えたのだから、次だって。

うん。大丈夫だ。

さすがに竜籠の中で攻撃魔法を使うわけにもいかないので、窓を開けておく。目標は目の前に見える雲だ。

「ウル・カーノ……」

精神を研ぎ澄ます。杖に精神力を込めて、力を流し込んでいく。ルーンの詠唱の結果生まれる現象を強く思い描いて……。

一気に、空へ向かって杖の先を向けた。さあ、これでサッカーボールほどの火の塊が……！

「あら。小さいわねえ」

「……」

次の瞬間に杖から出てきたのは、ろうそくのともし火のような小さな火の塊だった。

先ほどの不安が的中してしまったようだ。僕は昨日のあれを「火事場の馬鹿力」と表現したけども、まさにその通りだったらしい。本当に、一時的に使えるようになっていただけのようだ。調子に乗りすぎたらしい。もう言葉もない。

そんな黙りこくって落ち込む僕の方を見やりつつ、キュルケが口を開いた。

「ねえ。最近、思うのよ。あなたは水を極めた方が良いつて」

それはそうだ。僕が最初にぴんと来た系統は水だった。火の魔法は、半ば意地で習得を目指して来たに過ぎない。

「元はといえば、わたしがあなたに火の魔法を使わせようとしたの

が原因だったけど……。やっぱり、向き不向きはあるのよね。わたしは水の魔法はてんでだめだし。無理に得意でない魔法を覚えるより、自分に合った魔法の練習をした方がいいわ」

「……やっぱり、そうかなあ」

「ええ。本当にごめんなさいね、わたしが余計なことをしたから」

「いやいや、きみはちつとも悪くないよ。……ただ、一度始めたことだから、なんとかやり遂げたくて。それだけだったんだ」

『ファイヤー・ボール』一つまともに撃つことが出来ない、というのはそれなりに劣等感があった。やっぱりそこは自分の意思だね。今のところ、水の魔法で有用な攻撃手段を覚えるには至っていないし。

……そうだな。まずは僕の系統だろう、水から頑張ってみよう。それをやるだけやって、他の系統に手を回すのが良い。

「よし。帰ったら、水の魔法を中心に練習してみるよ」

「その意気よ。頑張って」

まだ僕は魔法の練習を始めたばかりなんだ。時間はある。いつか水のスクウェアメイジになれるように努力していこう。

そう、そのときの僕は考えていたのである。

——ホーフブルク宮殿の本宮内、皇帝の執務室。

その場では、皇帝アルブレヒト三世と帝国宰相の二人が顔を合わせていた。

帝国宰相は壮年の上級貴族である。彼は、見事にセットされた自らのカイゼル髭を撫でつつ、眼前の皇帝へ困惑を滲ませた口調で問いかける。

「……カール・フォン・ゴットルプを内密の『皇位継承者』とする？　ですが、本人から色よい返答はなかったと伺っておりますが」

「なに。本人がなんと言おうと、周囲の足場さえ固めてしまえば拒否できなくなるだろう。既に彼の婚約者は“その気”のようだしな」

あろうことか、この皇帝は帝位を拒む自分の甥の外堀を埋めるつもりであるらしい。なんとしてでも、自分の決めた人間に後を継がせたいというのだ。

「陛下も、中々にお人が悪い」

「ふっ。朕は元より“極悪人”だからな。自分の目的のためならば、どんな手とて使うよ」

……自分で自分を極悪人と称するのはどうだろうか。一応は皇帝なのだから、せめて徳を見せてもらわなくては困るというのに。

心の中で、宰相は小さくため息をついた。

「そのような言葉は慎んでくださいますよう」

「なに、卿だからこそ言うのだ。そうでなければこのような発言はしない」

自分を諫める言葉もなんのその。特に気にもせず、皇帝はただひたすら皇位継承権に関わる書類へと目を通していく。

……世継ぎはなんとかなる。それよりも皇帝が気がかりなのは、娘のマリア・テレジアの件だった。

彼女は、北方の新興国であるプロイセン王国の嫡男に恋慕している。

プロイセン王国はゲルマニア騎士団領を起源とする領邦国家で、近年急速に力をつけてきた。ウィンドボナの政府にとって、潜在的な脅威となりつつある国だ。

万が一にも、その国に皇帝の唯一の娘が嫁ぎなどすれば。最悪の場合、血縁関係を理由に皇帝家の所領ごとプロイセンに乗っ取られてしまう可能性があるのである。

そうでなくても、あの野心的なプロイセン王は、息子の妻の地位を最大限利用するだろう。

それよりは、たとえ血縁上の従兄であっても、ゴットルプの嫡男に嫁がせた方が良い。皇帝はそういう考えを持っていた。

「しかし、内密の後継者とは……。争いの火種になるという予感しかしませぬぞ」

「なに。今から手回しをしておけば良い。今はまだ何も知らず、気楽な人生を謳歌するというのも、決して悪くはないだろうからな……」

未来を憂える宰相のぼやきが耳に入ったのだろうか。皇帝は不適に微笑んだ。

新たな世界の“彼”の未来は、もう決定してしまっていたようである。

第十一話（後書き）

第二章は終わり。次回より第三章に入ります。

第十二話

色々な事があったウインドボナへの訪問をなんとか終え、キールへと戻ってから二週間が経った。

もうすぐ八月——ニイドの月を迎える今日この頃。

いくら涼しいゲルマニア北部の海沿いの町とはいえ、こここのころの暑さは、僕の体力を蝕むには十分なものとなっていた。

魔法の練習ももっぱら室内で行うか、あるいは中庭の東屋の屋根の下で行うことが多くなっていた。

その場合、大抵はエリザベートが近くの椅子に座って本を読んでいる。

どんな本かと思えば、それはこのホルシュタイン公国の北にある、デーン王国のアンデルセンなる作家の童話だった。題名は『醜い火竜の子』というらしい。

言動から忘れがちになってしまいが、彼女はまだまだ幼い。年相応の本を読む事だつてあるのだ。それを見て、僕は少しばかりほんわかとした気持ちになる。

……ただ、そのすぐ近くにマキャベリの『君主論』が置かれているのを見つけて、すぐにげんなりとした気持ちになりもした。

エリザベートはありとあらゆる本を読んでいる。ああいう童話やら、難しい学術書やら分け隔てなくだ。

ちなみに。僕は、家庭教師であるヴォルテール先生の思想的な影響を受けている。そのせいか、どちらかといえば考え方は啓蒙思想へと傾いているように思う。

もっとも、こんな田舎の小さな国の統治で、やれ啓蒙だの専制だの主張する機会があるのかは、まったくわからないけども。

さて。そんなこんなで、この二週間ほどはずっと魔法の練習に努

めてきた。せめてラインメイジになれないかと努力は続けているが、ランクアップの壁は高く険しいものだ。

メイジの魔法は精神力に影響する。つまりは、僕が精神的に何らかの変化をすることで、メイジとしてのクラスも上がる可能性が高い。

そのきっかけが掴めるといいんだけど……。このキールの町で引きこもっている限りは無理かな。単純な訓練でも、上がる可能性はあると思うのだけど。

「……カールさん。そろそろお夕飯の時間です」

「ん？ あれ、もうそんな時間か」

顎に手を置いて考え事をしていると、僕の服の袖がエリザベートにきくいくいと引っ張られる。それにつられて空を仰ぎ見れば、確かに空の色が茜色に染まっているのが見えた。

結局、今日もあまり進歩は見られなかったな。やはり、誰かに師事しなくては“コツ”やらを知ることが出来ないのだろう。

ただ、お抱え騎士のミスタ・ヴルムは水のメイジではないので、そうなるかと頼める人がいなくなってしまうのが難点だ。どうにかならないものだろうか？

……と。そうだ。

東屋のテーブルの上には、エリザベートが日中読みふけていた本が何冊も鎮座している。

どれも分厚いもので、とてもではないが彼女の細腕で抱えていけるものではないだろう。そういうわけで、本を元あった場所に戻すのは僕の仕事だった。

「魔法の練習はどうです？ なにか、手ごたえは掴めましたか？」

「そうだな。あんまりうまくはいってないね。とりあえず『アイス・ウォール』を使えるくらいにはなりたいんだけど」

「……そうですか」

僕はそれほど深く考えてはいなかったのだけど、なぜかエリザベートは残念そうに俯いてしまった。

そんなに深刻そうな顔をしなくてもいいのに。この年頃の子は笑っている方がずっといい。まあ、年齢を問わず皆が笑っていられる方がいいのだけど……。

「なに。まだ時間はあるし、ゆっくりやるしかないよ。本当に才能がなかったら諦めるけど」

「そんなことありません！　あなたは、きっと才能があるはずです！　だって……」

「え、エリザベート……？」

「あ……う……。ごめんなさい」

なんというか、酷く驚いた。いつも大人しい、というか大人しい姿しか見せたことのない彼女が、こんなふう to 声を荒げるなんて。

しかも、それは怒りから来ているとか、僕を叱るとか、そういう意図はまったくないのが理解出来た。怒りではなく、どちらかといえば焦りのようなものが感じられたからだ。

なんだかなあ。とにもかくにもミステリアスな子だけど、本当にわからないところが多い。僕は彼女がどこの生まれなのかすら、未だに知らされていないし。

……まあ、それは置いておこう。今は、このしゅんとうな垂れてしまった女の子を元氣付けないとね。

妹みたいなもんだから、それほど気兼ねなく接せるというのは大いに助かる。これが同年代かそれ以上の異性だと、かなり辛いものがあつたりするからだ。

数刻の後。夕食の席。今日は珍しく、父と同席することが出来た。父はとにかく忙しい。しかし、たまの休暇にこうしてキールへと戻って来てくれるのだ。

大きなテーブルを囲むのは、僕と父、そしてエリザベートだった。人数は少ないけれど、こういう時間こそが僕にとってはかけがえのないものなんだ。

食事の間は、会話もなく淡々と料理を口へと運んでいく。うん、この牛肉の煮込みは美味しいな。名前はグーラシュといって、ゲルマニア料理の一つだ。

それからしばらくして食事を終わると。ナプキンで口を拭いた父が、僕へ向けて声をかけてきた。

「どうだ、カール。魔法の練習は」

「まだまだといったところです。独学ではいささか厳しいところもありますし」

「ふむ……。そうか。ならば、仕事の合間を縫って魔法の先生を探してみよう。水魔法となると少し厳しいかもしれぬが」

そう言い、父は顎で生え揃った立派な鬚を手で撫でた。

未だにあちこちで内紛が絶えないゲルマニアでは、水のメイジは非常に重宝されている。故に、フリーでそれなりに腕の立つ水メイジの数はあまり多くないのが現状だ。

「ありがとうございます、父上。ですが、あまり無理はなさらないよう」

「ははは、まだまだ私は大丈夫だよ。こうしてお前の顔を見るために生き延びて来たのだからな。そう易々とやられはせんよ」

僕の言葉を耳にした父は、実に明るい表情で笑い飛ばしてくれた。父は現在、ゲルマニア周辺にあって、ゲルマニアへの服属を拒絶している国を討伐する任務を請け負っていた。

シュレースヴィヒ公国の大部分を占領しているデーン王国も、ゲルマニア帝国と隣接した枠外の国家だ。

ちなみにプロイセン王国も、東側の領土はゲルマニア帝国の外部に存在している。首都のベルリン近辺は『ブランデンブルク選帝侯領』といい、あくまでもゲルマニアの一領邦に過ぎないのだ。

それがどうして、独立国家としてのプロイセン王国などと名乗っているかといえば……。

「……ううむ。この、一人で考えに没頭して周りが見えなくなる癖がなくなればいいのだが……」

父が何か言った気もするけど、物思いに耽っていた僕はとうとうそれに気が付かないのだった。

翌日は虚無の曜日だった。ヴォルテル先生が旅に出てから、もうそれなりの日数が経過する。ま、あの人は鉄砲玉みたいな人だし、そのうち戻ってくるだろう。

父は相変わらず軍での仕事に忙殺されているらしく、今日も僕が起きた頃にはとくに屋敷を出て行ってしまっていた。

せっかくの虚無の曜日だけど、どうしたものかなあ。今日も朝から暮れまで魔法の練習でもしようか。それとも、町へ出て気分転換をするのも……。

そうだな。最近はあまり外へ出ていなかったし、植物園でも見に行ってみようか。エリザベートも誘って。

よし、思い立ったら吉日だ。さっそく、彼女を呼んでこよう。

植物園は、キール市街地の外れに建設された、大きな温室を備えた施設だった。

その設立は三十年ほど昔のことで、先代のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン・ゴットルプ公……つまりは、僕の祖父が建設させたものらしい。

温室では、比較的温暖なロマリアや、ガリアの南西部に当たるヒスパニアなどから集められた、南方の珍しい植物などが植えられている。

もちろん温室以外のプラントもあって、そこではトリステインやゲルマニアはもちろん、アルビオンから持ち込まれた植物もあったりする。

ちなみに、屋敷からは徒歩で数分の距離にある。祖父は昔よく通っていたらしい。そのための立地なのかな。

エリザベートは温室で興味津々な様子で南方の植物に見入っていた。彼女の目の前では、オリーブオイルで有名なオリーブの木などが幾本も植えられている。

ちなみに、オリーブの枝は『平和と充実の象徴』であるらしい。だからといって枝を折って持って帰ったりはしないけどね。

実が青いうちから採取して、塩漬けにする食べ物がロマリアの方ではあるみたいだけど、生憎ながら僕は口にしたことがなかった。

温室を抜けると、それまでの南国を思わせるからっとした暑さから開放される。ロマリアはあんな気候なんだろうか？　だとしたら

一回行ってみたいなあ。

などと考えていると。隣で一緒に歩いていたエリザベートが、小さくあくびをするのがわかった。

「ふわああ……」

「ん？ どうしたの？」

「なんだか、眠たくなってしまいました」

まだ昼前なんだけどな。大方、夜遅くまで本でも読んでいたのだろう。朝から少し眠そうだったし……。歩くのも辛そうに見える。

まあ、眠いというのなら仕方ない。ここは一度帰ろうか。そう思い、僕は園内の木陰に設置されたベンチに座る。そして、彼女にその主旨を伝えるのだけど。

「……だめです。眠いです」

「と、言われてもなあ……」

うつらうつら。もう船を漕ぎ出してしまっていて、とてもではないけど自力では帰れそうになくなってしまった。困ったなあ……。

そんなことを考えながら僕が悩んでいると。とうとうエリザベートは眠気に負けてしまったらしく、目を閉じてぱたりと倒れこんでしまったのだ。

それも、僕の膝の上に。

……困ったな。身動きが取れない。ここままだと、彼女が起きるまでこの体勢を維持しなくちゃならない。

メイドの一人でも同行させればよかったな。必要はないと判断したのが失敗だった。おまけに、お抱え騎士たちも植物園の中にまでは入ってこないし……。

「弱ったな……」

そう呟きつつも、僕は腹を括ることにした。ああだこうだ言っても始まらないんだ。どうせここは日陰になっているから暑くはないしね。

とはいえ、本の一冊もないと暇つぶしは出来ないけど。

……うん。とても暇だ。エリザベートはぐっすりやすやすや寝入っているから、起こすのもなんだか悪いや。

と、僕が半ば諦めかけたとき。軽い足音と共に、園内を誰かが駆けてくるのがわかった。一体誰だろう。ここは市民も物好きくらいしか来ないけど……。

「若さま、大変です」

「ロツテじゃないか。どうしたんだ？」

足音の正体は、うちの屋敷に勤めているメイドのシャルロツテだった。彼女はエリザベートの世話をしてくれているメイドだ。ロツテ、というのは彼女の愛称である。

しかし、あんだか様子がおかしい。妙に焦った様子で、額に冷や汗など浮かべていた。

「ええと、その。若さまに会わせろ、と何人かの人たちが……。身なりからして貴族の方であるのは間違いないので、無下に追い返すことも出来なくて」

「……なんだろう、一体。いや、とにかく一回戻ってみるよ。その前に、この子をどうにかしないといけないけど」

「あ……」

ここでようやく、シャルロツテはエリザベートが寝入ってしまった

ていることに気が付いたらしい。一瞬だけ硬直してしまい、それを見て僕はふと笑みをこぼす。

「エリザベートは頼むよ。僕は行って来るから」

「は、はい！ 行ってらっしゃいませ！」

そっと、なんとかして膝の上の少女を起こしてしまわないよう、細心の注意を払いつつ、僕はそっとベンチを離れた。そして、歩き出す。

……それにしても、こんなときに一体何の用だろう。アンニユイな午後を過ごす予定だったのに……。

——少し早足で歩くこと数分。僕は屋敷の敷地内へと戻っていた。

僕がやって来たことを察知したのか、未だ負傷したままのミス・ヴルムがこちらへと歩み寄って来た。どうにも、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「若さま、大変です。来客の件についてですが……」

ううむ。そこら辺の怪しい人間なら、すぐに追い出してしまうだろうに……。彼が屋敷へ受け入れなければならないほどの人間となると、ちょっと厄介だな。

「父でなくて、僕に用があると伺いました」

「はい。相手が相手ですので、やむなく受け入れましたが……。これは大きな問題となるかもしれません」

「え？」

相手が相手？ それはどういうことだろう。僕はわけがわからず、ただ黙ってミスタ・ヴルムの次の言葉を待つしかない。

「落ち着いてお聞きください。来客というのは……、プロイセン王国王子フリードリヒ、その姉、そしてその従者なのです」
「ふえ？」

僕がこういう間拔けな反応をしてしまったのは、なんとか大目に見てほしいものだ。青天の霹靂とは、まさにこのことであつたのだから。

第十三話

屋敷の応接間。部屋のほぼ中央に設置されたソファ―に腰掛けながら、僕は困惑の表情を浮かべる他なかった。

その理由は色々あるのだけど、もっとも大きいものはいえど。“命の恩人”であるフリードリヒが、こちらへ向かって深々と頭を下げている事だった。

……ミスタ・ヴルムから彼らの来訪を伝え聞いた僕は、すぐさま彼らが待つ客間へと赴いたのである。

すると、そこで待ち構えていたのは。ウィンドボナのブルク劇場で、刺客から僕を守ってくれた、あの黒マントの少年フリードリヒだったのだ。

彼は、自分がプロイセンの王子であること、そして隣の女性が姉のヴィルヘルミーネ王女であることをまず話した。

そして、とある事情からベルリンを飛び出したこと、逃亡中にプロイセン王の放った追っ手を巻くために、この国へやって来たという話を語った。

また、付き添いの一人であるフォン・カッテ少尉によれば、彼らは、プロイセン軍の野外演習中にこっそりと脱走したらしい。

そしてベルリンの郊外でヴィルヘルミーネさんと合流し、今に至るといった話だった。

説明の後、黒マントを羽織ったままの少年は顔を上げた。そして、重々しげに口を開く。

「……ここまで逃げてきたとき、ふときみの名前が浮かんだった。ぼくたちが無礼な真似を働いたことは重々承知している。それでも、お願いだ。なんとかゲルマニアを脱出するあてがつくまで、どうか

ぼくたちを匿ってほしい」

「……」

参ったな。

さすがに、この事態は予想していなかった。まさか、あのフリードリヒがプロイセンの王子だったなんて。そんな彼が家出をしているなんて。

どうして彼がそんなことをしたのか。実は、その理由についてまったく見当がつかないということではなかった。

プロイセン王国のフリードリヒ・ヴィルヘルム王は、とてつもなく厳格で節制を徹底する君主として広く知られている。

先代のフリードリヒ王が疲弊させた国の財政を瞬く間に立て直してしまった一方で、自国の軍隊を過剰なまでに増強した。

そして、それまで先代の王が支援していた芸術家たちを、ことごとく追放してしまったのである。つまりそういった芸術には理解がないという事を意味している。

……ううむ、プロイセンの王さまはみんなフリードリヒだからややこしい。

ウィンドボナで出会ったとき、彼はブルク劇場にいた。そして、誰かに追われているかのような態度を取っていた。

あれはマリア・テレジアから逃げているのだとばかり思っていたけど、よくよく思い出してみれば「父の追っ手」という発言をしていたのだ。

恐らく、あのとときのフリードリヒは父の方針に背いて、無断でブルク劇場へやって来ていたのだろう。

そして、そのことが原因でなんらかの不和を起こし、こうして家出と相成ったのだと思う。

……苦勞してゐるんだろうな。僕としてはぜひ匿ってあげたい。だけど、これは下手をすれば外交問題になるし、最悪の場合は戦争にだってなりかねない。

プロイセンは、常備軍だけで数万の兵力を保持している。ゲルマニアの諸侯でも突出した軍事力を保有しているのだ。

一方のホルシュタイン公国。常備軍の数はプロイセンには到底及ばないし、質だって勝負にならないだろう。

まともに両者が正面からぶつかれば、まずこちら側が敗退するはず。

ただ、今のプロイセン王は強大な軍隊を持ちながら、即位以降ただの一度も戦争に参加していない。

もしかしたら、彼にとつての軍隊は、飾って嬉しいコレクションなのかもしれない。なにせ、『ポツダム巨人軍』なんて悪趣味な部隊に多額の予算を注ぎ込んでいるらしいし……。

それに、いざ戦争となればウィンドボナも黙っていないだろう。本当に戦争になるかはわからないのだ。

しかし、現実的な観点から考えれば、ここはベルリンに通報して彼らを送り返し、後は知らぬ存ぜぬを貫いてしまうのが最善の策だ。最初から問題となりうる事案に関わりさえしなければ、先ほど考えたような事態にはまず陥らないだろう。

……だけど。

だけどあのとき、フリードリヒは劇場で僕を助けてくれた。見ないふりだって出来たのに、危険も省みず、見ず知らずの人間に手を差しのべてくれたんだ。

そんな人をないがしろにすることなんて……、僕はしたくない。いや、してはいけないと思う。

父がこの事をどう言うのかはわからない。だけど、きっと理解してくれる。そう思った。

ここで僕は腹を決め、眼前で不安げにソファアに座り込む姉弟に

向かって告げることにしたのだ。

「わかりました。当分の間、あなた方の身柄はこちらで預かりましょう」

「……若！」

「ヴルムさんは下がっていて。父には僕から伝えるから」

「ですが」

「お願いします」

「……わかりました」

彼らを受け入れる趣旨のの発言を耳にしたミスタ・ヴルムが制止にかかって来たのだけでも、それをなんとか押し止める。

大人しく下がってはくれたけど、彼はまったく納得した様子がないのだけど……。そこは信じるしかない。

そんな僕たちのやり取りを見ていたからなのか。フリードリヒもヴィルヘルミーネさんも、どこかばつの悪そうな顔をしていた。

「……本当に、いいのか？ 転がり込んでおいてなんだが、きみはぼくらを匿う理由なんてないんだぞ」

「理由ならありますよ。ブルク劇場で、あなたは僕を助けてくれました。だったら、次は僕が助ける番です」

自分は命を救ってもらったというのに、その恩人を見捨てるなんてことはやっぱり出来ないよ。

本来なら、政治家としては失格なんだろうなあ、こういうの。でも、譲れない一線というものは誰だって持っているはずだ。今はそれを大事にしたい。

フリードリヒは、それから少しの間黙って俯いていたのだけど、やがて顔を上げた。そして、再び僕に向かって頭を下げる。

「……すまない、恩に着る」

「我々からも深く、お礼申し上げます」

「い、いえ。これはこの前のお礼ですから、あまり気になさらない
てください」

フリードリヒだけでなく、ヴィルヘルミーネさんやカッテ少尉、
もう一人の付き添いのカイト少尉にまで頭を下げられてしまい、僕
は大いに困惑した。

……このとき。部屋の入り口近くで鋭く目を光らせるミスタ・ヴ
ルムの視線に、僕はとうとう気づくことはなかった。

それから、少し経った頃。屋敷の客間が居並ぶ廊下。

とりあえずフリードリヒたちには、今のところ使っていない客間
を宛がうことにした。

同行者も含めた四人全員が貴族なので、本当は一人一人に部屋を
割り当てようとしたのだけど……。どういう訳か、ヴィルヘルミー
ネさんはフリードリヒと相部屋でいいと言い張るのだ。

まあ、万が一他の来客が来たりすると困るから、部屋が空くに越
したことはないのだけど。

「……プロイセンの方、ですか？」

「うん。色々と事情があるみたいでさ。しばらくここに滞在してい
くんだ」

「フリードリヒ・フォン・プロイセンだ。少しの間、ここでお世話
になるよ」

「……はい」

フリードリヒたちの滞在が決まった後、シャルロッテに連れられてエリザベートが屋敷へ帰ってきた。

まだ寝ぼけ眼だったけど、彼女は珍しく不機嫌な様子を見せている。どうも、彼女を置いて僕一人で帰ってしまったことが気に入らないらしかった。

とはいえ、用事が出来てしまってやむなく、ということは理解してくれているようだ。

ちなみに、なぜ彼女にフリードリヒたちを紹介しているのかといえば。どのくらいかはわからないけど、それなりの日数は一つ屋根の下で暮らすことになるはずだ。

だから、紹介を……と思っていたのだけど。

そういえばエリザベートは人見知りをする性格だったのだと、僕の背後に隠れながら服の裾を握る少女を見て、今さらながらに思い出した。

「エリザベートちゃんって言ったかしら。よろしくね」

「はい……」

今度はヴィルヘルミーネさんが前へ進み出て挨拶するのだけれど、やっぱりエリザベートは恐々と小さな声で返事をするだけだった。

性別に関係なく見慣れない人は苦手なんだろうなあ。

ちなみに、カッテ少尉とカイト少尉は、脱出経路を確保するために早々に出掛けていた。

彼らは最初、トリステイン経由で空路を使ってアルビオンに逃走しようとしたらしいのだけど、それはプロイセン王の差し金によって妨害されてしまったらしい。

そこでゲルマニア内を逃走するうちにこの国へと到着したのだという。縁とは色々な場面で巡りめぐって来るのだなあ、と呑気に考

えてみる。

いやしかし、落ち着いて見てみると、フリードリヒもヴィルヘルミーネさんも、揃って美形の姉弟なんだと実感させられる。

フリードリヒはマントの色と同じ黒髪でなかなかクールな外見。ヴィルヘルミーネさんは綺麗な金髪をくるとカールさせていて、かなり整った顔立ちをしている。

こんな二人と比べると、あくまでも十人並みの容姿でしかない僕という生き物が、酷く空しく思えてくる。将来的には父みたいに渋い感じに慣れるといいのだけど。

でも、なあ。キュルケといい、マリア・テレジアといい、この姉弟といい、なんでまあ美形ばかりと面識を持つようになるのか。

うーん。なんだか悲しくなってきた。

……あ、そうだ。

そんなことより、せっかく彼がやってきているんだ。刺客を倒したときの挙動を見る限り、彼はかなりの手垂れのはず。ここは稽古をつけてもらえないか頼んでみよう。

「あ、フリードリヒさん。少しお願いがあるのだけど……、いいですか？」

「ん、なんだ？ 便宜を図って貰ったんだ、ぼくに出来ることならなんでもするよ」

そう問いかけてみると、フリードリヒはなんだかもすごい勢いでにじり寄ってくる。それを目にしたヴィルヘルミーネさんの視線がなんだか痛い。

……やっぱりちょっと変わった人だな。悪い人じゃないっていうのはわかるんだけど。

いや、無駄なことは考えないでさっさと用件を伝えてしまおう。

そして、相変わらず背中張り付いたままのエリザベートの体温

を感じつつ。僕は、黒マントの少年に向かってこう告げるのであった。

「魔法をもっとうまく使えるようになりたいんです。時間の都合がついたらいいので、訓練をつけてはもらえませんか？」

——フリードリヒたちがこの屋敷へ滞在するようになって、三日。

屋敷の近くに広がる森の内部。

僕は大いに後悔していた。正直、彼に魔法の訓練を頼んだのは大きな間違いだったといわざるを得ないのである。

そもそも、僕は彼の出身国をもっと考慮するべきだった。プロイセン軍の訓練といえば、それこそゲルマニアの他の諸侯を遥かに凌駕しているのだから。

彼はかなり甘くしていると言うのだけど、今までほとんどまともな訓練などしたことの無い僕に、あの国の訓練方式は明らかに身の丈を越えてしまっていたのだ。

……というか、隠密行動する敵の魔法攻撃をかわした上に反撃しろなんて……。無茶苦茶だ。

「どうした！ その程度では魔法の上達なんて夢のまた夢だぞ！」
「う、うわっ」

「なにをしているんだ、プロイセン軍人はうろたえない！」

……くそっ、僕はプロイセンどころかどこの軍人でもないんだぞ。

いくら低威力の『ブレット』だからって、当たれば痛い。うろたえもするよ。

こちらから頼んだ手前、内容が気に入らないからってやめるわけにもいかないし、その気もないけど……。

さつきから、土の塊が際どいところを飛んでいくせいで、体中あっちこちが泥だらけだ。汚れを洗い流している暇だってありゃない。

「習うより慣れろ。ぼくが『ブレット』を放つ際の一瞬の殺気を感じ取れるようになるんだ。これは不意の暗殺に対する防衛手段にもなるぞ」

「……つく」

殺気を感じ取る……。ああもう、やるだけやってみるか。

言われたとおり、僕は目を閉じて感覚を研ぎ澄ました。こうなると、もう耳に届くのは、ざわざわとした木々のざわめきだけ。

……。

駄目だ、なんにもわからない。これじゃ……。

と、そう、考えたときだった。

「ああ、いたいた。カールくん。なにしてるの、こんなところで」「ヴィルヘルミーネさん……。いえ、フリードリヒさんが魔法の練習だっというから来たんですけど……」

「え？ ……なにこれ、泥だらけじゃない！ ちょっとフリッツ、なにやらかしてるの！」

そこへどうしたかヴィルヘルミーネさんが現れた。恐らくはフリードリヒを捜しに来たのだろう。彼女は、傷だらけの僕の顔を見るなり怒り出した。杖を取り出し、手当たり次第に魔法をぶっ放し始めたのだ。

ちなみに、フリッツというのはフリードリヒの愛称であるらしい。

「姉上。これは正当な訓練なんだ。彼は……」

「ふざけていないで出てきなさい！ 魔法の練習なら、もっと大人しいやり方があるでしょう！ 乱暴なところばかりお父さまに似て！」

「……っ、ぼくをあんのと一緒にするな！」

なんだなんだ。勝手に兄弟喧嘩を始めてしまったよ。僕は完全に置いてけぼりだな……。ま、喧嘩をするほど仲が良いって言うし、ここは静かに見守ってあげよう。うん。

「ご飯の時間ですよ」

「あ、もうそんな時間なのか。ありがとうエリザベート」

どうやらエリザベートもヴィルヘルミーネさんについて来ていたらしく、くいくいと僕の服の袖を掴んできた。

ヴィルヘルミーネさんは綺麗だけど、ちょっと性格がきつめなんだよなあ。それはそれで……という人種もいそうだけど、僕はちょっと無理かも。

いや、そんなことはどうでもいいか。

「じゃあ、喧嘩をしているあの人たちは置いて、さっさと戻ろうか」
「はい」

うん。今日はかなりしんどかったし、もういい加減に切り上げてもいいと思うんだ。

そうして、二人で並んで歩き出した頃だった。屋敷の方角から、ミスタ・ヴルムがこちらへと歩み寄って来たのである。

「若さま」

「ヴルムさん。どうされたんですか？」

「いえ……。プロイセンの動きですが、とうとう軍の一部を動員して王子の行方を捜し始めたようです。ここまで追っ手の手が伸びてくるも、もう時間の問題かもしれません」

やっぱり、そうなるのかなあ。カッテ少尉とカイト少尉は相変わらず戻ってこないし……。大丈夫なのかな。

そう、僕が少しばかり案じていると。言い辛そうに、しかしはっきりとした口調で、ミスタ・ヴルムは口を開く。

「やはり、彼らのことはプロイセンへ報せるべきではありませんか？ このまま状況が長引けば——若さまにも責が及ぶかもしれません。いえ、恐らくは及ぶでしょう。自分としては、そのような事態にだけはなってほしくありません。どうか、善き処置をお願いします」

「でも、やっぱり見捨てるなんて出来ないよ。身勝手な言い分だとは思ってるけど……」

「……わかりました。ですが、自分は若さまの利益を第一に考えて行動させていただきます。あなたはもう、一介の地方領主で収まる身の上ではないのですから。……それでは」

それだけ言い、ミスタ・ヴルムはきびすを返して屋敷へと戻って行った。僕はその大きな背中を見送りながら、小さく呟く。

「皇帝にはならないよ……。僕はそんな器じゃない」

「カールさん……」

「あ、ああ。大丈夫だよ。心配しないで」

……。っと。思っていたよりも怖い顔をしていたらしい。エリザベ

ートが不安げな様子でこちらを見上げてくるのに気が付いて、僕は慌てて表情を取り繕った。

参ったな。

怖がらせたくないのに。そう考え、なんとか彼女を安心させようとして、僕はエリザベートの手を握り締めた。とても小さな手だ。

握った手を彼女が握り返してくれたとき、張り詰めていた僕の心は、なんとか落ち着きを取り戻すのだった。

第十四話

実を言うと、僕は他人に最後まで隠し事を出来たことはほとんどなかった。

大抵、途中でばれてしまうのだ。それは点数の悪いテストの答案だったり、ひっそりと持ち帰った猫だったり……。まあ、どう考えてもばれないはずがない。

それがわかっていても隠したいことはあったし、それを出来るようにと努力はした。まったく、それはほとんど無駄だったのだけど。

……今回の『隠し事』が一番知られたくない人たちに露呈するの、それはまた必然であつたのかもしれない。

フリードリヒたちの来訪から、一週間。ゲルマニア国外への逃走路の確保を行うため屋敷を出たカッテ少尉とカイト少尉は、未だに戻らなかった。

さすがに八日間も戻って来ないと不安になる。事実、ヴィルヘルミーネさんは彼らのことが気がかりらしく、どんどん口数が減っていった。

しかし一方でフリードリヒはそういう様子をまったく見せなかった。曰く、「彼らは友人だ。友人を信じなくてどうする」とのことだ。

年はほんの少し離れているけど、あの二人の軍人は、プロイセンの王子にとってとても信頼をおける大の親友なのだろう。

なんだか、すこしばかりうらやましい。

父を除けば、僕の周りにいるのは基本的に僕に仕える人たちばかりだ。対等……というか、あまり気兼ねしなくていいのはエリザベートしかないのである。

また、フリードリヒは親しげにしてくれるけど、対等かといえは少し違う。なんだか、そんな気がした。

もう少し、同年代の貴族の子らと交流なりなんなり持ちたくはあるのだけど。それはウィンドボナの魔法学院へ入学するまでお預けだろうか。

さて。僕は今日も、キールの屋敷の中庭でフリードリヒの下で魔法の練習を行っている。

ちょうど、ようやく『ウォーター・ウィップ』を扱えるようになってきたところだ。

ちなみに、先日まで練習していた『アイス・ウォール』の練習は、今のところ中断している。あれは後でも出来そうな気がするし。

『ウォーター・ウィップ』は、文字通り水の鞭を繰り出す魔法だ。生物に巻いた場合、対象の体内を巡る水の流れを感じ取れたりするらしい。

水の鞭ということで、攻撃にも防御にも使える汎用性の高い魔法だ。直接的な攻撃力で劣る水系統のメイジならば、ぜひ覚えておきたい魔法だった。

……一応試しはするけど。実は、体内の水の流れを見るくらいなら、もう出来るんだけどね。

「まずはその木でいいかな」

「そうだな。人で試すのは後でもいいだろう」

生き物ならば大抵は大丈夫とのことなので、僕は手近な樹木に『ウォーター・ウィップ』を巻きつけてみることにした。

木は地中に張った根から水分を吸い上げる。つまり、根から吸収された水は上へ上へと流れるはずなのだ。吸い上げるといってもいい。

木の幹に巻きつけられた鞭からは、やはり想像していた通りの感

覚がこちら側へと伝わってくるのがわかった。

「ま、そこは問題ないだろう。媒体と距離が変わるだけで、水の流れを読むという作業は同様だからな」

「そうですね。これといって問題はないと思います」

「ああ。……しかし、やはりラインメイジになるには、まだ訓練が足りないな。地道にドットスペルを覚えていくしかないだろう」

なんというか、今の僕は魔力というか、精神力がほとんど足りていないらしい。そこはもう努力を積み重ねる他ないというし、そうしなくてはならないとわかってはいるけど……。

このまま一生ドット止まり、というのは勘弁して欲しいところだった。

一通りの練習を終えた僕たちは、屋敷の中へと戻ることにした。

フリードリヒが木陰でなく日なたで練習しろと言うので、余計に体力を消耗してしまったのである。

……無駄に体育会系っぽいというか、僕に流行のオペラだの絵画だのを語る割りに、微妙に脳筋を思わせる発言が混じっている気がするのは、果たして気のせいだろうか。

フリードリヒと別れて自室へと戻る。夕食まではいくらか時間があるから、読書でもして暇を潰そうか。

何を讀もうか。そうだな、エリザベートが読んでいた『法の問題』があるから、読み直そうかな……。

プロイセンを除いては、ゲルマニアでは未だに司法の独立が成されていない。というか、ハルケギニアで司法が独立している国は皆無だった。

魔法という“神が与えた力”、支配力を持ったメイジという存在そのものが、王権は神が与えたものだとする王権神授説を確固たるものとしていた。

そうになると、当然ながら、三権分立なんて発想は出てこないはずだ。ところが不思議なもので、数世紀前にそれを唱えた人はいるのだけだ。

始祖ブリミルの血を引く王権というものは、神聖不可侵なもの。どこかの多情な太陽王が言ったとか言わないとかいう「朕は国家なり」を体言しているのだ。

ブリミル教の存在もまた、それを輔弼している。ブリミル教とハルケギニアの始祖から連なる三つの王権は密接に結びついていた。

そんな中であって、プロイセンはやや異色の存在だ。

ガリアやトリステインで弾圧された新教徒たちを受け入れて人口を増やして国力を強化し、さらには司法を王権から独立させたりと……。

まあ、プロイセンは始祖とは直接の関わりはないみたいだけどね。ガリア・トリステイン・アルビオンにロマリアでは在り得ない政策だろう。

正直、前者なんかはよくロマリアを恐れずにそこまで出来るものだと思う。もっとも、ゲルマニアにおけるロマリアの影響力は、本当にたかが知れているというけど。

あまり重要視もされていないんだろうな。虚無の担い手が現れる可能性もないに等しいし。

——と。そんなことはどうでもいいか。

それより、今考えなくてはならないのは、僕のベッドを占拠している二名ほどの侵入者だ。

それはエリザベートと、あろうことかメイドのシャルロッテだった。

二人が二人、すやすやと気持ち良さそうに寝息なんて立てていた。まるで姉妹のように仲睦まじげに眠りこけるさまは、どこの眠り姫だと言いたくなる。

どうしてよりによって僕のベッドを占拠するのだろう。あまりに見事に寝入ってしまったているから、なんだか起こすのも悪い気がするし……。

どうしたものかな。

……結局、他のメイドが食事の時間だと呼びに来るまで、僕は彼女たちの安眠を妨げぬよう、静かに読者に耽る他ないのであった。

なんとなく、予感はしていた。

ミスタ・ヴルムにプロイセンが軍を動員したと聞いたときから。あるいは、僕の中ではずっと警鐘が鳴っていたのかもしれない。それを意図的に頭の片隅へ追いやっていたのかもしれない。

フリードリヒたちがやって来てから十日目のこの日。とうとう、彼らの逃走劇は終わりを迎えることとなったのである。

それは、まだ日が昇りきらない朝方のこと。フリードリヒ監督の下、魔法の練習をしている時のことだった。

いつもは落ち着き払った態度を崩さない、父の秘書のアドルフが血相を変えて僕たちの元へと飛んできたのである。

彼は、本来ならば父と共にウインドボナヘで出向き、軍務を補佐

していたはずだった。それが慌てた様子でキールへと戻って来る――事態は、既に大きく動いていたのだ。

「わ、若さま。お父上があなたをお呼びしています。……フリードリヒ殿下もお連れして、屋敷の正面玄関前へ来るようにと」

……やはりというか、プロイセン組のことは父に露呈していたようだ。黙って彼らを匿ってしまっていたから、それなりの追求は覚悟しなくてはならないだろう。

鎮痛な面持ちのアドルフに連れられ、僕とフリードリヒは中庭から屋敷の正面玄関へと移動した。

すると、前方で四人ばかり人がいるのが見えた。そのうちの一人は僕の父であり、もう一人はミスタ・ヴルム。

そしてヴィルヘルミーネさんが不安げな表情で立ち尽くし、プロイセン軍の制服に身を包んだ見慣れない軍人が彼女の傍に立っている。

「あなたは、ロツホ大佐！」

「捜しましたよ、殿下。まさかこんなところに潜伏していたとは思いませんでした。ベルリンへ帰りましょう」

ロツホと呼ばれた男性は、中肉中背の五十男だった。ごくごく普通の中年男性にしか見えない。しかし、よくよく見ると、彼の制服ではいくつもの勲章がきらめいていた。

フリードリヒは彼の遭遇がよほどショックだったらしい。身構え、警戒しつつ口を開いた。

「どういうことだ。なぜここが……！」

「この近辺で、あなたの協力者が脱出工作を図っていたのを、うちの諜報員が見つけたようです。カイト少尉には逃走されてしまいま

したが、カッテ少尉の身柄はこちらで押さえています。苦勞しましたよ、この場所を見つけるまで……。まさか、ゴットルプ家の屋敷に潜伏しているなどとは思いませんでした」

「……つく」

カッテ少尉らが戻って来なかったのは、プロイセンの手の者に捕まってしまったかららしい。どうもヴィルヘルミーネさんの懸念は当たっていたようなのだ。

万事休す。

窮地に立たされたフリードリヒは自らの杖を構えようとするのだけれど、僕たちの眼前に立つロッホ大佐はそれを一笑に付するだけだった。

「おやめください、殿下。今の殿下では自分に勝つことはままならない。それはご自身が一番よくわかっているでしょう？」

「……そうだな。父があなたを遣したのは大正解だろう」

どうもこのロッホという人物はかなりの手垂れであるらしい。あっさりと、実にあっけなくフリードリヒは杖を納めてしまった。

「カール。せっかく無理を言って匿って貰ったというのに、すまない。ここで終わりのようだ」

「……」

こちらの方を向いて、本当に申し訳ないといった表情で、フリードリヒは言った。真摯な表情で放たれたその言葉に対して、僕は何も答えることが出来ない。

「公爵殿。カールにはぼくが無理を言ってこの屋敷を間借りさせていただきました。申し訳ありません。彼には、どうか寛大な処置を」

「……善処しよう」

「ありがとうございます。それでは、失礼しました」

僕の父へ向けて謝罪の言葉を述べた後。フリードリヒは足早にロツホ大佐の下へと向かった。そして杖を取り上げられ、無抵抗のまま後ろ手に縛られる。

「ご辛抱願いますぞ、殿下。絶対に逃がすなどの陛下からのご命令ですので」

「わかつている」

手の自由を奪われる様子をただ傍観する僕に、彼は気丈な言葉を向けてくる。

「そんな顔をしないほしいな。こうなってしまった以上は仕方のないことなんだ。なに、大丈夫さ。心配は無用だ」

「……ごめん」

「いや、謝らなくてはならないのはこちらの方だ。すまなかった」

不安だった。このままフリードリヒを帰してしまって、本当に大丈夫なのだろうかと考えたのだ。

プロイセン王は非常に厳格な人物だ。自分に背いて逃亡を図った人間を、たとえ王子であろうとも許すのか、大いに疑問だった。

修行の最中に断片的に話を聞くことが出来たが、やはり彼は父王とあまり関係がよくないらしい。

そして、それはフリードリヒがウィンドボナ滞在中に無断でブルク劇場へと足を運んでいたことでより深刻化したという。今回の逃亡劇は、僕の想像した通りの原因で発生したのだ。

……だけど、今の僕では、彼を引き止める手段も権利もない。ただ黙って彼を見送るしかない。

無力だ。僕には、もうこれ以上の何事も出来ないのだ。純粹に、ただただ悔しかった。握り締めた拳に、爪が食い込んでいく。

「また会おう。いつか。だから……」

「ああ、わかつているよ。約束だ。また今度」

「……うん。また」

お互いに手を振りながら、別れを告げる。そして、それが最後の一句となった。

フリードリヒとヴィルヘルミーネさんはロッホ大佐に連れられ、屋敷の正門前に停められていたプロイセン軍の馬車へと乗り込んだ。それから間もなく、馬車はもうもうと土煙を上げながら東の方角へと走り始める。その様子を、僕はただじっと見つめていた。

だけど、いつまでもそうしているわけにはいかなかった。再び屋敷の正面玄関前へ戻って来た僕の眼前では、父がじっとこちらを見据えたまま立ち尽くしているからだ。

「プロイセンからは協力者の引渡しを求められた。だが私は、それに応じるつもりは毛頭ない。しかし、それなりの処罰は覚悟してもらうぞ。示しが見つからないからな」

「……はい」

父は静かに僕へ言葉を投げかけてくる。なぜフリードリヒたちを匿ったのか問い質すことが無ければ、責め立てることも一切しなかった。

後で知った事実なのだが、このときプロイセンは父に、フリードリヒたちを引き渡さなければ、武力制裁さえ行う用意があると警告

していたそうだ。

なのに、父は僕を責めなかった。理由はわからない。ただ、僕のような単純なものではなかったというのは、確かなことだった。……さらにもう一つの事実として、ミスタ・ヴルムは隠遁先を密告するようなことは一切していなかった。

本当にプロイセン側の諜報員がカッテ少尉とカイト少尉を発見しただけとのこと。もっとも、僕はそれを知らず、しばらくの間ミスタ・ヴルムを疎んじていたのだけど……。

一体どんな処罰が下るのだろう。俯いたままの僕へ、父はいよいよ処分を伝えてくる。

「お前にはゴットルプ城で二ヶ月の謹慎を命じる。わかったな」

「……わかりました」

ゴットルプ城。ホルシュタイン公国の辺境に位置する、ゴットルプ家の家名の由来となった古い城だ。

王子を匿った張本人をそのままにしておくことは出来ない。ならば、しばらくの間、僕の身柄をキールから離れた方が良いという判断なのだろう。

「今回の件はお前なりの考えがあってやってことはわかっている。だが、時には小を切り捨てることも必要だ。そうしなければ、大……お前が守るべき国が無くなってしまふのだから」

「……はい」

「向こうに着いたら、ゆっくりと今後の事を考えなさい。お前も一人身ではないのだから」

最後にそれだけ言い残して、父はきびすを返して屋敷の敷地を後にした。一方の僕はといえば、どうすることも出来ずにただ立ち尽

くすだけだった。

……そして。

ハンス・フォン・カッター——あのフリードリヒの親友でもあった少尉が、プロイセン王の勅令によって処刑されたという事実が僕が知ったのは、それからずっと後のことだったのである。

第十四話（後書き）

第三章のタイトルを変更しました。次話より第四章となります。

第十五話

帝政ゲルマニアとトリステイン王国の国境地帯には、とても深い森が横たわっている。

両者の勢力圏の境界線であるが故に、無用な衝突を恐れるどちらの陣営も中々手を入れず、長年放置されてきたのであった。

そんな生い茂る木々を見下ろす場所に、アンハルツ・ツエルプストー侯領の中心である要塞ともいえる城は存在している。

その歴史は古く、元は統一された一つの様式で建てられた城なのだろう。だけど、今の“この”城は——キュルケが生まれ育ったこの場所は、とても酷い様相を呈していた。

僕が二ヶ月を過ごしたゴットルプ城も、かなり古い城だった。それでも外観や内装の様式は統一され、洗練された美しさを誇っていたのである。

ところが、このツエルプストーの城はまるで違った。

無闇に増改築を繰り返したせいで、外装はつぎはぎが目立つし、内装も滅茶苦茶になっていた。ブリミル教徒なのに東方の神像なんか飾ってどうすると言うんだ。

いつかキュルケは、ウィンドボナのシュテファン大聖堂を「あちこち造りが違う」と言っていたけど、この城の方が遥かに酷いことになっているぞ。

「それ、お祖父さまがどこから買ってきたの。お父さまは捨てようとしていたのだけど……。大喧嘩になっていたわ」

僕が渋い顔をして、怪しげな像に見入っていたからだろうか。僕の隣で歩く赤い髪の少女が、少しばかり困ったように話しかけてきた。

そう。今僕がいるのは、ゲルマニアの西端に位置するフォン・ツエルプストーの居城だった。

ゴットルプ城での二ヶ月に渡る謹慎を終えたあと、僕はキュルケの母である侯爵夫人の誘いで、この城へと招かれたのである。

自分の所業が原因とはいえ、なんとなくキールの屋敷に居づらくなってしまった僕にとって、この誘いはまさに渡りに船といえた。

侯爵夫人からの手紙に、すぐに返信のフクロウを送ったのは言うまでもない。それからとんとん拍子で話は進み、こうして来訪することとなったのだ。

一応は義母になる人と挨拶はしておきたかったし、キュルケの家族と会ってみたいという気持ちもあったからいい機会でもある。

「……どう？ 変じゃない？ この城」

「変じゃないさ。時代が変われば建築も変化するし、増改築を繰り返しているのも、それだけこのお城が古くからあるってことだから」「そうかしら。なら、いいのだけど」

かなり古い城であるのは間違いないし、年代を重ねるごとに増改築などを繰り返せば、それこそ魔王の城のようないびつな外観になるのも仕方ない。

内部もまるで迷路のようだ。正直、ここで生きていく自信はない。キュルケがいなかったら、僕は城の中で遭難する羽目に陥っていたかもしれない。

ちなみに、今はキュルケにお城の内部を案内して貰っているところだった。侯爵夫人への挨拶の後、彼女に二人して城を回るように提案されたのである。

今日の彼女は、黒いワンピースにブーツというシンプルな出で立ちだった。数ヶ月ぶりに会うせいか、ほんの少しばかり背が伸びているようにも見えた。

彼女、今はまだまだ少女然とした容姿だった。これが後数年で一気にとんでもないことになってしまふのだから、成長期の間人間というものは恐……不思議だ。

そのまましばらく、二人で他愛もない会話に興じながらお城の中を歩いていく。

城の内装はどこに行っても混沌としていたけど、その原因は今も隠居している先代のツェルプストー侯にあるらしい。今の侯爵は、むしろお城の建て直しすら主張しているとか。

廊下を歩いていると、幾人かの使用人とでくわした。皆忙しいようで、せっせかと目的地へ向かって奔走している。

ふと、キュルケの兄弟はいないのかと疑問に感じたので、それを口にしてみる。

「そういえば、きみにご兄弟はいるのかい？」

「ええ。兄と妹がいるわ。兄は魔法学院に在学しているの。妹は……活発な子だから、もしかしたら外へ出ているかも。家臣の子供たちを取りまとめてよく遊んでいるわ」

「そうなんだ。兄弟がいるっていいね」

「……そうでもないわよ？」

「僕は一人っ子だから、そう見えるんだよ。隣の芝は青いってやつさ」

兄弟、か。僕には縁遠いというか、関係のない話なのかな。エリザベートは妹の“ような”存在だけど、やっぱり他人であることは変わりないし。

……ただ、兄弟がいるというのも、上級貴族だと良からぬことになってしまふかもしれない。

それは今上のガリアの王とその王弟の例に留まらず、このハルケギニアでも、歴史上数多の親兄弟間での権力闘争があったからだ。

「そう……、そうね。じゃあ、わたしたちは兄弟をいっぱい作ってあげましょうか。きつと賑やかになるわ」

「うん」

「……っ。で、でも。そういうのって、まだ早くない？ ほ、ほら。わたしたち、まだ子供だし……」

「子供だからとかは関係ないよ」

そう。子供だろうと、情け容赦なく権力闘争に巻き込まれてきたのがこれまでの歴史だ。幼帝として即位した後には廃位され、そのまま一生を幽閉されて過ごした王族とている。残酷な話だ。

ん……？ ちょっと考え事をしていたせいか、何を言われたのかわからないのに適当に返事をしてしまった。

あれ、なんでキュルケは頬を染めてるんだろう。もじもじとしたり、頬を両手で挟みこんでじっとこちらを見つめているのはなぜかな。

「キュルケ？」

「あ……うん。わたしは構わないのだけど、ここはまずいと思うわ。使用人が通るかもしれないし……。初めてはきちんとした場所で行きたいし……。だから、わたしの部屋へ行きましょう。ね？」

「ん？ いいけど、まだ全部回ってないよ」

「いいじゃない、後でまた来れば。それより善は急げよ。早くしましよう」

「え？」

ぐいぐいと手を引っ張られ、キュルケに引き摺られてしまう。そんなに自分の部屋を見せたいのかな。何か面白いものでもあるのだろうか？

——「少し待ってて。用意するから」と言い残したキュルケが、ドアの奥へ消えてから十分。僕はまだ待ちぼうけを食らっていた。そんなに部屋が散らかっているのだろうか。なんだか、部屋の中から何かをひっくり返すようなゴタゴタとした音が聞こえてくる。さらには「こんな子供っぽいじゃ駄目だわ！　どうしてこんな肝心なときに良いのが見つからないのかしら、どれにしましょう」という声が聞こえた。

……？　置物でも選んでいるのだろうか。なんだか時間がかかりそうだ。

そう、思っていると。

「あら、カールくん。どうしたのかしら。こんなところで」

現れたのは、ツエルプストー侯爵夫人のヨハンナさんだった。

彼女はキュルケの将来を思わせるような見事なプロポーションの美人さんで、外見も実年齢を感じさせないほど若々しい。

先ほど挨拶したときには、初対面ながらあまり緊張せずに話をすることが出来た。どこか親しみやすさが出ているというか、なんというか。なぜか、わりと好意的に接してくれるのだ。

「ええと、キュルケが待っているというので待っているのですが……。一向に出てくる様子がないので」

「あらあら。……そうね、だったらわたしのところへ来ない？　あの子、こうなったら一時間は出てこないわよ」

「本当ですか？　あ、でも、もし準備が終わったら……」

「それなら大丈夫よ。終わったのならきつと呼びに来てくれるわ。あなたとちよっとお話してみたいし、ね？」

「……う、うーん」

困ったな。この人は将来的に義母となる人物なのだから、今のうちから交流を図っておくのは悪いことじゃないけど……。

どうしたものかと悩んでいると。彼女は僕の手を取って、にっこりと微笑んだ。

「お茶とパイをご馳走するわ。パイはわたしが焼いたのよ。どうかしら？」

ここまで言われると、なあ。……でも、やっぱりキュルケを置いておくわけにもいかないや。パイやらお茶やらを逃すのは、ちょっともつたない気もするけど……。

「ごめんなさい、マダム。やっぱり僕は待ちます。約束したので」
「あら、そう……。残念だわ」

僕の返事を文字通り残念そうに受け止めた後。しばしの沈黙を挟み、ヨハンナさんは再び問いかけてくる。

「じゃあ。後でお話しましょう。夕食後の予定は空いているかしら？」

「え、ええ。その時間なら」

「よかったわ。それでは、後でまた会いましょう。美味しいお菓子を用意しておくわ」

最後にそれだけ言い、彼女は去って行った。……お菓子か。夜に甘いものを食べるのはあまりよくなさそうだけど……。ま、いいかと、そのときだった。ようやく部屋のドアが開き、キュルケが顔を覗かせたのである。

「か、カール。待たせたわね。終わったから、どうぞ中へ入って」
「うん。お邪魔するよ」

自分の部屋を見せるのが恥ずかしいのかな。頬を染めたキュルケが開けたドアから、彼女の私室へと足を踏み入れる。

直後、なんというか、微妙に甘ったるいような匂いが鼻腔へと飛び込んでくる。これは香水だろうか？ お香を焚いているらしく、その匂いも混じっている。

部屋の中はわりと落ちて着いた雰囲気だ。かなり高価であろうアンティークの家具が整然と鎮座していた。

僕が部屋に入ると同時に、キュルケはベッドに腰掛ける。よく見ると、今の彼女は先ほどの黒いワンピースではなく、フリルのついたシャツとスカートに着替えている。

そして、彼女は脚を組んだ。脚線美というのだろうか。適度に細く長い脚はストッキングが覆っている。今のキュルケは、どこか実年齢よりも大人びて見えた。

「どうしたのさ、着替えて。あと、僕はどこに座ればいいのかな」

見た限り、部屋の中で僕が座れそうなのは、木の机とセットになった椅子くらいものだ。さすがに床に腰を下ろすわけにもいかず、かといってベッドというのも……。

そう考えて問いを発したのだけど、キュルケはぽんぽんと自分の隣を叩き始めた。どうも、ここに座れという事らしい。

さすがに隣というのは……と思い、一マイルほど離れた場所へ腰を下ろす。キュルケはなんだか呆気に取りられたような顔をしているけど、一体どうしたのだろう？

「それで、どうして僕をここへ連れてきたんだい？」

「え？」

「え？ って？」

「いじわるね……」

なんのことだろう。僕はただ疑問を口にしただけなのに……、なぜいじわるになってしまったのか。困ったな。彼女、ちょっと不機嫌になってしまったようだし。

原因がわかればいいのだけど、生憎僕にはその理由はまったく掴めない。どうしたものだろう。

などと考えていると。突然、キュルケがにじり寄ってきた。見るからに無理をしているようで、顔は耳まで真っ赤になってしまっているし、心なしか息も荒い。

「ええと、その。婚前だけど、問題ないわよね。どうせいつか結婚するのだし……」

「そうだね。でも、一体いつごろそうなるんだろう。親たちは誰も明言しないけど」

「……そうね。たぶん、わたしたちがウィンドボナの魔法学院を卒業してからになるのかしら。まだまだそれなりに先のことね」

「魔法学院か……」

ウィンドボナの魔法学院。このまま何事も無ければ、僕が通うことになるはずの学校だ。ただ、キュルケは問題を起こして退学してしまうはずだから……。

そうになると、彼女はトリステインへ行ってしまうことになるのだろうか？ いや、僕という婚約者がいる以上、そうはならないのだろうか。

うーん。未来のことはわからないな。僕がどういう運命をたどるかなんて、誰も知らないわけだし。

「……ねえ、ちょっと。聞ってるの？」

「ごめん」

「もう。しっかりしなさいよ」

しばらく考え込んでいたせいか、気が付くとキュルケの顔がすぐ目の前にあった。まったく整った顔立ちだ。長いまつげ、つぶらな瞳、すっと通った鼻筋、ふっくらとした唇……。

そういえば、今はうつすらと化粧をしているようだ。さっきはしていなかった気がするけど……。しなくても十二分に可愛いものにな

「はあ。どうやらわたしの勘違いだったみたいねえ。それなりに頑張ったのに、あなただったらろくに反応しないんだもの」

「なんのことだい？」

「さあ。なんでしょうね。自分の胸に訊いてみるといいんじゃないかしら」

ぷいとそっぽを向いて、キュルケは僕から離れてしまった。甘い香りやら微かな体温やらが瞬く間に失われ、僕はそのときになって自分の素っ気無い態度を密かに悔いた。

「はあ。まったく、先が思いやられるわね」

ため息混じりに、脚を組みなおしながらキュルケは言う。そしてこのとき、どうも僕の視線は彼女の脚を向いていたらしい。視線に気づいた彼女が、にやにやと笑みを浮かべながら問い質してくる。

「あら……。どうしたの、さっきから脚ばかり見て。もしかして女の子の脚が好きだったりするのかしら？」

「うん？ いや、綺麗だなんて。きみの場合は脚意外もとても綺麗だけど……。正直、すごいなあと思う」

「……！」

にやにやから一転。どうしたのかわからないけども、キュルケは再び頬を染めて俯いてしまった。

「ずるいわ。いじわるだわ。そういう台詞を真顔で言うなんて……」
「別に、そういうつもりじゃないんだけどな……」

何を過剰に恥ずかしがっているのやら。綺麗なものを綺麗と褒めるのなんて、ごくごく当たり前のことじゃないか。まったく。

その日の夕食の席。

食堂には僕とキュルケ、それにヨハンナさんが集まっていた。ツエルプストー侯爵の姿はなく、どうもウィンドボナへ出向いているらしい。

ちなみに現在、父はゲルマニア中部で発生した貴族の反乱の鎮圧任務に着いている。まあ、いつものよくある任務だ。まったく、どうせ鎮圧されるのに反乱なんか起こしてどうしたいのだろう。

さて。本当ならここで食事が始まるはずだったのだけれど、その前に大きなトラブルが発生してしまったらしい。

その問題というのは、どうもキュルケの妹のアウグステが未だに城へ戻らないというのだ。

確か、先ほど聞いた話では、ツエルプストーの家臣の子供たちを集めて遊んでいる……ということだったのだけれど、一体どうした

のだろうか？

「困ったわね、あの子。また森へ入って迷ってしまったのかしら。あれほどやめなさいと言ったのに……」

文字通り困り果てた様子で、ヨハンナさんは呟いた。キュルケも心配そうな様子でそわそわと落ち着きがなさそうにしている。

すると、そこへ慌しい様子で執事らしき男性が現れる。彼はすぐに侯爵夫人に向かって小さく何事かを告げ、再び慌しく食堂を去って行った。

「アウグステに同行していた子供たちが戻って来たわ。その子たちの話だと、アウグステは森の奥の斜面で足を滑らせて、そのまま消息がわからなくなったって……。ああ……」

「お母さま！」

まさかの報せにショックを受けてしまったのだろう。ヨハンナさんはそのまま気を失って倒れてしまった。

小さな娘がいきなり行方知れずになってしまったのだから、彼女の心中は察するに忍びない。僕だって、エリザベートがいきなり行方知れずになってしまったら心配するし……。

慌てて飛んできた使用人の女性にヨハンナさんを預けたキュルケは、少々の焦りを含んだ声音で口走った。

「あの森の奥地では、未だに亜人が生息しているって情報があるわ。もしあの子が亜人に出会ってしまったら……」

「捜索隊は出せないのかい？」

「それが難しいのよ。森の奥はラ・ヴァリエールとの境界線が曖昧になっているの。事前通告なしに捜索隊を出して、それが露見したら……。どんな難癖を付けられるかわからないわ。でも、早く捜し

に行かないと……」

「このままだと危ないな」

「ええ。だから、なるべく少人数で迅速に探し出す必要があるのだから……」

そうか。正規兵を出してしまうと揉め事——最悪戦争の口実にすらなりかねないのか。

……だけど、僕のような子供はどうだろう。それに、確かに立場的には危ういが、うちは一応トリステイン王家の傍系だ。

万が一捕まったとしても、たとえば・ヴァリエールといえども迂闊な扱いは出来ないはず。それに、捜しに行ったからといって捕まるとは限らない。向こうもそんなに暇でないだろうし……。

よし。決めたぞ。

「キュルケ。きみの妹は僕が捜しに行くよ」

「……だめよ」

僕が腹を決めてそう宣言するや否や、即座にキュルケから否定が入ってしまった。

「いや、でも」

「だめよ。夜の森はとても危険なの。毎年、無謀にも夜の森へ出た人たちが亜人の被害に遭っているわ。そんなところへあなたを行かせるわけにはいかない。わたしが行くわ」

「それこそ認められないな。きみを行かせるわけにいかない」

「どうして！ あの子はわたしの妹なのよ。それを放っておくなんて……」

「だからだよ」

「……？」

僕が口にした言葉の意味を図りかねたのか、キュルケは一瞬だけ動きを止めた。何を言っているんだこいつは、とでも思われていそうだ。

だけど、僕にだって一応理屈はある。助けに行く明確な理由だってね。

「彼女……、アウグステにはまだ一度も会ったことがない。だけど、彼女だって将来的には、ぼくの家族になるかもしれないんだ。だったら、見捨てる理由なんてないじゃないか」

「あ、あなた……」

我ながら恥ずかしい台詞だ。正直、決まった可能性より滑った可能性の方が……。そう思いつつ、キュルケを見やると。

「まったく。あなたは……、もう。しょうがないわね。どうせ一人で行ったって捜せやしないわよ。だから、わたしもついて行くわ」

「え、でも……」

「大丈夫よ。さっきは日和ったの。……そうよね。家族のことなのに、いちいちラ・ヴァリエールのことなんか気にしていたってしょうがないわ。なにせうちはフォン・ツェルプストーですもの！」

あ、あれ？　なんかスイッチ入ってしまったような……。キュルケが妙に張り切りだしてしまった。もう日も暮れたというのに大丈夫なんだろうか。

そう考えていると。急にぐいと僕の体が引っ張られた。本日二度目の牽引だ。

「きゅ、キュルケ！　冷静に考えたら、二人でもまずい気がするんだけど……」

「大丈夫よ。どうせ黙っていてもうちから護衛がついてくるし、あ

あなたの護衛さんだって来るわ」

「ミスタ……、いや」

確かにミスタ・ヴルムはこのツェルプストー訪問にも同行している。ただ、謹慎明け以降彼とは一度も会話を交わしてはいなかった。僕は彼がフリードリヒの所在を密告したのではないかと疑っていたし、もともと彼はあまり話をする人間ではなかったのだ。

ただ、そういうのを抜きにすれば、非常に頼りになる人材であることには間違いなく、ついて来てくれるのならば助かるというのが本音だ。

……ええい、とにかく。

アウグステには無事でいてほしい。そう思いつつ、僕はキュルケに引き摺られるようにして城の外を目指すのだった。

第十六話

キュルケと数名の護衛、そして一人の子供と共に、僕はアウグステが行方不明になっているという森へと足を踏み入れた。

危険な夜間に僕たちが森へ出ることは、当然ながら家臣たちに反対された。だが、そこはキュルケだ。僕が見ている前で、あつという間に家臣たちを説き伏せてしまったのだ。

つくづく彼女を敵には回したくないなと思わされる光景だったね。あれは。ま、敵になんてなるわけないけど……。

なるほど、森は完全に手付かずの状態で放置されているらしい。杖を取り出して『ライト』の呪文を詠唱しつつ、これからの道のりに大きく不安を覚える。

懸案事項一つ、滑落の現場までの道案内。それはアウグステに同行した子供たちの中で最年長である、ハインリヒという少年が申し出てくれた。

今は夜間になってしまっているものの、魔法の灯りが幾つもあるから、道の状態に関しては大丈夫だろう。ただ、足を滑らせてしまったという地点の周囲は、注意が必要かもしれない。

……それにしても、どうしてアウグステは足を滑らせてしまったのだろう。何か、気になるものでも見つけたのだろうか？

そう思い至り、僕はハインリヒへと問いかけてみた。

「ちょっといいかな。きみは、アウグステが足を滑らせた理由を知っているかい？」

「……ぼくからは見えなかったけど、きっと崖の斜面に花が生えていたんだ。多分、彼女はそれを取ろうとしたのだと思うよ」

「そっか。わかったよ、ありがとう」

花を取ろうとして、か。ありがちなようで、あまり聞かない理由だな。……理由はともかく、彼女が無事であることを祈るばかりだ。

——護衛の一人を先頭に、僕たちの集団は静かに獣道を進んでいった。一步、また一步と踏み進むごとに、足元に散在した枯れ枝がぱきぱきと折れる音が上がる。

『ライト』に照らされた周囲はそれなりに明るい。ただそれでも、光の届かない場所から、何かがこちらを狙ってきているのではないかと考えてしまう。

ふと顔を上げると、厚く木々が頭上を囲んでいるせいで、双月の光すらここへは満足に届いてくれないのがわかる。こちらの灯りでうつすらと枝葉が照らされているばかりだ。

ほんの数メートル先は闇。一寸先は闇と言ったものだが、本当にそう思う光景だ。“敵”がどこから来るのかもわからない。

もしかしたら、今このとき、本当に何かが僕らを狙っているかもしれない。

そう考えると同時、自然に杖を握った手へ力を込める。そして、フリードリヒの一見すると意味不明な特訓を思い出した。

“一瞬の殺気を感じ取る”ということが出来るほど、僕は訓練を積んだ人間ではない。しかしこういう状況となると、彼の言いだしただけでも、まったく無駄ではないと思う。

たとえば風メイジは、聴覚が他の人間よりも発達するという。他人の気配に人一倍敏感なのは、そのせいであるというのだ。

では、水メイジも……。何か、異常に発達した特長があるのではないだろうか。特に無い可能性もあるけど、あると考えた方がいい。だが、このときの僕はそれらしいものを何一つ持たないのも、また事実であった。

「……この木だ。この大きな木の向こうに、一つだけ大きな岩がある。そっちの方向だよ」

歩き始めて二十分ほど過ぎた頃だろうか。

ハインリヒが立ち止まり、眼前に聳え立った一本の大きなライカ櫟を指差す。とても立派な櫟だ。幹は太く、周囲が何メートルあるのかわからないほどだ。

「ほう。これは……、もしかすると厄介なことになるかもしれませんな」

「あら、侍従長さん。どうしたの？」

そのときだった。先頭の護衛の一人が、立派な髭を撫でつつ何やら意味深なことを呟いたのだ。そこへ、すかさずキュルケが疑問を述べる。

「見ての通り、これは非常に立派なライカ櫟です。そう、それこそ翼人が居住できるくらいには……。私の見立てでは、これがこの近辺に群生していますね」

「……いるっていうの？ 翼人が」

「断定は出来すまいな。ただ、『南方で大規模な翼人狩りが行われた』という噂が入ってきております。これほどの森林が、手付かずとなっている現状を鑑みれば……」

「はあ。妹が行方不明になったと思ったら、今度は翼人？ まったく勘弁して欲しいわね。ただでさえ、オーク鬼だのなんだのが住み着いて戦々恐々としているのに」

髭の護衛こと侍従長さんは、ライカ櫟の片手で表面を撫で、片手を顎に添えた。一方のキュルケは「もう勘弁してくれ」のポーズをとっている。

翼人、ねえ……。僕は翼人はおろか、吸血鬼もオーク鬼もトロール鬼も見ることがない。亜人というものと無縁の生活を送ってきていた。

だから、知識としての亜人の脅威を知ってはいるけど、実際にどんな脅威があるのかまではわからなかった。それに翼人というところ……あまり有害なイメージがない。

気にはなるけど、それについては、後で訊いてみようか。今は救出を優先だ。

それから僕たちは、ハインリヒの言葉に従って大きな石の方向へと歩みを進めた。

先ほどのライカ樫を発端として、どんどん周囲にライカ樫の姿が見え始める。ぽつぽつと、ツリーハウスでも建造出来そうなほど巨大な個体も混じってくる。

「……なんだか、不気味ね。まるで周囲から何かに監視されているような気配を感じるわ」

また少し進んだ頃だろうか。不安げな表情になったキュルケが、そつと距離を縮めてくる。空いた僕の左手を、彼女が握り締めてきた。

……確かに、彼女の言う通りだ。僕ですら、周囲の木々の上から“明確な敵意”を向けられていることを感じ取れるのだ。それは、よほど強いものなのだろう。

僕が気づくほどのだから、周囲の護衛たちはとっくのとうに感づいていたようだ。やがて、護衛の一人の金髪の青年が、焦りを含んだ声を出す。

「こりゃ、やられましたね。すっかり囲まれていますよ」

その言葉を受けた侍従長も、周囲を見回しつつ、やはり髭を撫でながら口を開く。

「……そのようだな。“先住”か、何かか……。いずれにせよ厄介な相手だ。翼人は」

「よ、翼人？ 昼間ぼくたちが来たときには、そんなの……」

「きみたちは子供だからな。恐らくは、警戒する必要もないと判断されたのだろう。だが、今は違う。武装した大人のメイジが何人と来ているのだから、彼らも神経質にならざるを得ない」

「そ、そんな。崖はもう少しなのに……」

ハインリヒはやはりまだ子供だ。亜人に囲まれてしまっているということを耳にした瞬間、恐怖に支配されてしまったらしい。情けない声を上げた。

「大丈夫よ。こちらから何もしなければ、襲って来ることもないはずだわ。彼らが厄介なのは……そう、住居になっている巨木を切ろうとするときくらいね」

キュルケは一見、なんとないとも言いかのように気丈に振舞ってはいるのだけど、実際には手はかなり力がこもっていた。ぎゅっと握られた手のひらは、ほんの少しだけ汗ばんでいる。

「……いずれにせよ、あまり長居はしない方がいいでしょう。早くアウグステを見つけ出さないと」

「そうね。ええ、早く行きましょう」

「引っ張らなくても大丈夫だよ」

ずるずるとキュルケは僕を引き摺っていく。こんな状況だと言うのに、周囲の大人はそれを眺めながら苦笑するばかりであった。

それから、さらに数分。僕たちはとうとう、アウグステが滑落したという崖のある場所へと到達したのである。

そこは“崖”というよりは“穴”と言った方が正しいかもしれない。

全体的に多少の起伏はあるものの、比較的平坦であるといえる森の中で、ここばかりは地面にぽっかりと口が開いていたのである。穴の内部は真っ暗闇で、一体なにがあるのかはまるで伺えない。コウモリの類は住んでいないらしい。ただただ、不気味な穴は静かに僕らを見上げるだけだ。

護衛の一人が穴に近づき、下を覗き込んだ。そして眉を歪めながら言う。

「かなり傾斜がきついですね。ちょっと足で行くのは無理そうです」「そうか。ならば、ロープか何かで……」

「いやいや、とりあえず『レビテーション』で行ってみますよ」

とそこで、穴を見た護衛がそんなことを言い出した。……ちょっと待てよ、この周りは翼人だらけだってさっき言っていたじゃないか。こんなところで空を飛んだりしたら……。

件の護衛が迂闊にも浮かび上がった瞬間、周囲から浴びせられる殺気は急激に増した。そして、翼人たちの怨嗟の声が辺りに響き渡る。

「やはりそうだ。奴らは我々の住処を再び奪う気なのだ」

「我らを追い出すに飽き足らず、とうとう安住の地まで奪うのか。地の果てまで追い詰めるというのか」

「目にももの見せてやれ。我らに害を成す者たちに。同胞の命を奪っ

た人間たちに、裁きを与えよ」

……うわぁ。なんだよこれ。南方で翼人狩りがあつたっていうけど、一体なにしたんだ。……いや、“狩り”といえど一つしかないわけか。

殺気、怒気、怨念……そんな感情が、いくつもの調べとなって降り注いだ。それは、聞いているだけで気分が悪くなるような代物だった。

ここにきて、とうとうキュルケは我慢の限界を超えてしまったらしい。人目も憚らず、回れ右をすると僕に向かって飛びついてきたではないか。

柔らかく、温かい。おまけに良い匂いもする……とか言っている場合じゃない。今は非常時だ。そう考え、彼女を引き剥がして杖を構える。

「―――我らが契約したる葉は水に代わりて“力”を得て刃と化し舞い落ち飛んで我に仇なす輩を切り刻まん」

突如として飛来した翼人は、数人でスタッグを組んで歌うように魔法を唱えた。それは、僕が始めて耳にする“先住”の調べだった。幾人もの翼人たちの歌声と共に、周囲の木々の葉がはらはらと舞い落ちる。彼らの詠唱通りならば、その葉っぱはすぐに……。

「……じ、侍従長！」

「ええい、馬鹿者が！……ホルシュタインの騎士はお嬢さまにハインリヒ、ゴットルプの公子を守ることに専念せよ。こちらは敵を引き付けつつ撃滅する、お前たち、行くぞ！」

そう言うや否や、侍従長自ら翼人たちに向かって飛び出した。そして、すっかり気配を消していたミスタ・ヴルムが現れ、僕たちを

守るような体勢を取る。

正直、複雑な心境だった。彼もそれを理解しているのだろう、こちらを振り返ることはなかった。

「カール。あの先住魔法……」

「うん。たぶん、葉っぱを刃物のようにして飛ばす魔法だ。今はまだ木から落ちているだけだけど……」

などと話しつつ、考えていると。

先頭を行っていた侍従長が『ファイヤー・ウォール』を詠唱。今にも刃物と化しつつあった数多の葉を、一気に焼き払おうとする。だが、それでも葉は多く残っていた。鋭利な刃物と化した葉が、次々と護衛の人々へと襲いかかっていく。標的は護衛の人たちだけではなかった。僕たちのいる方向にも、幾枚もの葉っぱが襲いかかりだしたのだ。

「……『イル・ウィンデ』！」

ミスタ・ヴルムは、竜巻を起こす魔法『ストーム』を詠唱。飛んでくる葉のほとんどを打ち落とすことに成功したのだけど……、幾枚かは、竜巻を超えて襲い掛かってくる。

僕とキュルケは示し合わせたかのように『ファイヤー・ボール』と『ウォーター・ウィップ』を詠唱し、なんとかそれを叩き落とすた。

「こちらのはなんとか凌いだけれど……」

「ああ、このままじゃ全滅だろう」

前方で戦っている護衛の人たちは、今のところは翼人相手に互角以上とも見える戦いを繰り広げていた。だが、葉を落とすことは出

来ても、肝心の翼人にダメージを与えてはいないらしい。

このまま留まると、本当に命に関わる。ここは一度離脱するべきだろう。そう考えて隣を見やると、キュルケも同じ考えのようだった。

「カールの騎士さん。ここは一旦引くべきだと思うわ。だから、その子をお願い。『フライ』で離脱しましょう。そうすれば、あの人も引ける」

「ミス。一応、私は若さまの騎士です」

「……頼む」

「御意に」

……くそっ、なんでまたそんな建前に拘るんだか。

そんな文句をつける暇すらなかった。ミスタ・ヴルムはハインリヒを抱きかかえると、『フライ』で一気に上昇。“穴”の上を、猛烈な勢いで飛んでいく。

それに僕とキュルケも続いた。残念ながら、二人ともそれほどの速度は出せないけど、今はこれしか逃走手段がないのだ。

だが、翼人たちは、尻尾を巻いて逃げ出した僕たちを見逃さなかった。目ざとい翼人の一人が、こちらへぎろりと視線を向ける。

「―――我らが契約したる枝は伸びてしなりて我に仇なす輩の自由を奪わん」

“先住”の詠唱。そして、それと同時に、僕たちへ向かって何本かの枝が伸びてくる。魔法を使ったのは一人か二人なのだろう、その本数は少なかった。

だけど、『フライ』で他の魔法を使うことが出来ない僕たちにとっては、それすら大きな脅威だった。しゅるしゅると伸びる枝は予想外に速く、瞬く間に標的へ肉薄する。

「きゃっ！」

「キュルケ！」

一瞬の出来事だった。長く伸びた枝がキュルケの足に絡みつки、彼女の動きを止めてしまったのである。

『ブレイド』を習得することが出来ていれば、枝を切り裂くことは実に容易だった。だけど、それは軍用魔法であり、僕は扱うことが出来ない。

やむなく、『ジャベリン』を詠唱。枝に接近して、直に氷の刃を打ち込む。大きさはそれほどなかったが、枝を切断するくらいには使えたのだ。

しかし、それは大きな判断ミスだった。このとき既に、枝はキュルケの手から杖を奪い取っていたのである。つまり、『フライ』も解除されるわけであって。

枝による支えを失った彼女の体は、真っ逆さまに穴へと向かって落下を始めた。当然、僕はそれを追うのだけど……。

「だ、駄目よ！ カール、後ろっ！」

「え？」

墜落しながら、こちらを向いたキュルケは大きな叫び声を上げた。その声を受けて、僕は背後を振り返る。

だがそのときには既に、僕の背後は巨大な木の枝に陣取られていた。とても太い、まともに食らったら体がばらばらになってしまうかもしれないほどの枝だ。

時既に遅し。回避する術を持たない僕は、そのまま木の枝に背中を強打される。瞬間的にとつもない圧力が体内に伝わり、呼吸が一時的に止まってしまう。

杖を手放すことはなかったものの、それでも『フライ』を維持で

きる状況にはなかった。僕の体は急速に降下を始め、キュルケに向かつて一直線に墜ちていく。

駄目だ。このまま意識を失ったら、重力に任せるままに“穴”へ落ちたら、彼女を死なせてしまう。それだけは絶対に阻止しないとけない。

朦朧とする意識の中、段々と距離が近づいてきたキュルケへ視線を向ける。なんだか、泣きそうな顔をしていた。端正な顔を歪めて、恐怖に慄く表情で僕を見つめる。

……なんて顔だ。いつもの、揚々していて、それでいて嫌味っぽくない彼女が一番可愛いのに。こんな顔じゃあ、せっかくの美少女がもつたいない。

とにかく必死に腕を伸ばして、キュルケの体を掴む。そしてそのまま力いっぱい抱きしめ、もうすぐ訪れるであろう地面との激突に備える。

もちろん、ただ激突するつもりなんて毛頭ない。あくまでも生き残るつもりだ。ただ、もうかなりのところまで落ちてしまっている。勢いよく落ちているのに、今から魔法を唱えて間に合うか……。やってみるしかないな。

念のために僕が下へ回り、地面へ背を向ける。後は落下地点に尖った岩などがないか、幸運を祈るばかりだ。

未だ底は見えない。ただ、なんとなく。直感的に、僕はもうすぐこの“穴”の底が近いのではないかという感覚を覚えていた。

だから、もういいだろう。僕は杖を振りかざし、精一杯にとある魔法のスペルを詠唱した。

——『レビテーション』を。

ヴルムたちが翼人の襲撃をようやく巻いたときには、既に太陽が地平線からその顔を覗かせていた。

怒れる翼人たちは、執拗にツエルプストー家の騎士やヴルムに攻撃を加え続け、ほとんど森と城の敷地の境界線付近にまで追撃を行ったのである。

本来それほど好戦的ではないとされてきた翼人たちのこの行動に、ヴルムはただ愕然とする他なかった。そして、彼は守るべき対象さえ失ってしまった。その衝撃は計り知れない。

ほうほうの体でツエルプストーの城へ戻った護衛一行とハインリヒを出迎えたのは、この城の主であるツエルプストー侯その人であった。

城の正門前で仁王立ちするその様は、まさに歴史ある諸侯の長としての威厳に満ちていた。

「……どういうことだ。キュルケとアウグステはどうした。あの子供も姿が見えないようだが？」

語気は静かだった。しかし、侯爵の全身からは彼の怒りを体言するかのように強烈な力の奔流が迸り、今にも大爆発を起こしてしまいそうなほどの威圧感を放っている。

すると、すぐに一人の男が進み出た。それは、今回の搜索隊でキュルケたちの護衛を務めた髭面の侍従長だった。

「申し訳ありません、旦那様。昨夜行方不明となったアウグステお嬢さまの搜索に向かったところ、恐らくは南方から移住してきたで

あろう翼人の襲撃を受けました。キュルケお嬢さまはその戦闘の最中に……」

「翼人？ 羽根のついた亜人が住み着いたというのか、あの森に！？」

「左様でございます」

「亜人にやられたのか！ キュルケと、あの子供は！」

「それはわかりませぬ。ただ、小生が最後に目撃したのは、“穴”へと落ちていくお二人の姿で……」

自らの主に、ひたすら低頭で侍従長は報告を続ける。だが、侯爵は年上の武人の言葉を遮り、半ばヒステリックにまくし立てた。

「貴様！ なぜキュルケを、あの子を同伴させた！ お前たちだけで向かえばよかったのではないか！？ そこになおれ、貴様たち全員打ち首だ！」

「こ、侯爵！ 責任はすべて私にあります、どうかこの者たちを咎めることだけは……」

「黙れ！ 貴様たちの……、貴様たちのせいで、大事な娘を二人も失ったのだぞ！ それでいておめおめと自分たちだけ生き残りおつて！ 武人の恥さらしが！」

「……」

激昂する侯爵はもはや暴走特急のごとく。ついには、彼は懷から杖を取り出し、それを侍従長へと向ける。

「私の居ぬ間に、よくもこのような大失態を……！ 貴様の遺体はあの森と共に焼き払ってやる！ 見ている亜人め、私の可愛い可愛い愛娘……」

その瞬間、場が凍りついた。さすがのヴルムも、一瞬なにが起き

たのか理解できなかった。

突如として、ツェルプストー侯爵が意識を失って体勢を崩したのである。ばたりと、まるで人形のように彼は地面へと崩れ落ちた。

そして、それは背後からかけられた魔法『スリープクラウド』が原因であり……、それを放ったのは、侯爵夫人ヨハンナであったのだ。

第十七話

『レビテーション』を詠唱してから、一体どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。

ふわふわと宙を漂う感覚をにわかに感じつつ、僕は恐る恐る目を開ける。

すると、目の前にはキュルケの顔があった。精一杯に瞳を閉じて、これでもかというほど齒を食いしばっているのが垣間見える。いや、はや、なんというか。

……このまま彼女を観察する、というのも悪くはない。だけど今このこのとき、僕たちにはもっと重大なことが差し迫っていたのだ。それは、僕とキュルケの体を支える存在——翼人の少女のことだ。

どうも、こちらの『レビテーション』使用とほぼ同時に、僕たちが墜落死しないように上から引っ張りあげてくれたようなのだ。

ふと下を見ると、もう地面まで一マイルもなかった。あのまま『レビテーション』だけで墜落していたら、もしかしたら悲劇的な結末を迎えていたかもしれない。

そう考えるとぞっとする。

彼女は、どうもこちらの視線には気がついていないらしい。ゆっくりと羽ばたき、僕たちを地面へと静かに下ろしてくれる。

どうも敵対する意思はないようだ。ただ、どうして翼人が僕たちを助けてくれたのだろうか。上から覆いかぶさる形となっていたキュルケをなんとか支え、僕は立ち上がった。

支えているのはこちらの方なのだけど、彼女は僕を気遣うように声をかけてくる。

「大丈夫？ 痛いところはない？」

「問題ないよ。だって……」

そう答えつつ、僕はキュルケの背後を見た。

そこでようやくキュルケも翼人の少女の存在に気がついたらしい。元々大きな目をより見開いて、少しばかりヒステリック気味な声音で言う。

「ちょ、ちょっと、どういうこと？　なんで翼人が……！」

「待ってくれ。彼女は僕たちを助けてくれたんだよ。そうだろう？」

珍しく取り乱し気味のキュルケを宥め、僕は翼人の少女へと声をかける。そうすると、それに答えるかのように翼人の少女は小さく頷くのである。

「……どういふことなの？　あなたの仲間がわたしたちを襲ったのよ……？」

わけがわからない、といった様子でキュルケは頭を振った。そこは僕も気になるところだ。敵対する意思はないようだが、あくまでも翼人の彼女がなぜ……。

それに目の前の翼人の少女、どうにも体に傷を負っているように見える。元は真っ白だったであろう背中の中羽根の一部が、今は血でべつとりと汚されてしまっている。

そう疑問に思ったときだった。少し離れたところから軽い足音が響いてきて、小さな物体がキュルケに飛びかかったのである。

「キュルケ姉さま！」

「アウグステ！　あなた、無事だったのね！」

現れたのは、キュルケの容姿をそのまま年齢だけを幼くしたよう

な少女だった。年の頃はエリザベートと同じくらいだろうか。

どうやら、彼女がアウグステ・クリスティーネ・シャルロッテ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー……キュルケの妹であるようだ。

多少服が汚れている程度で、外傷などはないようだった。姉と会うことが出来てよほど嬉しいのだろう。彼女は輝くような笑みを浮かべている。

「うん、アイーシャが助けてくれたの。さっき、わたしが崖から足を滑らせたときに飛んできてくれて……」

「そう、なの……」

アイーシャ。翼人の少女の名前だろう。僕たちだけでなく、アウグステも彼女に命を救われたらしい。

こうなると、いよいよ謎が深まってくる。なぜあのとき、翼人は僕たちに襲いかかってきたのか。その中で、なぜ彼女だけが人間を助けたのか。それがどうにもわからない。

そう思いながらも、どう出るべきか様子を伺っていると……。突然、アイーシャが姿勢を崩して、ほんの少し鈍い音と共に地面へ倒れこんでしまったのだ。

「アイーシャ！」

「だ、大丈夫、だから……」

その様子を見たアウグステが慌てて駆け寄り、すぐ傍に跪いた。少しばかり複雑そうな顔のキュルケがそれに続き、僕もその後を追う。そして、二人と同じようにしやがみこんだ。

近くで見ると、アイーシャは意識を失ってしまったらしい。

また、体のあちこちに傷を負っているようだった。

どうしてこうなったのかは知る由もないが、かなりの量の血が染

み出していることは間違いなかった。

どれも致命傷というには浅い傷ばかりだが、放置しておくわけにもいかない。一度懷にしまっていた杖を取り出し、『ヒーリング』のスペルを唱える。

精神力を宿した杖の先を傷ついた体に向ける。その様子を不安げに眺めつつ、アウグステが口を開いた。

「……そういえば、あなた誰？」

「はじめまして、だね。フロイライン。僕は……カール。カール・フォン・ゴットルプだ」

「じゃあ……、あなたが次の皇帝？」

「そういう噂みたいだね」

噂は噂だ。僕はホルシュタイン公を継ぐつもりはあるけど、決してゲルマニア王位やら皇帝位やら、パンノニア王位やらを継ぐつもりはない。

アウグステはまだ杖を持っていないらしい。僕が『ヒーリング』をアイーシャの体全体にかけていく様子を、興味津々といった様子で観察している。

……少し、負傷箇所が多い。僕的能力で治癒しきれるか、ちょっと微妙なところだな。

「汗をかいているわ。少し休んだ方がいいんじゃない？」

「このくらい問題ないよ。命を助けてもらったんだ、多少は無理をしても苦痛をやわらげてあげないと。これだけあちこち出血していたら大変だし」

「わたしを助けてくれたときには、もうたくさん怪我をしていたの。さっきだって、そこで休んでいたのに、いきなり飛び出しちゃって……」

そうアウグステが教えてくれる。なるほど。もう長いこと怪我だらけの状態だったのか……。なんとかしてあげないとな。

そう考え、僕はかなりの長時間を治癒魔法に費やす。だんだんと眩暈がしてきたけど、まだやめるわけには……。

「ねえ、カール。もうやめた方がいいわよ」

「まだだ。まだ、怪我を治しきってない」

キュルケの制止も聞かず、僕は一心不乱に魔法を使い続ける。

そうして、やっとアイーシャの体に刻まれていた傷が癒えきつたのを認めると共に。もう何度目なのだろうか、僕の意識は強制的にシャットダウンされる。

……ドットなのに無理をしすぎたかなあ。

「……ああ、もう。だから言ったのに」

カールが翼人の子に『ヒーリング』をかけ続けて、最後にはとうとう気絶するのを見やりながら、わたしは大きくため息をついた。

本当によく気絶するわねえ、この人。なぜか回復は早いけど、今回ばかりはちょっと時間がかかるかもしれないわね。魔法の使いすぎで精神をかなり消耗しているだろうし。

うつ伏せで倒れたカールを仰向けに寝かせ、彼の頭を自分の膝に乗せる。そうすると、彼の気の抜けたような寝顔が目に残まる。

……本当、この人ってマイペースね。

そんなことを考えながら、彼と同じように気絶している翼人の子

を見ていると……。少し離れたところに立った妹が、俯きながら謝罪の言葉を向けてきた。

「姉さま……。ごめんなさい、心配をかけて」

「いいのよ、あなたが無事だったから。でも、あとでお父様やお母様に謝りにいきましょね。わたしも一緒にいてあげる」

「うん。もう子供だけで森の奥へ入ったりはしないわ。危ないと思ったこともしない」

「そう。いい子ね。さ、おいでなさい」

そうして、恐々と近寄ってくるアウグステを空いた片腕に抱く。ここは少し事情を訊いておきましょかしら。わたしたちを襲った翼人が、どうしてその命を救ったのか知りたいから。

「ねえ。さっき、その翼人の子があなたを助けてくれたって言うていたわね。少し詳しく聞かせてもらえないかしら？」

「……うん」

記憶を探ろうとしているのかしら。わたしから視線を逸らして、アウグステはぽつぽつと話し始める。

ツェルプストーの城から、家臣の子供たちと一緒に国境の森へ出たこと。道中、なにか珍しいものを探そうということになって、彼女がこの穴の斜面に咲く花を見つけたこと。

それを自分で取ろうとして、周りの制止を聞かずに斜面へ降りていったこと。途中で足を滑らせ、真っ逆さまに穴の中に落ちてしまったこと。

もう駄目だと思ったとき、傷だらけの翼人の少女がやって来て、自分を受け止めてくれたこと。そして傷ついた彼女と共に穴の中で休息を取ったこと。

二人で他愛のない話をしたこと。彼女たちが南方から来たこと。

どうしてこの森へ来たのかについては、口をつぐんだこと……。それらを話し終えたとき、彼女は最後に付け加えた。

「姉さまはアイーシャたちの部族に襲われたって言ってたけど、わたしには、この子の家族がただそんなことをするようには思えないの。きっと事情があると思うわ」

「そうね……」

そういえば、ガリアで翼人狩りがあったという話を侍従長がしていたわね。襲いかかってきた翼人たちも、そのようなことを言っていた気もするし……。

色々と複雑な事情がありそうねえ。これはなんとかしないといけないかしら。このことをお父さまが知ったら、きっと討伐軍を編成して森を焼き払うくらいはするはずだわ。

そうなると当然、ラ・ヴァリエールと揉め事が起きる可能性も出てくるわね。侯爵の軍勢を国境付近まで進めたなんて知れたら、間違いなく一大事になる。

ここは穏便に済ませたいわね。お父さまとお母さまはわたしとアウグステで説得できるだろうけど、問題は翼人の方かしら。

森へ入ってきた人間を無差別に襲う可能性がある以上、放置するわけにもいかない。この翼人の子の、アイーシャの部族長と話がつけられればいいのだけれど……、それは厳しいかも。

……それにしても、なぜ翼人のこの子がかんな穴の中にいるのかしら？ それに怪我をしていたって……。本人に尋ねてみないとわからないわね。

——そして、それから、数分が過ぎた頃。

地面に横たわっていたアイーシャが目を覚ましたと思ったら、不思議そうに自分の体を観察し始めた。きっと、自分の傷が完治して

いるのが不思議だったのでしょうね。

「あなたの怪我、このカールが治してくれたのよ」

「……！　そ、そうでしたか。ありがとうございます……」

わたしにお礼を言われても困るんだけどねえ。それより、この子にも訊かないと。詳しいことを。

「……ねえ、アイーシャさん。よかつたら、あなたがここにいた事情を聞かせてくださいな」

「あ、は、はい……。ええと……」

彼女曰く、“黒い森”に居住していた翼人部族がこの森へやって来たのは一ヶ月ほど前のこと。

そもその原因はガリアの翼人討伐で、なんとか“黒い森”からの脱出には成功したけど、そのときに何名か負傷者が出たというわ。そのことが原因で、彼らはすっかり人間不信に陥ってしまったそう。人間への暴力を主張する翼人もいて、長もその考えに賛同し始めていたとか。

長の娘だったアイーシャは、そのことが原因で父や家族、部族の仲間と仲たがい。昨日に家を飛び出したばかりだらしいわ。

翼人たちの気が立っていたのは、この子の行方が知れなかったからかもしれないわね。

「お恥ずかしい限りですが、わたしの怪我は家を飛び出した後で自分で負ってしまったもので……。精霊の力も、まだうまく使えなくて。カールさんには本当に感謝しています」

精霊の力……。わたしたちが『先住魔法』と呼んでいる力のことね。これもメイジと同じで、最初から満足に使えるというわけでは

ないみたい。

「南方にいた頃、とてもよくしてくれた人がいました。その人と、いつも語り合っていたんです。『人間だとか翼人だとか関係なく、僕たちはきつと分かり合えるはずだ』って……。今となってはもう、彼と話をすることもできませんが……」

「好きなのね、その人のこと」

「えっ、あ、う……」

あら、顔を真っ赤にして俯いちゃった。この子なかなか可愛い生き物ね。頬に手を添えて悶える仕草とか、なかなかぐつとくるもの。

「いいじゃない、いいじゃない。恋をするのって素晴らしいことだと思うわ。いつか、彼に会えると良いわね」

「ええ。ヨシア——彼の名前ですが、いつかまた会いたいです……」

恋しい異性の名を口にしながら、アイーシャは両手を胸の前で組み合わせた。それはまさに恋する乙女であって、わたしや周りの女の子とまったく同じ。違いなんてないわ。

こんな子に想われてるなんて。本当、ヨシアって子は幸せ者ね。いい男なのかしら。……まあ、興味はないけど。

「ん。……夜が明けたらここを出しましょうか。お母さまと、場合によっではお父さまとも“話し合い”をしなくちゃならないだろうし」「話し合い？　姉さま、一体どうするつもりなの？」

「三人で城へ戻って、お母さまと直談判するの。『森の翼人へは手を出さないで、森への立ち入りも一切禁止してほしい』って。こちらから接触を図らなければいさかいは起きないと思うから。ほとぼりが冷めるまでは、一切の接触を断つのよ」

翼人たちも大層気が立っているはず。今この状況で交渉をするなんてことは無謀。なら、時間をかけるしかないわけね。今採れる策はそのくらいだわ。ちょっぴり残念だけど。

元々この森は半ば放置してきたのだし、最奥部に翼人が住み着いたってどうということはない。むしろ……。

「でも。それじゃ、いつまで経っても誤解は解けないと思う。わたしは仲良くしたいのに……」

そうぽつりとアウグステが呟く。誤解……ね。ちょっと違うかもしれないわ。

「大丈夫よ。彼らだって、ここの人間が自分たちに危害を加えたわけじゃないのは知ってる。そうでしょう？」

「……はい。今は意地固になっているのだと思います。何人も仲間が傷ついたから……、でも、あれはあなたたちのせいじゃない。それは皆わかってはいるはずです」

うん、なんとかかなりそうね。お父さまが戻っていた場合、言いくるめるのにちょっと苦労しそうだけど……。ま、そこはアウグステもいるから大丈夫だと思いますよ。

襲われたのも事実だけど、助けられたのも事実だもの。五分五分というところで収めるしかないわ。

「方針が決まったところで、今日はもう寝ることにしましょうか」
「でも……、地面で直に寝るの？」

……そうね、その問題があったわ。仮にも嫁入り前の乙女が、地べたで直に寝るといふのもちょっと考えもの。なんとかしたいところ

ろだけど。

わたしたちの心中を察したのか、アイーシャが立ち上がって、少しばかり気後れしたように口を開く。

「わたしが使っていた枯葉のベッドなら……。かなりの量を集めてあるので、四人寝することもできるでしょう。でも……。その、あまりお気に召さないかもしれません」

「そんなことないわ。地面で寝るのに比べたら雲泥の差ですもの。さて、この子を運ば……」

と、そこまで口にしたところで、わたしは自分の杖がないことに気がつく。

さっき落としちゃったからかしら。一緒にこの穴へ落ち来てくれていると助かるのだけど……。

仕方ないわね。アイーシャにも協力してもらって、カールを運んでいきましょう。

……それにしても、本当によく寝てるわね。なんだか、いたずらしたくなっちゃうわ。

第十七話（後書き）

感想にてご指摘いただいた誤字・誤用を修正しました。ありがとうございます。

第十八話

どうしたのだろう、妙に息苦しい。なんとか呼吸はできるのだけれど、やけに空気が熱されているというか、生暖かいというか……。

あまり覚醒し切れていない頭で、ぼんやりとそんな事を考えつつ。それまで閉じていた目をゆっくりと開け——また閉じた。一瞬、信じがたい物が目に飛び込んできたからだ。

段々と目が冴えてくると共に、自分の両頬に当たっている物体が何であるかを理解し始める。そして、ほのかに漂ってくる少女独特の体臭というか……。

なんというか……。あまりこのままではいると、色々とよろしくない。今の状況はある意味で男の夢なのかもしれないが、さすがにそれを楽しむ余裕も度胸も僕にはないのだ。

そういうわけで僕は、両脇ですやすやと眠りこけている赤髪と翼人の少女たち双方の隙間から、なんとか脱出を試みる事にした。

十分ほどの試行錯誤の末、僕はなんとか二人の狭間から抜け出すことに成功した。……本当はちょっとだけ名残惜しいとか、そういう感情はない。そうだと。

途中でいろいろな部位が当たってしまったけど、それはあくまでも不可抗力なんだ。決して故意じゃない。

……ふう。と、僕が安堵のため息をついた、その瞬間だった。

「…………くす」

背後から、誰かが笑うような声が聞こえてきたのだ。それはごく最近耳にした覚えのある声だ。恐る恐る、僕が声の主がいるであろう方向を振り向くと……。

「ふふっ。どう？ 姉さまたちに挟まれていた気分は？」

高さ一メートルほどの岩の上で、キュルケの妹であり、昨晚の搜索対象であったアウグステがちょこんと腰かけていたのである。

「……見ていたのか」

「うん。ばっちり」

僕が四苦八苦する光景を思い切り見られていたようだ。たぶん、キュルケもアイーシャも寝ているうちに偶然僕を挟んでしまったのだろうから……。できれば、知らせないでほしい。

キュルケがそれを知ったら、彼女のことだから、それを口実にまた僕をからかってきそうなのだ。

「どうか、内密に……」

「どうしよっかなあ」

恐らくはエリザベートとそう変わらないだろう年齢だろう。しかし、このアウグステという少女は、年不相応な笑みを浮かべている。僕をどう処分するか考えているようだ。

昨日出会ったときは、それこそただの子供でしかないと思っていたけど……。それはこちらの見込み違いであつたらしい。

というよりも、姉や家族、友人、恩人の前とそれ以外で、態度を使い分けているのだろう。少なくとも僕はそう感じたのである。

アウグステは、姉とよく似た色の髪をくるくると指に巻きつけて弄びながら、座り込んだ岩の上からじっとこちらを観察するように見つめてきている。

困ったなあ。なんとか対処できないだろうか……。

そう考えていると、ふと自分の上着のポケットにいくつかのチョコ

コレートがあることに気がついた。もしかしたら長丁場になるかもしれないと考え、侍従さんをお願いして持ってきてあったのだ。

僕はそれを取り出し、まるで女王のような態度を取るアウグステに差し出した。

「これでなんとか……」

「……」

無言だ。ただのチョココレートでは駄目だろうか。……と、思ったときだった。

アウグステは軽快な仕草で岩から飛び降りると、まるで獲物を追う猛獣のような速度でこちらへ接近。僕の手からチョココレートを受け取ると、包装紙を一気に破いて口へ放り込んだのである。

それほど大きな物ではなかったので、彼女はあつという間にチョココレートを飲み込んでしまう。そして、こちらをじっと見つめてきた。今度は上目遣いだった。

……ああ、お腹が空いているんだろうな。昨日の昼から何も口にしていないだろうし。

などと考えつつ。もう一つチョココレートを懷から取り出し、それを彼女に手渡した。

そして、そんな行動を三回ほど繰り返した頃だろうか。満足した様子で、アウグステは言うのだ。

「ふう。美味しかったわ、ありがとう」

「じゃあ……」

「うん。わたしは口外しないよ。でも、姉さまはどうかなあ」

「え？」

まったく考えてもみななかった、意外な一言だった。驚いてキュルケのいる方向を見ると……。

なんと、既に彼女は目を覚ましていて、赤くなった頬に両の手を添えているではないか。

「ふふ……。カールったら。触りたいならそう言えればいいのに。本当、むつつりねえ……」

「……キュルケ。きみはなにか誤解しているぞ」

ああもう、なんでこうなんだ、この一家は……。

一人できやあきやあ言い出してしまったキュルケを見やりながら、僕はもう頭を抱えるしかないのであった。

——— 昨晚キュルケが落としてしまった杖を探し、ようやく回収した後。

出発までの僅かな時間。藁の上に座り込んで何事か考え込んでいる様子だったキュルケが、杖をくるくると指で回しながら僕に問いかけてくるのである。

「……ねえ、カール。お母さまたちを説得して、その後はどうしましょうかしら」

「その後？」

「仮に、家の人たちを説得できたとして……。それでも、ひよんな事から争いが起きないとも限らないじゃない。やっぱり、きちんとした形でお互いの不干渉を取り決めた方が良いと思ったのよ」

「そうだなあ……。確かにその方がいいけど。ちよっとアイーシャを呼んでみようか」

キュルケによると、アイーシャは翼人たちの長の娘であるらしい。つまり彼女の父をうまく説得できれば、あるいは状況が動くかもし

れないのだ。

アウグステと共に少し離れた位置にいたアイーシャを呼び出して、この場へと連れてくる。そして、キュルケが彼女に事情を説明した。

「どうかしらね。この状況だと無謀な試みだとも思うのだけど」

キュルケの提案に、しばし悩むような顔を見せるアイーシャ。しかし、それはほんの少しの時間だった。すぐに顔を上げる。

「……わかりました。やりましょう」

「いいのかい？ その、けんかをして出てきてしまったんだろう？」
「確かにわたしは家出中です。でも……」

その言葉と共に、アイーシャが僕の方に視線を向ける。なにか言いたげな様子だったが、結局この場で、彼女がそれ以上僕と言葉を交わすことはなかった。

……双方の説得、うまくいくといいんだけどなあ。

話し合いの後、僕たち四人は“穴”から出るようになった。

アウグステはキュルケが担いでくれるというので、僕とアイーシヤは各々で地上まで戻るようになった。

例によって『レビテーション』を使い、僕は“穴”の斜面をゆっくりと上昇していく。……やっぱり、ここは結構深かったみたいだ。なんでこんなものがあるのだろう。

むき出しになった地層を観察しながら、そんなことを考えていると。先行していたアイーシャが速度を緩め、僕のすぐ傍まで近づいてきたではないか。

「あの……、カールさん」

「う、うん。どうしたんだい」

間近で見ると、この翼人の少女もかなりの美少女であるというのがよくわかった。背中の大きな羽根を広げて飛ぶさまは、まるで絵画の中の天使のようでさえある。

僕も最近は美人・美少女に対する耐性が少しはついたと思っていたけど、やっぱりまったく面識のない相手だと駄目なようだ。どうしてもどぎまぎしてしまう。

そんな僕のの内心などは知らず、しかし彼女はあくまでも控えめな態度で、こちらに向かって頭を下げてくる。

「昨日は治療していただいて、本当にありがとうございました。おかげでこうして飛べていますし……」

「礼を言うのはこちらの方だよ。僕たちを助けてくれてありがとう。きみのおかげで僕も、キュルケも、アウグステも助かったんだ」

「い、いえ……。そんな」

実際問題、彼女がいなかったら、僕たち三人は誰も生きて帰ることはできなくなっていただろう。いわば命の恩人である。

「だから、さ。ぼくにできることはあまりないだろうけど、それでもなんとかやってみるよ。だから、きみも頑張っしてほしい」

「……ええ、そうですね。お互い、頑張らしましょう」

「うん」

もう既にツエルプストー候は討伐隊を出したりしているのかもしれない。そうになったら手遅れだろう。でも……。それでも、やるだけはやる。説得が通じない相手じゃない。

とにかく、今は城へ戻らないと。お互いが血を血で洗う戦いを始

める前に……。

途中の“ある地点”でアイーシャと別れた僕たちが、ツェルプストーの城へとたどり着いたのは、“穴”を出てからしばらくの後のことだった。

「お父さまの馬車があるわね。ということは……」

「……姉さま」

「大丈夫よ。どうしても不安なら、わたしの横についていなさい」
「うん……」

なんというか、この妹君は。キュルケに対する態度と僕への態度、どちらが彼女の本性なんだろう。このおどおどとした少女が、先ほどの岩の上での笑みを向けてきたとは思えないよ。

……ま、今はそれは置いておこう。問題はこれからなんだ。

僕が先頭に立ち、そのすぐ斜め後ろキュルケが、その横をアウグステが続く。ツェルプストーの城の正門にいる守衛の方へ向かって、僕たちは歩き始めた。

すると、すぐに守衛の一人がこちらに気がついたらしい。すぐに周囲が慌しくなり、侯爵の家臣たちがわらわらと集まり始める。

キュルケとアウグステの無事を確認して、皆が安堵の表情を顔に浮かべている。集まった人垣から昨日同行した侍従長が出てきたかと思うと、キュルケの面前で膝をつき、そのまま泣き出してしまった。

「お嬢さま方、よくぞご無事で……！ 申し訳ありません、我々の

力が足りないがばかりに……」

「あらあら。大丈夫よ、そんなに気にしないで。あなたたちも無事でよかったわ。……そうだわ、お父さまがいらっしゃるのでしょうか？」

「は、はい。それが……」

侍従長がキュルケに向かって何か説明を始めたようだけど、姉妹の取り巻きの外に押し出されてしまった僕では、それを聞き取ることはできなかった。

……一応、彼女の婚約者なんだけどな。ものすごく酷い扱いを受けている気がするよ。

「若様」

と、人ごみをただただ傍観していると。よく見知っていて、それでいてあまり耳にしない声の人物が近寄ってきたのがわかった。それは、ミスタ・ヴルムだった。

「申し訳ありません。ウィンドボナでの一件といい、今回の件といい……、自分は護衛失格です」

「……いいよ。あんな状況だったんだ。誰も責めないよ」

「ですが……」

「いいんだ」

彼が自分なりに、強い自責の念を持っていることはよくわかる。ここは意固地になってそっぽを向いている場合ではないとも……。だけど、どうしても今の僕は彼とともに会話する気にはなれない。どうしても、拭いきれない疑念がある。それが僕の中で燻り続ける以上、この状況は改善のしようがない。

わかってはいるんだ。わかってはいるけど……。やっぱり、納得

はできなかった。

そうして無言のまま、ただただ二人で立ち尽くしていると。正門の奥から、ドレスに身を包んだ女性が姿を現すのがわかった。

それはツエルプストー侯爵夫人のヨハンナさんだった。彼女は、人ごみから少し離れた位置にいる僕らを見つけると、ゆっくりと歩み寄ってくる。

彼女が安堵の笑みを浮かべるさまはなんだかキュルケを思わせ、やはり彼女たちが親子なのだとよく実感させられた。

「無事だったのね、よかったわ。本当、あなたたちが戻って来なかったときは心配で心配で……」

「ご心配をおかけして、すみません。勝手に森へ出てしまいましたし……」

そう言って、僕が頭を下げたとき。不意に、大きな声が響き渡る。

「お母さま！」

母の姿を認めたアウグステが人垣から飛び出し、己の母親の胸に飛び込んだのだ。その声音といい表情といい、本当に嬉しそうな様子である。

「あらあら、元気一杯ね。とっても心配したのよ？　怪我はなかった？」

「うん！　アイーシャが助けてくれたから！」

「アイーシャ？　……それはどこの方かしら。ぜひ、お礼をして差し上げないと」

よし。ここでキュルケが……と、思ったのだけど。彼女はさきほ

どから家臣たちにすっかり周囲を囲まれてしまっていて、まったく身動きが取れそうにないようだった。

居並ぶ家臣たちの隙間から窺い見ると、ふとキュルケと目が合う。その視線は、僕に事情を説明しろと言っているように思えた。

やむを得まい。彼女が喋った方がうまく事が進みそうな気がするけど、ここは僕が頑張ってみよう。

「事情は、僕から説明します」

そうヨハンナさんへ告げて一歩進み出る。そうして、森で体験したこと、アイーシャから聞いたことを要約して伝え始めた。無論、彼女が翼人であることもだ。

途中で口を挟むこともなく、ヨハンナさんはただ淡々とこちらの話を聞いていた。アウグステも、このときばかりは大人しく佇んでいる。

そうして、大体の事情は話し終える。問題はここからだ。翼人の扱いについて……、キュルケが言うような方向に持っていかなければ、説得である。

「アイーシャはアウグステだけでなく、僕やキュルケのことも助けてくれました。彼女がいなければ、僕たちがこうしてこの城へ戻ってくることはなかったでしょう」

「そうね。でも、翼人が搜索に出たあなたたちを襲ったのも事実だわ」

「それはもちろんです。ですが、翼人にも翼人なりの事情があるのだと言っていました。だから、いたずらに刺激することがなければ、彼らも暴力に訴えるようなことはしない……、と思うんです」

「ええ、それもわかるわ。翼人は元来大人しい種族だから。アイーシャという子が、あなたたち三人を助けてくれたというのも信じるわ。でも、“身内”が危害を加えられた以上、はいそうですかとい

くわけにはいかないの。何らかの形で“けじめ”を付けないと」

「それは……、森へ討伐隊を出すということですか？」

「あの人ならそうするでしょうね」

やはり駄目か。もう少し、双方が矛を収められるような材料があるといいのだけれど……。

……と、そこでふと、僕はある違和感に気がつく。先ほどキュルケは「お父さまの馬車がある」と言っていたのに、どういうわけか侯爵本人がその姿を見せていないのだ。

あれだけ娘に執心している人物だ。この状況下で出てこないというのはどうもおかしい。とくに討伐隊を出していてもおかしくないのに、その兆候すら見えないし……。

「……あの、ツェルプストー卿はどうされたのですか？」

「あの人なら、大人しく眠ってもらっているわ。ちょっと頭に血が上っているようだったから。今はわたしが代理で権限を持っているのよ」

ヨハンナさんは目を細めて言った。彼女の視線はまっすぐに僕を捉えている。……なんだか、先ほどキュルケが行ったアイコンタクトを思い起こさせた。

彼女の言う“けじめ”。未だに出ていない討伐隊。「権限を持っている」という発言。そこから導き出されるのは……。一か八か、尋ねてみよう。

「……翼人の長と、交渉していただくことはできますか？」

「ええ。もちろん構わないわ。話し合いができるのなら、それに越したことはないものね」

即答である。まるで、最初からそうする気であったと言わんばか

りの口調だった。おまけに軽くウィンクまでしてくるありさまだ。

「……ええと」

「あなたたちが今日の昼までに戻って来なかったら、侯爵軍の主力を動員して搜索を始めるつもりだったわ。でも、こうして戻って来てくれたから。……ありがとうね、カールくん」

礼を言われるようなことはなにもしていない。そう思ったのだけど……、ヨハンナさんの有無を言わせない口調の前に、僕はただ頷くことしかできなかった。

数刻の後。森の内部。アイーシャと別れた“ある地点”を、ヨハンナさんとキュルケ、僕の三人で訪れていた。

周囲に護衛の姿はない。いたずらに翼人たちを刺激しないためである。もつとも、これは家臣の人たちに猛反対されたのだけど……。その場は、ヨハンナさんの鶴の一声で収められた。

時刻は正午になる頃だろうか。もしアイーシャの説得が成功していれば、そろそろこの場所へ来るはずだ。

「静かな場所ね。ここへ翼人たちの長が来るというのは、本当なのかしら？」

「ええ。向こうの説得が成功していれば……。間違いないと思いますわ」

「あらあら。あなたらしくもないわね。そんな博打に打って出るなんて。珍しいわ」

「……自覚はあるのよ」

確かにそうだ。アイーシャの説得が失敗すれば、この賭けは負け

である。最悪僕たちは危害を加えられるかもしれない。

……そうならないように、いざというときは二人を逃がすために僕もついて来たのだけだね。

とはいえ、事態はそう悪い方向に進んでいたわけでもないらしい。遠くの方から風を切るような音がしたかと思うと、二名の翼人がその姿を現した。

一人は見慣れた翼人の少女。そしてもう一人は、精悍な顔立ちの男の翼人だった。年の頃は中年に差し掛かった辺りだろうか。屈強な体つきをしていて、どこか戦士のような風格を漂わせている。

「ここからは、わたしに任せておきなさい」

それだけ言うと、ヨハンナさんが慎重な面持ちで前へと進み出る。すると、向かい側の翼人の男性も同様に進み出た。

二人はほぼ同じ速度で歩み、お互いの距離が一メートルほどになったところ、両者が止まる。そして、何事か言葉を交わし始める。

「……大丈夫だろうか」

「大丈夫よ。だって、わたしのお母さまだもの」

僕の弦きが耳に入ったのだろう。キュルケがそんなことを言う。まったく根拠のない言葉ではあったが、なんとなく納得してしまう気もするのであった。

——森での会談から数時間が過ぎた、夕刻。

僕はヨハンナさんに呼び出され、彼女の私室へと向かっていた。

道中、あのときのことを思い出す。結局、翼人たちとツェルプストー候……というか、ヨハンナさんの間で、ある種の不干渉条約のようなものが結ばれたのだ。

まず、今回の件で不幸な行き違いがあったことを、翼人の長が謝罪。一定期間ごとに貢物を出すという条件で、和解を求めてきたのである。

ヨハンナさんはしばらく悩んでいたが、それを受け入れることを決めた。お互いに覚書を交わして、ツェルプストー側は今後、翼人の森への居住を黙認するとしたのだ。

“代理”のヨハンナさんがそんなことをしても良いのか、という疑問はあったのだが、キュルケによるとそういうことは日常茶飯事であるらしい。

……なんだか、かかあ天下という言葉を出すな。

それは置いておくとして、いずれにせよ、翼人の問題は一応の決着を見たのである。無論、家臣たちの中にはこの終わり方に不満を持っている人もいるらしいけど……。

と。そんなことを考えている間に、ヨハンナさんの部屋の前へとたどりついてしまった。

一度咳払いをし、軽くノックをすると、中から「どうぞ」という声が聞こえた。

すかさず僕は「失礼します」と告げ、ドアを開けた。入室と共に、ほんのりと香水のような香りが漂ってくる。

部屋の中には、いくつもの大きな本棚があった。窓際に置かれた机にも本が積み重ねられている。どうも、ここは元々書斎かなにかであるようだった。

「よく来てくれたわね」

声が出た方向へ視線を向けると。部屋の隅に置かれたベッドに腰かけたヨハンナさんが、優雅に紅茶をすすっているではないか。

さて。今回の件について、ちゃんとお礼をしないと。そう考えた僕は、真っ先に彼女に向かって頭を下げる。

「本当に、ありがとうございました」

「あらあら、そんなに簡単に頭を下げてはだめよ。あなたは最低でも公爵になる人なの。たかだか侯爵の妻に下げる頭なんてないわ」
「そんな。お世話になったのにそれは……」

はつきりと言い放たれた一言に、しかし僕は困惑を持って答えた。
それでもヨハンナさんは言葉を続ける。

「覚えておきなさい。あなたはれっきとした大貴族の子弟なの。目下の人間相手になよとした態度を見せていたら、かならず舐められるわ。そうになったら終わりよ。特に、このゲルマニアでは」
「……それは」

他国よりも実力主義であるといわれるゲルマニアだ。それは確かにそうかもしれない。

それに、場合によっては酷評されることの多いアルブレヒト三世だって、常に覇者としての“威容”を見せていたのだ。近くで見ると、とても小物だなとは思えない“オーラ”があった。

威風堂々とした態度を、姿を見せて、己が他者よりも絶対的上位の存在だと認識させる。それも王として、皇帝として君臨する人物にはとても重要なことなのだろう。

そういう意味でも、僕という人間は、皇帝などという位を戴くにはまったく不適格な存在だ。しょっちゅう他人に頭を下げてるから、

威厳もなにもない。

そんなことを考えつつ、こちらが情けない顔をしているからだろうか。ひどく物憂げな表情で、ヨハンナさんは言うのだ。

「ううん……。もったきりつとしてほしいわねえ。あなた、このままだとキュルケを留めておくことができないかも」

……おっしゃる通りです。彼女、今はまだ僕と一緒に行動してくれているけど、いつか見放されるんじゃないかという予感は一ひしと感じています。

もし、不仲な状態で結婚なんてしたら……。いや、その前に侯爵に阻止されそうな気もするけど、それは置いておいて。

なんだろう、とてつもない悪寒が背筋を走る。まるで、そうなのはいけないと、絶対にキュルケを失望させるなど、本能が訴えかけてきているような感覚だ。

額に嫌な汗が浮かぶのがわかった。どうしてだろう。彼女と不仲になると自分の命が危なくなるような気がするの、決して気のせいではない。そう思うのだ。

虫の知らせ、という言葉がある。今のこの状況はまさにそれに当てはまる。杞憂であってほしいけど……。

「カールくん、大丈夫？　すごい汗よ。少し、こちらへ来なさいな」
「あ、はい……」

言われるがまま、僕はヨハンナさんがいるベッドへと向かった。ふらふらと歩き、真っ白なシーツの上へと腰を下ろす。

すると、額になにかが被せられる。それはタオルだった。ヨハンナさんが丁寧な汗を拭ってくれている。

「……すみません」

「どうしたのかしらね。風邪というわけでもないでしょうに……」

こちらを覗き込まれながら心配そうな声音で呟かれる台詞に、僕はなんだか母のことを思い出してしまう。

あの人がいなくなって久しい。今までの人生を総合しても、ろくに母親と接することがなかったせいなのか、妙に意識してしまうようだ。

もしや、その手のコンプレックスでもあるのだろうか。そうなる
と後世の史家からあれやこれや汚名を付けられそうだ。エディプス・
コンプレックスの持ち主だなどと中傷されては敵わないぞ。

……などと、考えていると。ふと、僕が座っている場所がヨハン
ナさんからこぶし一つ分も離れていないことに気がつく。

さすがに気恥ずかしくなって、思わず距離を取った。

「あら……。こんなおばさんに近づかれると迷惑かしら？」

「い、いや、そういうわけじゃ……。すみません」

「……もう。また頭を下げて」

「う……」

参ったな。下げるなど言われても、なぜだかどうしても頭を下げて
してしまう。こんな調子じゃまずいから、そろそろ直さないといけな
いとは思っただけ。

ふと、ここでヨハンナさんが何事か考え事をしているのに気がつ
く。小さく、なにか呟いているようだった。

「……ううん、そうね。まだしばらくはここにいるのだから……。、
焦ることもないわ」

「……？」

「あ……。な、なんでもないわ。それより、お菓子をいただきますし
ょう？　美味しいビスケットがあるの。夕食まではまだ時間がある

から」

珍しく慌てた様子で、彼女はビスケットを差し出してくる。せっかくだからと一ついただいてみる。

「これ、わたしの手作りなの。たくさんあるから好きなだけ食べてね」

ふむ。なかなか美味しい。まるでプロの職人が作ったようだ。お茶との相性も悪くない。軽い食感で何枚でも食べられそうだ。

「……♪」

……いや、しかし。どうしてこの人はずっと僕の方を見ているのだろうか。やけに笑顔だし。自分も食べればいいのになぁ。こんなに美味しいのに……。

第十九話

ツェルプストーの城へ滞在を始めてから、既に一週間ほどが過ぎていた。

毎日のようにキュルケにからかわれたり、アウグステにからかわれたり、ヨハンナさんがバイオリンを教えてくれたり……と、僕はなんだかのんびりとした生活を送っていた。

音楽は聴くのに限ると僕は思っている。ただ、ヨハンナさんの教え方が上手なのだろう、僕でもそこそこにはバイオリンで演奏することができるようになっていた。

……と、ここで不思議なのがキュルケのことだ。

彼女は昼間、大抵の場合僕と共に行動しているのだが、どういうわけかバイオリンの練習をしているときに限って、その姿をさっと晦ませてしまうのである。

そして、練習を終えたころになってちゃっかりと戻ってくる。もしかして、彼女は楽器を演奏するのが嫌いなのだろうか？

ヨハンナさんにその疑問を投げかけてみても、返ってくるのは苦笑だけ。どうにも理由がわからないのであった。

時刻は昼過ぎ。

僕はツェルプストーの城の敷地内にあるテラスに置かれた白塗りの椅子に腰かけ、分厚い本を開いていた。

表紙には随分と合成な革張りの装丁が施されている。中身はなんのことはない、ただの歴史書だ。この本の中で扱っているのは、主にここ数十年の歴史である。

そうだな。たとえば、ゲルマニアに関係するものというところ……。一部をかいつまんでみる。

ガリアのアルデラ地方侵略に『黒い森』で抵抗するバーデン辺境

伯の戦い、ベーメン王家出身者によるクルデンホルフ大公国の建国、ペーター一世の治世と功績などの記述があるようだ。

ペーター一世。

僕の母方の祖父に当たる人物で、ゲルマニア中興の祖だと言われている。大帝とも呼ばれ、かのトリステインのフィリップ三世とは幾度となく矛を交えたそうだ。

その崩御後、次のペーター二世という皇帝が即位。しかし彼はすぐに崩御してしまい、その後の後継者争いの結果、最終的には現在のアルブレヒト三世が即位した。

ゲルマニアの帝位は、選帝侯による選挙で決められる。ペーター二世の後釜として、アルブレヒト三世の異母兄弟を擁立する動きが一部の選帝侯から出て、それがお家騒動の原因となったそうだ。

僻地で幽閉されている親族というのは、その一件でアルブレヒト三世と敵対した人たちだという。

政争で負けた者には、目を覆いたくなるような悲惨な結末が待っている……。考えるだけでも恐ろしいことだ。

僕はそういうことには巻き込まれたくない。でも、もうそれも無理なのではないかと思うようになってきた。それでも、あくまでも認めたくないのだが。

今の時間は、特にすることがない。青々と晴れ渡った空の下、眠気を感じた僕は白いテーブルに突っ伏す。そばで控えるメイドの視線を感じるが、ここは気にしたら負けだ。

やがて本当にうつらうつらとしてきたころだった。不意に、周囲の空気が一瞬にして張り詰めたのである。

「ほう、珍しいな。今日はきみ一人か」

突如として現れたのは。キュルケやアウグステの父であり、ヨハンナさんの夫……クリステイアン・フォン・アンハルツ・ツェルプストー侯爵その人だったのだ。

これはまずい。この人は僕を快く思っていないというか、どちらかといえば嫌われているようなのである。当然ながら、僕とキュルケの婚姻にも消極的な立場をとっている。

翼人との一騒動のときに一度城へ戻ってきていたそうだが、なぜかその姿は見えなかった。ヨハンナさん曰く、また仕事で城を出ていたそうだけど、今日になって戻ってきたのだろうか。

「失礼するよ。なに、そう硬くならなくていい。私は独り言を言いに来ただけだから」

「は、はあ……？」

なんだろう。独り言を言いに来た、というのもなんだか妙な話である。どういうつもりなのだろう。

一見では穏やかなように見えるけど……、キュルケの父である。彼女のように、怒れば怒るほど冷静な態度になるのかもしれないし、油断は禁物だ。

しばしの間。メイドの淹れた紅茶を見つめながら、やがて彼は口を開いた。若干の緊張感をにじませる声音だった。

「……ガリアが、アルデラ地方に要塞を建設しているという情報が入った。それも『黒い森』の東の果てにだ」

「！」

アルデラ地方。長年ゲルマニアとガリアの係争地域となっている土地で、その東側には『黒い森』——ゲルマニア語でシュヴァルトヴァルトと呼ばれる、深い森林地帯が横たわっているのだ。

近年は長らくバーデン辺境伯領の南半分を構成していたが、過去

の戦争の結果、現在ではガリアによって支配されている。また、アイーシャたちの故郷もその森だ。

「リュティスには元皇太子……、カール・アルブレヒトが亡命している。そのことと要塞の建設に関係があるのかはわからないが……。ガリアは、黒い森で大規模な森林伐採を行っているらしい」

「では……、翼人たちが追いやられたのは……」

太く立派なライカ樺は、要塞を建設するに当たってとても重宝する資材なのだろう。そして、それを住居とする翼人の存在が邪魔となるのは必然だ。

しかし、今のガリア王がそんな無茶をするとは到底思えなかった。一体どうということだろう……？

そう、思ったのと同じ。侯爵は驚くべき事実を伝えてくるのだ。

「そういうことだろうな。あの無能王はどうとう気でも狂ったのかもしれない。ここまであからさまな挑発行動に出るとは、さすがに想像できなかったよ」

「……無能王？ 無能王というのは、あのジョゼフ王子ですか？」

「そうだ。……なんだ、知らなかったのか。二月ほど前に即位したばかりだろう。我が家ではろくに話題にもならなかったがね」

……そうか。いつの間にやら、そんなことになっていたのか。知らぬは自分ばかりだな。

ゴットルプ城にいる間は、まるで世間の流れからは隔絶されていた。キールでの生活においても、自分から調べることをしなければ、外部の情報なんて入ってこなかったけど……。

もう、『物語』は動き始めているということだ。静かに、ゆっくりと。まるで足音を立てずに……。

一度考え込むのをやめ、侯爵へ視線を戻す。すると、彼は再び話

し始めた。

「これは私の個人的な見解だが……。もしかしたら、このハルケギニアでは大きな歴史の動きが起きつつあるのかもしれない。現に、アルビオンでは地方貴族の反乱が続発し始めている。このゲルマニアも、やがてそういった流れに翻弄されるかもしれない」

アルビオンの内戦……。ジョゼフ王の謀略によって、最終的には現アルビオン王家であるテューダー朝の転覆にまで至ってしまうという出来事だ。

「自分という人間の価値をよく考えるといい。そして、今のままでは、きみは他人はおろか自分さえも守ることができないだろう」

……。そうかもしれない。いや、そうだろうな。今まで生き延びてこれたのは、周りの人たちに守ってもらったからだ。

僕一人になったら、それこそひとたまりもないだろう。

「きみにも大切なものがあるだろう。それを守りたいのなら、早く男になることだな。今のきみはまだまだ脆弱な子供にすぎない。腰を据えられるようになることも大切だ」

「……はい」

「うむ。……悪いな、独り言などを長々と聞かせて」

「いえ……」

完全に会話を交わしてはいたけど、そこはあくまでも侯爵の独り言ということで済ませるのだろう。

「それでは失礼するよ。ウィンドボナでやり残したことがあるからね」

最期に振り向き、それだけを告げて、ツェルプストー侯爵はこの場から去っていく。

……僕を嫌っているだろうに、こうしてわざわざ重大な情報を直接伝えてくれるとは思わなかった。感謝したほうがいいんだろうな。心から……。

侯爵との会話から、しばらく。僕はヨハンナさんの部屋で出向いて、バイオリンの練習を行っていた。

教えられた情報は確かに重大なことだったし、恐らくは僕のこれからとも無関係ではいられないのだろう。ただ、今は気を落ち着かせたかった。

今の僕が騒いだところで、どうにかなる問題ではない。それに僕の記憶が確かならば、ゲルマニアは『物語』とはあまり密接な関係は持っていないはずなのだ。

まだ慌てる段階じゃない。僕の存在という不確定要素がある段階で、この世界は元々の世界とはまったく異なった流れの中にあるというのも、最初から理解はしているし……。

『ガンダールヴ』の出現という事象が起きるまでには、まだ三年以上の時間がある。

しかし、そのときに僕はどうなっているのか。キュルケと共にトリステインへ留学しているのか、それともウィンドボナの魔法学院に通うことになるのか、あるいは……。

三つのうちの、どの道筋をたどるかで対処法も変わってくる。もっとも、今のところトリステインへ行くなどという可能性は考えにくい。

だけど一方で、うちがトリステイン王家と浅からぬ関係にあるという事実は変わらない。僕が何らかの形で『物語』に巻き込まれる

可能性は、低くとも決してゼロじゃないんだ。

それをどううまく避けるのか。こんな悩みは杞憂だけに終わるのか。

……ああ、考えれば考えるほど、わけがわからなくなってくる。考えないようにしたいと思っているのに。

「……どうしたの？ 音がずれているわ」

「あ、ああ……。すみません。ぼうつとしていました」

「もう。集中しないと腕は上がらないわよ？ キュルケのように、生来の問題で駄目な場合もあるけど……」

「あう……」

「……本当に、どうしたの？」

僕があまりにも情けない醜態を見せているせいだろう。眉を顰め、ヨハンナさんが訝しげな様子で問いかけてくる。あんまり、心配させるのもよくないな。

「すみません。少しナーバスになっていただけで……。今度は集中します」

「そ、そう？ ……なにか悩みがあるのなら、遠慮せずに言うのよ？」

「はい。大丈夫です」

最初からやけに親しげだったのがどうにも疑問だったけど、彼女から悪意のようなものはまったく感じられない。きっと、元々他人と接するのが上手な人なんだろう。

いい人なんだ。余計に気を遣わせたくはないし、あんまりどうしようもないことを引きずっていても仕方ないだろう。

そう考え、僕はバイオリンの演奏に集中するのだった。

――夕食後。

やっぱり特にすることもなく、僕は自分に割り当てられた客間のベッドでのんびりと横になっていた。食べてすぐ寝ると牛になるので本当はよくないのだが、どうもダルいのである。

そして僕のすぐ近くでは、例によって部屋を訪れたキュルケが脚を組んで座っている。彼女、今はブーツの類などは履いておらず、素足にサンダルを履いていた。

うむ。どうしても視線が行ってしまうな。彼女もそれを理解した上でそういう格好をしているみたいだし……、うむむ。

「アンニユイな気分だわあ……。騒動もなにもなく、こうして二人でのんびりとしていられるのって良いわね」

「そうだね」

来て早々のアウグステの行方不明事件、そしてそれに続く翼人の問題。そういった問題が解決して一週間も過ぎると、いつものもつさりとした日々が戻ってくるのだ。

アルデラ地方で建設が始まっているという要塞のことや、皇位継承問題。そんなことはもはや、考えるのも億劫になってしまふ。今は忘れよう。そうしよう。

そんなことを思いつつ、ごろんと寝返りを打ったとき。キュルケがこちらを向いて、突然問いかけてきたのである。

「……ねえ、カール。あなた、お義父さまとはきちんとお話をしているの？ プロイセンの王子絡みの問題で一悶着あったみたいだけど」

「どこで聞いたんだい、そんなの」

「お父さまからよ。軍では噂になってるって。あなたがベルリンか

ら脱走した王子を匿っていたって。王子の側近が処刑されたという話もあるわ」

「……え？ 処刑……？」

ごく自然にキュルケの口から出た言葉。それを耳にしたとき、僕は自分の背筋が凍りつくのを感じた。

それまでのどこかだらけた空気など吹き飛び、僕の脳裏にフリードリヒやヴィルヘルミーネさん、カッテ少尉、カイト少尉の顔が浮かぶ。

「そうよ。ハンス・フォン・カッテという士官の人。王子の逃亡を手助けした罪を問われて……、一度判決で禁固半年の刑になったけど、その後王の勅命で処刑されたって」

「そんな……」

知らなかった。そんなことさえ、僕は満足に情報を得ていなかったのか。あのカッテ少尉が処刑された。司法が独立しているはずのプロイセンで、その判断に王が介入したなんて。

……どこか安心していたのかもしれない。まさか、そんなことが起きるなどとは、まったく思いもよらなかったのだ。

僕のしたことはまったくの無駄で、いたずらにプロイセン王の気を揉ませるだけの結果になってしまったのだ。僕が彼らを匿ったりしなければ……、もしかしたら……。

「……」

「か、カール？ そんなに落ち込まないでよ。……わたしは、あなたが間違ったことをしたなんて思わないわ。彼はあなたの命の恩人だったのですものね」

「そうだ……。僕は、命の恩人を余計に苦しませることを……」

カッテ少尉はフリードリヒの親友だったという。そんな人物が、自分の家出に付き合わせたせいで殺されてしまったのだとしたら……、僕には、耐えられそうもない。

きつとフリードリヒは辛い思いをしているはずだ。なのに僕ときたら、この場所での生活にかまけて……。

駄目だ。もう他のことが考えられない。僕が余計なことをしなければ、カッテ少尉は処刑されずに済んだかもしれないのに。余計なことさえしなければ……。

きつと、その言葉が口から出ていたのだろう。キュルケは眉を顰めて、唐突にこちらに向かって身を乗り出した。

そして不意に、ふわっとした香りが感じられ、それと共に人間の暖かさが自分を包み込んだ。

「落ち着いて。あなたは悪くないわ。遅かれ早かれ、彼らは連れ戻されていたのよ。あなたはあなたなりによくやったの。だから、あまり自分を責めないで」

「でも……」

「でもないの。王子さんも少尉さんも、あなたに感謝こそすれど、恨むなんてことはただの一つもないはずだわ。わたしだったら、行く宛てもないお尋ね者の自分を匿って貰えたらとても感謝するもの。彼らだって同じはずよ。捕まってしまったのとは別の話なの。いい？」

「……」

……確かにそうかもしれない。キュルケの言うとおりなのかもしれない。でも……。

「ほら、もう寝ましょう？　今はとにかく落ち着くことが必要よ。……ごめんなさいね」

最期に小さく囁かれた謝罪の言葉が、どうしても耳に残った。どうして謝ったのだろう。キュルケが謝る必要なんてないのに……。彼女は僕を抱きかかえたまま、器用に毛布を引っ張り上げる。どうも添い寝をするつもりのようなだったが、このときの僕はそれにまで気が回らなかった。

急速に薄れ行く意識の中で、不意になにか子守唄のようなものが聞こえた気がする。けれど、僕の脳はそれを正確な調べとして処理することは最後までできないのだった。

——お抱え騎士の風竜に乗った父の執事のアドルフが、見るからに酷く焦った様子でツェルプストーの城へと飛来したのは……、この翌朝の出来事だった。

第十九話（後書き）

第四章は終わり。次話より第五章となります。

第二十話

ゲルマニア帝国の中部。パンノニア王国の首都プレスブルク。

かつて、エルフによる攻撃に備えるために建設された、四つの防衛拠点を擁する地域——ブルゲンラントのうち、最北に位置する城下町。

反乱鎮圧の任務中に、父が重傷を負った。

その報せを受けた僕は、執事のアドルフやお抱え騎士に連れられ、その地を訪れていた。

空には暗雲が立ち込め、今の僕的心情を代弁しているかのよう to 思えた。道行く人々は、恐らくはこれから降り注ぐであろう雨から逃れるために、早足で道を通り抜けていく。

途中で馬車から降り、目的の建物への道を行く間。周囲の家臣たちは皆一様に無言だった。

事情については既に聞かされているし、今は会話を交わすような気になどなれはしないのだ。それは、僕以外の人たちも同様のはず。人が大勢いる城下町の主要通りを無言で歩く集団は、事情を知らない人間が見ればひどく不気味なものに見えただろう。だが、今はそれを気にする精神的余裕などなかった。

やがて、僕たちの一行はとある病院の前へとたどり着く。

ペーター一世が建設を命じた、パンノニア王国最大の病院。見上げれば首が痛くなりそうな高さの石造りの建物に、戦場で重傷を負った父は入院しているのだという。

僕たちがやって来るを知っていたのだろう。院長らしき禿頭の人物がうやうやしく頭を下げ、出迎えてくれた。彼は挨拶もそこそこに、僕だけを連れて病棟の最上階へと向かう。

とても長い階段を使ったが、それを上ることに苦痛はまったく感じなかった。ひどく現実感のないまま、周囲に気を向ける余裕さえ失っていた。

「ここが、お父上の病室です」

そう告げると、彼は自らの手でゆっくりと扉を開けた。すると、広々とした大きな部屋が僕の瞳に映る。だけど、今そんなことはどうとも感じなかった。

僕の視界にまず映ったのは――大きなベッドに寝かされ、各種の医療用マジックアイテムを体の至るところに装着された、父カール・フリードリヒの姿だったのだ。

ゆっくりと歩み寄る。父は寝ているらしく、こちらにはなんの反応も返すことがない。

父が目を閉じているさまは、あまりにも弱々しく見え……、本当に自分の父なのかと疑いたくなるような光景だった。それほどに覇気が感じられないのだ。

「父上……」

枕元に立ち、そう呼びかけてみるものの、当然ながら反応はない。顔は土気色になってしまっていて、本当に生きているのか、それさえも判別がつかなかった。

ベッド脇の椅子へと腰かける。この頃には、もう雨がぽつりぽつりと滴り落ちるようになっていた。そう遠くなく本降りとなるのだろうか。

「院長先生。父は……」

無駄だとわかっていても、結果を知っていたとしても。僕はそう

問いかけずにはいられなかった。

部屋から出ず、後ろで控えてくれていたのだろう。すぐに、院長は僕の答えがわかりきった問いに答えてくれる。

「残念ながら……。傷があまりにも深すぎるのです。こう言っただけなんですが、これほど臓器を損壊したにも関わらず、今も生きているのが不思議なほどです。もはや、我々の医療技術では手の施しようがありません。こうして延命するのが関の山だと……。申し訳ありません」

「そうですか……」

アドルフに聞かされたとおりだった。父は即死してもおかしくない傷を負い、体に致命的な損傷を受けた。それは『治癒』という魔法の限界を超えているらしい。

父が怪我を負ったのは、地方の反乱を鎮圧する中での出来事だったと聞いている。

反乱勢を打ち倒し、その後処理をしているとき……。父に一人の子供が近寄ってきたらしい。それは反乱を起こした貴族の子で、父は彼を保護しようとしたらしいのだけど……。

その矢先に、父はその子供に身を貫かれたのだという。使われたのは軍用魔法の『ブレイド』で、威力は低かったものの、人間の体を再起不能にするのは十分すぎるものだったのだ。

その直後に、ゲルマニア有数の医療施設を持った、このプレスブルク総合病院へ運び込まれたそうだが……。結果は院長の言うとおりだ。

もう、父は助からない。

その現実をまざまざと突きつけられるのと同じ時……。窓の外から、

大粒の雨が一斉に降り注ぐ音がした。

——眠ったままの父を病室へ残し、僕は病院の中庭へと出た。周囲に人気はない。雨水が滴る屋根の下に置かれたベンチに腰かける。

僕の考えはなにもかもが甘かった。

あのプロイセン王のことを甘く見ていたし、父が今まで行ってきた任務についても侮っていたのかもしれない。

処刑なんてするはずがない。あくまでも司令官の父に危害が及ぶはずがない。そのどれもが、手前勝手な偏見や思い込みによって形作られたもののだと理解していなかった。

僕は、父が自ら前線に出ていたことなど一つも知らなかった。知ろうともしていなかった。命をかけて仕事をしていたなどと、まるで考えもしなかったのだ。

なにが、父のように立派で強いメイジだ。未だにドット程度の實力で、体だって鍛えることもしていないじゃないか。思うだけでなにができるんだ。

……結局、僕はただ流されるままに生きてきたただけだ。こんなことになるまで、それを意識したことさえなかった。

そんな思考に脳内が支配され、一人頭を抱えた、そのときだった。どこか聞き覚えがあるような……、とても高圧的な声が、すぐ近くで発されたのである。

「ちょっと、あなた。こんなところでなにをしているんですの？」

「きみは……」

長いプラチナブロンドの髪。はっとするような美しい造形の顔立

ち。つん、とすました立ち居振る舞い……。

突如として現れたのは、アルブレヒト三世の娘……、マリア・テレジア皇女だった。

「お久しぶりね。できれば、会いたくはなかったけど」

「……」

「ちょっと。あなた、こっちを向きなさい」

「……」

「ちよっとって言っているでしょう！？ わたしは無視されるが一番嫌いなもの！」

「……なんだよ。今はきみに構っている場合じゃないんだ。どこかへ……」

なんで彼女がこんなところにいるのだとか、そんなことはどうでもよかった。それを考えることすらしたくなかったのだ。

どこかへ行け、という意思を示すために手を払うような仕草を行う。そんな僕の様子を見てマリアは、心底こちらを軽蔑しきったような顔になった。

「ふん。大事なお父上のそばにもいないで、こんな辺鄙な場所で自分で自分を責めていて、それでなにか解決するんですの？ あなた、自分のお父上に不幸があつて、それを悲しむ可哀想な自分に酔っているだけでなくて？」

「……なんだと？」

聞き捨てならない言葉だった。

なにを考える余裕などなく、僕は立ち上がってマリアに掴みかかる。だけど、胸倉を捕まれようと、彼女は眉一つ動かさなかった。どこまでも冷たい眼差しで、どこまでも呆れかえったと言わんばかりの表情を見せるだけなのだ。

「叩きたいのならそうしなさい。それであなたのお父さまが助かるのなら。さ、どうぞ好きになさって？」

「お前……、つく……」

わかっている。わかっているんだ。この子に八つ当たりしたところでどうにもならないって……。自分が惨めになるだけだって、わかっているんだよ。

睨みつけて威嚇しようとも、彼女は一切動じなかった。どこまでも青い瞳で、ただじっとこちらを見つめるだけ。そこにはなんの感情も窺うことができなかったのである。

そのうちに突発的な怒りは消え去り、結局なにもせずに手を離す。そして、またベンチに腰を下ろした。

「……ふん。情けない方ですわね」

「うるさい。用がないならどっかに行けよ」

もうなにも話したくない。ぶっきらぼうな口調で彼女を追い払おうとするのに、それでも彼女が去ることはなかった。

「そうはいきませんわ。本来なら養父となるべき人物が危篤状態だというのに、それを知らん振りしてしまっているなんて」

「まだそんなことを言っているのか。僕は皇帝の椅子なんかいらない。きみが女帝でもなんでも勝手になれよ。婿の成り手なら腐るほどいるだろ」

「あら。サリカ法がある限り、わたしがゲルマニアの皇帝位を得るのは不可能ですけど？ そんな基本的なことさえ失念してしまっているのかしら」

「……っ。だったら、婿を皇帝にすればいいんだ」

なんだ。なんなんだ、こいつは。久しぶりに会ったと思ったら。こんな状況だっていうのに、どうして人の神経を逆撫でするようなことばかり言うんだ。

「……それは駄目よ。お父さまは、皇帝家の血を引かない人間を後継者にするつもりなんて微塵もない。もうあなたは、実質お父さまに後継者指名されたも同然。断ることなんて不可能なの」

「だから、なんなんだよ。この状況でそれを言い出して、どうにかなるのかよ」

「はあ。これだけ言ってもわからないなんて」

本当に疲れたようにため息をつきながら、マリアは額に手を当てた。そして、言葉を続ける。

「いい？　これから先、あなたはもっと辛い思いをするかもしれないの。確かに自分の家族がこういう事態に陥ってしまえば、悲しくなる。気を乱すことだってあるでしょう。でも、そればかりに気を取られていつまでもくよくよしていたら、あなたは……、あ！　ちよっと、待ちなさい！」

駄目だ。これ以上彼女と話をしていたら、本当にどうにかなってしまいそうだ。無言で立ち上がり、僕は中庭から走り去った。

その後、再び階段を上って最上階の病室へと戻る。父はまだ寝ている……そう思って佇んでいると、不意に声が聞こえた。

「……息子よ」

ひどく小さな、弱々しい声だった。それでも、僕たち以外に誰も

いないこの病室の中では、十分に聞き取れた。すぐにベッドのそばへ駆け寄る。

「父上。起きていらしたのですか」

「うむ。窓から、お前と皇女殿下のにぎやかな声が聞こえてきたからな……」

「す、すみません……」

「いや。むしろ……、お前の意外な一面を知ることができた。皇女殿下には感謝しないといけないな。ほら、そこを見てみなさい。その花瓶の花は、彼女が持ってきてくれたのだよ」

「……」

父が指し示す方へ視線を向ける。なるほど、大きな花瓶に、大小さまざまな色とりどりの花が活けられていた。

……そういえば、僕はろくに怒ったことがない。いつもなんでもしやうがないって流してきた記憶がある。今までの僕は、怒りという感情が抜け落ちていたのかもしれない。

「愚かな父を持って、お前も苦労してきたことだろう。母は早世し、私自身はお前の教育に注意を払うこともしてこなかった。ただ、外敵から守ることばかりを考えていたのだ。それをしていればいいと、自己満足に浸っていたにすぎぬ」

「……そんな。そんなことは」

「エリザベートも、彼女の家を、両親を焼き払ったのは私だ。私の部隊が彼女のすべてを奪い……それでいて、あの子だけは連れ帰るなど……、身勝手もいいところだ。今回とて同じようにしようとして……、この状態だ。因果応報だろう」

「でも、それは任務で……」

「そうだ。私は、任務だからと、一切の躊躇を捨てて作戦を遂行してきた。人を人と思わず、己の唯一の子を蔑ろにしてきた。そして、

その報いを受けたのだ。神はやはり、きちんと我々の行いをご覧になられているのだな……」

途中から、父は僕の方を見てはいなかった。目を閉じ、どこかうわ言のように呟くだけ。

なんとなく、窓の外をしてみる。雨はより激しさを増し、風の影響なのだろう、窓ガラスを水滴が叩き始めた。まるで嵐の日のように思える。

と、そのときだった。不意に病室のドアがノックされ、誰かが入室してきたのだ。

「……あら。まだいらしたの」

やって来たのは、マリアだった。ずっと部屋を横切り、僕を無視してベッド脇の椅子に腰を下ろす。

気まずい空気が流れた。なにを話すこともできず、かといってまた父を置いて出て行く気にもなれない。どうしたものだろう。そう、悩んでいると……。

唐突に、自身の長い髪を指で弄んでいたマリアがこちらを向いた。そして、声をかけてくる。

「あなたのお父上は……。ウインドボナで勤務をしているとき、時間を作ってはよくわたしと遊んでくださったの。ここへ足を運んだのは、決してあなたの父親だからという理由だけではないのよ」

「……」

そんな話があったのか。確かに、父と皇帝は昔なじみだ。そのくらいのことであってもおかしくはない。僕は蚊帳の外にいたけどね。

「優しいお方だわ。実直で、軍人としてもとても優秀で……だから、

父から無茶な任務を押し付けられることも多かった。あまりキールへ帰れなかったのは、決してこの人のせいではないの」

「そんなこと、言われなくなっただってわかってる」

「ええ、そうでしょうね。でもお父上は、それをとてにも気に病んでる」

「……」

窓に映りこむマリアは、とても悲しそうな表情をしていた。

こちらに背中を見せているからだろうか。先ほどの勝気なさまは、もうどこかへ消えうせてしまっていた。

……ああ、そうか。

マリアも、父とは昔からの知り合いなんだ。よく遊んでもらったって言ってたし……。そりゃ、悲しくないわけない。現に、今は泣きそうな顔をしているようにも見える。

彼女が必死で泣かないように耐えているのに、男の僕がうろたえていたらいけない。さっきの言いようも、僕にもっとしっかりしろと言いたかったのかもしれない。

そして、そう思ったときだった。

「カール」

「父上？」

父が再び声をかけてきた。不思議なことに、今度はしっかりとした声音で、顔色も先ほどに比べると随分とよくなっていた。僕は慌てて駆け寄る。

マリアは退席するかどうか悩んだのだろう。不安げな表情となるが、父は彼女をここに残らせるつもりのようにだった。

「お前がこの先、どのような道をたどるのか、私はそれに口を出すつもりはない。だが、一つだけ成してほしいことがある」

「……それは？」

「シュレースヴィヒを、先祖代々のあの土地を、デーン人から取り戻してほしい。わたしにはそれができなかった。お前の祖父や私が生まれ育った土地を、もう一度ゴットルプ家の手に取り戻したい。それだけが望みだ」

シュレースヴィヒ公国は、祖父の代に事実上失った土地だ。

僕はそれを取り戻すつもりではあったけど……。その方法については、まったくダメと言ってもよかった。ホルシュタイン一国でデーン王国に対抗するのは不可能だからだ。

……。けど。

今はその方法が示されている。強大なゲルマニア軍を使えば、恐らくは勝利することもできる。だけど、そのために皇帝になるつもりはない。

ゲルマニアも政治機構はそう他国と変わらない。未だに前時代的な仕組みを引きずり、それが多くの損失を招いている。

カッテ少尉のように、司法の判断が覆されて理不尽な仕打ちを受ける人も多くいる。いつまでもそれを続けてはいけない。抜本的に変えないといけないんだ。

僕にその能力があるとは思えない。だけど、他の……、ヴォルテール先生のような人たちがもっと集まれば……。それはできるはずだ。

覚悟を決めて、僕は頷く。

「……わかりました。父上。必ずや、生涯をかけてでもシュレースヴィヒを取り戻して見せると、約束します」

そんな僕の言葉を受けた父は、満足そうに頷いた。しかし、すぐにこんなことを告げる。

「頼んだぞ。だが、そのためにすべてを犠牲にする必要はない。人を、縁を大切にしなさい。……あの子たちを、幸せにするのだ。……アンナの……お前の母のように……」

そして言葉は尻切れとなり、やがて黙ってしまった。疲れて眠ってしまったのだろうか。

……とりあえず、マリアに謝っておこうか。そう思い、後ろを振り向いたとき。僕の前ではあれだけ表情を頑なに保っていた少女が、急に嗚咽を漏らし始めてしまったのである。

その様子を見て、僕は異変に気がついた。何かがおかしい。致命的ななにかを見逃しているのだ。

父を見る。その刹那、額から一条の汗が滴り落ちた。

どうか間違いであってくれと願いつつ、急いで父の毛布をまくりあげ、その手首に自分の指を押し付ける。

……そして。事実を知った僕は、半ば茫然自失となりながら呟いた。

「ない？ 脈が……？ ちょっと待てよ。これじゃ、まるで……」

猛烈な勢いで、頭の中が真っ白になっていくことを理解しつつも……。それに対処する術を、僕は持っていなかった。

第二十一話

キール市街地の郊外にある、少しばかり小高い丘。祖父母や、僕の母が埋葬されている一族の墓地に、父は埋葬された。

ゲルマニアだけでなく、他国からも大勢の貴族たちが参加した父の葬儀は、最後までつつがなく進行させることができた。

もつとも、それは父の叔父がほとんどのことをしてくれたおかげであって、僕は名ばかりの喪主でしかなかったけど……。それでも、自分にできることはしたつもりだった。

ホルシュタイン公は、僕が引き継いだ。過去にもっと幼い年で爵位を継承した例は数多くあるけど、現時点でのハルケギニアでは、僕はもつとも若い公爵なのだそうだ。

ただ、継承に際しての儀式などは行わなかった。今の僕は名ばかりの存在。大叔父に公国の統治を任せている段階では、まだ胸を張るということはできない。

それから三日ほどが過ぎたころ。すっかり人気のなくなった丘の上で、僕は人知れず両親の墓を訪れていた。

海……キール峡湾から吹き抜けてくる風が、刈り揃えられた青草の上を抜けていく。それは墓石が潮風にさらされることも意味したが、そこは厳重な『固定化』で劣化を防いでいるのだった。

「……一人になっちゃったな」

誰ともなしに、呟く。

呼び起こされるのは――僕がカール・ペーター・ウルリヒとして生まれ変わる以前の記憶。断片的な記憶が脳裏を過ぎ去って行く。もつとも、それも年月が経つごとにどんどん風化してしまっていて、

今ではあまり細かいことは思い出せなくなった。それは『物語』についての記憶も同じだ。

……そういえば、あのときも両親とは早々に死別したんだ。父方の祖父母がいたから、本当に一人になることはなかったけど……。結局、人生の最後はひどくろくでもなく、あつけないものだった。まさか、そうして生まれ変わってまで同じようになるなんて。なにかの呪いでもかけられているのか。この人生も、そう遠くなく終わりを迎えてしまうのだろうか。

なんとなく、そんな気がしなくてもない。ただでさえ、皇帝の座を狙う連中に見れば、僕という存在は目障りで仕方ないのだ。ガリアに亡命中だという、元皇太子の動向もわからない。さらには、恐らくはジョゼフ王が命じたであろう、黒い森の要塞の建設……。なんだか、段々と死の足音が近づいているような気がしてならない。

……はあ。

かなりナーバスになっているな。これから公爵として、第一人者として活動しなくちゃならないのに。

僕は、ある程度の期間が過ぎたら、ウィンドボナへ向かおうと思っている。葬儀に出席したアルブレヒト三世から、本格的に皇太子任命の誘いが来たからである。

今までは皇帝の座になんて興味はなかった。だけど……。何かを変えるためには、やはり権力がなくてはならないのだと、僕は思い至った。それは俗に言う“上からの改革”を目指すことに繋がる。

自分の能力でそれが務まるかはわからない。だけど、お飾りのまま終わってしまうことだけは避ける。やるべきことを、全力で最後までやらないと。

そう、密かに決意したときだった。

「カール、ここにいたのね。捜したわよ」

後ろから声をかけてきたのは、すっかり馴染み深くなった赤い髪の少女――キュルケだった。彼女は、葬儀の後もキールに残ってくれているのだ。

そして、そのすぐ横にはエリザベートの姿もあった。すっかり長くなった亜麻色の髪が潮風に流されてばらけ、彼女はそれを手で必死に押さえ込んでいる。

一人、か。少なくとも、今の僕には彼女たちがいるんだよな。家臣たちだって、内心どう思っているのかは知らないのだけど、僕についてきてくれるようであるし……。

「……もうすぐ、お昼ご飯です。しっかり食べてください。このところ、あまりご飯を食べていないですよ。栄養を摂らないと、いざという倒れてしまいます」

「あ……、うん。わかった」

いつも静かにご飯を食べるエリザベート。他人のことを見ていないようで、実はしっかりと見ているようだ。このところ、ろくに食事へ手を付けていないのもお見通しということだろう。

「じゃあ、屋敷へ戻りましょうか」

どういふつもりなのかはわからないが、キュルケは僕の腕を掴むと、ぐいぐいと引っ張って行く。少し腕が痛い。

そして、彼女に連れられていく中……、最後に一度だけお墓の方を振り返った。

シュレースヴィヒは必ず取り戻してみせる。改めてそう誓い、僕はその場を後にするのであった。

屋敷の食堂には、僕を含めて四人の人物が集まっていた。本来この場所を使うのは、僕とエリザベートだけのはずなのであるが……。

今はキュルケはともかくとして、なぜだかマリア・テレジアまでが一同に介するという状況だった。そして思う。やっぱり、どうしても苦手なんだ、彼女は。

父が亡くなる直前は、僕自身いろいろ参っていたから強気な態度が取れたけど……。ある程度気が落ち着いてしまった今となっては、かつてのように苦手意識ばかりが先行するだけ。

そんなことを考えつつ、黙って見入っていたからだだろうか。彼女は頬を染めて、突き放すような口調で言う。

「あまりじろじろ見ないでください」

とはいえ、あまり元気のある声ではなかった。彼女自身、僕の父の死で精神的にくるものがあつたらしい。最初は、本当に泣きじやくったもんなあ……。プライドの塊みたいな子なのに。

それだけ父を慕っていたということでもあるのだろう。

僕の場合は……。死んでも同じように涙してくれる人なんて、ろくにいないだろう。なんだか別の意味で悲しくなってきた。……いや、こんなようじゃだめだな。

そう考えたときだった。突然、傍から僕たちのやり取りを見ていたキュルケが、横檣を入れてきたのである。ちなみに、彼女の席はマリアの隣だった。

「あら、カールはわたしを見ていたのじゃなくて？ 痴女殿下は自意識過剰であらせられますわね」

「……っ、また痴女と……!!」

「事実を言ったまででお？ 凶星をつかれたからとお怒りになられるなんて、いけませんわあ」

「その話し方やめなさい……! 不愉快だわ!」

あれ。またあの二人、また喧嘩を始めたようだ。まったく、顔を合わせる度にこんな感じではなからうか。まさに犬猿の仲であると言えるだろう。

そんな光景を眺めつつ。先ほどから僕の隣で大人しく座っていたエリザベートは、くすくすと笑みをこぼしている。

……笑うようになったんだよな、この子も。

父が連れてきたときには、あれだけ暗い表情をしていたのに。今となつては僕にさえ笑いかけてくれる。なんだか嬉しいな。

そうして、にぎやかなまま。その日の夜は更けていくのだった。

——すべての支度を終え、もう後は寝るばかりとなった時間。今宵は双月の明かりがよく見える。とても澄んだ夜空だ。

キュルケ辺りが襲来してくる可能性も考えたけれど、今日のところはマリアとの争いで疲れ果てたのだろう。その気配はなかった。それは疲れるだろうな。半ば決闘騒ぎになる寸前だったから。もしミスタ・ヴルムが止めに入ってくれなかったら、なぜか僕が屋敷の尖塔から吊るされたりしたんだろうか。

高所にロープで吊るされ、タバサもシルフィードもない状態でロープが焼き切れたら……、縁起でもないな。そういうことを考えるのはよそう。

さて。もう今日は特にすることもなし、さっさと毛布を被って寝てしま……。

「カールさん？」

毛布を勢いよく振り上げたところで、部屋の外からノックの音と共にエリザベートの声が聞こえてきた。……どうしたんだろう。彼女、この時間はいつも就寝しているはずなのに。

「入っていいよ。鍵は……、開いたから」

杖を取り出して『アンロック』を詠唱し、返答する。

しかし、この鍵を開け閉めするコモン・マジックというのも、実に面白い代物だ。いったいどういう経緯で生まれたのだろう。

寝る体制には入っていたが、一応ベッドの上から足を下ろしておく。さすがに寢床に入ったまま話をするのは、相手に失礼だと思うからだ。

かちやりという音と共に、エリザベートが部屋へと入ってくる。

……なぜか、彼女は自分の真っ白な枕を持っていた。

とてとて、という擬音でも聞こえそうな足取りで、彼女はこちらへと向かってくる。そして、ベッドの上に腰かけた。

「どうしたの？」

「ええと……」

僕の問いかけに、彼女は言いにくそうに体をもじもじとさせるだけだった。下を向いて、足をすり合わせている。

そのうち、決心がついたのだろうか。そんな感情を思わせるような表情で、こちらを上目遣いに見つめながら、彼女は枕で顔の下半分を隠した。そして、もごもごと声を出す。

「その……、今日はキュルケさんもないみたいなので、わたしが

一緒に寝ても……、いいですか？」

……なんというか。彼女がこんなことを言い出すなどとはまったく想像していなかった。珍しいどころの話ではない。

「それはまた、どうして？」

「あなたが、元気なようだったから。あと、少しお話もしたくて」
「なるほど……」

極力普通に振舞おうとはしていたんだけど……。あんまり、心配させるのも悪いな。皆内心辛いだろうし、僕だけ特別扱いされるのも気が引けるから。

……でも、せっかく、こうしてやって来てくれたんだ。その気持ちを蔑ろにはしたくない。

それにしても、エリザベート。今はランプの灯りしかないのに、顔中が真っ赤に染まってしまっているのがよくわかった。恥ずかしいのかな。

僕が使っているものよりもずっと大きい枕を抱きかかえて、うぐと唸っている。……いや、もしかして、本当はここで寝るのは嫌なのだろうか。僕と一緒にするのは抵抗があるのかもしれない。

「あー……。なんだったら、僕は床で寝るけど」

「それじゃ、本末転倒ですよ」

「うん、そうなんだけどね」

なんだか冷たい眼差しを向けられてしまった。しかたない、さつさと横になってしまおうと思い、僕は自分の枕をベッドの奥にずらした。

「……」

横になってしばらくしたころ。意を決したのだろうか、エリザベートがベッドの上へとやってくる。彼女は枕を抱きかかえたまま、僕がかけていた毛布の半分を自分にかける。

やっぱり、会話はない。どうしたもののかと隣を見ると、相変わらず枕で彼女の顔が埋まってしまっている。

話がしたい、って言っていたけど。自分からは言い出しにくいのだろうか。だったら、こちらから話かけてみるかな。このままじゃいつの間にか眠ってしまいそうだし。

そして、どうせだからと……、ずっと疑問に思っていたことを問にかけてみる。

「あんまり、訊かれたくないことだろうけど……。きみは東部諸侯の生まれなんだよね」

尋ねてしまってから、あまりやらない方がよかったのではないかと思ったものの。エリザベートは特に不快感も緊張感も示さず、ただ淡々と答えてくれる。

「はい。……わたしが生まれたのは、ヴォロンツォヴァ家。ゲルマニアでも新興の……。あまり、良い思い出はありません」

「その家は……。確か、辺境伯だったかな」

「そうです。でも、爵位なんて関係ありません。いつかも話しましたが、あの土地はまだ開墾を始めたばかりで、荒れていたせいで食べるものも満足に得られませんでした。農奴……農民たちは、その日の暮らしにも困っていたのに。それを省みないどころか……」

そこまで口にして、エリザベートは再び黙す。しかし、すぐにまた話を続けた。

「その挙句に、農民の扱いや収税で中央政府と揉めて。最後には屋敷を焼き払われて……。ばかみたい」

彼女の住居を焼いたのは、父によれば父の部隊だというが……。それはつまり……。

僕が言わんとすることに気がついたのだろうか。それとも、また別の理由なのだろうか。彼女は枕に落としていた視線をこちらに向ける。

「確かに、わたしはなにもかも失いました。でも……、あの息の詰まるような思いをして、親とも思えない人たちの中にいたくなかったのも事実なんです。こんなことを言うのと軽蔑されるかもしれない……。だけど、今の生活の方がわたしにとってはずっと幸せなんです」

あまり……、というか本当に家庭環境が悪かったのだろうか。でなければ、ここまで言うとも思えないし……。

どうにも複雑な気持ちとなってしまう。この年頃の子がそんなことを言い出すなんて、よほどのことだ。どんな状態だったのかなんて、僕では想像もつかない。

親を親と思えない。それは一体、どれだけの苦痛を伴うのだろうか。

残念ながら僕には、彼女の気持ちを完全に理解することはできないだろう。環境があまりにも違いすぎる。理解しようと努力することとはできるけど、同じ立場になることは絶対にできないのだ。

だから、安易に慰めの言葉をかけるようなこともしなかったし、できもしなかった。ただ黙って、彼女の頭を撫でる。それが精一杯だ。

「……」

終始、お互いに終始無言だった。髪を撫でられている間、エリザベートはじっとこちらを見つめてくるだけだし、僕はなんだか気恥ずかしくなってほとんど目を逸らせていた。

ふと、思う。この子には、もうこの場所以外に居場所がないのだと。どうも家は取り潰されたようで、恐らくは貴族としての籍も喪失しているはず。一人では、まともに生活できるはずもない。

今の彼女には、もうなにもない。

父が僕にそうしてくれたように、今度は僕がこの子を守らなくてはならない。少なくとも、自分で屋敷を出て行けるようになるまでの間は。

しかし、僕がウィンドボナへ向かえば、当分の間はこの屋敷へ戻ることはできない。当然、家臣や使用人も連れて行くことになるわけ……。この屋敷は、ほとんど空となってしまふ。

だとすれば。

「エリザベート。僕がウィンドボナに行ってから、きみはこの屋敷に残るかい？」

そう問いかけてみる。すると、彼女はふるふると首を振った。

「一緒に行きたいです。だって、わたしは……。あ……。ううん、なんでもありません」

「そっか」

最後に何か言いかけたようだけど、彼女はその先については口を噤んでしまふ。もつとも、そのことを問い質す意味もないので、そこは流しておく。

そうして、再びの沈黙の後。僕はこれからを案じながら呟いた。

「これから、色々なことがありそうだ。今までだって、色々なことがあったけど……。これからはもっと多くの出来事が待ち受けているんだろうな」

皇太子。次の皇帝となることが、ほぼ決まったも同然の存在。そうなれば……このキールでの、のんびりとした生活を送ることはもうできないだろう。

だけど、それもやむを得ないことだ。父との約束を果たすために、変えなければならぬことを変えるために、僕は皇帝にならなくてはいけない。

苦手……というより、まったく経験のない社交も、一人前にこなさなければいけなくなるだろう。第一人者として、それなりの振る舞いをする必要となるだろう。

不安は山ほどある。でも、今からそれを気にしていたら、目的はなに一つ果たせないんだ。

ふと、毛布から出したままの手が小さな二つの手で包まれる。暖かいそれは、エリザベートのものだ。

「……大丈夫ですよ。根拠はありませんけど……。きっと、大丈夫です。そう思います」

「そうかな。……ま、やれるだけはやってみようと思うよ」

「ふふっ、その意気です」

頬をぽりぽりとかきながら言うと、彼女は小さく微笑んだ。

……さて。そろそろ寝ようかな。

明日は、いよいよヴォルテル先生が放浪先から戻って来る。随分と長い間行方知れずだったけど、それはどうも“未開の地”で遭難していたかららしい。

ゲルマニアの東部、ガリツィアの地方都市からそういう趣旨の手紙を送ってきたのだ。

あの人もなんだか滅茶苦茶な人だ。一体どのようにして父と知り合ったのだろうか。まったく謎だった。

「それじゃ、おやすみ」

「はい。おやすみなさい……」

ひとまず、僕は仰向けとなる。見慣れた天井を視界に納めつつ、やがてゆっくりとまぶたを下ろす。そうして、眠りにつこうとした、そのときだった。

ばんという高い音と共に、キュルケとマリアが部屋へと侵入してきたのである。手には杖を持っていて、どうも『アンロック』をかけたようであった。

「カール！ 大変だわ！ 痴女殿下がまた喧嘩を吹っかけてきたの！」

「だ、だから！ 痴女って言うの、いい加減やめなさい！ ……この人、ずっとこんな調子なんですの。あなたからも、注——」

次の瞬間。あれだけきやあきやあ騒いでいた彼女たちは、一瞬にして沈黙、硬直した。視線は僕の方を……いや、正確にはエリザベートを捉えている。

僕たちがいるのはベッドの上だ。僕としては、やましい気持ちなんて欠片も持っていないのだが、彼女たちはそう思わなかったらしい。わなわなと体が震えだした。

「……ちょっと？ どういうことかしら。まさか、そういう趣味だっけ言うんじゃないでしょうね？」

「不潔だわ……」

キュルケには表情がなかった。マリアは両手で顔の下部を覆い、不快感を露にしていた。エリザベートはなぜか僕に引っ付いた。

……なん……だと？

「あなた……、そう。そうなのね。そこまでしちゃってたの……」

「そこまでってなんだよ」

「不潔……。汚物よ」

「そりゃないよ」

なんだこれ。どうしてこんな、あらぬ誤解を受けなくちゃならないんだ。ただ一緒にいただけだろ。疑う方がおかしい。そうに決まってる。

……ああ！ 逃げようにも、エリザベートが思いのほかがつちりとくっ付いているせいで、身動きが取れない！

「……まあ、あれだわ。大抵の性癖は受け入れるつもりではあったけど……。さすがにそれは容認できないわね。色々と問題があるものの」

「かわいそう。あんまりだわ」

じりじりと、キュルケが歩み寄ってくる。その端整な顔に浮かぶのは笑顔。輝くような笑顔だった。

だが、髪はそうではなかった。体から放出される魔力が原因なのか、僕の目の錯覚なのかはわからない。だが、宙を束になって漂うそれはまるで、ギリシャ神話の怪物ゴルゴンを思わせる異様な代物だった。

不意に、エリザベートの体が僕から離れる。マリアが『レビテーション』を使って引き離れたようだ。よかった、これで彼女に危害は及ばない。

犠牲になるのは、僕だけだ。

「あなたのためなのよ」

——キュルケの、その言葉と共に。僕の視界は、胸に秘めた決意は。灼熱の太陽のごとき閃光によって、丸ごと覆いつくされるのであった。

第二十一話（後書き）

第五章は終わり。次話より第六章となります。

第二十二話

皇太子。第一人者を意味するその言葉は、主に皇位継承者に対して使用される。ただし日本では、王位継承者を皇太子を呼ぶこともあるけれど。

僕がその皇太子となったのは、十三歳の誕生日を一月ほど過ぎたティールの月のことだった。

十二歳でのホルシュタイン公の継承。十三歳での皇太子任命。なかなか展開が速い……、と僕は思う。もっとも、それは今までに比べればだけどね。

皇太子となった僕は、生地であったキールを離れ、ウインドボナ市内はホーフブルク宮殿の敷地内にある建物の一つに、その居室を移すこととなった。

キールの屋敷からの引越しは、翌月のフェオの月は半ばに行われた。

いろいろと持っていかなければならず、荷物はかなりの量になってしまつて、それをゲルマニアの北部からウインドボナまで運ぶのには、結局“船”を使わなければならなかった。

船とは言つても、まず思い浮かべる海に浮かぶものではない。風石と呼ばれる魔法石で空を飛ぶ船だ。

なにせ、いちいち地上を移動していたら、時間も運賃もばかにならない。特に時間のロスがあまりにも痛い。この世界には自動車なんて便利なものはないからね。馬車はいろいろと面倒だ。

一見すると経費が高いように見える船の方が、実は時間も経費も総合的に見るとあまりかからなかったのだ。

まあ……。実際に運搬費用を出したのはうち——ゴットルプ家ではなく、皇帝家の方だったんだけど。

「なかなかすごい船だなあ……。全長は二百メートルくらいあるんだろうか……」

「そんなにはありませんわ。せいぜい、百メートルほどです。この『シュレジエン』は」

そう僕が呟くと、少し離れた位置に立つマリア・テレジアが答えてくれた。

そしてどういう訳かはわからないけど、彼女は今回の引越しに伴っている。

荷物を船に運び込むときに、キールの屋敷の中をまじまじを観察していたから、それが目的だったのかもしれないけど。

僕たちは甲板の上に立っている。高所特有の強い風で、彼女のブラチナブロードの髪がさらさらと流されていた。迷惑そうに眉を顰めながら、彼女は両手で長い髪を押さえ込んだ。

「……ここにいると髪が乱れてしょうがありませんわ。中へ入りましょう」

「そうだね」

そんなやり取りと共に、僕たちは『シュレジエン』の甲板を歩く。そして船室への扉を開け、用意された客室へと向かった。

「それにしても、ずいぶん新しい船だね。建造されたばかりなのかい？」

「ええ、そうですわ。今年に入ってから両用艦隊に配備されたばかりの新造艦です」

「……え？」

「どうしたのですか、そんな顔をして」

……いや、ね。まさか引越しに軍の船を動かしてくるとは思って
いなかったから。そういえば、船の側面に大量の黒光りする大砲が
あったような気もするな。うろ覚えだけど。

なんでそこまでするのだろう。費用対効果が極端に悪い気がする
んだけど……。

と、そんなことを考えていると。マリアはあきれ気味にふうと息
をついた。そして頬に手を当てながら、半眼になって僕へ告げる。

「あなたは曲りなりにも、この国の皇太子ではありませんか。これ
からは本格的に命を狙われる危険性も増大します。ですから、父は
このような軍艦を持ち出してでも、あなたを無事に帝都へ迎え入れ
たいのでしよう」

「……そうか」

戦艦、か。そこまでの価値が僕には……、あるんだろう。

僕がいなくなれば元皇太子が復権するチャンスが出てくるし、そ
うでなくても女子のマリアを出し抜ける環境はいくらでもある。そ
うならないための対策だろう。

また、ゲルマニアの陸軍は各諸侯の寄り合い所帯と言っているが、
海・空軍はゲルマニア皇帝直轄の軍隊だ。こういうときに信頼でき
る部隊を使うという皇帝の方針なのかな。

船の内部とはいえ、僕に用意された客室は、本来ならば上級将校
や上流貴族が使うための、広々とした快適な空間だった。それこそ、
畳にすると二十畳分くらいはあるだろう。

部屋の中央にはテーブルが配置されている。そのそばでは、キー
ルの屋敷から連れてきたメイド……シャルロッテが控え、椅子には
エリザベートが腰掛けている。

二人とも空の旅には慣れていないらしく、どうも先ほどから顔色
が悪い。特にシャルロッテの方は足元がおぼつかない状態にさえな

ってしまったっていた。

このまま、あまり無理をさせるのも良くはない。そう考え、僕は彼女に向かって声をかけた。

「シャルロッテ、きみは体調が悪そうだから、部屋に戻って休んでいるといいよ」

「え、ですが……」

こちらの呼びかけに、メイドの少女は逡巡するようなそぶりを見せた。その視線の先には、やはりあまり体調がよろしくないエリザベートがいる。

「大丈夫だよ。エリザベートは僕の方で見ているから。ウィンドボナについてからは少し忙しくなるだろうから、今のうちにゆっくり体を休めておいで」

「……は、はいっ。わかりました！　ありがとうございます！」

なんだかこちらがびっくりしてしまうほどの大きな声でそう叫んだあと、シャルロッテは慌てた様子で部屋を飛び出していった。

どうしたものなのか。そう思い、背後を振り返ると。どうにも不機嫌というか、なにか言いたげな様子のマリアがぶすつとした顔で突っ立っている。

「どうしたんだい、そんな顔をして」

「いえ、別に。ただ、あまり女性を囲いすぎると後で痛い目に遭う……とだけ言っておきましょうか」

「彼女はそんなじゃないよ」

囲うって、なあ。生憎僕にそんな度胸はないし、別に彼女とそこまで親しくした覚えもない。あくまでも今の彼女はエリザベートの

世話係だ。

それに、今はまだそれほど問題にはなっていないけど、皇帝はこのマリアを僕と結婚させるつもりらしい。

ところがもう既に、僕には親同士で婚約を決めたキュルケがいるわけで……。図らず、というかまったく自分の意思とは無関係なところで、いわば二股をかけるような状態になってしまっている。

それだけでも精神的には結構辛い。普段は意識しないようにしているけど、思い出すとやっぱり辛い。

そんな状況でまた女の子と……。なんて考えられるわけもなく、というより、そもそもそんな甲斐性なんて自分にはありません。はい。

そんなふうに思考を巡らせていると、マリアが思い切りこちらを睨むような視線を浴びせてくる。

なので、僕はその見透かすような青い大きな瞳から逃れるべく、わざとらしくつかつかと歩きながらエリザベートの元へ向かった。

「調子が悪そうだけど、大丈夫かい？」

「はい……。ちょっと眩暈がしますが、大丈夫です……」

大丈夫とは言うけど、口調も見た感じも、あまりそうであるようには見えなかった。ぐったりとしながら、テーブルに上半身を投げ出しているところからして……。

やっぱり、休ませた方がいいのかな。そう思い、僕は彼女に部屋に備えられたベッドへの移動を促す。

「いや、やっぱり休んだ方がいいよ。立てるかい？ 駄目なら支えてあげるから」

「……」

ん？ どうしたのだろう、急に黙ってしまつて。

「……あ、その……、やっぱり、慣れないせいか、とても疲れてしまいました。歩けそうにないです」

「仕方ないね。ほら……」

そう言つて僕は手を差し出すが、彼女はなぜかそれを取らなかつた。ふるふると首を振り、なにかを決心するかのように俯く。そして両腕をこちらに向かつて差し出した。

「……だっこ、してください」

そう、エリザベートが口にした瞬間だった。

「先ほど忠告申し上げたばかりなのに」

僕の背後から、とてつもなく冷ややかな声が聞こえた。まるで氷のように冷たく、そして鋭く……。刺すような声、というのはこういうものを差すのだろうか。

「僕は、なにもしていない。あのとき、あれほど言っただろう」

「そうですか。なにもしていないわりには、ずいぶんと、とてもとても懷かれているご様子ですわね」

「だから、なんできみはいちいち、そういう方向に考えを持っていくんだよ」

もうやめだやめだ。相手をしていたらきりが無い。マリアの視線を無視して、エリザベートを抱え上げる。見た目は華奢だけど、そこはやはり人間だ。結構重い。

とそこで、なにを思ったのか、彼女はいきなり僕の背中に向かつ

て腕を伸ばした。そして体を寄せて、頭を埋めながらこちらに密着する。

……なんだろうなあ。最近やけに甘えてくるようになったとか、ちよつと接触が増えたというか。

そういえば、そうなたのはあの晩以来な気もする。眼下で目を細める少女を見やり、かすかに漂う髪の香料の香りを感じながら、僕はそんなことを考えた。

「……まったく、殿方というものはなんでそうなのでしょう。特にあの人は不潔極まりないですわ」

ベッドにエリザベートを運ぶ途中、そんな声が聞こえた気もするけど……。とりあえず僕はその声を聞き流すことにするのだった。

——ウィンドボナ郊外の軍港に到着後、僕たちは馬車に乗り換えて市街地を目指した。その前後は十数台の馬車を取り囲み、かなり厳重な警戒体制を敷いているのがわかる。

僕が本当の意味でこの国の要人になったのだと感じる光景だった。どう言葉に言い表していいのかわからないけど……、なんだか不思議な感覚だ。

この馬車には僕とマリアだけが乗り込んでいた。エリザベートやシャルロッテ、他の家臣たちはそれぞれ割り振られた馬車に搭乗している。

カーテンの隙間から垣間見る車窓の外側では、立派な軍用馬に騎乗したミスタ・ヴルムを筆頭とするお抱えの騎士たちが、僕たちの

乗る馬車を守るようにして併走していた。

去年、キュルケと一緒にこの町へやって来たときに通った大通りを進んでいく。どうも新しい皇太子がやって来ることは既に知られているらしく、沿道には大勢の人々が集まっていた。

……これがアンリエッタ王女のような美貌の持ち主なら拍手喝采なんだろうけどなあ。僕じゃ「誰だこいつ」みたいな扱いを受けるのは想像に難くない。

そんなふうには、窓にカーテンを引いたままの僕とは対照的に、マリアは窓を開けて民衆に向かって優雅に手を振っていた。

なにせ、とんでもないハイレベルの美貌の持ち主だ。彼女のいる方向からは、民衆からの拍手喝采の音が響いてくる。

一方で、僕のいる方向からは、あまりよろしくない気配の音が聞こえてきた。皇太子のくせにいつまでも顔を出さないでいるからだろう。

「どうしたのですか、一体。今回の主役はあなたなのですよ」

あまりにふがない僕を見かねたのだろう。マリアは窓を閉め、あきれ返ったような口調と表情で声をかけてくる。

「……いや、事前に民衆の前を馬車で進むっていうのは知っていたけど……。これじゃまるでパレードじゃないか」

「それはそうですわ。今回は、ウィンドボナの民衆にあなたの存在を知らしめることが最大の意義ですから。ほら、窓を開けて手を振りなさい。それだけでいいのですから」

「い、いや！　ちょっと待ってくださいよ」

大きくため息をつきながら、僕の――正確には窓の方へ身を乗り出してきたマリアの肩を掴み、慌てながら半ば強引に押し返す。

ところが、押し返した勢いで、こんどはこちらがマリアの方に身を乗り出す形となってしまった。やっぱり慌てながら僕は後ろへ飛びのき、そして彼女に言う。

「ま、待ってくれよ。心の準備というものが必要だろう。だいたい、僕は大量の人の前で手を振るなんて練習はしていない。自然な笑顔だって無理だ」

「そんなもの、わたしだって最初からできたわけではありませんわ。皇族とて人なのです。誰しも、父でさえ今のあなたと同じような心境の時期はあったでしょう。それでも人の上に立つ者として、決して甘えはしなかったのです」

「……」

なんというか、まさにぐうの音も出ない。それはそうだ。マリアだって、皇帝だって、今の僕のように、初めて人の前に出るときはとても緊張したのだろう。

それでもなんとかやって来たんだ。だったら、僕だってそれは倣わなきゃならないよな。

……少なくとも、次の皇帝になると決めた以上は。

皇太子ともなれば、もつと多く、今回のように大量の人々の前で姿を晒さなければならなくなるはず。なら、今このようにひきこもっていてはいけないんだ。

なに、これは予行演習だと思えばいい。どうせだからマリアにも一緒に出てもらおう。一人ぼつんというよりはいくらかマシだ。

そう考え、僕は自分の腰掛けていた座席の下をまさぐる。すると、予想通りというか希望通りというのか、下から上に出るための梯子が出てくる。

先ほど乗り込むときに確認したが、この馬車は厳密には二階建て

になっている。ロンドンの二階建てのバスを思い出してもらえると、それなりにわかりやすいかもしれない。

「な、なにをしているんですの？ まさか上へ出ようなんて思っていないでしょうね？」

マリアが慌てて止めに入ってくるが、僕はそれを意に介しなかった。さっさと梯子を馬車の床と天井に固定し、混乱気味の少女の手を引いた。

「きみの言う通り、甘えてちゃいけないんだよな。どうせ後でこんなことは何度もあるんだ。だったら、今からそれをやったって同じだと思ってね」

「あ、あなたという人は……。なにを言い出すかと思えば。もう少し秩序だって考えないのですか？ 行動が突飛すぎますわ」

先ほどから明らかに混乱しているマリアだったが、口ぶりはやっぱりいつもの憎まれ口そのものだ。

「それはそうかもしれないな。じゃ、僕だけ行ってくる」

「え？ ちょ、ちょっと、待ってください！」

なんだろう、急に。もうやると決めたら一気にやらないと駄目になりそうなんだけど……。

そんなことを考えつつ、視線を送っていると。少しばかり頬を上げさせたマリアは、半ば梯子に乗りかかった僕へ向かって告げてるのである。

「わ、わたしも一緒に行きますわ。あなたは皇太子なんですから、しっかりとリードしてくださいまし」

その言葉と共に彼女は手を伸ばしてくる。僕は大きく頷き、彼女の手をしっかりと握った。

「將軍、もうすぐここへ皇太子の車列がやって来るようですよ」
「ほう、もうそんな時間か」

帝都の防衛をつかさどる、ウィンドボナ防衛隊の本部。大通りに面した場所に建てられた、石造りの大きな建物のテラスに、二人ほどの軍人が佇んでいた。

一人は壮年を過ぎ、やや古い始めた白髪 of 男。もう一人はずいぶんと若く、恐らくは男の部下であろう将校の青年である。

「あ、来ました。……あれ？ おかしいな。事前の通告では、馬車の中から顔だけ出すはずでは……」

そんな青年の呟きが聞こえるのと同時、男の視界に多数の馬車の列が飛び込んでくる。前から三台目、一際大きな馬車の二階部分に二人ほどの姿があった。

一人は、ゲルマニア軍が正式採用したばかりの軍服に身を包んだ、ブロンド髪の少年。まだ年齢はそうとっていないのだろう、身長はさほど高くなく、真新しい軍服はどこか滑稽なようにさえ見えた。そしてその隣で、少年の腕に自らの腕を組んでいるのは、このゲルマニア帝国の皇女マリア・テレジアだった。

男はそっと杖を取り出し、『遠見』の魔法で皇女の様子を確認し

てみる。すると、今にも火が出そうなほどに顔中を火照らせた少女の顔を、ありありと観察することができた。

珍しい。“あの”皇女が、あのような状態で人前へ出るとは。まったく信じられない光景だ。男はそう考える。

「あれはテレジア殿下に……、新しい皇太子だな。なぜ屋根などに上っているのか。わかるかね、ダウンくん」

「……申し訳ありません、自分にはまったく事情を把握できません」「ふむ。それはそうだろうな」

民衆に向かって軍隊式の敬礼をしながら己の姿を晒す少年は、かのホルシュタイン公国の公子にして、皇帝家の相続権も得たカール・ペーター・ウルリヒ・フォン・シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン・ゴットルプだ。

現状の皇女の嫁ぎ先として、もっとも有力視されている人物でもある。

ふと、男は考える。かつて噂に聞いた、あのプリンツ・オイゲンが推したプロイセンのフリードリヒ王子とテレジア皇女の縁談は、もう立ち消えになったようだ。

と、そんなことを考えているうちに、車列が防衛隊本部前を通り過ぎる。近くで見る少年の顔はどうにも頼りなく、また皇女の美貌の前に大きく埋もれてしまっていた。

「新しい皇太子……、大丈夫なんでしょうか？」

「さあな」

「け、ケーフェンヒュラー將軍……」

どうにも訝しげな視線を送る部下に取り合わず、男はただひたす

ら少年を見つめた。果たしてあの人物が、自分の上に立つ者として
相應しいのかを見極めるがごとく。

第二十三話

皇太子という地位に就いた以上、僕にはまず絶対に成さねばならないことが一つあった。……それは、己の権力基盤の確保である。

母親が皇帝家の出とはいえ、僕自身はあくまでもホルシュタイン・ゴットルプ家の人間だ。

ベーメン系貴族やパンノニア系貴族が幅を利かせるこのウィンドボナにおいて、我が家の力はまったく言っていないほど皆無に等しい状況でしかなかった。

それは中央政界にそれほど関わって来なかった歴代当主の影響が大きいのだろう。

当たり前といえば当たり前だ。自家から皇帝を出すことなど、それまではまったく考えもしなかったのだろうから。

現皇帝家に反発を持っている諸侯は実際多い。とはいえ、長らく帝位を独占してきた家ではあるし、従う貴族の数もそれこそ膨大なものに上る。

そういった人々がすなりと僕に従うかといえば……、大いに不安があると言わざるを得ない。本音を言えば、恐らくは彼らを従わせることはできないだろう。

彼らが忠誠を誓うのはあくまでも現皇帝家であり、いきなり降って湧いた北の小国の家などに臣従する理由などないのである。

とても頭が痛いことだが、もうそれは仕方ないことだと割り切るしかない。

だから、もはやそこは、マリア・テレジアと今以上の友好関係を築くほかないだろう。彼女に臣下たちとのパイプ役になってもらう他なかった。

……しかし、そうすると彼女との結婚が本当の意味で現実味を帯

びてきてしまう。

一応、キュルケが先に婚約者になっているからなあ……。それを考えてしまうと、いまいち本腰を入れる気になれないというか。そんなことを言っている場合ではないのだけど。

僕が皇太子となってからは、毎日のようにゲルマニア内の諸侯へのお披露目に借り出されることばかりだった。そのせいか、ろくに宮廷内での地位も築けずにいる。

そして、そんな状態で迎えたニューイの月。

自分に丸々割り当てられたこじんまりとした宮殿。その内部にある執務室で、僕はソファアヘ腰かけて執事のアドルフの話を聞いていた。

もつとも、このときの僕の意識はあまりはつきりとはしていなかったけれど。

「直近に予定されているトリステインのマリアンヌ太后殿下の園遊会であります……。殿下？」

「……ん？ あ、ああ。すまない。話を続けて」

「はい。皇帝陛下は体調の悪化により、出席は見合わせるようになります。そこで、殿下が陛下の代理として出席されるようにと」

園遊会、か。そういえばもうそんな時期になるんだな。各国から要人が集まるわけで、当然ながらゲルマニアの皇族も出席することになるわけで。

……アルブレヒト三世の体調が悪化しているという事実は、皇帝本人から直接聞かされていた。

どうにも、つい先日に行っている最中に食したキノコに当てられてしまったようだった。彼は笑いながら、寢室のベッドの上で

そんな状況を僕たちに説明してくれたのだ。

同席していたマリアは呆れ果ててしまったらしい。ずっと、じっとした目で父親の奇行の愚痴をはいていたくらいだった。

ううん……。暗殺の恐怖に怯えている割に、そこらへんに生えているキノコを食べてしまうなんて。意外と抜けている……。と、僕が言うのは間違っているかな。

「出席するのは構わないけど……。そうなるとその場が、国際社会での僕の皇太子就任の初お披露目ということになるわけだね」

「そうですね。殿下は数千年ぶりの始祖の血を引く皇太子です。あのトリステインの堅物どもに、もはやゲルマニアを蛮族呼ばわりなどさせぬよう、立派にやり遂げてほしいものですな」

「……善処するよ」

この数ヶ月、国内の諸侯相手にはそれなりに場数を踏んできたつもりではある。アルビオンの大使らと会食をしたのも、一度や二度じゃない。

……もつとも、大使からの評判はまったく良くはないみたいだ。自分なりに頑張りはしたけど、それでも足りないのだろう。

「そうさ。僕はやれるだけのことはやるつもりだ」

「その意気ですぞ。若様」

「アドルフ……」

おっと。独り言を聞かれてしまったらしい。……。それにしても、彼に若様なんて呼ばれるのはいつ以来のことだろうな……。

——慌しく日々が過ぎていく。

僕は毎日のように各地の諸侯たちと会合を持ち、練兵場に足を運

んでは近衛部隊を視察する毎日を送っていた。

たまに暇が出来るとエリザベートと話をしたり、ヴォルテール先生の講義を受けたり……。そんなときばかりは、いつもの慌しさも忘れてのんびりとできた。

その日僕は、ベーメンの国王で、選帝侯の一人であるハインリヒ・フォン・クルデンホルフと会談を行った。

なにを隠そう。その家は、“あの”クルデンホルフ大公家の本家であり、現国王の妻は先々代のトリステイン王の姉に当たる人物だ。その弟が、ベアトリス・イヴォンヌ・フォン・クルデンホルフ——クルデンホルフ大公女の父親であり、クルデンホルフ大公国の大公でもある。

そして、僕がベーメン王と会談を持ったのは、次に行われることになる皇帝選出の選挙で自分に投票するようにと促すためだった。散々回想したことであるが、ゲルマニアの皇帝は選帝侯による選挙によって選出される。

マインツ、ケルン、トリアーの各大司教、バイエルン、ザクセン、ブランデンブルク、そしてベーメンの各選帝侯がその選挙権を保持していた。

このうち態度を明確にしているのはケルンとザクセン、ブランデンブルクのみであり、他の諸侯は態度を不明瞭にしたままだった。

しかしベーメン王家は、元々現皇帝家に仕えてきた一族だ。だから今までの選挙では、ほぼ例外なく現皇帝家に投票してきた記録が残っているのだが……。

「……で、散々態度をはぐらかされた挙句、色よい返答すら頂けずに逃げ帰ってきた、と」

「はっきり言うなあ……」

「それははっきりと言うほかないでしょう？　ベーメンの選帝侯を

押さえればあなたは次期選挙で間違いなく皇帝に選出されるというのに」

「そうだけど……」

「……ま、次の選挙は事実上の信任投票でしようけれど。それでも諸侯に信任されるかさえわかりませんわ。最悪、対立王が出てきてしまうかもしれません」

ホーフブルク宮殿の一角。人払いをした執務室の内部。机の前で、背筋を伸ばして高圧的に見下してくるマリアと、僕はそんなやり取りをしていた。

今後の宮廷内での立場を考えると、あまり彼女を邪険にはできない。なので、僕はずっとただただ言われるがままだ。

「父は復帰せず、ガリアは国境付近での活動を活発化させてきています。あなたにはもっとしっかりしてもらわねば。宰相の力にも限界はあるのです」

「それはわかっているさ。ただ、現状だと僕の勢力はあまりにも小さい。なんせホルシュタインから連れて来た人くらいしか味方がいないからね。ははっ……」

「笑っている場合ですか？　だったら、なぜ味方を増やそうと努力なさらないのですか？」

「一応、新設した近衛部隊には、各地から色々な人材を拾い上げてはいるんだけどね。財務大臣があまり予算を下ろしてくれないんだ」「むう……」

宮廷貴族にあまり快く思われていないことは、まったく重々承知の上だった。

だからミスタ・ヴルムに命じて、どの政治勢力にも属していない下級貴族を拾い上げて直属の部隊を編成しようとしているのだけど……。

部隊編成には当然ながらお金がかかる。その予算が国庫からはほとんどまったく下りてこないの、ホルシュタイン公国の財政を切り崩している状況なのだ。

大叔父にはかなり迷惑をかけてしまっている。向こうだって楽しいのは知っているから、余計に申し訳なく感じてしまう。

なにせ、あの国は今も北のデーレン王国と対峙し続けているのだ。均衡を保っているとはいえ、その均衡のためには軍事費がどうしてもかかってしまうのに。

そんな内容の僕の話聞いたマリアは、やがて何事かを考えるように顔を俯かせた。そしてすぐに顔を上げる。

「……そうですわね。予算については、わたしから財務大臣に“お話”をしておきましょう」

「本当かい？ でも、大丈夫なのかな。きみが目をつけられたりしたら……」

「ええ。どうせ彼は父の腰巾着です。わたし相手にろくな口が利けるはずありません。せいぜい、あなたにのみみっちい嫌がらせをするのが関の山のような男です」

「そっか……」

うん。やっぱり僕は舐められているようだ。まあ、たかだか十三歳ほどで周囲の大人を屈服させられるほどの人間じゃないからね……。

カリスマ性なんて、夢のまた夢だった。それは僕にはもっとも縁遠い言葉なのかもしれない。

……けれど、そんなことで挫けてはいられないんだよな。僕にはやりたいことが、やらなくちゃいけないことがあるんだから。

ガリア王国の首都リュティス——それがカール・アルブレヒトの借りの住まいがある街にして、奪われた帝位を奪還するための拠点でもあった。

カール・アルブレヒトは現ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世の嫡男であり、本来ならばアルブレヒト四世として即位するはずの人物である。

だがしかし、彼は己の失態が原因で皇位継承権を剥奪されてしまった。それは明らかに彼の自己責任であったが、本人はそれをまるで認めていなかった。

また彼は、仇敵であるホルシュタイン・ゴットルプの嫡男を排除しようとした一連の行動を咎められ、隣国へと脱出せざるを得ない状況へと追い込まれたのだ。

故に、彼はホルシュタインの公子を酷く憎悪していた。

たとえば、それが自分の従弟に当たる人物であろうと。彼にとっては、己の皇帝の座を掠め取っただけの憎い男でしかなかった。

自分が他国へ逃れる羽目となり、あのガリアの無能王に、露骨にぞんざいな扱いを受ける立場に甘んじなければならなくなったのは、あの子供のせいなのだ。彼は常々考えていた。

ただ、ガリアへ逃れることで収獲はあった。

ガリア王ジョゼフは大層な変人であると噂されていた。そしてなるほど、実際に顔を合わせてみれば、それが嫌というほど露骨にわかる。

ジョゼフは、やけに大仰な身振りで亡命の身であるカール・アルブレヒトを出迎えたかと思うと、彼の帝位奪還計画に賛同し、力を貸すと言いつつ放ったのだ。

しかし一方で、前述の通り、ジョゼフはカール・アルブレヒトをひどくぞんざいに扱ったのもまた事実であった。

結局のところ。自分の帝位奪還に協力するというのは、かねてより進めていた、自国によるゲルマニア侵略の大義付けに過ぎなかったのではないか。

彼はそう考えるようになった。

……けれども、カール・アルブレヒトにとって、無能王が腹の中
でなにを考えていようと、それはまったく意味を持たなかった。

自身がゲルマニアの帝位を得ることに成功すれば、今度は一気に
反転攻勢を行ってガリアを領内から駆逐するという算段を立ててい
たからである。

ガリアは自分を利用する。自分もガリアを利用する。最終的に勝
つのは自分である。

実に都合のいい、どこまでも自身に都合の良い解釈であるとしか
言いようがない。もっとも、より冷静な分析が出来ていれば、彼は
故国を追われることはなかったのだろうが。

……それは、日差しがやけに強いある初夏の日であった。

王都リュティスの東側に建設された、ヴェルサルテイルの宮殿群。
その中の一つであるグラン・トロワの玉座の間に、二人の男の姿が
あった。

男の一人は、カール・アルブレヒト。そしてもう一人は、このガ
リア王国の頂点に立つ存在……ガリア王ジョゼフである。

ジョゼフはひどく不機嫌そうな様子であった。それは、彼が常日
頃から楽しんでいる兵隊遊びを、目の前の青年に妨害されたからで
ある。

本来ならばただちに切り捨てても良いのだが、あいにく目の前の
青年はジョゼフにとっての“玩具”の一つだった。

その価値が無くならないうちは、まだ生かしておこうと考えてい

たのである。

無能王が思案する対ゲルマニア戦争、本物の生きた兵士を使つてのチェス——否、“侵攻作戦”に際して、この青年の利用価値は非常に大きいものがあつたのだ。

「アルデラの要塞を視察したい？　なぜだ」

「そうです。アルブレヒト三世の崩御と共に、私が新たなる皇帝として出発する要塞の姿を、今からこの目に焼き付けておきたいのです」

「……ふむ。そうか。よろしい」

ただ一言、それだけだった。

ジョゼフはそれきりカール・アルブレヒトから興味を失い、玉座のすぐ隣りに設置された、精巧な模型の戦場に夢中になり始めた。

ふん。無能王が。いつか見ているがいい。貴様もあの子供も、容赦なく断頭台へ送ってやる。

気でも触れているのかというガリア王の醜態を目の当たりにしながら、青年は心の中で眼前の青髪の男をひたすら罵り始める。ただ、決して表情には表さず。

「……ご許可をいただき、ありがたく存じ上げます」

ジョゼフの視線はとうに青年から外されていたが、それでも彼は頭を下げて礼をする。そして、静かに玉座の間を去っていった。

……それからすぐだろうか。カーテンの隙間に潜んでいた妙齡らしき女性が、その姿を不意に現したのである。

「陛下。彼は蛮族の出とはいえ、ゲルマニアの皇族ではありませんか。それほど冷たくなさなくてもよろしいのに」

「よい。あれは木偶人形にもならない欠陥品だ。人間と同じ扱いを

する必要などあるまい」

「あらあら。いつにもまして、なかなかおきついお言葉ですわ」

「モリエール夫人。私はただ事実を述べただけだ。……そうだな。

この世の中はおかしい。ただただ真実を述べた者を、その真実を隠蔽しようとする者たちが悪し様に罵るというのは、あまり好かないものだ」

そう口にしつつ。ジョゼフは、交差した杖が描かれた旗を手にした兵隊の人形で、双頭の鷲が描かれた旗を持った兵隊の人形を弾き飛ばした。

「……ああ、そんな！ 陛下、わたしは陛下を罵りなどしておりませんわ！」

そんな嘆きの声を上げながら、青い髪の美しい女性は、やはり美しい美髯を揃えた男性へと身を寄せる。

己の背に寄りかかる美貌の女性を受け止め、しかしその相貌にひどく歪んだ不快感を露にした表情を浮かべつつ、ジョゼフは告げる。

「おっと、誤解はしないでいただきたい。私はモリエール夫人のことをどうと言ったのではない。世間一般の、世俗にまみれた民衆のことを論じたに過ぎぬ」

「では……、ああ、陛下……」

——滑稽なものだ、とジョゼフは思った。

すべてが滑稽だ。どの道滅びる運命の青年。気が狂った男に歪んだ愛情を注ぐ人妻。そして、己自身でさえも。誰も彼も、皆が道化でしかないのだ。

「つまらんな。なにかもがくだらない。ああ、東方の蛮人たちよ。早くおれを楽しませてほしいものだ……」

どこまでも冷め切った瞳で、ガリアの王は窓から見える景色に視線を向けるのだった。

第二十四話

トリステイン王国とガリア王国の国境となっている巨大な湖。それがラグドリアン湖だった。

実際に目にした者がどれだけいるのかは定かではないが、その湖底では水の精霊たちが独自の文明を築いている……らしい。ちょっと見てみたいような、そうでもないような。

僕が今現在滞在しているのは、その湖に浮かべられた園遊会の施設である。これがなかなか大きく、上空からでもはっきりとその姿を視認できたものだった。

自分が園遊会へと参加してから、約二週間の期間のうち、既に半分が過ぎ去っている。その間、僕は各国の要人と顔を合わせる機会があった。

……ただ、未だにガリア王は会場へ姿を見せていないし、トリステインの王女とも顔を合わせていなかった。

既にトリステイン王夫妻とは謁見を行っていたので、これといって会う理由もないのだけど。ちょっとだけ彼女の姿を見たい気がするのも、また事実だ。

「……なにか良からぬことを考えていますね。こんな場所で、そんな間抜け面をいつまでも晒してどうなさるおつもりですか？」

「わかっているよ。ちょっとぼうつとしていただけさ」

「そうですか。なら、手を引いてくださいまし。皇太子ほどの地位にいますのです。女性のエスコートの一つでもできないと恥ずかしいですわ」

「そのくらいできるさ。これでも、礼儀作法は散々叩き込まれたんだ」

この場には、当然のごとくマリア・テレジアも同伴していた。彼女はゲルマニアの皇女であるからして、参加資格は十分にあるのだ。どうせなら彼女だけに任せてしまいたい、という気持ちもないわけではなかったけれど、貴重な皇太子としての絶好のアピールの場を失うことは許されなかった。

実際、この園遊会のおかげで、僕は多くの人々に自分の存在を知らしめることができた。

他国の貴族たちと、直接顔を向かい合わせる機会なんてものはそうそうない。ここは出席して正解だったのだろう。恐らくは。

それから僕は、マリアと二人で会場を練り歩き、時おり周囲の貴族たちと他愛のない会話をするなどしていた。

正直自分はあまり会話が得意ではなかったが、そこはマリアが間を取り持つなどしてフォローしてくれた。

本当、彼女のような人がいてくれて助かるよ。一人だとなっていたか……。考えるだけでも恐ろしいとは、まさにこのことだと思ってしまう。

……と、そんなときだった。

あまりにも会場に人が多いせいか、ちょうど目の前の老紳士たちの隙間を通り抜けようとしたとき、僕は前から来た誰かとぶつかってしまったのだ。

小さな悲鳴と共に、ぶつかってしまった栗毛の少女がよろけてしまう。そんな彼女の腕を、僕は引っ張って支えた。

「ああ、ごめん。怪我はないかな？」

「え、ええ……。ありがとうございます。おかげで倒れずに済みましたわ」

「姫さま？ 大丈夫ですかっ!？」

「ルイズ……。大丈夫ですわ。ほら、この通り」

ルイズ。どこかで聞いたような名前だ。そういえば、『物語』の

主役はルイズという名前だったはずだ。確か、ラ・ヴァリエール家の令嬢で、トリステイン王女とも仲が良いはず。

と、なると。僕がぶつかってしまった、この肩の辺りまで栗毛を伸ばした、白いドレスの少女は……。

“それ”に思い当たってしまったとき、自分は無意識に背筋を伸ばしていた。そしてできる限りの真摯な表情で、眼前の少女へと告げる。

「失礼しました、アンリエッタ王女殿下。私はゲルマニア皇太子のカール・ペーター・ウルリヒです。先ほどの無礼な言葉遣いをお詫びします」

「あ……。もしや、あのゴットルプ家の？」

「はい。そうです」

「なるほど、あなたが新しい皇太子でいらしたのですね。わたしはアンリエッタ・ド・トリステイン。ご存知の通り、このトリステインの王女です」

僕が軽く会釈しながら名乗ると、アンリエッタ王女も頷き返してくれる。

それとほぼ同時に、僕の後ろにいた MARIA が前へと進み出てくる。彼女は優雅な仕草でドレスの裾を持ち上げると、やはり軽く頭を下げながら名乗った。

「ゲルマニア皇女、MARIA・テレジアですわ。アンリエッタ殿下。よしなに」

「あなたが、あの……。常々噂には伺っていましたが、本当にお美しい方でいらっしゃるのね。わたくし、驚いてしまいましたわ」

「いえ。殿下ほどではありませんわ。わたしなどは所詮路傍の石ころ。可憐に咲き誇る白百合のごとき殿下の美貌の前では、一瞬で霞んでしまいますもの」

「そんな、ご謙遜を……」

身内（？）の鼻肩目かも知れないけれど、マリアの容姿とアンリエッタ王女のそれは方向性がまるで違っているとはいえ、決して引けを取らないどころか勝ってさえいるように見える。

まあ。その基準は、きつめの美人が好きなのか、あるいはそうではないかの差なのだろうけど。

……あれ？

なんだか自分があまり良からぬ方向に向かっている気がするが、とりあえずそれはこの際置いておこう。あまり深くは考えたくないからね。

談笑を始めてしまった皇女と王女とを横目にしつつ。僕は、その背後にいるストロベリー・ブロンドの髪少女へと声をかけた。

「やあ。きみは見たところ、王女殿下のお友達のようにだけど……」
「……ラ・ヴァリエールのルイズ・フランソワーズです。皇太子“閣下”殿。お会いできて光栄ですわ」

うん。思い切り“閣下”呼ばわりされてしまったようだ。一応これでも僕は、トリスティンの開祖を発祥とする始祖の血統の末裔ではあるんだけどね。

彼女からすれば、そんなことは関係ないのかな。ゲルマニアという時点で、まったく良からぬ感情を抱かれているのはわかるし。

「ラ・ヴァリエールといえば古くから続く名門中の名門だったよね。ぜひとも友好的な関係を築きたいものです」

「そうですね。閣下がツェルプストーの娘を婚約者としていないければ、それも可能だったかもしれません」

「あ、あははは……」

……駄目だこりゃ。なんか思いつきり敵視されてるみたいだ。

別に表情に嫌悪感をむき出しにしているとか、そういうわけではないのだけれど、言葉の節々から僕……というか、ツェルプストーに対する嫌悪感が滲み出しているのがよくわかる。

確かに、ラ・ヴァリエールとツェルプストーは積年の対立関係にあるようだからね。キュルケも直接ではないけど、あまりいい顔をしていなかったし。

ちよつと残念かな。これじゃ、話をしようにも取り合ってはもらえないだろう。少しでも話をしてみたかったのも事実だけど……。しょうがない。

「……それでは、わたくしたちはこれから用事があるので失礼致しますわ。マリアさん、皇太子さん。それではごきげんよう」

いつの間にか、二人の話は終わっていたらしい。アンリエッタ王女はきびすを返すと、もう一人の少女を連れてこの場から去っていた。

……あ。そういえば、マリアはアンリエッタ王女とどんな話をしたのだろう。少しだけ気になって、僕はそれを隣りに立つ彼女へ問いかけてみることにする。

「で、王女殿下とはどんな話をしたんだい？」

「特に面白い話ではありませんわよ。でも、そうですわね……。心なしか、アルビオンのウェールズ王太子の話題が多かった気がしますわ」

「プリンス・オブ・ウェールズか……」

「ええ。なんでも、思わずはっとするような美貌の持ち主だとか。どこかの誰かと違って」

「……悪かったね」

僕は一度ウェールズ王太子やジェームズ王陛下と顔を合わせたことがあるから、マリアの言わんとしていることは嫌というほど理解できる。彼と僕では勝負になんてなりはしないとも。

……あんな二枚目と比較されても困るよ。十人並みという言葉は、僕の顔の作りのためにあるようなものだから。恐らくは。

なんてことを考えていると。マリアがなにやらぶつぶつ呟いている声が聞こえてきた。

「……でも、女装させてみると案外……いけるかもしれせんわ。この人の顔の作りなら、あるいは……」

「マリア？」

「……いえ。なんでもありません」

「なんかおぞましい言葉が聞こえた気がするんだけど」

「気のせいですわ。もう耳が遠くなってしまったのですか？ まったく、冗談はその情けなさで顔だけにしていたきたいですわよ」

「顔だけね、はは……」

微妙に耳が赤い辺り、どう考えても誤魔化そうとしているのがわかったけど……。あんまり深くは突っ込まないでおこう。後が怖いし、それがいいさ。うん。

園遊会の最終日。最後を飾るこの日、太陽は既にとつぷりと沈んでしまい、辺りは魔法の照明の灯りによって照らされていた。

今の時間帯はある程度の入場制限がなされ、かなりの高位の貴族以外は会場外へと締め出されている。それでいいのかと思ったが、

ある程度は仕方ないのかな。

日程の都合なのか、一部の貴族はもう帰り始めているようであるし。実質的に、昨夜で彼らの園遊会は終わりということなのだろう。

……それにしても、二週間というのはあまりにも長いものだ。さすがにいい加減疲れてきたし、やっとこの催し事が終わると思うと、ほっとため息が出るよ。

ちなみに、今は僕は単独行動中だ。マリアは最後の夜のために発注したドレスを身に着けている最中なので、当分姿は現さないと思っている。

しばらく、ワインが空になってしまったグラスを手で弄んでいると。誰かが自分に近づいてくるのがわかった。

「おや、これはこれは。皇太子殿下じゃないか。愛しのテレジア皇女殿下はどうしたんだい？」

「……マリアはそんなじゃない。だいたい、彼女は従姉です」

「おや、これは失礼した！　そういえばきみにはツエルプストーの婚約者がいるんだったな！　はっはっは、気を悪くしないでくれたまえ！」

このやけに馴れ馴れしく……いや、気さくに声をかけてきた青年の名は、ザクセン選帝侯アウグスト二世、またの名を、ポーランド王アウグスト三世という。

彼は選帝侯の中で態度を明確にしている一人で、皇太子となった僕が最初に会談を行った相手でもある。

恰幅の良い体型とその体型に似合う豪快な性格の人間で、初対面であるにも関わらず、いきなり僕をドレスデンの娼館に連れて行くこととした変わった男だった。

……そりゃ、僕はそういう経験は未だにないけどさ。

会って突然、「お前童貞だろ。皇太子がそれじゃ格好つかないぜ？　俺が面倒見てやるよ」などと言い出したときは本当にどうしよ

うかと思ったよ。

根は悪い人ではないとわかるんだけど、ちょっと苦手なタイプであるのは間違いないようだ……。

「で、どうだい。園遊会は。俺は退屈で退屈で仕方がなかったぜ。まったく、トリステインがこんな行事を開かなきゃわざわざ参加する必要もなかったのにな。たまったもんじゃないぜ」

「その発言は、さすがにどうかと思いますよ……」

周囲のほとんどがトリステイン貴族で埋め尽くされているというのに、この人はどうしてこんなに大胆な発言ができるのだろう。少し、関心……。

「なんと無礼な発言だ。これだからゲルマニアの成り上がりは……」
「まったく、あんな男をここに入れたのは誰かね」

……関心なんてできないな。うん。

なんてことを考えつつ、新しいワイングラスを呷っていると。周囲の貴族たちが、ある方向へと視線を向けてどよめくのがわかった。

「けっ。とうとうきやがったか。最終日の夜にノコノコやって来て、一体なにがしたいんだか」

「……誰が来たんですか？」

「あっちを見てみる。嫌でも視界に入るぜ。あの青い髪がな」

——青い髪。その言葉がどうにも気になった僕は、アウグストの言う方向へと視線を向ける。

……すると、確かに彼の言う通り、前方から大柄な青い髪の男性が栈橋を渡ってこの会場へとやって来るのがわかったではないか。しばし、そんな仮想敵国の王の姿を追っていると。不意に、何者

かによって肩が叩かれ、直後に耳慣れた声が聞こえてくる。

「せっかくをドレスを着替えたというのに、どうしてあなたは……、あらアウグスト殿。あなたもお越しになられていたのですか。珍しいですわね」

「おうよ、テレジア殿下。今日も素晴らしい美少女っぷりだな」

「褒めてもなにも出ませんよ。あなたには。……それで、どうされたのですか？ この会場の沸き立ちぶりには」

そうマリアが問いかけてくるので、僕は無言で青い髪の男性がいる方角を示した。

「ガリア王、ですか。てっきり、もうこの園遊会へは参加しないものだと思っておりましたが……。今さらやって来て、一体なにがしたいのでしょうか？」

青い髪の男の姿を確認したマリアは、先ほどのアウグストと同じような――彼らだけでなく、僕や他の人もそう思うだろうが――感想を述べる。

ガリア王は、トリステイン王夫妻やアンリエッタ王女を相手に大仰な仕草で何事かを話しかけている。ここからでは声は聞こえないが、彼が笑顔なのはわかった。

王女は思い切り引いているのがここからでも見える。国王も、マリアンヌ太后も、あまりよくは思っていないのがよくわかる。

ただ、相手は西のハルケギニア最大の強国ガリアの王だ。内心では色々思うところはあれど、そう強くは出られないのがなんとも難しいところだった。

やがて。ガリア王は王一家から離れ、周囲の貴族たちに向かって尊大に笑顔を振りまき始める。

トリステインの宰相マザリーニ、桃髪の少女を連れた紳士……恐

らくはラ・ヴァリエール公爵、そしてクルデンホルフ大公などの姿が窺えた。

ジョゼフ王は、どんどん僕たちがいる方向へと近づいてくる。確実にここまでやって来るかわからないし、特に恐れることはないと思うのだけれど……、自然と身が強張るのを感じてしまう。

そして……。いよいよ、ガリア王は僕たちの前にまでやって来た。だけど、次の瞬間に彼が取った行動は、まったくこちらの予想しないものだった。

「おお！ これはこれは、あなたが噂に聞くかの MARIA・テレジア皇女殿下か！ なんともお美しい、見目麗しい少女だ！ 朕があと十歳若ければ、ほぼ間違いないなくそなたを后として迎えていたであらう！」

彼は、身を強張らせる僕をまったく眼中に入れなかったのだ。マリアの容姿を大げさな身振りや言葉で褒め称え、次にアウグストへと視線を向ける。

「それに、あなたはかのザクセン公ではないか！ これはこれは、いや、第二次アルデラ紛争ではわが国の精鋭部隊が貴君の軍勢に壊滅させられてしまったというな！ これは参った！」

「……なんのつもりだ？」

「む、どうされたのだ、ザクセン公よ。朕は貴君になにやら不愉快な思いをさせてしまったようだが」

「何かも糞もあるか。目の前にいるゲルマニア帝国の皇太子を無視するとは、良い度胸じゃねえか？」

「……ん？ おお、そこに人がいたとは！ まるで気がつかなかったぞ！」

まるで今気がついたとでも言いたげな様子だけど、まあ真つ赤な嘘だろうな、これ。わかっていて明らかに無視しているのだと嫌でもわかるし。

それにこの人、愉快そうな仕草をしているというのに、目はまったく笑っていない。まるで路傍の石ころでも見るような視線を向けてくるじゃないか。

なんとなくだけど、直感的にわかった。僕はこの人に完全に見下されている。いや、それならまだましかもしれない。これじゃ、もう……。

ぞっとするような視線だ。今にも逃げ出したくなってしまうけれど、僕はそれをなんとかして堪える。

「……おおっと、少し時間が押しているな。それでは失礼するよ。テレジア皇女には、いつか会食の申し入れでもしたいものだ！ はっはっは」

最後にそれだけを言い残して、ガリア王は取り巻きの貴族たちを連れて、僕たちの前から立ち去っていく。

「なんですか、あの態度は！ こちらを舐め腐っているにもほどがありますわ！」

「“無能王”なんて呼ばれちゃいるが……。ありゃ、それ以下かもしれないな。出来れば関わりたくないもんだぜ」

アウグストの言う通りだった。出来れば、あんな人物などとはこの先もずっと関わりたくない。

けど、アルデラ地方に建設されたという要塞や、元皇太子カール・アルブレヒトの動向を考えると、必然的に関わらざるを得ないのだろうか。

……頭が痛くなってくる。

もし今後なんらかの理由であのジョゼフ王やガリアの強大な軍隊と矛を交えなければならなくなったとき、果たして僕はそれに打ち勝つことができるのだろうか。

わからないな。それが起こらないように努力すべきなのだろうけど……。正直、僕にはどうしたらいいかさえ、よくわからなかった。

第二十五話

夏は過ぎ去り、段々と涼しくなり始めた今日この頃。

ウィンドボナ郊外にある練兵場にて、僕は自らが組織した近衛部隊の訓練を視察していた。

マリアが財務大臣に“お話”してくれたことで、この“皇太子付き独立大隊”への予算が大幅に増額されることとなった。

ただそれは、今まで雀の涙程度だったそれが、ようやく並みの予算になる程度ではあるけど。それでも有難い話であることには変わりがなく、マリアには大いに感謝しなければならない。

もし彼女が動いてくれなければ、この先この部隊はなんとも悲惨なことになっていただろうから……。

ちなみに。

一般的な軍の『大隊』はおおよそ五百名超の人員で構成されるのだけでも、この部隊の場合、実際の規模は一段階下の『中隊』相当の約二百名に過ぎなかった。

本来皇太子はゲルマニア正規軍の部隊指揮官（儀礼的な）となるはずだったが、僕はそれを断っていた。

北の田舎からやって来た、得体の知れない存在であるぽつと出の自分に、ゲルマニアの正規軍の人々が忠誠を誓ってくれるとも思えないからだ。

そういう理由から、地元の下級貴族を中心として編成を行ったために、到底大隊規模の人員など動員することはできなかったのだ。

この部隊名はとりあえずのお飾りだ。せめてもの見栄というやつかもしれない。

この『大隊』を実質的に率いるのはミスタ・ヴルムだった。

僕に出来るのは父から教わった敬礼やら行進程度であり、実際の

軍事についての知識はほとんど無いからだ。

うちのお抱え騎士となる以前はベーメン王国の諸侯軍にいたそうだから、僕なんかよりはよほどこういう事に詳しいはず。

それに、周囲の人の話では士官学校も出ているそうだし……。しかし、なんでそんな人物が北の外れのホルシュタインに流れてきたのか。それはいまいちわからない。

ふと、視線をすぐ隣りに置かれたテーブルへと移す。

するとそこでは、長い亜麻色の髪をツータールにしたエリザベトが、なにやら古びた本を広げて見入っているではないか。

「なにを読んでいるんだい？　ずいぶんと分厚い本のようだけど……」

そう僕が声をかけると、彼女は一旦本を読むのを中断して本をテーブルへと置く。すると一瞬、やたらびっしりと文字が書き込まれた文面が視界の端をかすめた。

「これは“東方”の古代の思想家、孫武の『孫子』という書物をガリア語へ訳したものだそうです」

「そ、孫子……？　なんでそんなものが」

「はい……。皇女殿下が好事家から入手されたものだそうです。彼女は興味がないとのことなので、わたしが貰い受けました」

「そ、そうなんだ」

孫武……。か。どこかで聞いたことがある名前をよく聞くと思っていたら、今度は“東方”と来たようだ。一体どうなっているんだろう。

あまり深く考えてもどうしようもないけど、やっぱりハルケギニア……というか、この世界って本当に地球とよく似ているんだなあ

……。

「“百戦百勝は善の善なるものに非ず。戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり”……」

「ん、なんだいそれは？」

「この兵法書の一節です」

「そうなんだ……」

どういう意味だろう？ 戦争で百回勝つよりも、他の方法で敵に勝てとかそういう意味なんだろうか。……なんだか難しいな。昔の人が考えることは。

そんなことを考え、僕が再び訓練を行う兵たちの方へ視線を向けた。そうとした、そのときのことだった。

例によって、マリア・テレジアがその姿を現したのである。ただ、今日の彼女は誰か人を連れてくるようだ。中年に差し掛かったほどの男性だ。

軍服と勲章の数々を見るに、どうも高い位の軍人のようだけど……。確かなのは、この人物はただ者ではないという点だ。発する気配が、なにか“違う”ように感じられた。

「どうですか、エリザベートさん。その本は。わたしはさっぱり意味がわかりませんでしたわ」

「……とても、素晴らしい書物です。これが何千年もの昔に書かれたものだとは思えません」

マリアはさっそくエリザベートに声をかける。つられて見てみれば、エリザベートは『孫子』をやたらと大事そうに胸に抱え込んでいるのだ。

元々年齢に見合わず難しい本を読むのが好きであるようだったから、きつとあの本も気に入ったのだろう。

「そうですか。差し上げて良かったですわ。喜んでいただけているようで……」

「はい。ありがとうございます」

そんなやり取りの後、マリアは僕の方に顔を向けた。そして、広場で訓練に勤しむ隊員たちを横目に見やりながら、僕に向かって問いかけてくる。

「……どうです、近衛部隊は？　いざというときに使えるほどのものになりましたか？」

「一応、最低限の統率は執れていると思うよ。同じ地域の出身者が多いおかげかな」

「だが、あれでは実戦投入は出来ずまい。お飾りの部隊といえど、もっと徹底した訓練を行うべきだと思いますな」

僕が問いかけに答えていると、先ほどからじっと近衛部隊の面々の方向を観察していた男性が不意に口を開いたのである。

一体誰なんだろう、この人は。あまり見た覚えがないんだけど……。

そんな疑問を感じつつ、こちらがいぶかしみの視線を向けていると。珍しく慌てたようにマリアが僕たちの間に割り込んで、こほんと咳をしてから男性を紹介してくれる。

「このお方は、オイゲン・フォン・ザヴォイエン……、プリンツ・オイゲンとも呼ばれているお方ですわ。本日はわたしが無理を言っでご同行願ったのです」

「ぷ、プリンツ・オイゲン！？」

このとき。目の前にいる人物が、まさかそんな大物だとはまった

く知らなかった僕は、思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

プリンツ・オイゲン。

元はロマリア北西部の古き公爵家の血を引くトリスティン貴族の生まれで、故あってゲルマニア軍に仕官してからというもの、数々の功績を残してきた人物だ。

彼は最初に、当時分裂状態だったアウソーニャ半島での戦役において名を上げ、エルフとの国境紛争でも一歩も引かずに指揮を執り続けて国土を防衛。

近年ではとうとう、軍の最終階級である元帥にまで任命されていた。政界においても多大な影響力を持っており、皇帝に物怖じせずに見てくれる数少ない豪傑でもあったのだ。

ただ、近ごろは帝都を離れることが多かつたらしく、僕は今の今までこうして顔を合わせることはなかったのだけど……。

いざ実際に本人を目の当たりにすると、特有のプレッシャーのようなものをひしひしと感じるのがわかった。

「か、カール・ペーター・ウルリヒです。かのオイゲン公にこうしてお目にかかれるとは考えておりませんでした」

「……ご紹介に預かった、オイゲン・フォン・ザヴォイエンです。お初目にかかります」

う……。なんだろう、今の一瞬の間は……。なんだか値踏みされているような視線に感じられたけど……。

それになんというか威圧感がすごい。この人が僕を快く思っていないというのが、ありありと感じ取れる。初対面でここまで嫌われるとは……。

「そ、それで、どうですか？　せっかくだから、この人の部隊の訓練監督を行っていただきたいのですが。いざという時に必要な部隊でしょうから、信頼できる貴方をお願いしたいのです」

「先日もしましたとおり、それは構いませぬ。が、まずは皇太子殿のご意見を伺うべきではありませんかな？」

「ぼ、僕としてはぜひお願いしたいところです。どうか、よろしく願います」

こういう場合……、まずマリアの言う通りにするべきだと自分は考えるようになっていた。それに、プリンツ・オイゲンほどの人物に部隊を見てもらえる機会などそうそうありはしないのだ。

だから僕は、間髪入れずに目の前の偉大な軍人に向かって頭を下げた。せっかくマリアが連れてきてくれたのだから、ここはその意思を汲み取りたい。

「……わかりました。それでは、わたしが皇太子殿の部隊の監督を行きましょう」

僕が頭を下げたまましていると。プリンツ・オイゲンは小さくため息をついた後、ゆっくりと隊員たちがいる練兵場の広場へと向かって歩いていった。

「は……はは……。なんだかすごく嫌われているみたいだね……」

「ええ、それはそうでしょう。あの方は、わたしの婚約相手にプロイセンのフリードリヒ王子を推薦したいたのです。今も諦めてはいないようですが……」

「フリードリヒを？」

フリードリヒ。彼が連れ戻されて以来、一度も顔を合わせていない。風の噂では、どうもプロイセン王国内の領地の統治をしているそうだけど……。

「ブルク劇場でわたしが初めてあなたと出会ったとき、わたしが彼

を追いかけていたでしょう。見合いの途中で彼が逃げ出しましたからね。わたしとしても、とても良いお話だと思っていたのですが」

「あ、ああ……」

そういえば、キュルケと一緒にウィンドボナの劇場へ足を運んだときにマリアやフリードリヒと出会ったんだっけ。なんだか懐かしいな。

「はあ。結局フリードリヒとの婚約の話は父に有耶無耶にされた挙げ句、突然あなたに迫るようにまで言われて……。あの人に痴女呼ばわりされるわ、本当に最悪でしたわ」

「……なんていうか、ごめん」

「ただの愚痴ですから、謝らないでください。余計惨めになりますから」

「ごめん……」

「だからっ、……ああ、もう！ もう少しプライドを持ちなさい！ 皇太子ともあろうものが、目下の人間にすぐに頭を下げたり謝罪するものではありませんわ！」

またしても反射的に謝罪の言葉を述べてしまった僕に、マリアは大きな目の端を吊り上げて怒りを露にする。

「悪かった。僕が悪かったよ。でも、きみは僕が謝らないともっと怒るだろう？」

「ええ」

「……いや、そんな素で返さないでくれよ。僕は一体どうすればいいんだ？」

「そうですわね。すべてはナヨナヨしているのがいけないのですわ。“未開の地”で一年ほど体を鍛えてみるのはどうでしょう？ 今よりはまともになれるかもしれませんわ」

「無茶言わないでくれ。死ねって言うてるのと同じだよ、それは」

……一応、今でも講師を頼んで空いた時間に魔法の練習を続けているが、今のところ僕がラインメイジになれる様子はなかった。水魔法の精度が若干上がった程度だ。

ううん。ドットだからといって、スクウェアに勝てないことはないんだろうけど、それはやっぱり手垂れのメイジの場合なんだろうな。

僕のような素人だと色々難しい……。せつかく水のメイジとして生まれたのだから、ここはクラスに拘らず、変化球を狙ってみることにしようか。

たとえば、魔法を応用して毒を生成するとか。まだラグドリアン湖にあるであろう、アンドヴァリの指輪を盗まれる前に狙ってみるとかも……。

やっぱり、いざというときの自衛の手段は必要だろうしなあ。

「……あなた、なにか物騒なことを考えていませんか？」

「いや。まったく……。あ、そうだ。フグをどこかで手に入れられないかな？ ちょっと調べたいことがあるんだけど」

「フグって……。あ、あなたは……。やっぱり物騒なことを考えているじゃないですか！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。これはほんの冗談じゃないか……」

「冗談でもそういうことを言うのはやめてください！」

不用意な発言をしたところを思い切りマリアに詰め寄られてしまい、そういう事を実行に移すのは断念せざるを得なくなってしまうのだった。

——プリンツ・オイゲンとの対面から幾ばくか過ぎたある日。

珍しく丸一日の休暇を取ることができた僕は、ウィンドボナの市街地へと足を運んでいた。

今回同行しているのはエリザベートだけだ。久しぶりにキュルケに会うことも考えたが、遠く離れたツェルプストーにいる彼女をわざわざ呼び出すのも気が引けたのだ。

ちなみに、彼女を呼び出すことが前提なのは、皇帝から私用で帝都を離れないようにとのお達しがあったからである。

……本当、最近ろくに会っていないなあ。ホルシュタインにいた頃とは地理的にも立場的にも色々と変わってしまったているから、仕方ないのだろうけど……。

護衛はそこら中に配置されているらしい。一見して普通の通行人に見えるような人が護衛だった、なんてことは十分に考えられることであった。

そして今僕が足を運んでいるのは、市街地の外れにあるウィンドボナ魔法学院だ。

本来、建設当初は市街地よりもずっと離れた位置にあったらしいのだが。市域の拡大に伴って、とうとう学院の敷地が市街地に飲み込まれてしまったらしい。

歴史を感じさせる建築様式の尖塔群。広々とした敷地では、この学院に在籍する生徒たちがのんびりと談笑をしたり、スポーツに興じていたりする。

まさか皇太子が来るなんて知るはずもないだろう。それもそのはず、僕の意向で今回はお忍びでの視察ということになっているから。さすがに、学院の教員が引率として付いてはいるけど。彼は事実

を知っているのか、やたらと恐縮しているようだった。

「楽しそう……」

ふと。僕の隣りを歩いていたエリザベートが、芝生の上で談笑する生徒たちを見つめながら、そんなことを呟いた。

仮に彼女がこの学院に入学するとなると、今から七、八年ほど後の話になる。そのときは、彼女をこっそりとこの学院へ通えるようにしてあげよう。

……八年、か。思えばこの子は、こんなに小さいのにとっても落着いているし、いつも難しい本を読んでいるんだよなあ。もうここに入学しても問題なさそうな気がする。

僕の場合は、もう入学する機会もないのだろうか……。キュルケはやっぱり入学するんだろうな。

そういえば、どうして彼女はトリステイン魔法学院に留学することになったんだっけ。その辺りの事情が知りたい気がするけど、それはこの先の話だから無理だな……。

「この学院はリュティスの魔法学院と同じように、帝都の屋敷からの通学ができるそうだね」

「確か……、トリステイン魔法学院は全寮制でしたよね？」

「そうみたいだね。場所が場所だからかも」

……そういえば、トリステイン魔法学院はなんであんな草原の真っ只中なんかに建てたんだろう。他の国は大体の場合、首都郊外か近辺に建てられているのに。

なるべく静かな環境で生徒たちを学ばせるためだとか、そういう理由があつてのことなのだろうか？

「将来的にはきみが学院に通えるようにするつもりだから、今回は

下見のつもりで色々を見て回るといいよ。時間はあるし」

「本当ですか？」

「うん」

「……嬉しいです。……昔は通えなかったので」

「昔？」

「あ、いえ……」

なんだろう。たまによくわからないことを言うな、エリザベートは……。東部辺境地域に学院なんてないし、そもそもこの子の年齢じゃ……。

そんなことを考えつつ、学院の本塔と尖塔の一つを繋ぐ渡り廊下に差し掛かったときのことだった。

「こ、ここにおられましたか、殿下！」

「ヴルム隊長……？ どうしたんだ、そんなに慌てて……」

大きな声と共に、突然空から風竜に乗って現れたのは。

練兵場でプリンツ・オイゲンの下、近衛部隊の訓練を行っているはずのミスタ・ヴルムだった。

本来ならばそんな行為は認められない。教職員たちが慌てた様子であちこちから飛び出し、風竜の姿を目撃した生徒たちもわらわらとこの場集まりだしていた。

軍人氣質で規律をよく守る彼が、こんなことをするのは初めて見る。なにか重大な事態が起きたのだと僕は考え、自然と表情が強張るのを感じた。

「緊急事態です。すぐにホーフブルクへ戻りましょう」

「わかった。すぐに戻ろう。ただ、エリザベートも一緒に乗せてやってくれないか。さすがにこの状況でこの子だけを置いて行くことはできない」

「……了解しました」

そうして周囲の喧騒に巻かれながら、僕はエリザベートを抱えて風竜の上に乗る。そしてミスタ・ヴルムが手綱を引くと、風竜は周囲に風を巻き起こしながら一気に上昇した。

学院の方への説明は護衛たちがしてくれるだろう。緊急時ということなので、今はやむを得ない。

一体、なにが起きたのだろう。あまり考えたくないことでないことを祈りたいが……。

やがて風竜が降り立ったのは、ホーフブルク宮殿の本殿——皇帝が居を構える建物の正面広場前だった。

こちらが到着すると、すぐに宮殿の中から誰かが飛び出してくる。それはマリアだ。彼女は僕の父が亡くなったときのような、とてつもない悲壮感に満ちた表情を浮かべている。

……いや。まだ“それ”だと断定するには早い。だって、彼は……アルブレヒト三世は、こんなところで……。

半ばそう思い込むようにしながら、僕は恐る恐る、マリアへと近づいていく。そうしてある程度まで近づいたとき、彼女は搾り出すようにして声を発そうとする。

「父が……」

だが、その先は言葉とはならなかった。彼女はそれきり沈黙し、それが事態の深刻さをより深く僕に認識させる。

「ヴルム、まさか……、これは」

「……お察しの通りです。アルブレヒト三世陛下は……、つい先ほど、お隠れになりました」

その言葉を耳にしたとき、僕は思わず宮殿に向かって走り出して
いた。

第二十五話（後書き）

第六章は終わり。次話より第七章となります。

第二十六話

皇帝アルブレヒト三世の崩御による、全選帝候や国内外を問わず数多の貴族が出席した国葬は終わりを迎え、二ヶ月が経過していた。この間、ウインドボナの皇太子は「喪に服す」と宣言して即位はせず、すべての政務はそれまで同様に宰相が行っていた。

実際のところ、皇太子カール・ペーター・ウルリヒには、皇帝へ即位するという算段がまだ整っていなかった。

前帝の忘れ形見であるマリア・テレジア皇女の支持はあったものの、他に大規模な貴族で彼に明確な支持表明を行っていたのは、ポーランド王アウグスト三世のみに留まっていたからだ。

支持基盤が極めて脆弱であり、また宮廷の貴族たちからも、あからさまではないにせよ軽んじられているという現状。皇太子の前途は多難を示していた。

そして、彼にとってもっとも致命的だったのは――ウインドボナから遠く離れた領地を持った四選帝候が、既に西の大国ガリアと浅からぬ関係を持っていたことだった。

ゲルマニア帝国西部、トリリア。歴史ある選帝候がその支配力を保持する宗教都市である。

皇帝崩御後、ウインドボナ政府は地方の引き締めを図っていたが、元々は独立闊歩の風潮が非常に強いゲルマニア貴族たちである。

力の衰えた中央政府にそう易々と従うはずもないのだ。……もつとも、前述の四選帝候はとうの昔に謀反の企てを行っていたのであったが。

トリリアはバイエルン、ザクセン、プロイセン、バーメンなどの世俗諸侯とは異なり、ブリミル教のトリリア大司教が兼ねる選帝候

だった。

ゲルマニアの皇帝といえども、ブリミル教の偉容を背景に支配力を持つ彼らには迂闊な手出しができず、歴史上の皇帝はその大半が彼らの特権を黙認してきた。

近隣諸国と比べて“先進的”であると自称されるこの国でさえ、この地域を六千年に渡って支配してきた権威の前には、それほど他国との差異は存在しなかったのだ。

市街地の中心に存在する大聖堂、その地下室。

今やこの帝国の行く末を左右することとなった四人の選帝侯が、それぞれ机を並べて顔を向かい合わせていた。

彼らのうち三名がブリミル教の僧服に身を包んでおり、残りの一名が貴族的なマントを羽織っていた。

「……明後日、我々はこのゲルマニアに新しい秩序を産み出すこととなる」

最後の一人……、マントを羽織った初老の貴族がそう宣言すると、残りの三名も大きく頷いた。

続いて、僧服の男のうちの一人が、極めて嘆かわしいといった様子で口を開く。

「アルブレヒトは教会領地の国有化を進めようとしていた。だからこそ奴は命を失うこととなったのだが……。この悪しき流れは、ここで食い止めねばならない」

彼はなぜアルブレヒトがこの世を去ったのか、その確信を得ているようであった。

「今の皇太子は奴の肝いり……。しかしまだ子供であり、まったく

恐れる必要もないだろう。だがそれでも、万が一という可能性はある」

「“真の”皇太子殿下は何処に？」

真の皇太子——言うまでもなく、それは前帝の長子カール・アルブレヒトである。

父親に強い反抗心を抱いていた彼は、皇帝が目の敵にしていたブリミル教勢力と結託し、クーデターを企てたことさえあった。

「殿下……いや、陛下はすぐに戻られる。……我らの盟友、ガリアと共に」

「やはり、リュティスは動く？」

「うむ。奴らも我が帝国への領土的野心あつてのことだろう。だが今は、多少の犠牲を払ってでも事をなさねばならん」

前述の通り、カール・アルブレヒトはブリミル教勢力との結び付きが強く、また話は立ち消えとなってしまうものの、バイエルン選帝候の娘を妃として迎え入れる予定もあった。

彼を皇帝に仕立て上げ、その後見者となることで、彼らはより一層の勢力拡大を狙っていたのだ。

宮廷の内部にすら、ぼつと出の小国の出身者を快く思わない勢力が多数存在している現状を鑑みれば、帝位の篡奪など赤子の手をひねるがのごとく容易に進むと思われた。

まして、既に選帝候の過半数が離反している現状がある。たとえ皇太子派が投票工作を行ったとしても、この表差を覆すことはできないという事実があった。

「……我らの輝きしき未来のために、祝杯を」

そんなバイエルン選帝候の呼び掛けと共に、四人の男たちはグラ

スを手にしておもむろに立ち上がる。そして、互いにそれをぶつけ合った。

すると、まるで鐘のような高い音が地下室の中で響き渡るのだった。

……そんな、これから中央政府に反旗を翻そうとする選帝候たちの密会とほぼ同時刻。

ガリアのアルデラ地方——かつてはバーデン辺境伯が治めていた地域の森を切り開いて建設された、ガリア軍の要塞。

かつてゲルマニアの皇太子であった男は、ガリアの将軍と共に、祖国を攻め立てるために地形図へ目を通しているところだった。

カール・アルブレヒトが、地図上に記されたウィンドボナまでの侵攻路に見入っていると、そのすぐ隣で佇む男が彼に声をかける。

「明日には我が軍の主力隊がストラスブールを出立します。“敵”も警戒を強めてはいるでしょうが……」

侵攻軍の主力部隊は、ガリア東部の都市ストラスブールへ集結後、この要塞目指して進軍を開始する。

それからやや遅れて出立する別動隊は火竜山脈の北辺を進み、ゲルマニア南部の都市グラーツを目指す。南北からウィンドボナへ挟撃を仕掛けるという算段だ。

そしてさらにもう一部隊……、極秘でゲルマニアとトリステインの国境へ向かう部隊があった。

「バーデン、ヴェルテンベルクはウィンドボナ側に付くだろうが、それは無視していい。奴らにガリア、バイエルンを相手にする余力があると思えないからな」

「そうですね。……我が軍は、ヴェルテンベルクを強硬突破し、バ

イエulun軍と合流。そのままベーメンの首都を占領します」

「……プラークを？」

プラーク。ベーメン王国の首都で、クルデンホルフ家が支配するゲルマニア有数の大都市だった。

「はい。あの王はどちらかつかずの曖昧な姿勢を崩しておりません。万が一ウィンドボナ側に付かれることを考えれば……。それに、かの地は後背地としても有用でしょう。かの地を押さえれば敵の目はプラークへと釘付けとなり、『計画』の実行も容易になります」
「そうか。了解した。私は將軍の仰る案でよいと思う」

ベーメンのクルデンホルフ王家は、長年皇帝家に仕えてきた家だ。カール・アルブレヒトとしては、なるべく友好的な関係を崩したくはなかったが、今ガリアの意向に背くことは許されなかった。既に四つの選帝候がガリア側に寝返っているこの状況下。

元皇太子などを立てなくても、ガリア本国から皇帝となる人材を引っ張って来ると十分に可能だったし、あの“無能王”ならそれをやりかねないからだ。

現状はひたすら従順に振る舞い、利用価値があると思わせなければならぬ。

反撃するのは、玉座へ腰を据えてからでも遅くはないのだ。

続々とアルデラの要塞に集結するガリアの軍勢を眼下に納めながら、カール・アルブレヒトは底知れぬ笑みを浮かべるのだった。

季節は秋。実りの秋とも言われる、冬へ備えるための大事な時期。

ツェルプストー侯領もその例外ではなく、領地の至るところでその年の大地の恵みを収穫する作業が行われていた。

わたしは妹のアウグステと一緒に父に連れられてある農地を訪れていた。とはいっても、わたしたちは特にすることがない。

なので今は太陽の下でせっせと働く人々を眺めつつ、姉妹二人で畑の敷地の隅でまとめられた藁の塊に腰かけている。

ふと隣を見てみると。アウグステが足をぶらぶらと揺らしながら興味深そうに収穫の風景を見つめていた。

農作業を行うのは、『農奴』と呼ばれる土地に縛り付けられた農民たちだ。

なぜ“奴”などという言葉が付いているのかと言えば、一般にこの国で農業を担っている人々には移動の自由がなかったからだ。

封建領主にとって、自身の領地から上がってくる収益はなによりも大事な資産。

彼らに移動の自由を与えたがために、領地の生産高が減るようなことはあってはならない。それは貴族の生活の根底を揺るがす大問題となってしまう。

農奴は身分的には通常の平民に区分されていたが、ある意味で奴隷となんら変わらない身分であると主張する学者もいた。

ハルケギニア六千年の歴史において、この農奴制は何千年と続いてきた封建領主の支配を支える原動力となっている。

今までには何度か農奴制の廃止を行おうとした君主もいるにはいたものの、既得権益を持った諸侯や、教会領地で逃亡農奴を使役していた教会の反対を受けて、その全てが頓挫している。

……なぜ急にそんなことを考え始めたのかと言えば、ウィンドボナにいるカールの手紙で、そのことに少し触れられていたからだっ

た。

近頃の彼は、わたしとの手紙のやり取りにおいても、政治的な内容の話題を書き記すことが多くなってきた。

皇太子として帝都の宮殿で活動している以上、そういった話題に囲まれているのだから、手紙に書くようになってでも不思議ではない。それでも主な話題はあくまでも近況報告が大多数である辺り、やっぱり彼らしいと思うのだけれど。

……ただ、そんな手紙の文面の中でわたしがもつとも気にしていたのは、そういった類いのものではない。

ゲルマニア皇女マリア・テレジア……彼女こそ、今もつともわたしが注目している存在である。

マリア・テレジアは、カールの従姉妹に当たる人物だ。

彼女は宮廷内で孤立した皇太子にとっての数少ない味方であり、アルブレヒト三世の娘という立場がもたらす絶大な影響力をもつてしてウィンドボナの政府をまとめている。

……カールの帝都入りの際も、馬車の上から二人一緒に民衆へ向かって手を振っていたと聞いている。

元々皇女はプリンツ・オイゲン提唱のプロイセンのフリードリヒ王子との婚姻の話があったそう。

けれど、アルブレヒト三世は娘とカールとの婚姻を狙っていたらしい。既にわたしが婚約者として内定していたにも関わらず……。

カールが皇太子として帝都へ呼ばれて以来、彼とわたしの接点はほとんど手紙を通じてのやり取りに限られていた。

帝都で行われた大規模な国葬のときも、結局彼とは話せずじまいだったし……。なんだか微妙な気持ちになるものだ。

どうせならわたしを直に呼び出すとか、自分からツェルプストーヘ会いに来るとか、そういうアクションが欲しいと思ってしまう。

それは彼の立場上、そう簡単には事は運ばないことはわかる。
でも……。

それがわかっていても、心のどこかで納得できない自分がいることに気がつき、少しばかり驚く。

自分が婚約者に対してこんなふう独占欲を抱くことになるなどとは、今まで考えもしてこなかった。

あるいはマリア・テレジアという“敵”がいるから……、嫉妬のような感情を抱くのもかもしれない。

本気になれる相手がなかなかいないということもあるけれど、ツエルプストーの人間は基本的に移り気な性質だ。

数々の浮き名を流した祖父の血が流れている自分だって、本来ならばもう既に多くのボーイフレンドを作り、早々に経験を重ねていたかもしれない。

だけれど、今のわたしは婚約者を持つ身だ。だからできるだけ男性とは接点を持たずに——社交辞令で近隣の貴族の男子とお話をしたりすることはある——清い身体でいるようにしている。

とはいえ、自由奔放な恋というものへの憧れは当然ながらあるのだけれども。

親が決めた相手だとはいえ、ちゃんと結婚相手がいるのに遊び呆けるというのもどうかというところかしら。

それとも、恋愛ごっこ程度なら許されるのだろうか。実際、魔法学院では決められた相手と結婚する前に、まったく別の殿方とお付き合いをする女子生徒が少なからずいるというし……。

「姉さま、なにかいやらしいことを考えてない？」

収穫の光景をぼうっと眺めながら、ろくでもないことを考えていたのを見透かされたのだらう。アウグステが半眼になってわたしを睨み付けてくる。

「……恋について考えていただけだわ。ねえアウグステ、恋をするって素敵なことだと思わない？」

「したいならすればいいわ。でも、そうなったらまず姉さまは婚約を破棄されるでしょうね」

「それはそうよねえ……」

未亡人だとか、そこらの爵位もない下級貴族や平民と結婚するのならともかく。

次期皇帝の妃が、他の殿方と婚前交渉なんてしていたことが発覚した日には……、大スキャンダル間違いなしね。それこそ絶対に。

「姉さまはそんなに火遊びがしたいの？　ただ好奇心に突き動かされているというのなら、一度立ち止まって考えてみるというのも一つの手のよ」

「あなた、随分と言うようになったわね」

……アウグステもずいぶんとませてしまったようだわ。ちょっと前まではこんなこと言わなかったのに。

「……でも姉さまは、どうしてそんなことを考えてるの？　以前あの人と会ったときはあんなに仲が良さそうだったのに」

「そうね。でも、友人として好印象な人が、異性としても好印象だとは限らないわよ？」

「ふうん……。それじゃあ、姉さまはあの人を好きじゃないんだ？」

好きではないのかと尋ねられれば、それは違うと自分では思っている。

わたしは婚約者である彼を知り、出来る限り好きになれるよう心掛けてきたのだ。

決して理想の相手——白馬の王子様というわけではないし、そうなるはずもなかったけれど、だからといって嫌うということもなかった。

「お母さまは政略結婚でこの家に嫁いで来たけど、お父さまのことは愛している。わたしもそうできるようにするしかないわね」

「……そうなのかなあ？」

「どうしてそこで疑問符を付けるのよ」

妹のどこか腑に落ちないという声音と表情。この子はなにか思い当たる節があるのかしら。そんなことを考えつつ、わたしは視線を畑へと戻すのだった。

そして、この時点ではまったく予想だにしない事態——ガリア軍のゲルマニア本土侵攻の事実を知ったのは、それからわずか数日後の出来事だった。

第二十七話

「……なんだって？」

各地に放った諜報員などから伝えられ、まとめられた報告。それを執事のアドルフから知らされた僕は、思わず自分の耳を疑ってしまった。

聞くところによると、昨日未明、ガリアの大軍が突如としてゲルマニアとの国境を突破。瞬く間にバイエルン領内へと侵入してしまったそうなのだ。

さらにバイエルン側は一切の抵抗などを見せず、それどころか彼らもガリアと共に北東のベーメンへ進軍する準備を進めているらしい。……万が一あの土地が奪われて橋頭堡とされた場合、ドナウ川沿岸にある都市——ウィンドボナやパンノニアのプレスブルクが敵の攻撃に晒される可能性が高い。

これ以上の敵の侵攻を食い止めるには、ただちに軍を動員して対抗する必要がある。

だけど……。

今の時期から動員をかけたとして、いったいどれだけの兵が集まるのだろうか。兵を集めて軍を組織するのはそれなりに時間が必要なのだ。

正規軍の兵力だけでは、とてもではないが大国ガリアの軍勢へ対抗することができないのが現状でもある。

侵攻するガリア軍の兵力は、少なく見積もっても二万以上。対して、ゲルマニア軍がズデーデンやオーバーエスターライヒへただちに展開できる兵力は合計で三千強。

これは全兵力であり、そのほとんどを各地の防衛要塞に割り振る

関係上、野戦を行うのは不可能に他ならない。

せめてパンノニアだけにでも協力を得られれば、当座をしのぐことくらいは出来るはずなのだけど……。

しかし、パンノニア議会がそう簡単に兵力の供出に応じるかは疑問だった。なぜなら、パンノニア王国はゲルマニア中央政府に対し常に反抗的だからだ。

あの国は、ゲルマニア議会とは別に独自の議会や軍隊を有するなど、極めて高い独立性を持ち、さらには中央政府の統制を受けにくいような法整備がなされている。

恐らく、派兵要請を承諾してもらうのは大変な困難を伴うものになるだろう。交渉術がない自分にその役目は務まらない。

なにより、ガリアとの戦いでは僕自身が正面に立って指揮を執る必要があった。

無論、本当の作戦指揮を行うのはゲルマニア軍の將軍だ。素人の僕はあくまでも責任者……、総司令として戦場に赴くつもりだ。

ただでさえ脆弱な支持基盤しか持たない僕が少しでも皇帝として認めてもらうためには、やはり自分の体を張る必要があったのである。

渋い顔の官僚や軍高官たちにガリア軍への対応策を協議するよう命令した後、僕は執務室へとマリアを呼び出した。

皇帝の、自身の父親の死の直後にはかなり取り乱していた彼女だったが、今ではすっかり平静さを取り戻している。

……あくまでも表向きは。

彼女が内心どう考えているのか、それは僕にはわからない。だから、今はそっとしておきたかったのだけど……。事態が事態だ。それは不可能になってしまった。

マリアはどこか不機嫌そうな様子で、じとつとした眼差しを椅子に腰かける僕へと向けてくる。

「……意外と冷静に対処しているようですね。もっと取り乱すものだとはかり思っていました」

「僕だって、自分でも不思議なくらいさ。なんとなく、こうなるという予感があったのかもしれないね」

ガリアへ亡命した従兄の存在。以前からアルデラ地方で建設が進められ、つい最近完成したという要塞。西の選帝候たちの不審な動き。ジョゼフ王のあの態度……。

それらを複合して勘案したとき、このまますんなりと自分が即位できるだなどという、あまりにも楽観的な考え方はとてもではないができないかった。

恐らく宮廷内にも、僕ではなく従兄を皇帝として迎え入れようとする勢力はいるはず。いや、必ずいる。

敵対勢力の物理的な排除が容易でない以上、そうした人々を自然と黙らせるためには、この戦いで勝って自分の正当性を認めさせることが必要だった。

「マリア。きみにはパンノニアの議会へ赴いてほしいんだ。あの国の兵力を動員できれば、ガリア軍と正面から戦えるようになる」

「ですが、パンノニアの議会がそう簡単に首を縦に振るでしょうか？ 彼らは今を独立の絶好の好機と捉えていますわ。きっと、無理難題を吹っかけてきます」

「自治要求にはある程度譲歩しても構わない。とにかく、今のままガリアと正面からやりあうには、あまりにも正規軍の兵力が少なすぎるんだ。その点、あの国の騎馬軍団なら……」

「……そうですか」

彼女の懸念はもっともなものだ。アルブレヒト三世亡き今、ウィンドボナのトップが、事実上の外様大名である僕となっているこの状況を、絶好の機会だと考えているだろう地方勢力は多い。

しばらく、己の白金の髪を指で弄びながら考え込んでいたようだが、マリアはすぐに顔を上げる。そして、小さく頷いた。

「わかりましたわ。パンノニア議会の説得にはわたくしが当たります。あなたはガリア軍との戦いに専念してください」

「助かるよ。本当に、恩に着る」

「……まだ、成功は確約できませんわ。期待はしないでくださいね」

そう僕へと告げると、マリアは慌しい様子で執務室をあとにするのだった。

ガリア侵攻の報から一ヶ月後。

依然としてパンノニアの協力は得られなかったが、それでもようやくゲルマニア軍の防戦体制が整い始め、各地から続々と自軍の軍勢がオーバーエスターライヒのリンツへ集結を始めたこのとき。

ガリア軍がズデーデンの各要塞を突破、それからわずかな期間でベーメンの王都プラークを包囲したとの報が舞い込んできた。

やはり、防衛側とはいえ、少ない兵力で数万の大軍を止めるには限度があったようだ。それでも、決死で戦ってくれた将兵や、指揮官のブラウン將軍には頭が上がりない思いだ。

ここは気を引き締めなければならない。ここでガリア軍を食い止

めることができなければ、上下エスターライヒがガリアの脅威に晒されることになってしまう。

それはこの国にとって死活問題である。なんとしてでも、ガリアをベーメンから追い払わなければならないのだ。

リンツはゲルマニア中央部の大都市であり、大規模な兵站所がある。これから戦地へと赴くに当たって、ここで指揮権がばらばらの諸侯軍をゲルマニア正規軍へと編成し直すのである。

今回の僕の“補佐”……というより実質的な指揮官は、フォン・ナibelクという歴戦の将軍だった。

補佐には幾人かの候補が挙がった。そこで僕は、かつてロマリア戦役などで活躍したこの老伯爵に、事実上の指揮を任せることにしたのである。

自分に、大軍を動かすような指揮の能力はない。生憎、兵法の一切を学ぶ猶予すら与えてもらえなかったのだ。……学んだところで、それが通用する自信はないけど。

士気高揚のためなのだろうか。あるいは、プロパガンダ（この時代のハルケギニアにその単語はないようだ）の一環なのだろうか。僕は馬車に乗り、市街地で行われていたパレードに参加した。

たかだか十三の子供が軍服を着て、大柄な軍人たちに囲まれながら道を往く……。なんとも滑稽な光景だと考えてしまうのは、僕のことい過ぎなのだろうか？

沿道に集められた民衆の視線は不安そのものだ。僕ごときに国を守るのか、大いに不安なのだろう。

実際、兵の士気はあまり高くない。まだ脱走率はそれほど高くないようだったが、いざ戦闘が始まるとどうなることやら……。

「皇太子殿下万歳！」

「ゲルマニア万歳！」

恐らくはサクラなのだろう。数名の男たちが一斉に声を張り上げるものの、周囲の民衆からぼくへ向けられる視線は凍りつくように冷やかなものだった。

誰も彼も、恐らくは僕たちの敗北を予見しているのだろう。皆が口にしながらも、そう考えているのがよくわかる。

自分に民衆からの人気がないことは重々承知していたが、いざその事実を目の前になると、ちょっと心苦しいものがある。……やっぱり、民衆から人気のあるマリアのようにはいかないらしい。

季節そのもののなんとも寒々しい空気で満ち満ちたパレードを終えた後、僕は兵站場のすぐ近くにある建物へとやって来た。

ここは出発までの数日を過ごす、皇帝家の別宅だった。兵站場は近いものの、周囲は森に囲まれているためにあまり騒音が気になるということはない。

「お帰りなさい」

「ああ、ただいま」

やや寂びれた屋敷の玄関。どうにも意気消沈気味の僕を出迎えてくれたのは、軍に同行すると言って聞かなかったエリザベートだった。

彼女はまだ幼い。本来ならばウィンドボナに残してくるべきだったが……、頑なに態度を変えない彼女にこちらが折れた形で同行を許していた。

それも、このリンツまでではあるけども。さすがに、これから向かう北のメーレン、ベーメンにまで彼女を連れて行くことはできない。危険性がぐっと増すからだ。

自室までの道中、廊下では彼女は何も口にしなかった。きっと、僕の様子を見て軍事パレードの結果はよくわかったのだろう。

ようやく部屋へとたどり着くと、僕は軍服を脱ぎ捨ててベッドに背中から飛び込む。堅苦しい服装から開放されると同時に、大きくため息をついた。

「駄目ですよ、服を脱ぎ散らかしては。せっかくの軍服がしわになっ
てしまいます」

「ああ……、ごめん」

そんな僕の様子を見かねたのだろう。エリザベートが軍服を拾い上げ、埃を払う仕草をする。そして、手馴れた様子でハンガーへとかけて全体の形を直す。

あんな作業、本来ならば使用人がやるべきことだ。今は人払いをしているから、彼女が代わりにやってくれたけど……。

……この一ヶ月の間、世間では大なり小なりの動きが起きていた。最初に述べたとおり、パンノニアとの交渉は難航中。諸侯軍も思った数が集まらず、傭兵も様子見をするか、ガリアへ付く者が続出。大諸侯でも、王が病床に臥しているプロイセンは沈黙を貫いている。唯一、ザクセンはこちらに合わせて軍勢を出してくれるそうだけど……。

外国に仲裁を頼もうにも、トリステインは沈黙。ベーメン王と同家のクルデンホルフも同様に沈黙。アルビオンは内乱の兆候ありで他国どころではない。

ロマリアは、領土を巡ってガリアと対立しているサルデーニャ王国だけが、この内戦に関心を持っているようだ。

肝心の教皇庁は仲介さえ受け付けてくれない。……まあ、アルブレヒト三世は教会の権限を縮小しようとしていたし、ジョゼフ王も“あんな”感じだから、あまり両者とは関わりたくないのだろう。

僕が教皇ならそうしていただろうし、個人的な心情としては責める気にはなれない。

と、僕がそんなことを思案していると。エリザベートがとことくと近寄って来て、ベッドに腰かけるのがわかった。

「どうしたんだい？」

「あまり気分が優れないようだったら、少し気を晴らしてみてもどうですか？」

「気晴らし？」

「はい。お外でお茶を飲むとか、森林浴をするとか、魔法の練習を試してみるとか……。それとも、いつかわたしにくれたように、街を見に行くとか……。あ、でも、それは無理ですよね。すみません」

……他のはともかく、最後のは無理そうだな。でも、それが一番気晴らしにはなりそうには思うんだよね。

今の時間帯は無理だろう。けど、夜中にちょっと街へ赴くくらいなら……。ちょっとした変装をすればそれも出来るだろう。

数年後に物語の中で主役たちが行うように、夜の酒場で情報を集めるのも悪くはない。今の僕はフィルターを通した情報しか得られないから、民衆の本音を知る良い機会だ。

「……そうだな。街へ出る、というのも一つの選択肢かもしれない」

エリザベートには聞こえないよう、小さく呟きつつ。僕はそう心に決めた。

やがて、辺りがとっぷりと暗くなったところ。

軍人や地元の有力者との会食を終えた僕は、さっそく先ほどの考えを実行に移していた。

ちなみに、屋敷の警備は緩かった。僕が自分から外へ出るなどとは考えてもみなかったのだろうか。あるいは、それほど重要視もされていないのか。

とりあえず、理由はどうでもいい。恐らくは誰かに尾行されているのだろうが、干渉する気がないのなら放っておく。

夜間のリンツの町は多くの兵士とそれに相手に商売する人々でにぎわっている。あちらこちらで客引きが精を出し、少し暗い路地では、花売りらしい若い女性たちが兵士の手を引いていた。

一方の僕はといえば。浮かれてドンチャン騒ぎを繰り広げる兵士たちの間をすり抜けつつ、あまり目立たないだろう酒場へと滑り込んだ。

そして、カウンター席へと腰を据える。フードを深く被った姿はさぞかし怪しいのだろう。周囲の客や店主が疑り深い視線を向けてくるが、それは無視した。

「……坊ちゃん。ここは坊ちゃんのようなのが来る店じゃありませんぜ。なにがあっても——」

「まあ、そう言わないでくれよ。これで出せる物を適当に見繕ってくれ」

「へえ……」

店主は「さっさと出て行け」と言いたげな様子でアゴをしゃくったが、こちらがスウ銀貨を何枚かカウンターへ差し出すと態度は一変。なにも言わずに奥へ引っ込んでいった。

出される料理や酒に期待なんてしない。僕が知りたいのは、こういう場所で政治を語りたがる中年どもの意見だった。

……そうして、しばらく耳を澄ましていると。ちょうど、自分の真後ろの辺りにいるであろう三人組が、この度の戦争について話し始めたようだった。

「……にしても、ガリアは大軍でウィンドボナを取ろうとしているようだぜ？ あのボンクラ小僧で勝てるのか？」

「大きな声じゃあ言えねえが、俺はこの戦争はガリアが勝つと思うね。あの子供にや国をまとめるのは無理だ。今までよく分解しなかったってくらいだしよ」

「マリア皇女が指揮を執るっていうならよ、オレもクワを担いで一世一代の大勝負に出るけどよ……。あいつじゃあなあ……」

「そーいやあよお。あいつはなんでも、自分の軍隊を作って兵隊ごっこをしているらしいぜ」

「はあ……。まあ、本物のガキだからしょうがないけどよ……。もうちょっとなんとかならないのかね。戦のためだって言うんで、また税が上がりがった。これじゃあ、このたまの楽しみも数を減らさなきゃならねえ……」

「ははは、無茶言うな！ ありや全部大臣の言いなりさ。それどころか、本人はなにも知らないくらいだろうしよ」

予想通りの反響、とでもいえばいいのだろうか。彼らだけが世間の評判ではないのだろうか、昼間のパレードを見る限りでは他者もそう意見が変わるとは思えない。

税率引き上げについては僕も承知しているし、それが民衆の反発を招くこともわかっていて。戦費の調達のために、彼らが余計な税を取られることも。

僕は一旦彼らの会話から意識を外し、汚いグラスに注がれた不味いワインをすすする。料理も酒の肴にするのがやっつとで、普段は絶対に口にしないようならくでもないものだった。

もうこれ以上この場に長く留まりたいと思わず、僕は食事を終

えると足早に酒場を後にした。

再び夜の街へと繰り出す。相変わらず大通りは人でごった返し、酒場が道にまでテーブル席を広げて道幅を狭めるほどの有様だった。

……さて。次はどこへ向かうかな。また酒場にするか、それとも道を歩きながら、適当に道行く人の話を盗み聞きするか。

そんなことを考えながら歩いていると。不意に、僕の体が道行く兵士の一人に当たってしまったのだ。

「……すみません。失礼しました」

「あ？ おめえ、おれにぶつかっておいて“すみません”ったあどいうことだ？ いいか、おれは天下の皇太子直属の軍隊のなあ……」

酒に酔っているのだろう。まさか、自分の目の前にいるのが“皇太子”本人であろうなどとは微塵も思っていない。

ここで正体を明かしたら、この兵士はどんな反応をするのだろうか。それは少し気になったが、こんな街中で騒ぎを大きくしたくはなかった。

僕はそつとズボンのポケットに手を突っ込み、何枚かのエキュー金貨を掴む。そして酔いどれの兵士の手に握らせた。

「これはほんのお詫びです。どうか、これでお酒なりなんなり買ってください」

「あ？ あ、ああ……」

さすがに、こちらがいきなり何枚ものエキュー金貨を持ち出したことに疑問を抱いたのだろう。兵士はじろじろとこちらを観察。そして、なにかに気が付いたらしい。

「こ、今回は許してやる。これから気をつけろよ。二度はないからな！」

なんだか意味不明な捨て台詞を残しつつ、兵士は足早に、逃げるように去っていった。

……もしかしたら、彼は僕の顔を覚えていたのかもしれないな。何度か兵士たちの前に出たことがあるし、わざわざ直属がどうのと言っていたくらいだから。

「へえ、あなた。ただの子供じゃないようねえ」

そして、兵士の背中を見送った僕に声をかけてくる者がいた。その方向を振り返ってみると、若い女性がこちらを物色するように近寄ってくる場所だった。

あまり見ない髪の色だ。緑色、とでも言えはいいのだろうか。やはり酒に酔っているらしく、足取りはふらふらとおぼつかない。

積極的に関わらない方がいい気がする。特にこういう酔っ払いは……。そう考えた僕は、くると反対方向を向いて歩き出した。

「……皇太子が街へ来ているとは聞いていたけど、まさか一人でふらついているなんて思わなかったわね。まったく、のん気なものよ」

一瞬の悪寒。僕は慌てて杖を引き抜き、女性のいる方向を振り向いたが、そのときには既に、彼女の姿はどこかへ掻き消えてしまっていた。

いったい、あれは誰だったのだろう。どこかで見たような気もするんだけど。……まあ、いいか。

ほんのわずかな疑問はすぐに忘れ、僕はすぐに大通りを歩み始める。そして、やや道を進んだときのことだった。

「若様。そろそろお屋敷へお戻りになられてください」

「ヴルム？ やっぱりいたのか。そりゃ、僕が一人で外出できるとも思えないが……」

「ええ、最初から。……お屋敷でエリザベート様が心配されておられます。どうか、すぐにお戻りいただくようお願いします」

仕方ない。エリザベートを心配させるのも忍びないし、そろそろ屋敷へ戻ることになろうか。世間の僕の評判はだいたいわかったし……。

それにしても。このヴルムといい、他にも複数いるだろう護衛といい、まるで忍者のようだ。気配をまったく感じさせず、いつの間にかその場に現れているし。

結局、僕は彼に従って大人しく屋敷へ戻ることになるのだった。

寝ぼけたエリザベートが拗ねていたので対応を迫られたり、リンツの領主の屋敷が何者かによって荒らされたという報告を受けたりするのは、この少し後のことである。

第二十八話

ついに行軍を開始したゲルマニア軍は、非常にゆっくりとした速度で、メーレンの西部にあるブリュンという都市へとたどり着いていた。

ここで西進してきた約五千のザクセン・ポーランド軍と合流し、ゲルマニア軍の戦力は一万五千となった。開戦当初の六倍以上という彼我の戦力差はなんとか埋められた形である。

……ちなみに。ザクセンに関しては、戦勝の際にはアウグスト三世に皇帝領の一部を引き渡すという密約を結び、無理を言って参戦してもらった。

司令部はブリュン市の中央にある大きな館に設置され、軍人たちが慌しくどこかへと歩き去る様子が散見された。

戦争において、戦場となる土地の調査は戦局を左右する最重要項目だ。

地図の購入場所が軍事基地に限られ、さらに購入には政府発行の許可証が必要な国さえある。

これは、かつての戦争において“地図”は軍隊を動かす上でなくてはならないものだったからだ。

日本だって、戦前の地図は皇居の内部が白塗りになっていたりする。施設を詳細に記してしまうと、敵の空爆に利用される危険性があるからだ。

そのくらいの警戒をするのは当たり前だ。現代のように、原子力発電所の詳細な施設配置が、地球上どこでも閲覧可能なネット上で見られるような状況は少々異常なのではないかとも思う。

かつて、江戸幕府が伊能忠敬作成の日本地図の持ち出しを禁じたのも、詳細な地図を利用した外国による侵略の危険性を認識してい

たからである。

……長々となにが言いたいのかといえば、だ。

今、ゲルマニア軍首脳部の眼下に広げられているゲルマニアの地図というものは、非常に重要な価値を持っているという点である。

アルブレヒト三世が即位した年から始まった、ゲルマニア国内の測量。その目的は、国内の正確な領土面積の把握と、地図の作成にあった。

測量を担当した何十人もの貴族たちの血の滲むような努力によって作成されたそれは、僕が見ても非常に精巧な出来であるのが一目でわかるほどの代物だった。

「ガリア軍が展開しているのは、プラークの近郊部との報告が上がっております。とうに防御陣地は築いているでしょう。そうなれば……、こちらから攻めるのは得策ではない。どうにかして敵を誘き出し、各個撃破しなければなりません」

「それでは消極的過ぎはしないか？ 最低限、敵をベーメンから追い出さなければならぬ。まだプラークが落ちていない今こそ、我が軍による総攻撃が必要なのだ。正面突破こそ活路に他ならない」

「敵は強大です。正面からぶつかって勝てる保証はありません。それに、我々が敵にプレッシャーを与えるだけで、プラークへの攻撃は手薄になるでしょう。落城の心配は必要ないでしょうか」

「それは楽観的だ。ベーメン王は、この期に及んでどっちか着かずの曖昧な立場を貫いているだろう。今日この瞬間、ガリア軍へ白旗を掲げてもおかしくはない！」

先ほどから意見をぶつけ合っているのは、ナイベルク將軍とアウグスト三世の二人である。

どちらかといえば消極策を主張する前者、猪突猛進な積極策を主張する後者。ゲルマニア軍内部でも概ね意見は分かれていて、この

数日、軍はずっとブリュンへ釘付けの状態だ。

僕個人の意見としてはナイベルク將軍の意見に賛同したい。だけど、アウグスト三世はこちらの劣勢を承知で軍を率いて来てくれた。そんな彼の意見を蔑ろにするわけにもいかず……。

こんなことをいつまでも続けていても無意味だ。そうは思うのだが、今のところ打開策は見つからなかった。

どんよりとした空気の中。皆が皆、渋い顔をしていると、参謀の一人が突然立ち上がった。

「……おほん。プラークのガリア軍のことはひとまず置きまして、いくつかご報告があります。殿下、よろしいでしょうか？」

「構わない」

「はい。では、一つ目です。皇女殿下のパンノニア議会への訪問ですが、現在のところ議会で動きは見られません」

やはり、パンノニア議会への働きかけはうまくいっていないか……。予想の範囲内ではあるけれど、残念だ。

「二つ目に、先日再度の出兵要請を行ったシュレジエンの諸侯ですが、これはすべての諸侯が我々の要請を拒絶しました」

シュレジエンは、無数の中小領主たちが皇帝家の代理で統治する土地だ。鉱物資源に恵まれ、農業が盛んで人口も多い。皇帝家にとって非常に重要な土地だといえるだろう。

……そんなシュレジエンも、近ごろはやや不信な動きを見せている。それは最初の出兵拒否に始まり、戦費負担の拒絶、自治拡大要求、そして再度の出兵拒否と繋がってきた。

僕が原因でそのような態度を取っているのかはわからないが、いずれにせよシュレジエンの諸侯を放っておくことはできない。

その前に、まずはガリアをどうにかして追い出さなければならな

いのけど……。

「これ以上の戦力は見込めない、か……。ジリ貧のまま、消極的に戦いを続けるわけにもいかないだろう」

幸いなことに、こちらの軍勢には『砲亀兵』——巨大な亀の幻獣の背中に大砲を搭載した一種の自走砲だ——が存在している。その数は多くないが、敵の防御陣地の破壊は難しくはないはずだ。

ガリア軍は非常に長距離の移動を行っているため、砲亀兵のようなあまりにも鈍足の兵器を運用する余裕はない。こういった兵器を比較的容易に運用できる点が防衛側のメリットである。

ここで僕は席を立ち、将軍たちを見回した。

本来なら、ここは将軍やアウグスト三世たちが出した意見を裁可するべきなのだろう。けれど、このままでは軍を出した意味がなくなる。ここで足踏みをしている場合ではないのだ。

「砲亀兵の集中運用で、敵の陣地、歩兵部隊を叩く。ナイベルク将軍の仰ることももつとですが、寄せ集めの軍隊で長期戦は不可能です。ここは短期決戦を目指しましょう」

「し、しかし、殿下！ 敵の兵力はこちらを大きく上回っております。砲亀兵はあくまでも拠点攻撃用の兵器ですぞ、それを……」

「それはわかっています。ですが、貴方方はいつになったら結論を出して下さるのですか。こうして一万人を超える軍を動員しているだけで、毎日国家の財政は加速度的に疲弊している。もはや猶予はないでしょう。人心が我々から離れば、それだけで国は危機に立たされます。……ただちに全軍に命令を」

「ぐっ……」

慎重派の参謀の一人が異論を上げるが、僕はそれを意に介さない。……自分なりに毅然とした態度を取り繕ってはいるものの、内心

ヒヤヒヤである。もし僕の主張に強硬に異を唱える者が現れたら……、なんて小心者なのだろうか。我ながらそう思う。

「……わかりました。殿下がそう仰るのでしたら、私はそれに従うだけです。プラークへ向けて進軍しましょう」

「な、ナイベルク將軍！」

「見苦しいですぞ、城伯殿。殿下は現在この国の頂点に立つお方。そして軍の司令官でもある。そのご意向に背くことは許されない」

「……はい」

そう部下を嗜めつつ、ナイベルク伯爵自身まったく気乗りしない様子ではあった。

……細かい作戦は彼に任せよう。さすがに、アウグスト三世の言うような正面突破は無理があるだろうし、彼ならその辺りをうまく調節してくれるはずだ。

「子供がなにを粋がっておるのだ」——そう聞こえてきそうな高級参謀たちの視線を背中に浴びつつ、僕は一人でそそくさと司令室を後にする。

そして誰の目にも留まらないような物陰に飛び込み、大きくため息を吐く。壁にもたれかかって、ズボンのポケットから瓶を一つ取り出す。

これは胃薬だ。近ごろ胃の調子が悪くなってきたので、軍医に相談して処方してもらったものだった。錠剤を適量口に含み、嚥下する。これはすぐに効くわけではないが、気休めくらいにはなるのだ。

物陰から出て、廊下で少し窓の外を眺めながら休んでいると。不意に、背後から声をかけられた。

「おう、こんなところにいたのか」

現れたのはアウグスト三世だった。彼は機嫌が良らしく、ともすると不気味とすら形容できるような笑みを浮かべて歩いてくる。

「いやあ。お前さんがあの石頭共にガツンと言ってくれてせいせいしたぜ。あいつら、俺の話なんぞまるで聞く耳を持たないからな」
「……いえ。このまま行軍を停滞させることに危機感を抱いただけです。戦費だって馬鹿にならないし……」

酒場の酔っ払いたちが嘆いたこと。街頭で税が上がったと嘆く中年女性。そういった人々の言葉が、脳裏のどこかにずっと残っていた。

今回の戦争はやむを得ないものだ。敵が突然攻めてきたのだから、領土を守るために戦わなければならない。けれど、そのために民衆に際限の無い犠牲を強いることは許されない。

国家という家を支えている人々をあまり蔑ろにすれば、それは国家の崩壊にも繋がる。柱が腐り落ちた家は、そう時間を経たずして倒壊する運命にある。

別に、僕は平民万歳な思想を持っているわけじゃない。それでも、上に立つ者としての節度は守るべきだと思っているのだ。

「まあ、戦費は重いよな……。戦争に勝っても、戦費が原因で潰れた貴族なんて腐るほどいるもんなあ」

「今はガリア軍を追い出すことに専念しましょう。ザクセン軍の働きにも期待しています」

「おう、任せとけ！ やるからには勝たないとな！」

そう言い、アウグスト三世は僕にがっちりと組み付く。やたらと体格差があるわやたらと力が強いわやたらと距離が近いわで、胃が悲鳴を上げるのがすぐにわかってしまうのだった。

本当、変わった人だと思う。僕も他人のことは言えないが……。

——フランクフルト・アム・マイン。

ゲルマニア西部有数の大都市であり、数百年ほど前から歴代の皇帝がゲルマニア皇帝として戴冠式を行ってきた街でもある。

現在、この街はガリア・バイエルン連合軍の占領下に置かれている。主力隊がベーメンで苦戦している最中、なぜ彼らがこの都市を狙ったのか言えば……。

それは、この場にマインツ、トリアー、ケルン、バイエルンの各選帝侯が集まっていることから、推して知れることなのであろう。

市街地の一角、バルトロメウス大聖堂。これまでのゲルマニア皇帝の多くが——アルブレヒト三世が戴冠した巨大な聖堂の内部で、一人の男が今まさに戴冠の時を迎えようとしていた。

この場にはいない三人を除いた、過半数の四人。彼らは自分たちのみで皇帝選挙を行い、前皇帝の息子であるカール・アルブレヒトを皇帝とすることを決定していたのだ。

若きケルン大司教の手によって、皇帝の冠がひざまずいたカール・アルブレヒトの頭上へと持ち上げられる。

黄金の輝きを放つそれは、ゆっくりと着実に、これから皇帝となる青年の頭部へと下ろされていく。

……やがて、それが彼の頭へ完全に載せられたとき。

元皇太子カール・アルブレヒトは、ついにゲルマニア皇帝カール

七世となった。

父であるアルブレヒト三世を嫌っていた彼は、自らの名に含まれるアルブレヒトを名乗らなかった。かつての皇帝であるカール六世の名を頂き、その後継者を自負していたのである。

厳正な空気に包まれた戴冠式。出席者の半数がガリア軍の関係者という、少々異常とも言える状況の中で、カール七世は周囲を見回す。そして、口を開いた。

「現在、我がゲルマニアは建国以来の窮地に立たされている。トリステインの傍流の子供が政治の中枢に居座ったおかげで、政治が一部の大臣や官僚に牛耳られてしまった。腐敗が横行し、前帝以来のブリミル教僧院への弾圧は、一向に収まる気配がない。“元”皇太子は、民の心の安らぎである信仰を奪おうとしているのだ！」

内心、かつて自分から皇太子の座を奪った従弟の顔を思い浮かべながら。勝者の余裕を漂わせつつ、新たな皇帝は台詞を続ける。

「だが、そのような悪政はここで終わる。余が皇帝となった以上、もはや前帝の亡霊に身勝手な振る舞いを許すことはない。余の下へ集ってくれた、先見の明を有す優れた者たちよ。我らが盟友・ガリアと共に、ウィンドボナを汚染する小国の子供を叩き潰そうではないか！」

“叩き潰す”。明確な敵意が込められたその言葉に、ある者は眉をひそめ、ある者はそっと微笑む。一見して無表情な者も、内心ではほくそ笑んでいるのが明白であった。

小国出身の“元”皇太子を快く思わない貴族は多く、そうした人々がカール七世の下へと集っているのだから、ある意味でそれは当たり前の感情なのかもしれない。

戴冠式にはブリミル教の聖職者も多く出席していた。教皇庁からは、現教皇の側近である枢機卿が派遣され、ロマリアが秘密裏に新皇帝を支持していることを表していた。

カール七世の戴冠は即日公表され、フランクフルトの市街地はすぐに新皇帝誕生を祝う民衆がお祭り騒ぎを繰り広げていた。

彼ら平民からすれば、次の皇帝が誰であろうとそれほど興味を持つことはない。ただ、めでたい日だからと騒ぐ口実が欲しいだけに過ぎないのである。

皇帝の暫定的な住居となったブリミル教の教会。カール七世が窓から狂喜乱舞する民衆の様子を眺めていると、彼に近づく人影があった。それはまだ年若い女性であった。

彼女は眼鏡を光らせつつ、胸元に抱きかかえた書類に目を通して報告を行う。

「陛下。ガリア軍特殊部隊がツェルプストーの城への侵入に成功、元皇太子の婚約者の身柄を確保したとのことです」

「……そうか。報告ご苦労。身柄はこの教会へでも置いておこうか。そのように伝えろ」

「了解しました」

ガリア軍特殊部隊。ツェルプストー。侵入。婚約者。身柄を確保……。どう考えてみても誘拐の類ではないか。さすがに、そのような真似をして大丈夫なのだろうか。

どうにも物騒な言葉が並ぶにつけ、皇帝の親族でもあるケルン大司教は、やや呆れたような声を出した。

「穏やかではないですね」

「なに、あの子供には個人的な恨みがあってな。ガリアが北花壇騎士の腕利き——なにがしの兄妹を貸し出してくれるというのでな」

なにがしの兄妹。ケルン大司教も風の噂でしか聞いたことがないはずだが、恐らくは……。それを思案したとき、彼は背筋に冷たい物が走るのを理解した。

「元皇太子の婚約者……。彼女をどうなさるおつもりですか？」

ケルン大司教が恐る恐る問いかけると、皇帝は答えずに窓の外を見つめたままワイングラスをあおった。そして、大司教を振り返って口を開く。

「余の後とする。挙式は……。我々が勝利したその日だ。それも遠からず訪れるだろう……」

第二十九話

ブリュンを出発したゲルマニア軍は、すぐにベーメン王国領内へと進入。順調にプラークへ向けて進軍を進めていた。

非常に鈍足の『砲亀兵』の運用を行うため、やや予定より遅れは生じているが……、現時点ではそれほど問題がないと言って差し支えない程度の遅れである。

そして予想したようなガリア軍の抵抗もないうまま、ゲルマニア軍はベーメン盆地を進み、プラークまで五リーグの地点へと到達していた。

正直、拍子抜けしてしまうような行軍だった。もっと抵抗を受けると思っていたのに、敵はまったく抵抗しないどころか姿すら見せないのだから。

……ただ、状況はもっと厄介なことになってしまっているらしい。使い魔の鳥をプラークへ偵察に飛ばした貴族から、次のような報告を受けたのだ。

『プラークにて多数のガリア軍旗を確認』

これはそのままの意味で取れば、既にあの都市が陥落してしまっていることを示していた。あるいはベーメン王が籠城に堪えかねて降伏したのか、それは定かではないが……。

どちらにせよ、以前予想していた平地でのガリアとの直接戦闘ではなく、プラークのガリア軍との攻城戦が始まってしまうようなのだ。

敵がプラークを占領したタイミングでこちらが到着した以上、なんと少しでも敵を引きずり出さねばならない。

偶然に過ぎないものの、砲亀兵を運用することにした僕の判断は

間違っていないかったらしい。それに、一度籠城戦を経ているプラークの城壁なら、突破するのもそう難しくはないはず。

ここでガリア側の傭兵を捕虜とし、自軍側に引き込むことができれば、あるいは兵力不足解消の一助となる可能性もある。

まったく、色々と想定外の事態に見舞われるものだ。

「……敵は籠城している？　しかし周囲に伏兵を置いている可能性も高い。徹底的に、しらみつぶしに辺りを搜索せよ」

この状況を見たナイベルク伯爵は、すぐには城壁への砲撃を行わず、まずは周囲に敵が潜んでいないか調べることにしたらしい。さらには、伸びきった補給線の補強も行うようだ。

一通りの支持を終えた伯爵に、兵力の増派について問いかけてみる。しかし、返ってくる返事は予想通りのものでしかなかった。

「敵がティロル方面から侵攻してくる可能性もあります。これ以上、エスターライヒの守備隊の数を減らすことはできないでしょう」

「それもそうか。……このまま、うまく攻め落とせるといいんだけど

眼前に広がる盆地とその中央に聳え立つ大都市を見つめながら。

僕はこの近辺が記された地図へと目を通す。

と、慌しい足音と共に軍の士官が司令部のある天幕へとやって来たのは、この直後だった。

「皇太子殿下及びナイベルグ將軍に報告！　竜騎士隊、幻獣隊による偵察行動の結果、この周囲二十リーグに敵影は一切ないと確認されたとのことですよ！」

「……そうか。では、砲亀兵による破城攻撃を行なおう。全軍に通知しろ。プラークまで二リーグの地点へ前進するとな」

「は、了解しました！」

ナイベルク將軍の命令を受けた士官は、天幕へ入って来たときと同じく、慌しい様子で外へと駆け出していった。そんな彼の背中を見送ったあと、向かい側に立つ老将は僕を見やり、問いかけてくる。

「殿下はいかがないますかな？」

「僕も行くよ。ここで引きこもっていたって仕方ないから……。こんな中でも一応は名目上の指揮官なんだ。将兵だけ進ませるわけにはいかないよ」

『焦り』というのが、今の自分の感情を表すのにもっとも適しているかもしれない。

次期皇帝として認められたい、認められなければ困る。その為に自分から動く。ろくなことはできないが、とにかく前へ出る。でないと……。そんな焦りだ。

父と約束したシュレースヴィヒの奪還を成し遂げるために。ゲルマニアという国そのものを変えるために、僕は皇帝にならなければいけない。

絶対的な地位を得なければ、自分に出来ることなどなにもないのだ。

野営地を出発したゲルマニア軍は、砲亀兵が搭載している大型カノン砲の射程範囲ギリギリである、目標から二リーグの地点にまで接近を行っていた。

ここで十二の砲亀兵のうち、四機が砲撃の準備を始める。大型カノン砲は、一発打つごとに多くの人員とかなりの整備時間を必要とする。だから、全機一斉射を行うようなことはまずない。

出来る限り断続的に砲撃が行えるよう、ローテーションを組むのだ。それでも一回一回の間がかなり空いてしまうことには違いない

のだが……。

無論、プラークのガリア軍もこちらの動きは察知しているようだった。城砦に装着された大砲を発射しているのがわかるが、どれも老朽化しているのだろう、砲弾がこちらまで届かないのだ。

プラークは長い間攻め込まれたことのない都市だった。恐らく、クルデンホルフ家は大砲よりも商売に多くの金を注ぎ込んでいたのだろう。平時下ならばそれは正しい判断だ。

そのおかげでこちらに損害が出ないという良い効果もあったわけだし……。

「第一分隊、発射準備完了しました！」

「よし！　今回は射程ギリギリでの実戦だ、気合を入れていけ！」

整備兵と現場の指揮官たちのそんなやり取りの直後。巨大な亀の背中の巨大な砲塔から、これまた大きな黒い砲弾がプラークの城壁目掛けて発射されていた。

……しかし、一発目は発射時の角度が高すぎたのだろう。大きな放物線を描きながら、城壁の手前にある草原へと落下、派手な爆発音を引き起こした。

「次は砲塔を少し下げろ！　……第二射、撃て！」

再びの声。二番目の砲亀兵から砲弾が発射され、巨大な砲弾が城壁の内側へと飛び込む。直後、内部から轟音と共に土煙が舞う様子が垣間見えた。

「よし、三番は城壁を直接狙え！」

次の砲亀兵の砲撃はまたもやや角度を下げたようだった。今度は

城壁そのものを目掛けて発射・命中し、『固定化』がかけられた分厚い石の壁に大きなクレーターを生み出したのだ。

しかし、それでもまだ壁を破ることは出来ていない。直撃だったにも関わらず……、相当な強度を持った城壁のようだった。

だが。そうこちらのペースでことが運ぶわけでもない。敵がどうやら新しい大砲を配置したらしく、瞬く間に砲弾が砲亀兵の陣地まで飛んでくるようになったのだ。

砲亀兵は非常に鈍足だ。回避運動さえままならない以上、これ以上この場所に留めておくのは危険だろう。そう僕は考えた。

「四番、壁を砕け！」

しかし、後退命令を出そうとしたその直後のことだった。最後の四番機のカノン砲が火を噴き、残されていた城壁の一部を吹き飛ばしてしまったのである。

……だが、その代償に三番機の頭部へと敵の大砲が直撃。いくら砲亀兵ともいえず、頭部に大砲の弾の直撃を受けて無事でいられるはずもなく、やむなく放棄せざるを得なかった。

それがこの戦闘での、最初の犠牲だった。

——そろそろ就寝すべき頃合だろうか。

辺りがすっかり暗くなったところ、プラークから十リーグほど離れた平地で、一万五千のゲルマニア軍は再び野営を行っていた。

明日は日が昇り次第、再びプラークのガリア軍に対して攻撃を仕掛けるらしい。今度は主に城壁の内部を狙っていくそうだ。

そういえば、元々の市民はどうなったのだろう。それに、ベームン王の消息についてもまったく情報がないのに、そう城壁の内部を

執拗に砲撃していいのだろうか？

敵を損耗させ、疲弊させて白旗を揚げさせる必要があるが、あまり無関係な市民まで巻き込むことはしたくないのだけど……。

そんなことを考えつつ、専用の天幕の内部で偵察兵の報告書に目を通していたとき。ふと気がつく、周囲がにわか騒がしくなっていたのである。

……なにかあったのだろうか。なんとなく嫌な予感が脳裏をよぎったため、僕は自分の天幕を出て、司令部が置かれた天幕へと足を運ぶことにした。

やがて、司令部のある天幕へとたどり着いたとき。入り口に足を踏み入れようとした僕が耳にしたのは、参謀たちが沈痛な面持ちで放った台詞だったのだ。

「新皇帝が即位したというが……」

「カール七世はプラーク攻城の解除と、皇太子の即時逮捕を要求しているぞ。この派兵の正当性はどうなる？」

「と、とにかく、プレスブルクの皇女殿下にご意向を確認しないことには……」

カール七世……？ まさか、カール・アルブレヒトが皇帝に即位したというのか？　じゃあ、今回のガリア軍の侵攻は……、新しい皇帝を無理やり擁立するためのものなのか？

そんな疑念と共に、僕は司令室の内部へと足を踏み入れた。こちらの顔を目視した参謀たちは、皆一様に困惑した様子を見せるが、構わずに問いかける。

「カール七世というのは、カール・アルブレヒト皇子のことでいいんだね？」

「は、はい……」

「その件については後回しだ。新皇帝が何者であれ、ゲルマニアがガリアの侵略を受けている事実は変わらない。プラーク開放作戦は続行しなければならない」

「……」

そう容易く納得はできない、という様子か。それはそうだろう。

今の僕は、新たに即位した皇帝から『逮捕するように』との命令まで出されているんだから。

とりあえず大見得を切ってみたのは良いものの……。ゲルマニアでの実質的な権力の頂点にあるエスターライヒ大公は、マリアが保持している。

名目上のゲルマニア大公位を除けば、実質的にただの辺境の公爵でしかない僕にとって、マリアの支持と皇太子という地位だけが権力の支えだったが……。肝心の皇帝位を奪われてしまった以上、この先どうなるか。

あからさまに顔を逸らす参謀たちをなるべく目に入れないようにそう考えていると。突然、一人の士官が司令室に飛び込んできた。

「こ、皇太子殿下！　ご、ご報告申し上げます！」

「どうしたんだ？」

「北東方向より、シュレジエン諸侯の軍勢が我が軍に接近しております！　彼らは使者を派遣し、自らを援軍だと主張しているのです
が……」

シュレジエン諸侯？　……彼らはこちらから再三に渡って出した出兵要請を拒否してきたじゃないか。それがなんでこんなタイミングで……？

そう僕が思案したとき、またしても尋常ではない様子の士官が現れた。

「き、緊急事態です！ 南方を警戒中の竜騎士隊より、『我が軍の南方十リーグにガリア軍大部隊を確認』との……」

「なんだって……？ こちらは偵察隊を出したはずだぞ」

「そ、それが……、先立って南方の哨戒を担当した竜騎士、幻獣隊員らは所在がわからず……」

……やられた。まさか、竜騎士隊や幻獣隊に裏切り者がいたとは。どうするんだ、これじゃ……。ひとまず東方に向かって撤退するか……。

援軍を名乗ってはいるが、シュレジエン諸侯はほぼ間違いなくガリアの側についているのだろう。でなければ、こんな絶妙のタイミングで出兵を行うはずがないのだから。

「偵察隊より報告！ プラークの敵軍に動きあり！ 竜騎士を中心とした幻獣部隊が出現、まっすぐ我が軍へと侵攻を開始しました！」

三度の報告。完全に誘い込まれたらしい。ナイベルク將軍の言う通りにして、もっと慎重にことを進めるのが正しかったのだろうか……？

いずれにせよ、このままでは三方から挟撃を受けることになってしまう。ひとまず、どこか守りを固められる場所まで後退することが必要だろう。

恐らく、数では敵に敵わない。この状況で、こんな平原で正面からぶつかり合うのはあまりに不利だ。こちらは砲亀兵の後送も行わなければならないし……。

「前言撤回……、撤退だ。全軍、ブリュンまで引き揚げよう。プラーク開放作戦は……、失敗した」

もうどうしようもなかった。自分の無力さを悔いる暇もなく、ゲ

ルマニア軍は総員撤退の準備に忙殺されなくなってしまうのだった。

パンノニア王国首都プレスブルクで、パンノニア騎兵団の出兵要請を続けるマリア・テレジアの元に、『新皇帝即位』の報が届けられたのは、フランクフルトでの戴冠式の翌日のことだった。

彼女の兄であるカール・アルブレヒトの、カール七世としての即位。

それはまったく予想し得なかったものではないが、まさかそれが目的だと言わんばかりのタイミングで今回の戦争は起きたのであった。

——それから、さらに一日が経過したころ。

今日も議会の説得に失敗し、足早にプレスブルクのパンノニア議会堂を出たマリアは、同行していたオイゲン公に早口で己の意見を述べる。

「……ガリアの狙いは、傀儡の皇帝を立ててゲルマニアを牛耳ることでしょね。そして、今のタイミングでの即位はこちらの動揺を狙っている」

「皇太子殿下は支持基盤の脆弱なお方ですからな」

自身が君主のホルシュタイン。マリア・テレジアが継承した皇帝一族のエスターライヒ。名目上の婚約者の実家があるアンハルツ・

ツェルプストー侯爵領。

本当の意味での後ろ盾と呼べるものがあるのなら、せいぜいがその程度でしかない。

ゲルマニア政界で絶大な影響力を持つエスターライヒ大公位は、前帝の遺言を受けてマリア・テレジアが継承していたため、本来皇帝となるべき男の権力基盤はより一層脆弱なものとなっていた。

これは、アルブレヒト三世が自身の娘と皇太子の婚姻を半ば強引に進めるために編み出した方策であった。

絶大な力を自分の娘に持たせれば、自分の亡き後も娘との婚姻を既定路線として進められる。そういう考えの下で考案されていたのである。

だがしかし、それは甥である皇太子をより不利な状況へと追い込んでいた。本来ならば女子の継承が不可能なエスターライヒ大公位を、金印勅書の発行によって強引に娘へ継がせた結果なのだ。

「わたしはただちに皇太子への支持を表明します。兄を……カール七世を支持することはできません」

ふとマリアは足を止めた。そっと目を閉じ、かつての出来事を思い出す。

あれはまだ皇太子……、カール・ペーター・ウルリヒと出会ったばかりのころ。彼女の兄は、自身の父を自らの手で殺めようとした。ブリミル教寺院の関係者と結託し、クーデターを企てた。そのときに妹であるマリアにも手を出そうとしたことは、今も心の傷として残っているのだ。

そんな人間が今さら皇帝を宣言したところで、手を貸してやる理由などはない。少なくとも、彼女としてはその方針を変えることはない。

「その意見には賛同しますぞ。あのお方は、ゲルマニアの皇帝には

相応しくない。ただちにご退場願いましょう」

「……ええ。そのために、なんとしてでもパンノニアに協力いただかないなりませんわ」

オイゲン公は色々と思うところがある様子ではあったが、このままカール七世にウインドボナを明け渡しはしないという、マリアの方針には賛意を示している。

「そうと決まれば、パンノニアの議員の方々をもつと説得しなければ。ここまで強固に出兵に応じてくれないのはさすがに予想外できたが……、やれるだけはやりましょう」

そう、マリアが意気込んだときのことだった。

「こ、皇女殿下！ オイゲン公も！」

「……なんですか？ 騒々しいですわよ？」

彼女たちの前へと現れたのは、お付きの士官の一人だった。普段ならば冷静な態度を崩さない彼女の酷く狼狽した様子を見て、マリアは不安げに眉をひそめる。

「も、申し訳ありません……！ ですが、事態は急を要します！」

一昨日の未明、我が軍が敵の攻撃を受けました！ 主力隊はプラーク近郊の野営地を放棄、ブリュンへ撤退したようですが……」

「なんですか？」

「使者が隊を離れたとき、主力隊はガリア軍との交戦で押し負け、ブリュン市街地を放棄。近郊のアウステルリッツへ後退を始めていたようです」

アウステルリッツ。ブリュンの東方にある小さな町だ。

「……敵の規模は？」

「正確な数は不明ですが、ガリア軍は総数二万強。反乱を起こしたシュレジエン諸侯の軍勢が約一万弱。対する我が軍は、追撃による損害と兵の脱走で、既に一万を割っているようでして……」

そして、自身が非常に重要な土地として認識しているシュレジエンの貴族が反乱を起こしたことを耳にしたマリアは、呆けた様子で驚きを禁じえなかった。

「今回編成された部隊はいい加減なルートから集められた……雑兵が多い。当然ながら士気は低く、一度体勢が崩れると次々と脱走が生じてしまうでしょう」

「そんな！ では、皇太子殿は……」

「まだわかりませぬが……」

脱走は軍を運用する上での深刻な問題だった。兵を臨時徴用でまかなうことが多いハルケギニアの軍隊では、士気の低さからくる脱走率の高さの解消が一種の至上命題ともなっている。

プロイセンのように、徴兵制度を敷き、職業軍人を大量に生み出すことでその解決を図ろうとする国もあったが、強引な徴兵を繰り返したので、かえって脱走率が上がるという有様だった。

いずれにせよ、このまま放置すればゲルマニア軍の全滅は免れないだろう。いても発つてもいられなくなって、マリアは、先ほど出てきたばかりのパンノニア議会堂へと向かっていく。

「殿下。なにをなさるおつもりですか？」

「……もう一度、議会へ説得を行います！ もはや一刻の猶予さえないので！ 本気でやります！」

「な、なにを……」

プラチナブロンドの髪を振り回し、かつてないほど意気込んでいる様子のマリア。そんな彼女の背中を必死に追いつきながら、しかしオイゲン公は思案するのである。

——もはや今から援軍を出したところで、間に合うことはないのではないか、と。

第三十話

時刻は昼頃だろうか。

日の光が差し込む大きな部屋の内部。ベッドに腰かけながら、鉄格子の遙か彼方に広がる真っ青な空を見つめつつ、わたしは大きなため息をつく。

事ここに至っても、わたしは未だに自分の身に何が起きたのかを理解するに至っていないかった。

……否、そうではなく、ただ理解することを拒んでいるだけなのかも知れないけれど……。

どちらにせよ、自分が数日前までいたツェルプストーの城から連れ出され、この見たこともないどこかの屋敷に監禁されているという事実だけは、漠然とした形で残されているのだ。

襲撃を受けたときの正確な時間はよくわからない。

気がついたときにはもう、わたしはガリア軍らしい兵士たちによって身柄を拘束されてしまっていたのである。当然、杖の所在はわからない。

わたしが彼らから乱暴を受けるようなことは無かったけれど、家族や城の騎士がどうなってしまったのかはどうしても気掛かりだった。この部屋に連れてこられてから今まで、そればかりが脳裏を過っていく。

……このタイミングでのわたしの拉致。

恐らくは、ガリア軍のゲルマニア侵攻と関わりがあるのでしょうけど、なぜわたしを狙ったのかしら。

確かにわたしは皇太子であるカールの婚約者ではある。しかし、今となってはその立場も有名無実化しつつあった。マリア・テレジ

ア皇女の存在感に完全に呑み込まれてしまっていたのだ。

ま、それはそうよね。片やエスターライヒ大公、パンノニア女王、メーレン女王位を保持する皇帝の娘。片や個人では爵位も持っていない侯爵風情の娘……。こうなってしまったのも必然であったと言えるでしょう。

それを納得出来るかといえば、少し違うけど……。仕方がないことではあるわ。最終的な判断は当事者同士に委ねると父も仰っていたし。

わたし自身、自由な恋愛がしたいとか思ったりしていたわけではあるし……。

そんなどうしようもないことばかり思案し続け、このまま日が暮れてしまうかもしれないと思い始めたころのことだった。突然、部屋のドアがノックされ、一人の若い男性がわたしの目の前に現れたのである。

彼はブリミル教の僧服のような、しかし微妙に意匠を変えて製作されたことがわかる服に身を通している。

獲物を狙う猛禽類のように鋭い眼差しは、どこかあのアルブレヒト三世を思い起こさせた。

そして、頭頂部で光る、この国の最高権力者の証である王冠を見るに……。彼はもしかすると。

こちらがそのような疑念を抱いていることを理解したのだろう。

彼は寛大な様子でわたしに微笑みかけつつ、口を開いた。

「ようこそ、フランクフルトへ。ミス・ツェルプストー。会えて嬉しいよ。……余はこの国の新しい皇帝、カール七世だ」

「……新しい皇帝？」

「うむ。余は四選帝候の支持を受け、このフランクフルトで戴冠したのだ。きみの婚約者を差し置いて、ね」

なんとも不適な笑みを浮かべ、彼はそう口にする。

カールが選帝候の支持を取り付けられないうちに、ガリアの後ろ楯を得たこの人が皇帝として即位する。

そして生じるであろうウィンドボナ政府内部の不和を突いて、カールを皇太子の地位から引きずり下ろし、戴冠の事実を絶対の物とする……、といったところかしら。

しかし。

アルブレヒト三世はこの人から皇太子の地位を剥奪し、継承権も公には認めていない。今のところ正当性は無いに等しいのだ。

「……そうですか。それはよくわかりましたわ。ですが、わたしにはいまいち腑に落ちない点がございます」

「なんだね。遠慮せずに申してみよ」

「まず、なぜわたしが拉致されたのか。そして家族は無事なのか……。それが気になって、夜も眠ることができませんの。ぜひお答えいただきたいところですが」

最初の一日はともかく、近ごろはもう夜はぐっすり眠っているけれど。くよくよしたところで家族の安否がわかるはずもないですものね。……カール絡みのことではちょっとグダっているけれど。

「ふむ。そうか、それは悪いことをしてしまったな。だが、安心して欲しい。きみの家族には一切害は加えていないよ。始祖ブリミルに誓ってそう宣誓しようではないか」

こういう人が「始祖ブリミルに誓って」なんて言い出すのを聞いていると……。なんか胡散臭いのよね。教会の人とはとても仲が良いやうだけれど。

あまり感情を顔に出しすぎたからなのだろうが。そんなわたしの思考を察したのだろう。カール七世を自称するこの青年は、どこか

困ったような表情となる。そして頭を振った。

「余は信心深いブリミル教徒だ。神聖な始祖への宣誓を違えることは無い。前帝や、きみの“元”婚約者のように、信仰を蔑ろにするつもりなどはまったくくないよ。まして、婚約者の家族に害をなすなど……」

「“元”？ 婚約者？」

なにを言っているのかしら、この人は……。カールとの婚約は解消してなんかないのに。

けれど、そんなわたしの思案とは裏腹に。自らを皇帝であると宣言するこの男性は、大仰な身振りを加えて宣言を行うのだ。

「きみの父上との“話し合い”の結果、きみとカール・ペーター・ウルリヒの婚約は解消された。そして更なる話し合いの結果、きみは余の後となることが決定したのだ」

「……なっ！？ あ、あなた、父になにをしたというの！？」

「だから、言っておるではないか。“話し合い”をしたとな。それ以上でも、それ以下でもない」

「あ……、あんた……、お父さまに下手な真似をしてみなさい。ただでは済まさないわよ……！」

なんなの、この人は！ 家族に害は加えていないだなんて言うておいて……！

「ふん。反抗的な子供だな。だが、そうでなくてはわざわざ后にしてやる意味がない。余は本来肌の白い女性が好みなのだが……、その気概に免じて、妥協してやろうぞ」

「触らないで！」

こちらに向かって伸ばされた手を、強く払い除ける。こんな人に触らせるなんて冗談じゃないわ。なにが后よ。冗談はその目付きの悪さだけにすればいいのよ。

「……まったく、なかなか気が強い。だが、いつまでその余裕が保てるのだろうか？」

「なにが言いたいのか」

「なに。まあ、今のきみには関係のないことだが……、我らが盟友ガリアとシュレジエンの軍勢が、偽ゲルマニア軍を撃滅する寸前であるというだけさ」

偽ゲルマニア軍？ それって、ベーメンに侵攻したガリア軍を撃退するために編成された軍隊だったはず……。実質的な指揮官はナibelク伯爵で、総司令官は……。

まさか。

「……彼が？」

「ご名答。今ごろは、ガリアかシュレジエンの兵士に打ち取られているところではないかな？」

「この……、きゃ……っ」

「おっと。今のきみは杖もないただの小娘だ。余に勝てると思うなよ？ 肌の色は気に食わないが、容姿だけなら一級品であることは間違いないからな。進んで傷を付けたくはない」

とっさに近場にあった花瓶を手に取りろうとしたわたしの腕を掴み、青年は強く力を込める。自力で両者の明確な体格差を覆すことができるはずもなく、わたしはただ小さな悲鳴を上げることしか出来なかった。

サディストの類いなのだろう、目に涙を溜めるわたしを恍惚とした笑みで見下しつつ。去り際に、皇帝の冠を頭に載せた男は余裕の

声音で告げるのだ。

「奴の戦死の確認が取れ次第、余はウインドボナへと向かう。花嫁衣装に身を包んだきみを連れてな。民も祝福してくれるだろう！」

そんな。そんなこと……。

高笑いしながら部屋を出ていく男の背中を、ただ見送ることしかできないまま……。どうしようもなくなったわたしは、ただただその場で身を凍らせることしか出来ずにいるのだった。

ガリア軍やシュレジェン諸公軍に包囲されたまま——アウステルリッツでのにらみ合いが始まって、実に一週間が経過していた。

事実上、ゲルマニア軍は戦略的な撤退に失敗していた。

兵の訓練が行き届いておらず、予想外の事態が起きたことであつという間に使い物にならなくなったこと。砲亀兵を運用するという前堤を守ったため行軍が遅れたこと……。

理由はいくらでもある。だが、結局はそれをうまく乗り切れなかった僕の責任だ。責任逃れをすることはできないし、するつもりもない。

彼我の戦力差は明らかであり、もはや正面から戦って勝つ見込みがない以上、僕が囹になって時間を稼ぐくらいしか手は残されていないだろう。

かといって、そう易々と敵の前に出て行くことも出来ないのだが……。

ちなみに。

早期侵攻のそもそもの提案者であるアウグスト三世は自分なりに責任を感じているのか、ここのことろずっと気落ちした様子を見せていた。

……だけど、最終的に作戦を判断したのは僕だ。彼に責任を押し付けることはしない。

「現状、この地からの撤退すら容易ではありません。北にはシュレジエン諸侯の軍、西にはガリア軍。少しでも動きを見せれば、すぐに敵は追撃戦を行うでしょう」

「ここは要人のみ脱出させるべきでは？ 残った将兵は降伏させればよい」

「何を仰るか！ それでは、我々の数少ない貴重な兵力が失われてしまう！」

「既に収穫期は過ぎた。農民の徴用も十分に可能なのだから、ただちに援軍を組織させるべきだ」

「だが、それが終わるまで敵が動かない保証はない」

臨時の司令部にて、参謀たちが「ああでもない」「こうでもない」と延々と舌戦を繰り返している。こうしている間にも、また五人ほど兵が脱走したと報告が入ってきているのに……。

「やっぱり、ここは俺がしんがりを務めるしかないだろうな。お前はウィンドボナへ帰れ。帝都に戻ればなんとでも手の打ちようはある」

「やめてください。最高責任者が逃げ出してどうするんですか。僕は残りますよ。あなたこそ、ここは引くべきです」

「そうはいくか。乗りかかった船からは降りられねえよ」

そう呟きつつ、僕の隣りに立つアウグスト三世は窓の外を見つめた。

臨時の司令部が置かれているのはアウステルリッツの中心部にある宿の最上階だった。ここからなら、町の外側までを見渡すことが出来るのだ。

……窓の外に広がっていたのは、町の西側と北側を包囲する数多の敵軍の姿だった。敵はこちらの砲亀兵のカノン砲の射程圏外から虎視眈々と“チャンス”を窺っており、まったく身動きが取れない。これはもう、将棋やチェスでいう“詰み”の状態であるとしか言えない。

時おり偵察兵らしき風竜がこちらを挑発するように飛んできては、襲来に気が付いたこちら側の対空砲火を易々とかわし、余裕のある様子で自軍の陣地へと引き揚げていく。

そんな中で僕に出来ることは、そんな光景をただ唇をかみ締めながら傍観することだけだった。来るかもわからない援軍を待ちぼうけ、神経をすり減らすだけ……。

「おいおい。大將がそんな顔じゃ將兵が不安がるぜ。少し気晴らししてこいよ」

「……そうします」

ずっとこの臨時司令部にいたら頭がおかしくなりそうだ。アウグスト三世の言う通りに、僕は少し外へと出てみることにした。

アウステルリッツの住民の大部分はあらかじめ退避させている。そのため現在この町には、退避しなかった少数の住民とゲルマニア軍だけが残されていた。

護衛のミスタ・ヴルムに付き添われながら、僕は砲亀兵の一部が配置されている町の広場を訪れていた。……そういえば、彼と二人

になるのはずいぶんと久しぶりな気がする。

砲亀兵は“生きた”兵器だ。主にハルケギニア南部――ロマリ
アに生息する巨大な亀の仲間で、背中の巨大な甲羅にカノン砲を搭
載することで、ある種の自走砲の役割を果たすのだ。

この砲亀兵はハルケギニアの攻城戦の歴史を塗り替えた画期的な
兵器として、軍の指導書でも紹介されることが多い。

しかし一方で、砲亀兵は運用には問題も多い兵器である。

なにせ自走するのはいいが遅い。この砲亀兵のおかげで、行軍に
はかなり支障をきたしてしまった。

また、あまりにも重いので、攻城兵器としてアルビオンに持ち込
まれることはない。地上の拠点間をフネで運搬するのも、大型の輸
送船で一体程度が限度である。

おまけにとにかくよく食べる。馬も食事や水には気を使わなけれ
ばならない生物ではあるが、この砲亀兵はそれを遥かに凌駕する。

もし今、この場に地球にあるような自走砲があれば、僕は今すぐ
にでもこの巨大な亀たちを元の棲みかへと帰してやることだろう。

……とまあ。僕はそんなことを考えながら、恐らくは軍属だろう
青年が砲亀兵の世話をする様子を眺めていた。

もっとも手前側に鎮座している砲亀兵からはカノン砲が取り除か
れ、作業員が数人がかりで甲羅にブラシを当てている。どうやら、
甲羅についた汚れを落としているようだった。

映画に登場する怪獣のような迫力を持った大きな陸亀は、手足を
甲羅に収納し、とても大人しく作業が終わるのを待っている。恐ろ
しい見た目に反して、そこまで凶暴な生物ではないらしい。

もし無事にこの戦争を乗り切ることが出来たら、あの亀に乗って
みたいものだ……。

そんなことを考えた、そのときのことだった。

「で、殿下！ 緊急事態です！」

「どうしたんだ？」

またか。

正直そう思わずにはいられない内心を悟られることがないように気を付けつつ。僕は、慌てた様子で駆け寄ってくる士官の向かって返事をする。

「ガリア軍とシュレジェンの反乱軍が一斉に進軍を開始しました！こちらへ真っ直ぐ向かっています！」

「このタイミングで？」

「は、はい。どうも、敵は伸びきった補給線の補強を行っていたようです」

なるほど。万が一の討ち漏らしがないよう、功を焦らず準備は万全で来たということか……。相手の司令官は中々に慎重な性格のようだった。

とにかく、このままぼさっとしているわけにも行かないだろう。敵が来る以上はそれを迎え撃たなければならない。ブリュンるときとは違って、市街地をフルに使った戦いになりそうだ。

「よし。全軍に通達。各自、あらかじめ構築した陣地にて敵を迎え撃て。砲亀兵はただちに砲戦用意——」

「砲撃、来ます！ ガリア軍が大型カノン砲を使用した模様！」

僕が指示を出そうとした瞬間のことだった。広場のどこかで将兵の誰かがそう叫び、思わず空を見上げる。すると、そこはなにか黒い物体で埋め尽くされているのだ。それは鳥ではなかった。……鳥ならば、どれだけ良かったことか。

砲弾だ。恐らくは、進軍するガリア軍の後方から放たれたであろう、長射程の砲弾の雨が、風竜に乗った風メイジの弾道操作でこち

らに向かつて真っ直ぐに飛来しているのだ。

なんてことをするんだ。これじゃ防ぎようがないじゃないか。

僕は慌てて周囲を見回したが、周りの誰もがこの場から逃げることに必死だった。……無理もない。あの空を埋め尽くす砲弾の雨を目の当たりにして、逃げ腰にならない人間はそうはいない。まして今のゲルマニア軍の士気は最悪の状態なんだから。

万事休すか。

そう思ったとき、不意に体が宙に浮く感覚がする。どうにも誰かが僕の体を持ち上げているらしく——それを今この場で為せるのはミスタ・ヴルムだけなのだと思がつく。

彼は風の魔法を使って広場の端まで移動すると、出来るだけ頑丈そうな壁の影に身を潜めた。そして、何重もの『エア・シールド』を展開。僕を庇うような体勢を取った。

「若様、耳を塞いでください」

「あ……、ああ。わかった」

彼の言う事に異論を唱えることはせず、僕は出来る限りの力で自分の耳を塞ぎ、砲弾の着弾を待った。

そして、それからほんの数秒後。

耳を塞いだ手越しに猛烈な炸裂音、震動が伝わり、視界をもうもうとした土煙が覆い尽くす。やがて砲弾の何発かがこちらへ向かって飛来し、ミスタ・ヴルムの魔法の壁に衝突。

激しい閃光と爆風の末——何が起きたのかも理解できぬうちに、僕の体は宙を舞っていた。

「あなたはもっと真剣にこの国の言葉を学ぶべきです。毎日毎日兵隊ごっこの遊びに明け暮れて……、それで次の皇帝が務まるはずがありませんわ。陛下も呆れ気味ではありませんか」

……？

誰だろう、この女性は。まったく見覚えのない顔だ。言葉遣いからして、どこかのお嬢さまかなにかだろうか。それにしても、誰に向かって喋っているのだろうか？

そんな疑問を抱いたのだが、それはすぐに解決された。よくよく見れば、女性のすぐ目の前に同年代だと思わしき男性の姿があったからだ。

「なにを言うか。私の趣味には口を出さないで貰いたい。……だいたい、こんな野蛮な国の言葉など覚えなくても十分ではないか。祖国の言葉だけ話せばいい」

男性はなかなか尊大な態度で台詞を述べる。彼の手には、ゲルマニアの言語によく似た言葉の綴りらしい書籍がある。

「それは聞き捨てなりませんわ。あなたはこの国の皇帝となるお人です。民の話す言葉を理解せずして、どうやって彼らを……民衆を理解するのでしょうか？ 啓蒙君主として君臨なさるおつもりなら、もっとこの国のことを——」

「……ふん。いつまでもそうやってわがままを言っているといいさ。私はこれから彼の著作を読まねばならん。これで失礼するよ」

「あなた！」

あなた。あなた、か……。なんとなく、二人の間柄が見えてきたような気もするけど。見た限り、この二人の仲はあまりよろしくないんだろうな……。

一方的に会話を打ち切り、男性は部屋からすぐに出て行ってしまった。一人部屋に残された女性は、どこか寂しそうに首を振ったのち、なにかの書籍を開く。彼女はずっと背を向けていて、僕の立っているであろう方向は振り返らない。

……と。

ここでようやく気が付いたが、これはどうも夢のようだ。だんだんと意識がはつきりしてくるのがわかる。

次第に体の感覚を取り戻していく。背中がなにか硬いもの……、恐らくは瓦礫かなにかに当たっていること、そして自身が怪我を負っていることが理解できた。

夢のことは妙に気になったが、あんな断片的なものを深く考えてもしようがない。今は周囲の状況を確認することを最優先としなければならぬ。

「西のプラツェン高地の守備隊は全滅だ、間もなく敵軍が城壁に到達するぞ！」

「砲亀兵は無事か!？」

「現在動けるのは第二分隊の三番だけです！」

「構わん、手当たり次第にぶっ飛ばせ！」

「手が空いている者は守備陣地へ向かえ！　なんとしてでも殿下が脱出する時間を稼ぐのだ！」

「だが、皇太子は先ほどの爆発に巻き込まれたという情報が……」

「話してる暇があるなら一発でも多く撃て！　……にしても、上はなにをやっているんだ！　命令の一つも出さねえで！」

……現場は大混乱に陥っているようだ。ここからでも将兵の焦る様子が伝わってくる。肝心の僕がこんなところで寝ているわけにもいかないだろう。

『ヒーリング』で怪我の応急処置をし——あばらが何本か折れているようだが、僕の能力ではそこまで手が回らなかった——臨時司令部へ向かって歩き出す。

そういえば、ミスタ・ヴルムはどうなったのだろうか。彼ほどの実力者ならば、いくら大砲の弾を受けたからといって、そう簡単にやられるはずがないのだが……。

そんなことを考えつつ、とぼとぼと臨時司令部のある宿を視界に収めようとしたときだった。

「……無い？」

そこにあるはずのものがなかった。あえて存在しているものを挙げるとするならば、それは瓦礫の山だけ。レンガの山からはあちこちから黒い煙が燻り、何かが焦げたような臭いが鼻をつく。

臨時司令部が破壊されていた。先ほどの雨のような砲撃が原因だろう。ならば、この建物の中にいた人々は……。

指揮系統は混乱していたのではなく、完全に崩壊していたのだ。この臨時の司令部にいたはずの参謀や将校が“いなくなってしまう”ことで、もはや軍を統率するのは士官レベルの貴族だけとなった。

組織だった戦闘はもはや不可能だ。このままなし崩し的に戦い続けたとしても、それでは損害が増えるだけで、もう意味がない。完全に無意味な戦いなのだ。

「終わった、のか……」

どうしようもなくなり、僕はその場に座り込んだ。周囲には誰もいない。聞こえてくるのは散発的な爆撃音、銃撃音、魔法による破壊音、どちらの兵ともつかぬ人々の悲鳴……、そればかりだった。

今から自軍の兵士たちに降伏するよう伝えようにも、その手段す

ら自分は持っていなかった。

なにもできない。なにかを行うための術を持たない。
あまりにも無力だった。

もはや泥沼の戦場と化したアウステルリッツ市街地の中心部で、
僕はただ天を仰ぎ見ることしかできなかったのだ。

第三十一話

皇太子がガリア軍によって捕縛された――その報せを受けたマリア・テレジアは、ただちに本国の残存兵力とようやく協力に応じたパンノニア軍をバーメンへと向かわせることを決めた。

総勢一万五千ほどのこの軍の総司令官にはウィンドボナ防衛隊のフォン・ケーフェンヒュラーが任命され、即日でその任に就くこととなった。

元々、彼は帝都の警備隊隊長という要職を任されるほどの男だった。当然ながら軍内部での地位はあり、今回のような非常時の司令官に抜粋されることも十分にありうる。

しかし。

彼は初めから今回の派遣軍の司令官に任命されたわけではない。

本来ならば指揮を執るべきだった人物は他におり、その人物“たちは皆体調不良を理由に総司令を固辞していた。

実際のところ、この戦いはもはや“負け”なのだとゲルマニア国民の誰もが感じていた。

皇太子は先立ってガリア軍より「捕縛した」との発表はあったものの、実際にはその生死は不明である。死亡説も依然として有力視されていた。

ゲルマニア軍は壊滅し、指揮官のナイベルク將軍やザクセン公といった重要人物たちも行方が知れない。連絡の一つとして取れないままである。

そんな状況下で、ただでさえ数で圧倒的に劣る自軍を率い、優勢なガリア軍や四選帝侯軍、シュレジエン諸侯の軍勢などと戦いたいと考える人間がいるはずもなく。

ケーフェンヒュラーが着任を了承するまでの間、軍務大臣はあちこちの將軍たちの下へと直談判をする羽目になってしまっていたの

だ。

かといって、ケーフェンヒューラーはそのような大臣の姿を見て哀れみ、ほぼ勝算のない戦いの司令官という任務を請け負ったわけではない。

彼にはこの戦いに勝てるという確信があった。

それは他人に納得させられるほどの明確な根拠を伴うものではない。決してなかったが、彼はどういうわけかその手の直感が働くことが多いのである。

「しかし、将軍。本当によろしかったのですか？ この戦いは……」

「皆まで言うな。だが、私は勝算がまったくない戦いはしない」

「え？ そ、それでは……」

「さあな」

「しよ、将軍！ どうしてそこではぐらかすのですか！」

例によって部下のダウンとそんなやり取りを交わしつつ。彼は帝都の新聞社が発行している新聞に視線を落としていた。一面には、大きな文字で『プロイセン新国王戴冠』の文字が踊っている。

「それは、プロイセンの新しい国王の記事ですか。フリードリヒ二世……」

「まだ若いそうだな。皇太子殿下とそう年も変わらないようだ」

「早いものですな。父王の喪に服する間もなく戴冠するのですから」

やや侮ったような――若干十三歳の皇太子に対して、ダウンは他のゲルマニア人がそうであるように、やや皇太子を軽んじるような態度を取っている。

それは主に皇太子の年齢もあったが、大半の部分においては年相応程度の幼稚な働きしかできない皇太子に対する軽蔑の意味合いも

混じっていたのである。

“あの”アルブレヒト三世が、自ら現積極的に皇太子への擁立を推進した人物だというのに、肝心の当人は時代に逆行するような血統だけが取り得の人間だった。

これにはさすがに、自分たちの權益拡大を目指す新進気鋭の新興貴族のみならず、伝統を重んじ血統を重視している旧来の貴族層からも反発が上がる始末だった。

なぜなら、彼らは血統に見合うだけの能力を持った人材を神輿として欲していたからである。無能な人間は自分たちにとって害悪にしかならず、ただいけ好かない新興貴族を増長させるだけの腫瘍なのだ。

批判を表立って口にする者がいなくとも、内心ではそのように考える者が大多数というのが、この国におけるおおよその世論である。だからこそ、ダウンは自らの上司がそのような選択をしたことが不思議でならなかった。

こんな負け戦に……、それこそ自身の将来に悪影響を及ぼし、後世の人々に鼻で笑われることになるかもしれないような出来事に、どうして首を突っ込む必要があるのか。疑問は際限なく湧いてくる。

「……」

しかし、だ。

ダウンの眼前で新聞に目を落とすこの男の思考など、所詮は他人である彼には理解しようもなく、またその気もなかった。ダウンはあくまでも軍人であり、上官の命令には絶対服従なのである。

まだ年若い、未熟ともいえる青年将校は、進軍を続けるベームン派遣軍の兵士たちを馬車の車窓から見やりつつ、己や上司の行く末を案じるのだった。

——西のザルツブルク市近郊へ、ガリア軍の大部隊が出現した

という情報が彼らにもたらされることになるのは、この直後のことであった。

ベーメン王国首都プラーク。

この都市において、ガリア軍に捕縛された“元”皇太子カール・ペーター・ウルリヒは王城の地下牢にて監禁されていた。

ある意味で、彼は当初の目的を達していた。本来自分が攻め落とそうとしていた城壁の内部へと入城するができたのであるからだ。ただし、ガリア軍の捕虜という立場ではあったが。

曲がりなりにも彼は貴人である。本来ならばその地位に応じた環境が提供されるのはハルケギニアの常識であったが、彼を収監するにあたってはそうした常識は適用されなかった。

“貴族でない者たち”の中でも、特に最下層に位置するような人々が閉じ込められる冷たい地下牢。それが今のカール・ペーター・ウルリヒの居室である。

周囲は悪臭が酷く、少しいただけでも鼻が曲がりそうになるほどだ。光と呼べるものは鉄格子の外にある小さな松明の物だけで、牢獄の内部は暗闇が支配している。

どこからともなく……、おそらくは乱雑に敷き詰められた苔むした石の隙間から湧いてくる、姿の見えない虫たちが小さな音を立てるたび、少年の神経は透明なやすりですり減らされていく。

食事は一日に一回。それも、申し訳程度の小さな干からびたパンと、水のような味の薄いスープだけ。それを差し出す衛兵は、酷く投げやりな様子でトレーを放り投げる。

さすがに便所は衛兵用のものを使用することができたが、背後に

は常に衛兵が立って監視をしてくる。とても落ち着く暇さえなかった。ここでも、カールの心はすり減らされていく。

しかし、戦争に負けたという自覚があったからなのか。彼はこの待遇に対して異論を上げることとはしなかった。それがたとえこの時代の水準から見ても異常なものだったとしても、ただ沈黙を貫いた。そもそも、彼は自分には待遇の改善を訴える権利さえないと考えていた。

事実上の敗戦によって、彼の指揮下にあった部隊は文字通り壊滅した。なんとかガリア軍から逃げきれた者がいただろう。だが、大多数は殺されるか捕虜になっているはずなのだ。

その中にはもっと過酷な状況の下に置かれている人々がいるだろう。名目上とはいえ先の派兵の責任者である以上、自分だけがぬくぬくと貴人の待遇に甘んじることは決して考えるべきではない。

そんなことばかりを彼は延々と思案し続けていた。

この牢獄ではなにもできることなどはなく、ただひたすら自虐を繰り返し自分自身を追い詰めていくことしかできなかった。

たださえ周囲は闇に包まれ、光がほとんど得られない環境である。人は太陽の光を欲する。長期間に渡り暗闇にたった一人で閉じ込められ、天からの陽光を浴びずにいれば、人はいつか狂ってしまう。

少なくとも、彼はそんな状況下で平静を保ち続けていられるほど精神面が強靱なわけではなかった。

一日、一日と経過するごとに、以前の彼と出会ったことがある人間ならばすぐにわかるであろうほど、彼の頬肉はごっそりとそぎ落ちていった。

やがて、捕虜となってからどれだけの日数が経過したのかもわからなくなり始めた頃合。

あちこちが破れたノミだらけのゴザの上に寝転がりながら、カールが浅い眠りについていたときのことだった。突然鉄格子の嵌めら

れた扉が光り、まばゆい光が彼の視界を満たしたのである。

とうとう処刑の日時が決められのだろうか。暗闇で時間の感覚を失い、自分がどれだけの間を捕虜として過ごしていたのかわからない少年は、焦点の定まらない瞳を光の方向へと向ける。

……そして、自分の眼前で狡猾な笑みを浮かべて佇んでいる男に見覚えがあったことを――男の背後にいる少女が誰なのか、それを理解する。

なぜ彼女がこんなところにいるのだろう。どうして従兄……皇帝と一緒にいるのだろう。そんな疑問を覚えたが、干からびた唇が動くことはなかった。

「まさか、まだ生きているとは。生きたまま捕縛されたという報告を受けたときは、まさかとは思ったが……。悪運には恵まれているようだな」

鼻をつまみつつ、はき捨てるように口走ったのはこの国の新皇帝カール七世その人である。

牢獄の床に座ってボロ雑巾のような従弟の少年に視線を向け、より一層笑みを大きくしたかと思うと。カール七世はツカツカと歩み寄り、眼下の少年の髪を乱暴に掴んだ。

「……っ!!」

その様子を目撃した赤い髪の少女が牢獄に向かって駆け出そうとするものの、彼女は腕を屈強な衛兵に掴まれて引き戻されてしまった。

「お前がダラダラと無能ぶりを世間に披露してくれていたおかげで、余の皇帝即位に対する反発は最小限に抑えられた。礼を言おう」

その言葉と同時に、カール七世の靴のつま先が少年の腹部にめり込む。しかし、もう彼の胃に吐き出す物は残されていない。ただ嗚咽を漏らすだけだった。

「このゲルマニアの統治者に相応しいのは余である。お前のような虫けらに、もはや存在価値はない……。明後日、中央広場にて処刑を行う」

そう告げて髪から手を離すと、カール七世は後ろを向いた。そして二、三歩歩いたとき、唐突に首を斜め後ろへと向ける。

「……そうだ、言い忘れていた。そこなお前の“元”婚約者については心配はいらぬぞ。彼女はお前との婚約を解消し、余の正妻として皇室に入ることが決まったのだ。安心して逝くがよい」

婚約の解消。それがどういふことなのか、硬い石の床で転がる少年にはまるで理解できなかった。

かすむ視界の先で、少女……キュルケが今にも泣きそうな顔で自分を見ているのだということにはわかったが、もう立ち上がる余力などは一切残されておらず、少年はただ力なく崩れ落ちるのだった。

——地下の牢獄を出たカール七世は、忌まわしそうに暗闇の先にある階段を一睨みした後、すぐに歩き始めた。

しかし、そんな彼にキュルケは続こうとしなかった。しきりに階段の奥を見やりながら、どうにもその暗闇の中へと引き返したいように見えた。

カール七世は、そんな少女の様子を見ていらだちを覚えたらしい。背後へ振り返り、刺々しい口調で告げる。

「きみがその牢獄へ入りたいと望むのならば、願いは叶えてあげよう」

無論、やつと顔を合わせることは許さないが。

そうカール七世が付け加えていると、キュルケは階段から視線を逸らし、眼前にいるこの国の皇帝に向かって反抗的な眼差しを向ける。その赤い瞳には、強い憎しみが込められているのがありありと感じ取れる。

「……どうして。どうして、こんな惨い仕打ちを」

「なに、彼には借りがある。大きな借りがね。それを返してやっているだけさ……、たっぷりと」

「人でなし……！」

やや大人びた性格はしているものの、キュルケも根本的には良家の令嬢である。

世相というものにはまだまだ疎く、人間が敵対者に見せる強い残酷性というものを知ることなかった。

彼女が地下牢で目撃した光景は、完全にそれまでの彼女の常識というものの埒外だ。自分がよく知る人物が拷問にも等しい扱いを受けていることを目の当たりにし、動揺しないはずがない。

まだ感情を抑え込んでいる部分はある。しかし、その両目の端に留められた涙の粒を見るに、それが崩れてしまうのは時間の問題なのだ。他者からは受け取れた。

「この件をきみがどう思おうと余は関知しないが――夫婦仲は円満でいたいものだ。この国のためにも、きみのご家族のためにも」

家族。キュルケの家族は事実上の幽閉状態にあり、その生死はカール七世の手の平の上にある。この状況は、もはや少女一人の手に

負えることではなかった。

悠々とその場から去る青年皇帝の背中を見つめつつ。少女は、ただその場に立ち尽くす他なかった。

——暗雲。

この数日、ベーメンの空は灰色の雲に覆われていた。厚い雲の層はかなりの高度までを包み込み、まるで太陽の光が地上へ届かぬように妨害しているかのようである。

プラーク市街地のすぐ北方には、今回の戦争に際してゲルマニアに対して反旗を翻したシュレジエン諸侯の軍勢が駐屯していた。

シュレジエンは名目上の皇帝家の領地であり、しかしその実態としては無数の小領主が闊歩する独立性の強い地域である。

他の地方、特に北方のプロイセンなどの痩せた土地を圧倒する豊かな農業生産力を背景に、各諸侯は小領主としては考えられないほどの個々の力を持ち、中央政府に対しては常に団結して当たっていた。

アルブレヒト三世もこの地域の貴族たちには手を焼かされており、相続問題にかこつけて小さな家を潰し、火事場泥棒的に皇帝の直轄領に組み入れる程度が精々だった。

無論、諸侯はそうした動きに対し反発を強め、諸侯同士での婚姻を繰り返すことで徐々に一つ一つの勢力が巨大化し始めていた。

とはいえ、長年小競り合いを繰り返して来た間柄である。中央政府に対するときはまとまるものの、今回の軍勢の指揮系統を初めと

して、内情はとても一枚岩であるとはいえない状況であった。

今回の共同出兵に関しても、諸侯たちの考えや目的は実にバラバラだった。

新皇帝に取り入ろうとする者。ガリアに取り入ろうとする者。あるいは双方に取り入ろうとする者。あるいは、それ以外のさまざまな目的を持った者たち。

彼らは自らの利害関係を行動指針の中心に据えている。特に、自ら戦地へと赴いた諸侯の多くは目的の勢力や人物に取り入るため、毎日のように会談や密会を繰り返してた。

この日もそれは例外ではなく、諸侯軍の多くは指揮官たる領主を欠いていた。

無論、彼らは大軍である。平原に広く展開する一万あまりの軍勢を目の当たりにして、正面から攻勢をかけようなどという考えを持つ人間はいない。そう、いないはずだった。

——少なくとも、ある一人を除いては。

きっかけは、風竜に乗って北方の監視に当たっていたとある騎士からの報告だった。

視界が極端に悪いこの状況下において、彼は北方……シュレジェンの方角で、うっすらと飛び交ういくつかの影を発見したのである。

この発見はただちに上申され、騎士が所属する諸侯軍のとある家臣へ判断を仰いだ。だが、当の家臣は領主不在を理由に判断を見送り、この事態を放置した。

この土地に駐屯に際し、北方の警戒担当は常にこの諸侯軍に任されていた。他の諸侯は、手柄の上がない地味で物資の消耗を招く警戒任務を嫌い、立場の弱いこの諸侯に実働を丸投げしていたのである。

故に、この報告はそのまま書類の束に埋もれてしまうこととなる。それがどれだけ致命的な失態だったのか、それを今このときの彼らが知る由はない。

灰色の雲の海を直下に望む、青い空の海原。

地上の陰鬱とした空もなんのその。まばゆいばかりの陽光に照らされながら、雲の上ぎりぎりを数隻の帆船が航行していた。

通常、空を飛ぶ船は雲の上という非常に高い高度を航行することはない。なぜなら船を空に浮かべるのには風石が必要であり、それは高度が増せば増すほど消費量も増大する傾向にあるからだ。

例えば、トリステインからアルビオン大陸に向かう際は、ラ・ロシェールにそびえたつ古の巨木の枝に船を浮かべて行き来する。

アルビオンへ向かうためには、風石の力によって高度三千マイルまで上昇しなくてはならない。その消耗を抑えるため、少しでも標高の高い地点を港として利用するのである。

ところが、この船団の根拠地がある国は全体的に平坦である。海抜との標高差がない地点も珍しくなく、船を高高度まで上げるには相当の風石の消費を覚悟しなくてはならない。

風石は決して安価ではない。産出量とて限られる戦略物資である。それを惜しみなく使用し、この船団は本国から一直線にベーメン上空までやって来たのだ。

船団の先頭に行く、他の帆船より一回り以上大きな戦艦。旗艦なのだろうか。マストには大きな軍旗が掲げられ、その船が間違いく軍の物であることを誇示している。

戦艦の大きな甲板の一箇所。眼前で整列した多くの自国の兵を前にして、一人の金髪の青年が黒いマントを風になびかせながら腕を振るう。

「——帝国諸侯の一員として、皇帝を僭称する叛徒を撃破し、囚われた皇太子を奪回し、この帝国に秩序を取り戻す。それが我々の目的である」

青年のマントには王冠を頂いた鷲の図が刺繍されている。それはゲルマニアの北部に存在する、とある王国のそれであった。

「諸君らには上空からの奇襲攻撃という難しい作戦を担ってもらうことになる。プロイセンの……いや。帝政ゲルマニアの未来は諸君らの双肩にかかっている。心してかかってほしい」

プロイセン。それがこの船団が属する国家の名だった。

そして、多くの将兵の前面で演説を行っているこの人物こそ、ほんの数日前にプロイセンの国家元首となったばかりの青年フリードリヒ二世である。

父王の崩御後、わずかな期間で王に即位した彼は、やはり短期間で竜騎士隊や“ポツダム巨人軍”を全面的に動員した大規模な軍事作戦を計画、実行したのである。

果たして、彼はなにを思ってこの場へと現れたのか。

真の狙いとはなんなのか——それは常人以外の誰にもわからぬまま、プロイセン軍は雲の下のシュレジエン諸侯軍目掛けて降下する準備を進めるのであった。

第三十二話

「叔母上が崩御された？ それは間違いないのか？」

「はい、間違いありません。先ほど寝室へ向かった女官が、陛下がお隠れになられたのを発見したことです。どうやら、脳卒中の発作であつたと……」

「そうか……。三度目にして、だな……」

寒く陰鬱とした異国の冬——私はこの国の冬が大嫌いだ。

我が故郷の土地も、冬はまた凍えるように寒くなることはあつた。だが、それでもこの体の芯まで凍ってしまうような寒さに比べれば、まだ遥かに心地が良い。ここはニヴルヘイムのような人が住むに適さぬ土地なのだ。

私は彼女とは違う。彼女のように体調を崩しながらでもこの国の言葉を学び、心からこの国の人間として生きようなどということは出来ないし、その気もない。

本来ならば、私は——。

……いや。まあ、それはいい。ここでいくら考えても仕方のないことだ。

皇帝である叔母上が亡くなられた以上、今は私にこの国を動かす責務が生じている。長きに渡り政治から遠ざけられて来たが、今こそ自分が先頭に立って政治を行うのだ。

ついに、“このとき”が来たのである。かつて奪われた父祖伝来の土地を取り戻すという、常に心の奥底で温めてきた計画を実行に移すときが。

幼少にして故郷を捨てさせられ、叔母や周囲の貴族たちによって

この異国へと連れて来られ……。さまざまな苦難にずっと耐えてきた甲斐があったというものだ。

「これより宮殿へと向かう。すぐに支度をせよ」

「は、はい！ 仰せ仕りました、殿……いえ、陛下！」

「……いや、待て」

「な、なんでしょうか？」

重要なことを忘れるところであった。自らが君主となった以上、まず成さねばならぬことがあるのだ。これは非常に重大なことであり、戴冠式などを行っている余裕などは微塵もない。

先の戦争におけるかの国の戦況は刻一刻と悪化の情勢を辿っている。このままでは、私が尊敬するあの方の命も危うい。

かの国の敗北。それだけは避けねばなるまい。そしてあの女帝や、愛妾に牛耳られた国にこちらが利用されている状況も打開しなくてはならない。

叔母上が参じたこの戦いは、この私が終わらせるのだ。

「至急、宰相……伯爵に伝令を送れ。『わが軍はただちに戦線より離脱し、プロイセンと停戦せよ』とな」

“異変”が始まったのは、わたしがプラークの町へやって来てから数日後の朝だった。

カール七世……あの男は、自分が接收したベーメン王の屋敷へと

わたしの身柄を置いている。

自棄を起こしたわたしが自害したり町へ出たりしないように、見張りを付けて。

ところが今は様子が違った。

四六時中こちらを監視していた男はどこかへ消え去り、代わりに屋敷中で多くの人々が慌てているようなのが感じ取れた。そして、ずっと遠くの方で爆発音が起きていることも……。

恐らく、このプラークは攻撃を受けているのだ。それがゲルマニアの正規軍なのか、それともまったく別の軍なのかはわからない。けれど、この状況はチャンスであると言える。

見張りがいなくなるほどだ。彼らは……、カール七世の配下の人たちは大混乱に陥っているに違いない。この場から逃げ出そう。機会は今しかない。

そう考え、わたしは部屋を出ることにする。

ちなみに、取り上げられていた自分の杖は見張りが使用していた隣室に置かれていたので、難なく取り戻すことが出来たのだった。

『レビテーション』を使い、屋敷廊下の窓から敷地内へと降り立つ。幸い、周囲に人がいる様子はない。

……先ほどよりも、爆発の音がこの市街地へ近づいているように感じられる。屋敷の外周を覆う柵の外側では、鎧を着込んだ兵士たちが慌てた様子で城壁の方向へと向かっているようだった。

一体、これはどういう状況なのだろうか。そんな疑問を抱いたが、まずはカールを――あの皇帝ではない、わたしの婚約者を助け出すために、あの地下牢へと向かわねばならない。

あの建物があるのはこの敷地内だったはず。距離はそれほどないけれど……。果たして、誰にも見つからずに向かうことができるのかしら。

多少……いいえ、多分に不安だけれど、とにかく今は行動しないといけない。あの子をこれ以上あんなところに居させるわけにはい

かないのよ。

地下牢がある建物はすぐに見つかった。古びた、恐らくは遙か昔に建てられたであろう、石の尖塔が地上部分に露出している建築物。入り口では看守らしき男が暇そうにたむろしているけれど……。彼にとっては、周囲の蜂の巣を突いたような大騒ぎも埒外の出来事なのだろう。それはわたしにとっては好都合なことだ。

火の魔法……は目立つからやめておくとして。最近覚えた『スリプ・クラウド』を使ってみましょう。水の魔法は今でも得意でないから、成功するかどうかは賭けだけれど。

「イル・ウォータル・スレイプ・クラウドイ」

『スリプ・クラウド』のスペルを詠唱すると、看守の頭の上に小さな青い雲が発生した。

最初はまったく効いている様子はなかったのだけれど、段々と男の顔が眠気を帯びてきているのがわかり……。すっかり寝入ってしまったのを確認して、静かに横を通り抜けて地下牢へ続く階段を下りていく。

当然のように内部は暗い。壁にも松明の類は見当たらなかったけれど、そこは『ライト』の魔法を使用することで対策。魔法の灯りを頼りに奥へと進む。

階段は長く、地下牢は文字通りかなりの地下深くに建設されていることがわかる。

最初にこの場所へ連れて来られたときはあまり周囲を確認している余裕がなかったせいか、先ほど考えていたよりも階段は長い。一步、また一步と進むごとに、強烈に鼻をつく悪臭が強くなっていく。周囲を意識して観察できる分、ここがどれほど酷い状況下にあるのかより鮮明に理解できるのだ。

こんなところに押し込められて……、彼はまだ大丈夫なのだろう

か。時間と共に、そんな不安ばかりが強まっていく。まだ階段は終わらないのか。そればかりを考えるようになる。

やがて、ようやく階段が終わる。

そして、はやる気持ちを必死に抑えつつ踊り場を抜けた先では、無数の鉄の扉がひしめく狭い廊下が現れた。

『ライト』は当然のごとく牢獄の内部も照らし出してしまう。ほぼ例外なく、ほとんどの部屋にはこの牢獄に閉じ込められたままの人々がいた。

彼らは、いったいなにをしてここに閉じ込められたのか。なぜそのままに放置されているのか。陰鬱とした、今すぐにでもこの場を立ち去りたくなるような悪寒の正体は……。

……ああ、もう。そんなこと考えたってしょうがないのに。自分で恐怖心を煽っていたれば世話ないわね。

背筋に妙な感覚を覚えつつ、やや早足でわたしは狭い廊下の最奥部を目指す。カールが閉じ込められている牢獄は、この施設の中でももっとも奥にあるのだ。

廊下の最奥部に到着したとき、鉄の扉に備え付けられた仰々しい鍵を目の当たりにして、わたしは初めてこの牢獄の鍵を持っていることに気がつく。

どうしましょう。ここまで来て引き返すなんて出来ないわ。一刻も早く彼をここから出してあげないといけないのに。

……やむを得ない。ここは扉についている鍵を壊してしましましょう。『ファイアー・ボール』かなにかをぶつければ、この程度の鍵なら壊すこともできるはず。

「カール！ わたしよ！ もしわたしの声が聞こえるのなら、なるべく扉の前から離れて！ 今、魔法で鍵を壊してしまうから！」

扉を破るわけではないが、万が一ということもある。鉄の扉の向こう側にも聞こえるよう、わたしは声を精一杯に張り上げる。

鍵に狙いを定めた後、一度『ライト』を解除。同時に周囲はまったく光りのない暗所となってしまうが、なんとか精神を落ち着かせる。

そして、ゆっくりと自分を落ち着かせるように息を吐き、己がもつとも得意とする系統——火の魔法『ファイアー・ボール』のスペルを詠唱する。……すると、それと同時に、大きさが人間の頭ほどはある赤い火球が杖先に現れた。

大きさは良好。火の勢いもいつも通りにある。これなら問題はない。後は、中にいるカールがうまく避けてくれることを祈るだけだ。少しの間を置いてから、わたしは扉に向かって火球を放った。火の玉はかなりの速度で鉄の扉の鍵の部分に命中し、一瞬で鍵を蝶番ごと破壊する。ばらばらになった鍵の残骸が、床の石に当たって乾いた音を立てた。

鍵というストッパーを失った鉄の扉に他者の侵入を防ぐ手立てはもう存在せず、若干の重さと引き換えにわたしは牢獄の中に入ることができた。

……前回もわずかに目撃してはいたのだけれど、やはり内部の状況は凄惨を極めていた。悪臭は廊下におけるそれよりもっと酷いものだ。でも、だからといってここで引き返すわけにはいかない。

カールはどこにいたのだろうか。

そう考え、『ライト』で周囲を照らしたとき……。部屋の最奥部に、わたしはその姿を発見した。

彼は牢獄の苔むした壁に背を付けて腰を下ろしていた。顔は下を向いており、入り口からではその表情を窺い知ることはいくつか……。あれからさらに数日が経過した今、彼は大丈夫なのだろうか……。そんな不安を押し殺しながら、わたしは部屋の奥へと向かっていく。

「カール、大丈夫？」

しゃがみ込んでカールの体を揺さぶってみる。しかしそれを何度か続けても彼が反応することはなく、徐々にわたしの脳裏へ焦りがつのり始める。最悪の結末を予想し、動悸が激しさを増す。

それはほんの数分のことだったのだろう。けれど、今のわたしにはその時間が無限のように思えて――彼がようやく顔をこちらへ上げたとき、わたしは思わず破顔しながら抱きついてしまった。

「キュルケ……。どうして、きみが、こんなところに？」

「上の屋敷から逃げ出してきたの。今、プラークは外から攻撃を受けているみたい。きつと、帝都から増援が来てくれたのよ」

「そう、なのか……」

「そうよ。だから大丈夫。絶対、わたしたちは帰れる」

彼の顔は一目見てわかるほどにやつれ、声はかすれていた。わたしを見つめるその瞳も精彩を欠いているように思えたが、今すぐ命に関わるような状態ではないらしい。

「でも……。アウステルリッツで、僕の部隊は壊滅したんだ。大勢の人が命を落として……。なのに、僕だけが帰るなんて、出来るわけがない」

弱々しい拒絶。彼は今回の戦争でなにを見たのだろうか。……でも、今は彼の言うことを聞いている場合じゃない。

「……酷なようだけれど、戦争に犠牲は付き物なのよ。武器を持って戦うのですもの。誰だって、その覚悟を持って戦地へ赴いているの」

「だ、だけど。だけど、僕は彼らを……。彼らを戦場に駆り出したから……」

「あなたのお父さまも軍人だったわ。お義父さまは……。武人は、戦地へ向かうときにはそれ相応の覚悟をするものなの。そういう生き方なのよ。あなたはその覚悟を、彼らの生き様を否定するの？　……ゲルマニアのために戦って、散っていった人たちの名誉を汚す行為よ。それは」

「……」

しばし訪れる沈黙。

……本当は、わたしだって彼の言いたいことはわかる。自分が彼の立場だったら、きっと今のカールと同じことを考えてしまう。

けれど、それではいけないのだ。今は他者に帝位を奪われているけれど、いずれ彼はゲルマニアの頂点に立たねばならない人間だ。政治を行うのなら、ある程度の割り切りは必要不可欠。犠牲は犠牲として冷静に次の状況を判断できるようになる必要がある。

無理を言っているとは自分でも思っている。カールの性格を鑑みれば、そのような割り切りは容易ではないともわかる。けれど、その甘さを捨てることができなければ……。いずれ彼は……。

そう思案したとき。

突如として、地下牢全体に大きな衝撃が走ったのだ。轟音が辺りに轟き、天井からぱらぱらと土が落ちてくる。あまり、悠長に話をしている場合ではなさそう。

「今の話は置いておきましょう。ここはあまり頑丈ではないでしょうし……。すぐに外へ出ないと」

「わかった……」

ふらふらと足元がおぼつかない様子のカールを支えつつ。
わたしたちは、ゆっくりと牢獄を出て廊下を歩き始める。その間

にも幾度かの爆音が地下牢を揺るがし、どこから現れたのか、ねずみたちがなきごえをあげて駆けていく。

今の彼の状態では階段を上がるのも一苦労だ。一段一段、ゆつくりと、確実に上階を目指して歩んでいく。ずっとその繰り返しだ。でも、不思議と苦痛ではない。ちよつとした衝突はあったけれど、ようやく彼を救い出すことができたのだから。

やがて、わたしたちはようやく階段を上り終えることができた。そして、ようやく日の光りの下へと進み出た、そのときのことだった。

「キュルケ嬢。どうだね、地下牢の空気は？ さぞかし美味かったろうな？」

「……あなたは」

ようやく屋敷の敷地へと出たわたしたちの前に立ちはだかった者たち。それは数名の武装したブリミル僧たちと、そして皇帝カール七世本人だった。

「まったく、この非常時になんと厄介なことをしでかしてくれるものだ……。よほどその子供と心中したいように見える」

「厄介だと仰るのならば、こんなところでわたしたちに構ってくださいささなくて結構ですわよ？」

「いや、そうはいかない。たった今、余はプラークを放棄すると決めたのでな。その子供の処刑は予定を繰り上げて行うことにしたのだ」

「ふざけないで。そんなことはさせない」

あまりにもふざけた態度だ。

わたしは皇帝に向けて杖を構えるが――案の定、皇帝の周囲にいる僧侶たちが装飾の施された杖をこちらへと向ける。彼我の戦力

差はあまりにも明白だった。

「やめたまえ。きみでは余には傷一つ付けることはできん。よしんばそれが出来たとしても、次の瞬間にはきみの体は蜂の巣になるよりも悲惨な結末を迎えることになるだろう」

「……くっ」

やってみなければわからない……、なんて軽口を叩く余裕はまるでなかった。

わたしはなんとしてもカールを助け出したい。無事に連れ帰りたい。今はそのことで頭がいっぱいで、挑発など出来るはずがない。

「さあ。おとなしくその子供から離れるのだ」

どうしたらいいのだ。わたしには、この状況下を打開する方法なんて——でも、だからといってカールを見捨てることも……。

そう逡巡しつつ一歩後ずさった、そのときのことだった。塀の向こう側から、何かが飛んでくる音が聞こえたのは。

「ほう。まだ逃げ出していなかったのか——皇帝を僭称する男が」

「お前は、プロイセンの……」

「そう。プロイセン国王フリードリヒ・フォン・プロイセンだ。……さっそくだが、カール・アルブレヒト。ぼくはきみを皇帝だなどと認めるつもりはない。ここでご退場願おう」

屋敷の敷地外から突如として現れたのは、いつか帝都のブルク劇場で出会ったことのある殿方だった。……とは言っても、わたしはろくにお話はしなかったけれど。

見た限り、彼はたった一人で空から降下してきたようだ。相当、腕に自信があるのだろうか。それにしても数の劣勢を覆せるとも思

えない。

……そもそも、なぜ彼はこの場所へ現れたのだろう。プロイセンはカール七世を認めない方針であるのは、今の彼の態度を見ていればわかるけれど……。

「ご退場、か。それはきみの方だよ。フリードリヒ二世。余は正式な選挙を経て皇帝に戴冠した……、その事実を覆すことはできん」

「は、なにが正式な選挙だ。ガリアの犬になっている奴らが勝手に始めて、勝手に出席しただけじゃないか。帝国諸侯として、選帝侯として、そんなものは認められないし、認めるつもりは毛頭ない。今すぐ退位するんだな」

「退位？ 笑わせないでくれ。まったく、きみとは真面目に話をするだけ無駄なようだな。……やれ」

早々に見切りをつけたというべきか。カール七世が手を振ると、それまで建物の影や茂みに隠れていたらしい兵士たちが一斉にその姿を現す。皆、どうやらガリア軍の兵士であるようだった。

「……もう一度言うぞ。今すぐ退位を宣言し、ここから消え失せろ」

「なにを言うか！ ここから消え失せるのは君のほうだよ、フリードリヒ！」

すぐむフリードリヒ二世をあざ笑うカール七世。しかし黒マントを羽織った金髪の青年は、皇帝のその態度にもまったく動じる様子さえ見せなかった。

「忠告はした……、それを受け入れないのならば！ 出番だぞ、トロル鬼よ！」

トロル……？

アルビオンのハイランド地方に生息しているという、あの大型の亜人……？ あんなもの、人間が制御できる存在じゃないはず。

……いえ。

そういえば、いつか父がお話してくれたことがあったのを思い出した。ゲルマニアにはハルケギニア全体で唯一、亜人だけを集めた特殊な部隊を常設している物好き王国があると。

その王国の名前はプロイセン。創設したのは前国王フリードリヒ・ヴィルヘルム。その部隊に冠された名称は、“ポツダム巨人軍”。泣く子も黙る恐ろしい部隊であると言われている、ハルケギニアでも一、二位を争う悪趣味な軍隊。

フリードリヒ二世の掛け声と同時に。屋敷の敷地内と外の市街地を隔てていた分厚い壁が粉碎され、巨大な人型の化け物が姿を現した。それは、絵本の挿絵でしか目の当たりにしたことがない異形の怪物。亜人は亜人でも、翼人とはまったく異なる醜悪な外見。大きく裂けた口からは、人間の言葉とはおよそ似ても似つかない意味不明の言語が吐き出される。

彼らが手にしているのは、恐らくはアルビオンに分布している常緑樹の巨木から切り出された太い棍棒だ。ただの棍棒なのであろうが、まるで丸太のように太い。あれで殴りつけられたら、恐らく……。

「……と、トロル鬼だと！ 貴様、なんというものを持ち出してくれた！」

——阿鼻叫喚の地獄絵図。

わたしたちを包囲していたガリア兵やブリミル僧は、トロル鬼がたった一度大きな棍棒を振り回しただけで、その大半が吹き飛んでしまった。

恐ろしい怪力だ。彼らの多くはもはや人間としての原型さえ留めておらず、わたしは思わず視線を逸らしてしまう。

先ほどまで余裕の笑みを浮かべていたカール七世だったが、今の彼から余裕は完全に吹き飛んでいた。顔中から汗が噴出し、今にも失神しそうなほど動揺している様子が手に取るようにわかった。

もはや、この巨大な亜人にただの人間が敵うはずもなかった。ガリア兵たちは悲鳴を上げてあちこちに逃げ出すものの、間もなく彼らの体は棍棒によって四散させられていく。

見るに堪えない光景だった。わたしが吐き気を催してその場にへたり込んでしまうと、カールが心配そうま顔をして、わたしを抱きしめてくれた。

……今の憔悴しきった彼に、わたしを気遣う余裕なんてないだろうに。誰かに肩を貸してもらわないと歩けないほど酷く弱りきっているはずなのに、カールは……。

「おとなしく無様に逃げ出していれば、ここで命を散らすこともなかった。お前の判断ミスだよ、カール・アルブレヒト。父殺しをするような非道な男が何食わぬ顔をして皇帝になる……、そんな馬鹿げた話を通じるものか」

「……父殺し？」

唐突にフリードリヒ二世から放たれた不穏な言葉に、わたしは思わず顔を上げて疑問を発してしまった。そんなわたしに視線を向けつつ、若き国王は憎々しげな様子で答えてくれる。

「そうだ、ミス・ツェルプストー。この男はケルンの選帝侯……、親族の大司教に命じてアルブレヒト三世に毒を盛ったのさ。そうでもなければ、あの野心家がそう簡単にくたばるはずがないだろう？」

「な、なにを言うか、ふざけるな！　なぜ余がそのようなことを……、だいたい、証拠などないだろう！」

「証言ならあるさ。これは先ほど捕縛したケルン大司教ご本人から聞いた話だよ。ぼくは、あの皇帝の死についてはかねがね疑問に思っていてね……。今回の件に関係がありそうな彼を問い詰めたら、あっさり白状してくれた。『自分が部下に命じ、毒を盛らせた』と」

ケルン大司教、ね。幾度か顔を合わせた限り、大司教であるという以外はごく普通の温厚そうな青年だったけれど……。

「知らぬものは知らぬ！　よ、余は、毒殺など命じてはおらぬ！」
「彼は確かに言ったさ。それにお前は以前、一度アルブレヒト三世を殺そうとしたはずだ。……否定したいのならばあの世ですればいい。どの道、お前にはここで死んでもらう」
「ひ、ひいっ!？」

死んでもらう——フリードリヒ二世のその言葉と同時。

トルル鬼が棍棒を持った腕を振り上げる。今からそう遠くない未来には、この国の皇帝は再び不在になるだろう。……決してもう目にしたくない光景を想像し、わたしは再び目を閉じる。

「ま、待て！　わかった、私は今すぐ退位しよう！　皇帝の椅子はカール・ペーター・ウルリヒに譲る！　だ、だから、命だけは……！」

「往生際が悪い！　この期に及んで命乞いなどと、どこまで醜態を晒す気だ！　やれ、ト——」

命乞いを始めたカール七世を、憎々しげな表情で睨みつつ。フリードリヒ二世がトルル鬼に殺傷命令を下そうとした、そのとき。

「や、め、ろ……」

カールが、蚊の鳴くような声を上げたのだ。そして、その声はフリードリヒ二世の耳にも届いたのだろう。彼はぴたりと動きを止め、トロール鬼も振り上げた棍棒を地面に下ろした。

「どういうつもりだ、カール・ペーター・ウルリヒ。この男はきみを殺そうとしたんだろう」

「もう、いいんだ……。やめよう。これ以上、こんな惨いことを続けなくて……」

「そんな甘いことを……、そんなに甘ったれたことを言っているから、きみは足元をすくわれたんだろうに！」

「わかってる。僕が情けないから、こうなってしまったんだって。だけど、だけど……。これ以上……。きみに……」

フリードリヒ二世の怒声をその身に受けながら、カールの表情は苦痛に歪み……。やがて、意識を失ったようだった。

この場所にはガリア兵の亡骸が至るところに散在し、辺りは鼻をつくような血の臭いが充満している。この地獄絵図のような状況の中で、元々消耗していた彼はとうとう耐え切れなくなったのだろうか。

わたし自身……。どうして正気を保っていられるのかもわからない。いくら敵の兵士だとはいえ、目の前で大勢の人々が撲殺されたのだ。人の死に慣れていない人間には、正視に堪えない状況だ。

しばし辺りは静寂に包まれた。トロール鬼も、この状況に困惑しているようだった。

しかしやがて、フリードリヒ二世は一度天を仰ぎ見てから、わたしに向かって声をかけてくる。

「ミス・ツェルプストー。ぼくはこの男を捕縛する。きみたちには部下の者を付けるから、一緒に安全地帯まで脱出してくれ」

「でも」

「もう、殺しはしないよ」

短い一言だったけれど、彼の目は嘘をついている人間のそれではなかった。

「……そう。わかったわ」

わたしはあの男が死のうが生きようがどうでもいい。でも、カールは殺すなど言った。だから、その意思を尊重することにする。

この場の惨状に驚愕の表情を浮かべるプロイセン軍の士官にカールの身柄を預け、わたしは数日を過ごしたこの屋敷の敷地を出ることにする。もうこの場所を訪れることはないだろうけれど、わたしは一度として後ろを振り向くことはなかった。

「ふむ。そうか、プラークはプロイセンに占領されたか」

ガリア王国の首都リュティスは市街地の東方、ヴェルサルテイル。大国ガリアの政治の中枢が存在する、この宮殿群の中の一際大きな青の宮殿の中心部。王が座するグラン・トロワ。

軍務卿から上げられた報告書に目を通しつつ、この国の最高権力者はあまり興味もなさそうに口を開く。

「は、はい……。敵は想定外の戦力をもって侵攻し、我が軍の部隊を全滅させ、シュレジエン諸侯の部隊を壊滅させました。さらに、グラーツを目指していた別働隊はウィンドボナより進軍した新手の

部隊に敗北しました。事実上、我々の勢力が駆逐された格好です」

「おまけにあの傀儡……、なんと言ったか。あの男は捕らえられたと」

「そ、その通りでございます。陛下」

ベーメンにおける、プロイセン王国の参戦による予想外の敗北。ザルツブルク近郊における会戦の大敗。それらの事実をガリア王ジヨゼフに上申する際の、軍務卿の心中は察するに余りあるものである。

「なるほど。よくわかった」

しかし、胃に穴が開きそうなほどに動揺している軍務卿の思考とは裏腹に、ジヨゼフ王はなんら怒りを見せることさえなかった。興味がなさそうに、ただ報告書を椅子の横にある台座に放り投げるだけだった。

あれほど熱心に――ゲルマニアの皇族の亡命を受け入れ、その男が皇帝となるためのお膳立てまで命じておいて、王はまったく興味を失ってしまったようなのである。

前王の時代から今の職にあった軍務卿だが、この王がなにを考えているのかなど、彼の長い職歴をもってしてもまるで理解は出来なかった。

ジヨゼフ王は早々に“無能王”などとあだ名されているが、軍務卿にはそのあだ名が付けられた意味がよくわからない。彼にとって、この王は“怪奇”なのである。一見して無能であるように見えるが、本当はそうではないのだと彼は確信していた。

本当に無能ならば、今回のような策謀を考え、実行することなどは決してできないのだ。

「もしかすればゲルマニアの内政を牛耳ることも出来たのだろうか

——まあ、よい暇つぶしにはなったな」

暇つぶし……？

今、この男はこの戦争を暇つぶしと言ったのか。大勢の予算と人員を割き、多くの損害とジョゼフ王へのさらなる悪評を招いたこの戦争を、暇つぶしなどと発言したのか。

軍務卿はますますこの王のことがわからなくなった。果たして、この人物は脳裏でなにを考えているのか。愚直ともいえる思考の持ち主の軍務卿には、まるで理解できなかった。

「軍務卿。この余興はここで終わりとしようではないか。ただちにゲルマニアへ使者を飛ばし、休戦条約の申し入れをしろ」

「きゅ、休戦、ですか？」

「そうだ」

刹那。聞き返しを行った軍務卿に対してジョゼフ王が気分を害したことに気がつき、老齢の貴族は慌てた様子で立ち上がる。

「しょ、承知いたしました！　ただちに使者を派遣し、休戦に向けての協議へ入ります！」

軍務卿はもはや焦りを隠すこともなく、早足で王の間から逃げるように去っていく。

このとき。

去り行く老貴族には目もくれず、ただ一人で王の間に残されたジョゼフ王が呟いた独り言は、とうとう誰の耳にも入ることはない。

「まったく、つまらん……。ゲルマニアはつまらん。わざわざあの坊主共を唆してアルブレヒトを排除したが、なにも変わらぬではないか」

しばしの沈黙。なにか新しい遊びを思いついた子供のような、晴れやかな笑み。

「……いや、そうだ。まだ新しい余興はあるではないか。あの、白の国が……」

第三十三話

ザルツブルク近郊においてガリア軍を一方的に撃破したケーフェンヒュラーの軍団は、そのまま西進を続けてバイエルン選帝侯領内へと侵入。

瞬く間に本拠地のミュンヘンを制圧した。

また、ミュンヘンの戦いでバイエルン選帝侯は戦死。バイエルン大公及び選帝侯の地位は、ケーフェンヒュラーが身柄を確保していたマクシミリアン公子へと移行する運びとなった。

さらにケーフェンヒュラーは、ガリア軍の占領状態にあったバーデン、ヴュルテンベルクの両諸侯領を開放。事実上、ガリアの勢力をライン川の左岸にまで押し込むことに成功したのである。

帝都の中央政府に対して反旗を翻したシュレジエンの諸侯たちは、そのほとんどがプロイセン軍の手によって粛清され、彼らの領地のほぼ全域がプロイセンの占領下に置かれることとなった。

また、ベーメン王はプラークの貴人牢に監禁されていたところを開放され、即日で皇太子側に付くことを表明。

ケルン選帝侯はプロイセン軍に逮捕されて捕虜となり、事実上の廢帝となったカール七世の身柄は、やはりプロイセンの下に置かれているという。

そして、始祖の降臨祭を目前とした先日。

ガリア本国より、休戦条約の締結に向けた交渉の開始を提案する親書を携えた使者がウィンドボナを訪れた。

皇太子不在の帝都で、事実上の国家首班的な役割を果たしていたマリア・テレジアは、ガリアの一方的な提案に対して憤慨したが、結局はオイゲン公らの勧めで和平を結ぶことを承諾。

度重なる出兵でゲルマニアの財政は大きな負担を強いられていた。

恐らく、これ以上の長期に渡って戦争を続けるべきではない、という判断があったものと思われる。

帝都での予備交渉は、ガリア側が賠償金の支払いを拒否し続けるなどしたため難航したが、翌年の始祖の降臨祭が終わる頃には、休戦条約の条文もほぼ完成の域に近づいていた。

今回の戦役における戦後処理は、そのほぼ全てがマリア・テレジアやオイゲン公を筆頭とする古株の貴族の手によって行われており、皇太子が交渉の場にその姿を見せることはないのだった。

始祖の降臨祭が終わりに近づいたところ。

プラークからウィンドボナへと戻っていた僕は、年末年始を通してずっと自分の屋敷で療養を続けていた。

その甲斐あってか、地下牢に閉じ込められていたときの肉体的、精神的なダメージはもう回復しきったと言っている。公務に復帰しようと思えば、もういつでも戻ることは出来た。

だけでも。マリアから「始祖の降臨祭の間は休んでいなさい」と言われたし、僕自身色々と考えを整理する時間も欲しかったので、ありがたく休みをいただくことにしたのだ。

キュルケやフリードリヒ二世に助け出されたとき、僕は避難先でアウグスト三世やナイベルク將軍、それにヴルムらと再会することができた。

アウステルリッツの臨時司令部が瓦礫の山と化していたあの状況下での生存は絶望的だと思っていたが、司令部の人々は砲弾の直撃

直前に辛うじて脱出することが出来たのだという。

彼らは脱出こそ成功したもののその多くが捕虜となり、ヴルムも僕とはぐれた後にこちらを捜していたところ、運悪く敵の捕虜になってしまっていたらしい。

……なんにせよ、彼らが無事でよかった。
と。

不意に、ベッド脇の椅子に腰掛けたエリザベートが目に入る。早朝にこの場所を訪れた彼女は、先ほどまでは何かの本を読んでいたようだが、いつの間にか寝入ってしまったようだった。

正確な時刻はわからないが、もう朝日が窓の外で顔を出している。そろそろ起き出さないとまずいと考え、僕はベッドから這い出る。そして、寝入ってしまった少女を抱きかかえ、先ほどまで自分が寝ていた場所に運んだ。

その後は着替えた。使用人に最初から着付けをさせるということはせず、まずは自分だけでいつもの軍服に身を通す。

今日はマリアのところに向かって、ガリアとの休戦条約の条文がどれだけ出来て、どういう内容になっているのかを見ようと思っている。条約の調印式には自分が出ようと考えていたので、内容くらいは知っていないといけないだろう。

……なぜガリアの方から休戦を申し入れてきたのか、僕はその理由がわからない。戦いを終わらせることができる以上、それに異を唱えるつもりもないが。

「殿下。お客様がお見えなのですが……、お通ししてよろしいでしょうか？」

廊下から聞こえてきたのは、執事のアドルフの声だった。僕がそれに肯定で答えるのがちゃりと音を立てて扉が開かれる。そして、奥から一人の青年がその姿を現した。

「体調が良くなったとの連絡が入ったので訪問させてもらった。朝だというのに悪いが、許してくれると助かる」

「いや。来てくれるだけでありがたいよ。フリードリヒ——今は二世だったね」

国王となった今でも、彼はいつか身に付けていたあの黒いマントを羽織ったままだった。容姿はあのころよりもずいぶんと大人に近づいていたけれど、趣味はそんなに変わらないようだ。

「公の場でもないんだ。フリードリヒでいいよ」

「あ、う、うん。わかった。……立ち話もなんだし、椅子に座ろう。今お茶を出すから……」

「ああ……。だが、そんなに長居はしないから気は使わなくていい」

彼とこうして直接顔を合わせることになるのは、プラークでの一件以来のことだ。

状況が状況ではあったものの、あのときはお互いにまともに話すことすらできなかった。僕があまりにも不甲斐ないせいで彼を怒らせてしまったし……。ここできちんと話をできるといいんだけど。

「プラークでは、きみが来てくれなかったらどうなっていたかわからない。本当に助かった。ありがとう」

部屋の中央に置かれた白いテーブルを挟んで、真向かいに腰掛けたフリードリヒに向かって僕は頭を下げる。一方、そうされた彼は少々困惑気味に視線を逸らした。

「……いや。ぼくは今回の戦乱を利用しただけだ。我が軍がシュレジエンの占領を続けたままなのは、きみも知っているだろう？」

「構わないよ。どちらにせよ、今回の戦争に協力してくれた諸侯に

は領地を下肢することが決まっている。プロイセンにはシュレジエンを割り当てるつもりだ」

フリードリヒは沈黙したままだ。僕はさらに言葉を続けた。

「プロイセン軍の働きで僕たちが助かった事実は揺るがない。あそこは貴重な土地かもしれないけど、恩義に報いるのは当然だよ」

「変わっているな。本当に、きみは……」

頬を搔きながら、フリードリヒは目を細めながら呟いた。まさかすんなりと新しい領地が手に入るとは考えていなかったのだろうか。……まあ、正直なところ。シュレジエンはプロイセンの侵攻が原因でかなり荒れているはずだ。その復興事業を行う余裕なんかこっちにはないから、それを丸投げしようと思っただけだ。

そんな思惑は当に見抜かれているのだろうけど、彼は特になにも言わなかった。もはや、その程度のことは予め織り込み済みだったのかもしれない。

しばしの間、僕の部屋は沈黙に包まれる。聞こえてくるのは、エリザベートの寝息と彼女が寝返りを打つ音だけだ。だがやがて、フリードリヒは静かに口を開いた。

「次期皇帝選出の選挙は、間違いないく直近に開かれるだろう。そこで、きみは新しい皇帝となるはずだ」

「そうだね」

「無論、ぼくはきみに一票を投じることになるが……。その前に訊ねておきたいことがある」

——ほんの一瞬の間。そして、青年王はすぐに問いを投げかけてくる。

「きみは皇帝になってなにをする？ ……なにを目的とするんだ？」

ストレートにぶつけられた質問。問いかけてくるフリードリヒの表情は真剣そのものだった。僕は彼と同じように一瞬の間を置いたあと、なるべくゆっくりと答えを口にする。

「僕はこの国を変える。社会を停滞させ、いたずらに人々を苦しめてきた仕組みを壊す。君主の気紛れで司法の判断が左右されないよう、徹底的な権力の分立を目指す。そして、シュレースヴィヒを取り戻す。あの日……最期の日に交わした、父との約束なんだ」

「……そうか」

「やりたいことはたくさんあるんだ。そのためには、僕はもっと多くの“志”を持った人々の協力を得なければならない。だから……」

残念ながら、今のままでは僕は皇帝になってもなににもできないだろう。事を成すには誰かの、多くの人々の協力が必要だ。そして、その第一の盟友となれるだろう人物は目の前にいる。

彼ならばきっと僕のやろうとしていることに共感してくれるはずだ。なぜかはわからないが僕には直感があった。彼……フリードリヒならば、絶対に手を取ってくれるという確信が。

だから、僕は手を差し出した。いつもの自分なら、こんなことはしないだろう。相手が手を取ってくれないのではないか、そんなことばかり考えてしまうからだ。

でも今は違う。そういう後ろ向きな思考には陥らず、ただ目の前の青年を信じることができたのだ。

フリードリヒはしばらく下を向いて、じっと僕が差し出した手を見つめている。彼が今なにを考えているのか、それはまったくわからない。

「……この国を変える。だがそれは、多くの先人が歩み、そして挫

折した道だ。きみはそれをたどろうというのか？」

「たどるつもりはないさ。やるからには、甘さを捨てて徹底的にやらなきゃならない」

「変革の時には血が流れる。きみにはその覚悟があるのか？ 貴族だけではなく、無関係な民衆が多く血を流すかもしれない。きみ自身、伯父上の……アルブレヒト三世のように、いずれ斃れることになるかもしれないしな」

その通りだ。

ハルケギニアだろうと地球だろうと、政治体制を大きく変えるときは必ずと言っていいほど流血が生じる。人と人の思想の違い、立場の違い。そういった軋轢が、やがて武力を伴った衝突に発展する。今回のガリアとの戦争だってそうだった。新しい皇帝が誰になるのか。誰にしたいのか。なりたいのか。そういう考え方の違いから、大勢の人々の血が流れた。

それが当たり前だと思わすことはしたくない。だけど、それから目を背けることは許されない。人間である以上、思想の差異と衝突は避けられない。それが人間という生き物の性だ。

死というものの恐怖感は今でも忘れずに持っている。だけど、それに臆してばかりいたのではなにも変わらない。変えることができる。きない。

「その覚悟はあるよ。だから、僕はここにいるんだ」

僕はそうはっきりと目の前の青年に向かって告げた。

ここにきて、フリードリヒはついに顔を上げる。彼の瞳には光があった。希望に満ちた光が。彼も志を抱いていたのだ。生まれた場所ゆえにその機会に恵まれなかっただけで、彼も想いは同じなのだ。彼は僕の手を取ってくれた。少しばかり大きく、それまでの苦勞を感じさせる、ややごつごつとした手だった。

「そうか。ならば、ぼくからはもうなにも言うことはない。新しい時代を迎えるために、このハルケギニアを変える礎となるために、手を貸そう」

「……ありがとう」

——十四回目のハガルの月は第三週。僕は帝都での初めての誕生日を迎えることになった。

今のところ、屋敷にはごく近い人物しか招待していない。

あまり大々的に誕生会を開くのは趣味ではないし、よく知った人たちが楽しみたいという考えがあったからだ。ただ、前回の戦争で功があった人物は何名か招待している。

その中にはケーフェンヒュラー将軍もいる。彼は僕がプラークから帝都へ送り返されている間に、パンノニア軍の騎兵隊を有効的に使い、ガリアやバイエルンの軍勢を完膚なきまでに叩きのめしていたそうだ。

一説では、彼の活躍があったからガリアは休戦を持ちかけたのだと言われるほどだ。きっと、ケーフェンヒュラーの名は間違いないく歴史に刻まれることになるだろう。

マリアは彼の独断行動に相当怒りを募らせていたようだったが、

それは僕がなんとか宥めて怒りを静めさせていた。経緯はどうであれ、救国の英雄の一人を牢獄送りにするわけにもいかないのだ。

先日わずかにケーフェンヒュラーと話をした限りでは、ちょっと変わった感じがする初老の貴族という印象を受けた。落ち着いたナイベルグ將軍と似ているようで、少し別のベクトルのような……、不思議な感覚のする人だ。

彼の部下であるダウンという若い貴族はあまり僕を快くは思っていないらしく、あからさまではないにせよ終始視線がこちらに刺さる中での謁見だった。

元々、軍の内部では、プロイセンへの接近を始めた僕に悪感情を抱く人間も多いらしい。

皇帝家の下、ウインドボナで働いて来た軍人たちは、僕がプロイセンの軍制度をゲルマニア軍に導入すると決めたことに大きく反発している。

彼らはとてもプライドが高く、外様のプロイセン式の制度が気に入らないようなのだ。だからといって、軍改革を停滞させることなどではしないのだが。

「……なんていうか、わたしの場違い感がすごい気がするわ」

屋敷の中庭に設営された会場のただなか。キュルケは、自身の髪の色をさらに深めた色合いの真紅のドレスに身を包んでいる。彼女は周囲を見回し、らしくもなくため息をついていた。

「そんなことはないよ」

「そうそう。姉さまは皇帝のお后さまになるんだから、別に場違いなんかじゃないわ。姉さまらしくないわよ。そういう態度」

「はあ。アウグステ、あなたどうしたのよ。本当に」

「どうしないわ。姉さまが萎縮しすぎなのよ。それより、ほら。お料理をいただきますよう」

「あ、ちよつと……」

久々に会うアウグステはなんだかやけに大人びているというか、背伸びをしているというか。女の子は少し会わないだけでずいぶんと変わってしまうのだと思ったりするわけで。

そういえば、ツェルプストー侯爵一家は一時的にガリア軍に拉致されていたらしいのだが、プロイセンのプラーク侵攻の直前に幽閉状態から脱出していたのだと伺った。

一家を助け出したのは近辺の森に移住していた翼人たちで、彼らはガリア兵相手に先住魔法で大立ち回りを演じたらしい。彼らはガリアに追い払われた立場だから、それはもう鬼気迫る勢いだったようだ。

彼らはアルデラの森——現時点であの土地は旧領主のバーデン辺境伯に返還されている——に戻ることを望んでいるそうだが、彼らが居住できるような大型のライカ樺の多くが既に切り倒されてしまっていたために、それはなかなか難しいという。

テーブルに置かれた料理に舌鼓を打つアウグステたちを見やる。

……こうしていると、なんだかんだで、まだまだ色気より食い気なのかと感じてしまう気もするな。

と、そんなときだった。背後から誰かが近づいてくる気配がして、僕はその方向を振り返った。

「あの方がツェルプストーの……」

「アウグステだよ」

やって来たのはブルーのドレスを見にまとったマリアだった。彼女は並んでテーブルの前に立つキュルケとアウグステを見つめなが

ら、はあとため息をつく。

「オイゲン公は心底お怒りのようでしたわ。あなたが軍服を無理やりプロイセン風に刷新せよと仰るから」

「先の戦争で痛感したんだ。常備軍はきちんと整備しなくちゃならないって。プロイセンにはそのノウハウがあるし……。制服を変えたのは改革の一環だよ」

「だからといって、別に制服まで同じようにすることはないでしょう。別の趣向にしても問題はないはずです。いたずらに士気を低下させる行いは控えてください」

オイゲン公が……。だからここに来ていないのだろうか。ちゃんと招待状を手配して呼んだはずではあるから、来ないということは彼の意思なのだろう。

やむを得まい。ここはマリアの言うことに従っておこう。あまり彼女と邪険になりたくはない。それに、元々変えたことは少しまずかったのかもしれないと思っていたし……。

「……わかったよ。デザインは変えさせるようにする」

「ええ。そうしてください」

マリアはどうも不機嫌であることを隠しもしていない様子だった。鋭い眼光を放ち、じっとこちらを睨みつけている。

……そこまで怒らせるようなことをしたのだろうか？

そんな疑問を浮かべていると。彼女は視線を僕から逸らし、どこか遠くの方を見つめながら問いかけてくる。

「シュレジエンをプロイセンに割譲する、というお話を耳にしましたが。本当でしょうか？」

「本当だよ」

「なぜ？」

問いかけに短く答えると、マリアは視線を僕に戻した。彼女の瞳には隠しきれない怒気が含まれているようだった。

「なぜ、って……。戦争に協力した諸侯に領地を与えるというのはきみも承知しているだろう？」

「ええ。ですが、プロイセンにシュレジエンを与えるというお話はまったくの初耳ですの。なぜ独断でお決めになられたのでしょうか？」

「あそこは先の戦争でプロイセン軍が荒らしたようだから、その尻拭いをさせるのも丁度いいと思った。それだけだ」

「ならば、ただ土地の修繕を命じればいいだけです。なぜすんなりとあの土地を引き渡したのですか。せめて、その前にわたしに一言あってもよいのではないですか？」

……やけに食い下がるような気がする。どういうことだろう。

「あの土地に、父は並々ならぬ情熱を注いでいました。あの土地で闊歩していた貴族がようやくいなくなつて、ついに直接統治できるようになったのに……。それをあなたは火事場泥棒に渡したのですよ」

「火事場泥棒……。？ もっと他に言い方があるだろう」

「事実ではありませんか。確かにプロイセンはあなたを助け出しました。ですが、それはシュレジエンを得るための大儀を得る方策に過ぎなかった。あの国は、あなたが生きていようがそうでなかろうが、シュレジエンを掠め取っていたに違いありません」

「……どういふつもりだ？」

言われなくたって、そういう側面があったであろうことはわかっている。

だけど、結果的に僕は生きている。諸侯が君主に該当する人間を助けたのだから、それに褒賞を与えるのは当たり前じゃないのか。まさかただ働きをさせろとでも言うのか。それじゃ反感を買うだけだ。将来なにかがあっても、それに協力してもらえなことさえない。なるだろう。

「プロイセンへのシュレジエン割譲をただちに撤回してください。あの国にはもっと他の土地を与えればよいのです」

「もうお互いにシュレジエンの扱いに関しては書類を交わしているんだ。今さら覆すことなんかできないだろう」

そうだ。この誕生会に先立ち、プロイセンとはさまざまな交渉を重ねている。

次の皇帝に自分になる以上は自分でやるべきだと思って、マリアたちは一切通さずに自分の配下の人間だけを使って折衝していたんだ。

「ご自分の立場がおわかりなのですか？ あなたなんて、所詮はアンナ叔母さまの息子だから後継者に選ばれただけなのに……。どうして、皇帝家が長年をかけて自分の手に取り戻そうとしていた、あの土地を勝手に手放してしまうのですか！」

「……母の息子だから？ どういうことだよ」

マリアの口から飛び出した台詞を耳にして、僕は思わず問いかけていた。だけど彼女はそれに答えてくれるつもりはないようだった。

「そんなこと、ご自分で調べてください。わたしはもうあなたとは口も利きたくありません。皇帝でもなんでも、勝手になればいいのです」

「な……、どこに行くんだ」

彼女はなにも答えてくれない。

長い髪を振り乱しながら、こちらには一目もくれることもなく走り去っていく。後には、彼女が使っている香水の匂いだけが残されていた。

周囲の奇異の視線に晒されながら――事態を見ていたのだろう、キュルケたちがやって来る――僕はなにもわからず、どうしようもできずに立ち尽くしていた。

一体なにが悪かったんだ？

シュレジエンをプロイセンに割譲したのがそんなに不服だったのか？

それとも、彼女を通さずに話を進めたのが問題だったのか？

だけど、譲ったものを今さら「返せ」だなんて、そんなこと言えるわけがないじゃないか。僕はいったいどうしていればよかったんだよ。

「カール……」

やはりドレスに着飾ったエリザベートが僕のスーツの裾を掴み、こちらを心配そうな様子で見上げていたが……。

突然の出来事に頭が混乱していた僕には、その気遣いに気づく余裕などなかった。

第三十三話（後書き）

第七章は終わり。次話より第八章になります。

第三十四話

プロイセンの参戦などによって帝位争奪戦を制したカール・ペーター・ウルリヒは、ついに皇帝ペーター三世として即位した。

彼のファーストネームは『カール』であったが、先のカール七世との一連の因縁があったため、祖父ペーター一世から受け継いだ名前を皇帝名として名乗ることにしたのである。

先日ウィンドボナで行われた皇帝選出の選挙において、ペーター三世は全選帝候の票を獲得していた。

ただし、戴冠式の実施は見送ったため、彼は戴冠しないまま皇帝となっている。

皇帝側はこれをゲルマニア全諸侯から信任を得たことだと宣伝を繰り返したが、実態としてはプロイセンやザクセン、バーメン、バーデン、ヴュルテンベルクなどの名だたる諸侯からの支持を取り付けたに過ぎなかった。

特に反プロイセン感情が強い旧来からのゲルマニア貴族を中心に、反ペーター三世勢力は徐々に結集しつつあった。

“一応は”水面下における、その運動の事実上のリーダーであると言われていたのは、皇帝アルブレヒト三世の長女であるマリア・テレジアである。

本人としては政界の表舞台に姿を出さなくなっただけで、積極的にペーター三世と敵対するという意思は現時点では持ち合わせていなかったが、周囲の反皇帝勢力がその状況を利用しないはずがなかった。

特に影響があったのは政府の陣容だった。

新皇帝の即位とほぼ時を同じくして、マリア・テレジアに親い政府閣僚は次々と政府を離脱。ペーター三世は自身を支持する諸侯か

ら閣僚を招かねばならなくなってしまった。

また、このことが影響したのだろうか。

王朝は事実上、ホルシュタイン・ゴットルプ朝へ移ることとなり、皇帝自身もこれまでの皇帝家の名を名乗ることはしなかった。

新たに政府へ招かれた閣僚は宰相フォン・シュタインを始めとしてプロイセン出身者が多く、これは反皇帝派に格好の攻撃材料を与えることに繋がっていた。

『ペーター三世はプロイセンの傀儡である』。

後に世論——この時点での世論とは貴族のそれである——に大きく影響を及ぼすことになる“芽”は、既にこの時点で生み出されていたのだった。

僕が皇帝として即位してから、既に一ヶ月が経過していた。

難航していた政府閣僚の人選もようやく終わり、事実上これまでの体制を覆す新しい政府が出来上がっていた。

そして、その最大の要因……ある意味で原因とも言えるのは、皇帝選出の選挙直前で僕とマリアの間で起きた予想外の不和だった。彼女は政治の表舞台を去り、プリンツ・オイゲンら彼女に近い貴族も次々と政府の役職を降りてしまった。

結果。

僕の下で発足した政府は、プロイセンやザクセンを始めとして、これまであまり中央政界には縁がなかったその他の非主流派貴族の

登用が中心になった。

中には既に、僕がプロイセンの傀儡であると主張する人々もいる。だけど、僕本人としてはそんなつもりは毛頭ない。たまたまフリードリヒ二世と目指すところが同じだったのであって、自分は彼の傀儡などでは断じてない。

無論、皇帝家やこれまで皇帝家に仕えてきた古い貴族たちの協力を得られなくなり、積極的に協力してくれるプロイセンへの依存度が上がったのは事実ではあるのだが。

……あと少し気になるのは、やはり軍部の反発だろうか。

僕が率先してプロイセン式の軍制改革を導入したことに、旧い貴族を中心として猛烈な反発が上がっている。

だけど、今文句を言うのだったら、先の戦争でもっと迅速に動員をかけるくらいはしてほしかったものだ。

先の戦争の教訓から、諸侯に頼らない常設の軍隊——この場合は陸軍だ——は絶対必要不可欠であると僕や宰相、陸軍大臣らの意見は一致していた。

だからまずは、職のない農民の次男三男を集めて給金を支払いつつ訓練を施すことになった。所謂、職業軍人の育成である。

教官は既に実績のあるプロイセンから派遣され、さっそく第一陣が訓練を始めていた。正直なところ、今はまだ使い物にはならないだろうけど、ある程度訓練を積みばよく戦えるようになるだろう。

そしてそれと同時に進めているのが、教会領地の国有化、農奴制の廃止、土地売買の自由、職業選択の自由を平民に与えるという改革の骨子案作成だった。

これらは多くを宰相のフォン・シュタインが提案していた。彼は徹底的な改革こそが今のこの国に必要なだと考えており、大方の考え方において僕と共通した思想を持っている。

教会領地はゲルマニア全土に広く点在し、教会の資金源の一つとなっている。それを国有化することによって、莫大な税収が見込める上に、ブリミル教勢力の弱体化を促すことも出来る。

また、ゲルマニアは平民でも領地を金で買うことが出来るとは言われているものの、本当のところはまったく違う。

実際にそれが可能なのは領地を持たないながら貴族の地位にある下級貴族等までであり、それすらある程度のコネがなければ不可能だ。

平民にはそもそも土地購入・所有の権利はなく、またメイジの血統でない者が爵位を得るのも不可能である。

これはおおよそハルケギニア全体を通じて適用される制度だ。別にトリステインだけが遅れているとか、そういうことではまったくない。この世界全体における“常識”だった。

僕たちが行おうとしているのは、そういった緒制度を根本部分から改めることである。

徹底的な改革をしなければ、数千年間停滞した社会の有り様を変えることは出来ない。多少強引な、ともすれば急進的とも言える政策を実行しなければならぬ。

また、農奴制等の廃止と並行しながら、憲法の制定作業も行おうと考えている。

成文憲法は近代的な国家に無くてはならないものだ。ブリミル教こそが絶対的な価値観である今の思想を覆し、法の秩序に則って国を統治するためには、基本方針を定めなくてはならない。

これはウィンドボナ大学校の権威であるローレンツ・フォン・シユタイン（彼は宰相とは関係がない）らに草案の作成を命じていた。議論はこれからだが、恐らく年内には草案が完成するだろう。

と。……ここまでやってしまうと怖いのがロマリアの干渉だ。

彼らはブリミル教を絶対的な価値観とする典型的な存在である。僕らが行っているような、ブリミル教を政治から排除する動きは否定的に捉えているはず。

しかし既に、政教分離の大本の土台はアルブレヒト三世が生み出していた。伯父はブリミル教勢力の弱体化を意図し、それを水面下で実行に移していたのである。

ロマリア本国……、教皇庁がなんらかのアクションを起こせば話は別だが、最近になって即位した聖エイジス三十二世は、なんらゲルマニアに関する言動を見せていないようだ。

彼にとってはロマリア国内の改革がもっとも優先される事柄であり、三王権にも属さないゲルマニアには興味を持っていないのだろう。

それはそれで非常にありがたいというものだ。あまり干渉されても煩わしいだけだからね。

ひとまず、今のところ政治の多くは宰相たちに任せておいて大丈夫なようだった。

僕は政治のやり方をまだまだまったく知らない。基本方針を示すだけで、細かい調整は専門の人にやらしてもらうべきだと考えた。

とはいえ、いくら政務を適任者たちに任せているとしても、皇帝たる自分が遊び呆けているというわけにもいかない。

だから、今は空いた時間を使って勉強をすることが多い。学ぶことはまだまだ山ほどあってなかなか骨が折れるものだ。

やることは多く、まだ戦争が終わってから比較的日子は浅い。だけでも、国政改革と同時に僕はとある軍事作戦の準備をケーフェンヒューラー将軍に命じていた。

それは故郷であるホルシュタインの北、シュレースヴィヒを挟ん

だユーラン半島に存在する非ゲルマニア国家、デーン王国への軍事侵攻作戦のことである。

かの国は北東海沿岸部での海賊業を生業としていた人々が建国した国で、祖父の代にシュレースヴィヒの大部分を我が家から奪った国だ。

アルブレヒト三世以前からゲルマニアとは半ば敵対関係にあったが、ウインドボナの政府からすればあまり重要な地域ではないと見なされて放置されていた。

キール運河とそれを防衛するキールの海軍部隊がいる限り、商船はわざわざ北東海を迂回する必要がない。だから、わざわざ多額の遠征費用を投じてまで辺境の小国を潰す理由はなかった。

それにデーン人は元々が海賊だ。下手に国家を瓦解させ、彼らが先祖帰りする方が無駄に手間がかかるというものだろう。

……そのリスクを承知しながらでも、僕は軍を送り込もうとしているのだが。

対デーン王国の遠征軍は旧来通りの構成——陸軍は傭兵主体の軍隊になる。今現在訓練中の徴用兵を投入することも十分にありうるが、それはごく少数に留まるだろう。

次の戦争は極めて短期間での決戦を目指している。前回投入されなかったゲルマニア両用艦隊や、キールの海上艦隊を投入し、一気に敵の首都がある島を攻め落とすのだ。

この出兵に関しての批判は多々あるだろう。

だけど、たとえ何を言われようと、デーン討伐は絶対にやる。そう決めたんだ。……あのときの父との約束を実行に移すときは、そう遠からずやって来ることになるだろう。

「とうとう、彼も皇帝になったのよねえ」

帝都から遠く離れたアンハルツ・ツエルプストーの領地。自家の城にある自分の居室にて、わたしは新聞を眺めながら呟いた。

紙面ではカール……、ペーター三世がバーデンやヴュルテンベルクを訪問したときの様子が、挿し絵付きで報じられている。

挿し絵の彼が身に付けているのは、ゲルマニア軍の軍服だった。これまでの皇帝とは違って、公の場に姿を見せるときはいつも軍服を来ているようなのだ。

これはブリミル教と距離を置くための処置なのだろう。

でも、彼は本当に大丈夫なのだろうか。

ハルケギニアの貴族の権力を支えている思想の根底にはブリミル教がある。いわゆる、王権神授の考え方。

貴族が魔法を使うことが出来るのは、わたしたちが神に選ばれた存在だから。神によって選ばれた存在に平民が逆らうことは許されない……、そんなちよつと馬鹿げているとも取れる思想。さすがにこんなこと口には出来ないけれど。

そうやってブリミル教によって権威を得ている反面、ハルケギニアの貴族はブリミル教勢力に対して非常に立場が弱い。

過去に教会から破門された王や貴族の末路は……。それを考えてしまうと、どうしても不安になってしまうのだ。

「何事もなく……はいかないでしょうから、うまく立ち回ってくれるといいけど……」

そう願うように呟きながら、しかし一方でわたしは不安を拭い切れずにいた。

なにかよからぬことが間近に迫っているような――いつか感じた不安をさらに上回る“予感”が、このときのわたしにはあった。

「あら、キュルケ。珍しいわねえ、新聞に目を通すなんて」
「お母さま」

新聞に視線を落としていたとき、不意に背後から声かけられる。声の主はお母さまだった。

確かに言われてみると、わたしが自発的に新聞読むことなど以前は考えられなかった。世相というものに対して興味を抱いていなかったのも、大体はお父さまがお読みになっていたのを見目にするのが関の山というところ。

カールがどう報じられているのかが少々気になるので、近頃は手に取ることが増えたけど……。

「あら、それ……カールくんの記事じゃない」

「そうよ」

「……あまり上手じゃないわね、この絵を描いている人。彼はもっとかわいい顔をしているわ」

横から紙面を覗き込みながら、お母さまはとても不満そうに言う。ううん……。確かに似てないというか、この画家さんが本物のカールを見たことがなさそうなのはわかるけど。

こういうのって、ちゃんと似ている方が少ないんじゃないのかしら。見たままの光景を写し出せる魔法とかがあれば、こういうのもっと正確になるのじゃないか。

ここで、ふと思う。

お母さまはどういうわけか、なぜかやたらとカールを気に入っているようなのだ。彼とわたしの婚約を強力に後押しした……とか、ほはお父さまを強引に押しきったのもそうだし。

どうということなのかしら。少し、尋ねてみましょうか。

「ねえ、お母さま」

「どうしたの？」

「以前から少し気にはなっていたのだけど、どうしてお母さまはそんなにカールに好意的なの？」

そうわたしが指摘すると。ほんの一瞬、お母さまの表情が固まったのがわかった。

「……あら、わかつちゃった？」

「いくらなんでもわかるわよ。そこまで鈍いのなんてカールくらいだわ」

我ながら酷い言いようかもしれないけど、彼はそう言われても仕方なくらいには鈍いのだ。

「そうねえ。あなたには話していないこともあったかしら」
「え？」

なんとなく、カールの姿を思い浮かべていると。お母さまがテールの向かい側に腰掛け、真剣な様子でこちらを見つめているのだ。

「わたし、彼のお父さま……カール・フリードリヒとは幼なじみの。というより、ぶっちゃけると従妹なのよ」

「……え？　で、でも、名前は」

「わたしの両親は子沢山だったから……。親戚へ養子に出されたのよ。だから、あなたは彼のはとこに当たるわ」

貴族なんて大体みんな親戚のようなものだけど……。そんなに近いなんてこと、知る由もなかったわ。

ということは、わたしも一応は始祖の血を引いているということ

になるのかしら。ツエルプストーはラ・ヴァリエールに嫁いだ王族の女性を寝取ったりしてるから、どの道混ざってはいるのだろうけど。

「あの人が本当のことを知っていたのかどうか、それはわからないわ。とにかく……。小さい頃、よく遊んでいたのよ」

そうわたしに話すお母さまは……。どこか寂しそうに見えた。

「カールくんはあの頃の彼によく似ているわ。それこそ生き写しのように……」

「……ふうん」

……なんだか妙だわ。お母さまの瞳の色がおかしい。いえ、それは見ただけでは変わらないのだけど、比喻というかなんというか。ここでふと、去年の戦争前のアウグステの言葉が思い出される。あれはあの子の悪ふざけだと思っていたけど……。こうしてよく見ると案外そういうことなのかも……。

ええ。

あんまり深く考えるのはやめておきましょう。そうしましょう。

なにやら物憂げな様子で指を唇で挟むお母さまから視線を逸らしながら、わたしは現実逃避を決め込むことにするのであった。

第三十五話

ペーター三世の下、宰相フォン・シュタインが推進した国政改革は着々とその片鱗を現しつつあった。

彼は国の存続のためには徹底的な『上からの改革』が必要であると考えており、それは出身閥であるプロイセン内部を代表する意見でもある。

宰相は高等法院の司法系門閥貴族を次々と追放、プロイセンで法律を学んだ若手の法衣貴族たちを空席となった要職へねじ込んだ。

彼ら新進気鋭の若い貴族たちは、国家を統治するのは法であるという強い信念を抱いていた。後に彼らが、ゲルマニアがハルケギニア最先端の立憲君主制を擁する国家となる基礎を築くことになる。

これまでの教会に対する特権は次々と縮小され、領地には地方領主のそれと同等の租税が課されるようになった。

さらに、かなり長期間に渡って段階的に行うことにはなっていたが、農奴たちに対する一種の解放政策も徐々に動き始めていた。

こうした動きは、ペーター三世の即位からごくわずかな短期間のうちに起こっていたのだ。

だが、このような急速な変化を嫌う人々が多い。

伝統に反していると糾弾する者。急進的過ぎると批判する者。先進国を自称するゲルマニア内部ですらこうなのだから、他国がこの動きを危険視しないはずがなかった。

——ゲルマニアの西方に位置する『三王権』の一つ、トリステイン王国。王都トリスタニアの王城。

王を喪って以来、この国の事実上の最高権力者となっていた男が

いる。

それはロマリアからやって来たマザリーニ枢機卿であった。やせぎすの三十代半ばの男で、この頃から既に彼の顔にはその苦勞が偲ばれるように幾本ものしわが刻まれていた。

彼は隣国で起きている大規模な政治改革運動に関する報告書を目にしながら、ひどく陰鬱とした様子でため息をついた。

そんな、今にも倒れてしまいそうな枢機卿の様子が気にかかったのだろう。

ある意味ではこの壮年の男を中年たらしめている“原因”と言えなくもない栗毛の女性が、窓際から枢機卿の元へと歩み寄る。

「一体、どうされたのですか。そのような顔をされて……」

マリアンヌ・ド・トリステイン。前国王の妃にして、かつての王フィリップ三世の一人娘だった。

夫との死別後、本来ならば王位継承権の頂点にいた彼女は頑なに自身のトリステイン王への即位を拒絶していた。

実年齢からは信じられないような若さと美貌を兼ね備えた彼女の民衆からの人気はとても高く、女王への即位を望む声は身分の貴賤を問わず非常に多かったのではあるが……。

しかしそれでもマリアンヌは戴冠を拒み、トリステインの王位は空白のままとなってしまうていたのだ。

王族として最低限の政務はこなしているものの、実務の一切は宰相らに丸投げされていた。

マザリーニは外国人である故に、トリステイン国内の支持基盤はひどく脆弱で、ほぼゼロに等しい状況である。

それを得るために、容姿が美しいと評判の姪たちをトリステインの大貴族に嫁がせる約束を交わし、少数の協力的な貴族を確保するのが精一杯という状況であった。

マリアンヌの問いにマザリーニはしばらく答えなかったが、しばしの間を置いて顔を上げる。

そして、乾いた唇を重々しく開いたのだ。

「ゲルマニアの新皇帝と宰相らの件で、少々の懸念がありましたな」
「懸念……、ですか？」

マリアンヌには、マザリーニがどうしてここまで顔に憂いを浮かべているのかわからなかった。

彼女はかつて自身の誕生を祝う園遊会にて、新皇帝ペーター三世とは一度顔を合わせている。

その時の印象からすれば、別にこの枢機卿を困らせるほどの暗愚な君主になるようには思えなかったのだが……。

「ええ。ペーター三世はまだまだお若い。少年皇帝です。彼自身はあまりにも政治の経験がない。目下の者たちをうまく制御できない」
「……確かに、帝王学もまだあまり学んでいないでしょうね。即位した経緯や、年齢的に」

「故に、彼の治世においてゲルマニアは大混乱に陥る可能性がある。いや、既にその予兆は起きている。その余波が我々に及ばぬよう、早急に対策を講じておく必要があるでしょうな」

「なるほど……。確かにそうですわ」

トリスティンはハルケギニアでもっとも保守的な国家だ。貴族たちは伝統を重んじ、新しい、異質なものを嫌う。

ペーター三世は元を正せばトリスティン王家の分家の出身者ではあったが、今現在はゲルマニアに帰化した貴族である上、彼が推し進める一連の“改革”はトリスティン貴族たちの批判的だった。

外国のことであるから表立って言及することはなくとも、皆私的に集まっては幼い皇帝を罵っていた。

彼らはゲルマニアの農奴解放・平民への権利付与の流れが自国に波及することをひどく恐れており、そうした行動は恐怖感の裏返しでもあった。

——これからは、国内の平民たちの動向にも注意しなければならぬのか。

マザリーニは心底ため息をつきたい衝動に駆られたが、それをなんとか押さえつける。そして、手元の羽ペンを手に取りながら言った。

「私には、ペーター三世やプロイセンが何を考えているのかわからない。彼らは六千年あまり続いてきた支配構造をわずかな期間で破壊しようとしている。無謀すぎる。数百年早いのですよ、彼らの行いは……」

——ある日のことだった。

僕はフリードリヒ二世に誘われ、シュレジエンの森林へ狩りに訪れていた。

当初は提案を断ることも考えたが、宰相のシュタインから「たまにはお休みを取られてください」と言われたので、ありがたく休みを頂戴することにしたのだ。

このところはずっと諸侯や外国貴族との謁見を行っていたので、彼なりに気を使ってくれたのだろう。

ちなみに現在地はシュレジエンの北部、ブランデンブルクとの境目だ。この地域は人口が少なく、他に比べて比較的治安が安定しているのだという。

鬱蒼とした木々のただ中。視界の恥に映る小川の脇では、エリザベートとヴィルヘルミーネ王女がなにやら石を拾っていた。

久しぶりに会ったヴィルヘルミーネさんはあまり変わりが無いようだったが、僕への態度はかなり改まったものになっていた。ただ、エリザベートに対しては以前のように接してくれている。

……さて。

狩りは乗馬などと並んで貴族の代表的な娯楽の一つだ。

あえて魔法は使わず、弓などを使って目の前に現れた獲物を仕留める……というと簡単そうだが、素人にそんなことはまず出来ない。見た目よりもずっと難しいんだ、これは。

まず、僕は弓を射ることさえ無理だ。乗馬だって、ウィンドボナに来てからやっとまともに出来るようになったのだ。

そのことをフリードリヒに正直に話すと、彼は僕の指南役を買って出てくれた。

「ぼくが手本を見せるから、まずはそれを見て基本動作を覚えてくれ」

フリードリヒはそう言うのと、弓弦へ矢をつがって引き絞り始めた。すると、緩やかなアーチを描いていた弓がみるみるうちにしなり、手を離せばすぐに矢が飛んでいくのだとわかった。

次に彼はこちらへ目配せし、ほんのわずかな狙いを定めるための時間を置いて弓を射った。

弓から放たれた矢は目にも留まらぬ速さで近くの木の幹へと到達。やけに軽い音とともに、矢は木の幹に突き刺さっていた。

「す、すごいなあ。さすがだよ。僕には出来ない」

「そんなことはないさ。……弓は取り扱いに注意するんだ。慣れるまでは怪我をする可能性が高い。慣れても、気を抜けばただでは済まないしな」

「う、うん。わかった」

初めてでうまく行くのだろうか。

大きな不安とほんの少しの期待を胸に秘めながら、僕は手にした弓を引くのだった。

——それから、数時間後。

「……結局、ろくに射ることも出来なかったな」

「仕方ないですよ。だって、初めてだったのですから」

「まあ、それはそうなんだけどさ」

夜間。夕食と入浴を終えた僕は、エリザベートと一緒に星空を眺めていた。

人工的なネオンのやかましい光がないハルケギニアの空はどこでも綺麗だが、ここは一際夜空に輝く星がはっきりと視認できる。

ここのところはずっとハルケギニアで生きてきたので、“空気の味”の違いはよくわからないが……。やっぱり、気分は大きく変わるものだ。大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出したりしてみる。

そんなことをしつつ、ふかふかの下草に寝転がりながら天を見上げていたとき。ふと、天を横切る一条の光が見えた。

「流れ星か……」

そう呟きながら、なんとなくエリザベートを見やると。彼女は礼

拝のときのように両手を合わせ、目を閉じて何事かを呟いていた。

「……どうしたんだい？」

「せっかく流れ星を見ることが出来たので、願い事をしていました」

願い事……、ハルケギニアにもそんな風習があったのかな？ あまり聞いたことはないけど。

一体何を願ったんだろう。訊くのは野暮なんだろうなあと思いつつ、その問いかけを試してみる。

「ちなみに、願い事は？」

「秘密です」

エリザベートはいたずらっぽく微笑み、人差し指を唇の前で立てた。

「そりゃそうだね」

「ふふ……」

いつかと思ったことではあるのだけど、やっぱり彼女はずいぶんと表情が豊かになってきた。

ただ、それは主に僕と一対一で接している場合なのだけど。メイドのシャルロット辺りがいると、やっぱり彼女は借りてきた猫のように大人しくなってしまうのだ。

そんな変化を僕だけに見せてくれることが、少し戸惑うような、少し嬉しいような。なんとも形容しがたい微妙な心情だ。

「あ、そういえば……。カールは願い事はしましたか？」

「いいや、出来なかったよ。あつという間に消えちゃったし」

流れ星を見たら、それが消えるまでに三回願い事をすると叶う……、なんて言い出したのはどこの誰なんだろう。不可能とは言わないけどかなりの難易度なんじゃないかな。

ほんの少しふて腐れながら、両手を肩の辺りまで上げて首を振る。すると、エリザベートはそんな僕のことを励ますような口調で言う。

「残念です。……でも、またいつか見ることが出来ますよ。そのとき頑張りましょう」

そうだ。まだまだこの人生の先は長いのだ。今回は逃してしまっただけで、またいつか今回と同じように……。また、流れ星を見られるときも来るさ。

「そうだね。まだ、チャンスはいくらだってあるんだ」

僕はそう呟き、再び空を見上げる。そんな僕の隣に腰かけ、同じように空を見上げていたエリザベートは、ふと思いついたかのように僕の私服の袖を引っ張った。

「どうですか？ 皇帝になってみて……」

そう問いかけてくる彼女の表情はやや曇り気味の様子だった。一体どうしたのだろうか？

「今のところは何も問題ないよ。とても順調なんだ。宰相はよく働いてくれるし、新しく政府に組み込んだ人も、残ってくれている人も本当によく頑張ってくれる。心配はいらないよ」

……いや、そうだな。

思えば、皇帝になるまでにはずいぶんと心配をかけてしまった。

先にリンツからウィンドボナに戻っていたエリザベートは、僕が目覚ますまで付きっきり診ていてくれたそうだ。それこそ、眠気でふらふらしながらも頑として場所を動かなかったという。

それだけ心配してくれたことはありがたいし、申し訳ない気持ちにもなった。

もうなるべく彼女を心配させないよう、心配事の種を作らないよう、もっともって僕は頑張らなければならない。

「僕は今よりもっと頑張るよ。シュレースヴィヒだって、すぐに取り戻してみせる」

「……」

「エリザベート？」

どうしたんだろう。彼女の様子が少しおかしいような気がするんだけど……。

僕が顔に疑問を浮かべながらエリザベートを見つめていると。彼女は一瞬だけ逡巡したあと、静かに口を開いた。

「シュレースヴィヒの奪回は、年内に？」

「うん。準備が出来次第、陸海空軍部隊で総攻撃を仕掛ける。今度こそ短期決戦で終わらせてみせるよ」

「そう、ですか……」

……なんだろう。あまり浮かない様子だけど。

そう思っていると。なにを考えたのか、エリザベートは僕の手のひらを両手で掴んだ。そして、今にも消え入りそうな声音で言う。

「……戦をやめろとは言いません。でも、もう無茶な真似はしないでください。あの人……いいえ、あなたのお父さまのように、思わぬ傷を負って倒れてしまったら、わたしは……」

「エリザベート……」

やってしまった。心配はかけまいと、今度こそうまくやろうと決心したばかりだったのに。どうして僕はこう要領が悪いのだろうか。

「今度の戦争が終わったら、もう戦争を仕掛けることはしない。本当は今回の作戦もかなりのごり押しなんだ。でも、今のうちにやっておかないといけない気がして……」

「今のうちに？」

「自分でもよくはわからないんだけど、なるべく早いうちにシュレースヴィヒを取り返した方がいいって、そういう……虫の知らせとでもいうか」

それは根拠のない予感でしかない。だけど、なぜかそれを軽視してはいけない気がしてしまうんだ。父との約束を守るために。

時々、こういう根拠のない不安のようなものが脳裏に浮かぶ。キユルケに見放されたら終わりだとか、今度のシュレースヴィヒの件だとか。果たして、これはただの思い過ごしなのだろうか。

それは僕自身では図りかねることだ。自分のことだというのに、まったくわからないなんて……。

上体を起こして物思いに耽っていると、肩に誰かの重みを感じる。どうやらエリザベートが頭をもたれかけたようだった。

「仲がいいのは結構なことだがね。夜間に護衛もつけないでこんなところにいるのはよくないぞ？」

「フリードリヒ」

しばらくしたとき。僕たちが宿泊している別荘の方からフリードリヒがやって来た。ちなみに、別荘はシュレジエン諸侯から接収したものだそうだ。

「明日は朝から弓の練習をする。この休みに射ることが出来るようになるよう、突貫で仕上げるぞ」

「え、いや……。興味は持ったけど、そこまでは」

「なにを言うんだ。メイジは戦場で杖を失ったときの対処法も持っていないならなんだぞ。今のきみでは敵のいい的になるだけだ。自衛手段は多ければ多いほどいい」

「それは、そうだけど……」

確かに、ヴルムたちのような騎士は魔法を使うだけではなく、剣やマスケツト銃も扱い、体もかなり鍛えているようだった。

「うむ。そうと決まれば今から準備運動をしておくか……」

「え、え？　今から？」

今からって、さっき夜にこんなところにいるなんて言ったばかりじゃないか、この人は。

「そうだ。なに、屋敷の周囲……そうだな。五リーグくらい軽く一周するだけだよ。きみの護衛たちも呼んで一緒に走ろう」

「五リーグって……」

「よし。さ、行くぞ」

「あ、ちょ、ちょっと待って……」

フリードリヒは僕の話は一切聞きもせず、ずるずると無理やり引きずっていく。抵抗を試みてもまるで通じない。あまりにも異様なほどの怪力だ。細身に見えるのに、一体どこにこんな力があるのだろうか。

もはやどうしようもなかった。さっきまでただ星を眺めていただけなのに、どうしてこうなってしまったんだろう。

僕は救いを求め、先ほどの場所に取り残されたエリザベートへ視線を向けるのだが――

「あらあら。頑張ってくださいね」

救いの女神さまは僕に微笑んでくれたが、決して救いの手を差し伸べることはしてくれないのだった。

第三十六話

この国の政界内部には、大きく分けて二つの勢力が存在している。それは親プロイセン派と、反プロイセン派だ。後者に属する人間は私の判断に反発し、隙あらば政策の方向性を改めさせようとする。まったく、鬱陶しいことこの上ない連中だ。

「陛下。やはり、無条件でプロイセンと停戦した件は軍から大きな反発が起きております」

それはとうに知っていた。むしろ、それは織り込み済みですらあった。

この国の軍隊は伝統的に反プロイセン感情が強いのだ。だが、だからといって今さらかの国との講話を取り止めることなどはありえない。

「多少の反発は構わぬ。言いたいように言わせておけ」
「で、ですが……！ さすがに占領地を無条件で返還し、賠償金も取らないというのは……」

今回の戦線離脱には国家財政を圧迫していた戦争をやめる、という大きな目的があった。

ならば敗北寸前の交戦国から賠償金を取り、国庫の穴埋めに使うことはもはや常道であるのだろう。

しかし、自分がその選択肢を選ぶことはない。いずれ来るシュレールスヴィヒ奪回のための戦争に際し、あの土地に近いプロイセンとは友好関係を築くべきなのだ。

そこに、私の個人的な感情が一切含まれないといえれば真っ赤な嘘になる。

だが、プロイセン王憎しで外交革命を起こした彼女達ほど感情的に政策を決めたつもりはない。私は皇帝として、ツァーリとして、現状採ることが出来る最善の策を求めたに過ぎないのだ。

「我が国はプロイセンと同盟を結ぶ。そのためには多少の損もやむを得ぬのだ。下がれ」

「ですが……」

「下がれと言っておるだろう」

尚も食い下がる将校の男を強引に下がらせる。去り際に男が見せた表情は、私に対する憤怒と侮りの情に溢れていた。

反プロイセン派の将校などというものは、いつもあのような状態なのである。

かの国との同盟が今後の我が国にとってどれほど有用に働くのか、それを認めず頑なに否定へ走っているのだ。まったく、ひどく嘆かわしいことだ。

ただ、あえて言うのならば――

“彼女”を筆頭として、既にこの頃から私に反対する運動の芽は、確実に、信じられないほど急速に育ちつつあった。

後にその事実を私が知ったときには、もう何もかもが手遅れの状態になってしまっていたのだが……。

皇帝ペーター三世の治世が始まってから、四ヶ月目を迎えた現在。

若干にしてゲルマニアという大国を束ねることになった少年への

評価は、身分や立場によって見事なまでに真っ二つに分かれていた。まずは平民からの評価。これは即位前の低評価に関わらず、農奴解放や権利拡大を謳って実行していたため、おおよそ好評である。

一方、ブリミル教関係者からの評価は最低の状態にあった。事実上、ペーター三世が彼らの持つ既得権益を次々と奪っていったからだ。

軍人の評価はやはり悪い。少数派である親プロイセン派の軍人からは絶大な信頼を得ているものの、多数派である反プロイセン派の勢力に属する軍人からは「あれはプロイセンの傀儡だ」などと評価を受けていたのである。

貴族については完全に真っ二つ——皇帝に取り入ろうとする新興貴族はおおよそ皇帝側である——に別れており、やはり反プロイセン派からは嫌悪されていた。

反プロイセン派、ひいては反ペーター三世派の頭目として“担ぎ上げられていた”のは、前回の戦争に際して皇帝を支持したはずのマリア・テレジアだった。

彼女はペーター三世の即位以来、表舞台からその姿を隠していた。現在はおつばら、自身が王位にあるパンノニア王国の首都であるプレスブルクにて同国の政務に当たっていた。

なぜ、突如として彼女が皇帝と仲違いしたのか。その理由を知る者は片手で数えることができるほどの人間しか存在せず、また彼らは決して第三者に理由を語らなかつた。

しかし、詳細が伝わらずともこの事態は反ペーター三世派勢力にとっては行幸である。

事実上の外様貴族出身である皇帝を引きずり下ろすには、アルブレヒト三世の実子であるマリア・テレジアを利用するのがもっとも確実かつ、もっとも手っ取り早い方法なのだ。

だが、そうした貴族たちの思惑とは裏腹に、肝心の彼女はプレスブルクから動くことをせず、それどころか反ペーター三世派との接

触を避けているくらいすらあった。

反皇帝派はこうした状況が長引くとは考えず、水面下で着々と“その時”へ向けて準備を行っていたが……。

件のマリア・テレジアは、今日もいつも通りにプレスブルクの王宮にて政務を行っていた。

パンノニア女王、メーレン女王、エスターライヒ大公を兼ねた存在である彼女の毎日はそれなりに多忙だった。

政務の多くはウィンドボナから連れてきた官僚たちに任せていたが、最終的な裁定やゲルマニア国内の貴族らと謁見するのは彼女以外には務まらない仕事だ。

ちなみに、パンノニアは中央政府の影響下からほぼ切り離されているが故に、今現在ゲルマニアで実行されている宰相シュタインによる改革の影響は少なかった。

それでも国家の内部で起きている大小様々な出来事の情報には常にマリア・テレジアの下に届けられ、彼女の眉間にシワを刻む原因となっている。

「陛下。今からそう眉間を歪めていたのでは、近い将来に必ず後悔なさりますよ」

「そうは仰いますが、オイゲン公。このところ、毎日のように反皇帝派からの謁見要求が届いているではありませんか」

老紳士の言葉を受けつつ、それでもなお報告書をしかめっ面で見つめるマリア・テレジア女王。

本人の意思に関わらず、ゲルマニアの反皇帝派らは彼女を無理やり御輿として担ぎ上げようとしている。

しかしマリア当人としては、これ以上皇帝と対立するつもりなどは毛頭なかった。

誕生会では感情的な行動を取って喧嘩別れとなったものの、だか

らといってペーター三世の治世を妨害する気など彼女にはない。

むしろ自分がウインドボナを出る際、古くから皇帝家に仕えていた貴族たちが辞表を提出してプレスブルクに大移動したことはまったくの予想外であり、彼女が関知しない部分での出来事なのだ。

「出すぎた口かもしれませぬ。が、陛下。貴女はウインドボナを出たことを後悔しているようにも思えます。ならば、一度お戻りになって皇帝と……」

「嫌です。わたしから喧嘩を売って飛び出して来たのに、今さら合わせる顔などありません」

「……そうですか」

マリア・テレジアが帝都へ出向けば、ペーター三世は彼女が頭を下げるまでもなく関係の改善を了承するだろう。だが、その一步がこの女王には踏み出せずにいた。なかなか難しい性格だった。

「陛下が帝都に赴き、皇帝の後見人を宣言した方がよい……。個人的な意見ですが、私はそう思います」

「それは、プロイセンに関連する理由からでしょうか？」

「そうです。彼の国から派遣された宰相のやり方はあまりにも強引です。それは確かに必要な政策であるのかもしれないが、あれでは無用な反発を招いてしまう」

「反皇帝派をより勢いづかせる、と」

「ええ」

それは確かにそうだ。マリア・テレジアも、シュタインの半ば強引な政権運営には若干の疑問を抱いていた。

「このまま何事もなく改革が進むとも思えない……。皇帝が準備を進めているシュレースヴィヒ奪還計画が一種の分水嶺となるでしょ

うな」

「シュレースヴィヒ……」

シュレースヴィヒ。シュレースヴィヒ＝ホルシュタインの片翼をなす地域だ。数十年前に北方のデーレン王国に占領され、前ホルシュタイン公カール・フリードリヒが奪回を目指しながらついに叶わなかった小さな領域。

マリアにとってカール・フリードリヒは今でも忘れられない人物だ。ふと幼少時の記憶を思い出して、彼女は一瞬だけ懐かしそうに表情を和らげながら目を閉じる。しかし、すぐにまた眉をしかめた。

「あの人は、自分がシュレースヴィヒを奪回したいと考えているのに、どうしてシュレジエンをプロイセンに売り渡すような真似を……」

出来ることなら、現在の対立状態は解消したい。

しかしマリア・テレジアの脳裏にはどこかややとした気持ちが残ってしまったのだった。

――女王が憂鬱な時間を過ごすのと、ほぼ同時刻。帝都ウィンドボナはシュテファン大聖堂。

廢帝となったカール七世ことカール・アルブレヒトはすべての公職から追放され、一族が葬られているこの寺院で実質的な隠居生活を送っていた。

前回の戦争の経緯などを鑑み、一部の貴族はカール・アルブレヒトの処刑を主張していたが、ペーター三世は即位と同時に政治犯への大赦を発表。彼はブリミル僧として帝都へ残ることになった。

今のところ、彼はごく普通のブリミル僧のように振る舞っている。

……仮になにか行動を起こそうにも、杖を折られたメイジに何が出るのかという問題はあるが。

「ふん……。なにがペーター三世だ。祖父に……。ペーター大帝にあやかっただけか、あの子供が……」

自身の甥の記事が一面を飾る新聞の紙面を苦々しげに睨み付けながら、青年は深くため息をついた。

実際のところ、カール・アルブレヒトは未だにペーター三世を酷く恨んでいた。

彼はどこまでもあの甥が嫌いだ。それは甥によって大赦が発令され、死刑を免れた今となっても微塵も変わらない。隙さえあれば、いつでも復讐のために皇帝の下へ飛んでいく腹積りであった。

しかし彼が半ば復讐の機会を諦めていたのも、また事実ではあった。

今のカール・アルブレヒトは一介の、それも政府の監視下に置かれたブリミル僧の一人に過ぎず、自ら皇帝を暗殺するような機会などは絶対に訪れない。まして、それが廃帝カール七世という人物ならなおさらだ。

このシュテファン大聖堂を出ることにすら許可がいる現状、彼にとって復讐は現実ではなく夢物語。もはや考えるだけ無駄なのだ。少なくとも彼はそう思っていた。そう、今日このときまでは。

「カール・アルブレヒト・フォン・エスターライヒ……ですね？」
「誰だ？　ここは私の私室だ。許可なく立ち入ることは許さん。今すぐ立ち去れ」

カール・アルブレヒトが新聞紙を目の前の机に放ったとき、突如として背後から声かけられた。

内心、自分を手にかけるためにやって来た刺客か何かを想像して、身が縮み上がる思いではあったが彼は必死に冷静な態度を取り繕う。それでも手は若干震えてしまっていた。

しかし、声の主は廃帝たる青年の思惑とは裏腹にやや困ったような声音になった。

「これは失礼しました。ですが、申し訳ありません。自分は教皇庁より秘密裏に派遣された使者なのです。ゲルマニア政府の監視に引っ掛かる訳には行かず、このような形でお訪ねさせていただくことになってしまいました」

長々と事情を説明するのと同じ時。何もない空間から突然、見目麗しい美少年の顔が現れた。すぐにまたその顔は虚空に消えてしまったが、カール・アルブレヒトははつきりとその容貌を目撃していた。

——月目。

ハルケギニアから遥かに遠い空に浮かぶ青と赤の双月から、トリステインなどではオッドアイを“月目”と呼んでいる。それは不吉なものを差す言葉であった。

ただ、カール・アルブレヒト自身はそのことは特に気にしなかった。それよりも、『使者』だという少年が身にまとっている姿を隠す物体の方が気になった。

「……姿を隠すマジック・アイテムか。そんなものを持っているとは。さすがに、嘘とも断じられぬか。目的を申してみよ」

「ありがとうございます。では、その前に貴殿には“これ”をお受け取りいただきますよう」

「なんだ、これは……？」

透明な、なにもない空間から突き出されたのは、なにやら銃のような形をした重い物体である。本体中央部には、複数の弾丸が込められた丸いシリンダーが配置されていた。

「『聖地』で発見された拳銃の一種です。どうやら、ピースメーカーなどと呼ばれているようです」

ピースメーカー。またなんとも皮肉な名を武器に付けるものだ。

「ほう。これで私に殺れというのか。教皇庁は」

これでも自分は敬虔なブリミル教徒のつもりだったのだがな。よもや使い捨てにされるとは——青年はそう考えたが、口には出さずに拳銃を手のひらで弄ぶ。

「聖下はブリミル教の未来を、ひいてはハルケギニアの未来を憂えております。始祖の御心を蔑ろにするような人間には、それ相應の結末が待ってしかるべきです」

「ふん。悪趣味だな」

「民の信仰を守るためには、多少薄汚いことも避けては通れませんが……始祖の血統にありながら始祖に反逆する。それがどれだけ愚かな行いなのか、世に知らしめる必要があると聖下は仰いました」

確かに、ブリミル教などというものは統治する側……貴族にとっただけ都合の良いものだ。

人口の圧倒的大多数を占める平民たちを押さえつけるために、今日までブリミル教が発展してきたと言っても過言ではない。

彼らは信仰を強制され、体制側に都合の良い思想を植え付けられていく。思想の根本に、貴族に逆らうことをしてはならないのだとねじ込む。

無論、個人ではそれをただ唯々諾々と受け入れる人ばかりではない。だが大衆やコミュニティといった“全体”に思想を植え付けることが出来れば、必然的に個は押し潰されていずれ消えてなくなる。六千余年に渡ってこの広大なハルケギニア全域に浸透したブリミル教の恐ろしさは、信徒であるカール・アルブレヒト自身よく理解していた。

「ペーター三世はやり過ぎたんですよ。彼はまだ子供だから、ぼくたちも対話の道を模索しようと考えましたが……」

姿は見えないものの、青年にはオッドアイの美少年が首を振る仕草をしているのが手に取るように理解できた。

「それは諦めました。宰相のシュタインがかなりの曲者ですしね。だから……」

「……まさか」

「ええ、そのまさかです。もう軍内部には多数の協力者がいますよ」

思い出されるのは、過去にロマリアの教皇と対立したゲルマニア皇帝が教会から破門を宣告されたことに始まる大事件、『カノッサの屈辱』。

ブリミル教の権威によって体制を支えられているハルケギニアの諸侯にとって、教会からの破門は事実上の死刑宣告に等しい。当然、退位は免れない。

いよいよ、ロマリアも本気なのか。

カール・アルブレヒトは思わぬ形で自身の甥が引きずり下ろされると知り、歓喜の笑みを浮かべるが――次の瞬間に使者の少年から放たれた一言は、そんな彼の想像をも上回るものだった。

「間もなく、ペーター三世は『異端』認定を受けます。ハルケギニア史上初の“異端認定された君主”となるんですよ。彼は」

第三十七話

季節が段々と秋へと移り変わった今日この頃。

わたしは父に連れられ、帝都ウィンドボナへとやってきていた。

空の旅を経て帝都に到着し、わたしがツェルプストーの屋敷からホーフブルク宮殿に向かおうとしたとき。

玄関先で少し困ったような顔をした父に呼び止められ、そこでカールがついに対デーノ王国戦争を起こしたのだと知った。

どうやらわたしたちと入れ替えに、既にカールは生まれ故郷でもある軍港都市キールへ向かってしまっていたようなのだ。

彼からの手紙で近々戦争をするというようなことは知っていたけれど……、なにもこんなタイミングで始めなくてもいいのに。少し焦りすぎだわ。

仕方のないことではあるけれど、リアルタイムで情報が入って来ないのってなんとも不便なものね。父も、情報は生死に直結しかねないとよく仰っているし。

ま……とにかく。

そんなこんなで、わたしはもう何週間もウィンドボナに滞在していたのだった。

彼はいつになったら帰ってくるのかしら。あんまり待ちぼうけをくらしいすぎて、あくびが出てしまうわ。

———そんな、ある日のこと。

父は今日、ケーフェンヒューラー将軍に代わり、帝都防衛隊の隊長になったナイベルク伯爵に用があるのだそうだった。

そこにわたしが同席する意味はあまりないので、一人で適当に帝

都の大通りをうろつくことにした。

新たな戦争が始まったとはいえ、帝都を行き交う人々の表情はなんと穏やかなもの。前回の対ガリア・反乱軍の戦争と違って、今回は東方辺境地域で行われているような討伐戦争だから落ち着いているのだろう。

そういった辺境を制圧するための戦いが、この帝都に波及する恐れはまったくくない。どこか遠くの見知らぬ土地での出来事でしかないのだ。この都市の住民にとっては。

そういう物の捉え方をわたしは否定しないし、自分だって普段から父が行っているような地方の鎮圧だって、どこか他人ごとのように感じている。

要は、危機感がなかったのだ。超大国ガリアと未開の野蛮人では、その脅威も段違いなのだし。

中央広場ではカール……、皇帝ペーター三世初の戦勝記念パレードに向けた準備が早々に開始されていた。

もう皆が対デーン王国戦争には勝ったものだと思っている。だからこそ、こんな市街地の中央に、見上げると首が痛くなりそうなほど高さのある凱旋門なんて建てている余裕があるのだ。

それにしても、本当に大きいわねえ。シュテファン大聖堂よりも背が高いんじゃないかしら。こんなに大きくする必要があるのかしら？

なんてことを考えつつ。そろそろ歩き疲れたと感じたので、適当に近くにあったベンチに腰掛ける。そして、なんとなく建築現場を眺めていると……。見慣れた姿がすぐ近くを通りかかった。

「あら、エリザベートじゃない」

「……キュルケさん？」

そう。わたしの目の前を通りかかったのは、なぜかずっとカール

と一緒に暮らしている女の子ことエリザベートだったのだ。

今日の彼女は今までとは違って少しお洒落をしている。無地の真っ白なワンピースではなくて、街で流行りの上着とスカートを組み合わせ、編み上げのサンダルを履いている。ややクセのある長い亜麻色の頭髮は頭の後ろで纏め上げ、ぶらぶらと馬の尻尾のように揺れていた。

なんだか、いつもの彼女とは大分異なった印象を受ける。かなり地味な子だと思っていたけど、ちゃんと服装や髪型を整えるだけでとっても可愛くなるものなのねえ……。

ただ、少し様子がおかしい。額に汗を浮かべ、どうもなにかを気にするような仕草を見せているのだ。

「そういえば、こんなところでどうしたの？ 一人で出歩いているようだけど……。ちなみに、わたしは父の付き添いよ」

「えっと、それは……」

あら。あまり他人には言いたくない理由なのかしら。

「いいのよ、言いにくいことなら無理に言わなくても」

「そ、そうではなくて——」

と、エリザベートが居心地悪そうにもじもじとしていたそのときのこと。遠くの方から、誰かがこちらへ走ってきた。

「こんなところにいたんですか！ どうして逃げるんです！」

現れたのは、カールがキールから連れて来ていたメイドだった。名前は思い出せないのだけど、かなり珍しい……というか見たことのない青い髪の子だったから、それなりに印象に残っていたのだ。どうも彼女がエリザベートが不可解な行動を取る原因であるらし

い。だって、メイドの子が来るなりわたしの影に隠れてしまったのだから。

メイドの子はすぐにわたしの存在にも気がついたようだ。こちらを視界に入れるなり、あからさまに萎縮してしまう。まさか、こんなところで遭遇することになるなどとは思っていなかったのでしょうね。

「あ……。ミ、ミス・ツエルプスト……。こ、こんにちは……」

「どうしたの？ なにやら揉めているようだけど」

「い、いえ。そのですね。街で流行になっているようなお洋服を仕立ててみたので、それを着ていただこうとしたのですが……」

「嫌がられて逃げられた、と」

「さようでございます」

ふうん。この子って、お洒落とか嫌いなのかしら。でもそれはもったいないわねえ。せっかく女の子に生まれたのに。……ま、嫌がる人間に無理に服を着せるのは話が別だけど。

「とりあえず、嫌がっている以上は無理に着させるべきではないと思うわ。よく似合っているし、可愛らしいと思うけれど」

「も、申し訳ありません……」

「わたしに謝ってどうするのよ。エリザベートに謝りなさいな」

やや呆れつつ、わたしはなんとも頓珍漢な行動に出たメイドの子を促した。彼女は素直にそれを受け入れ、エリザベートに謝罪の言葉を口にしていった。

……それにしても、ねえ。

本当、この子って何者なのかしら。わたしがカールと出会ったときにはもう同居していたようだけど……。貴族の子女ではあるのでしょうか。ただ、ゴットルプとの関係性が今いち把握出来なかった。

それをわざわざ訊ねることはしなかったのだけれど、やっぱりどこか気になっていたり。今度、それとなく彼に問いかけてみましようか？

「どういうことだ、シャルロッテ！ エリザベート嬢の身柄の安全確保は陛下から最優先で命じられていただろう！ それを、お前の身勝手なわがままでもぶち壊しにしてどうする！」

「ご、ごめんなさい……」

「あ、あの、ヴルムさん……。勝手に逃げ出したわたしも悪いんです。どうか、彼女を叱らないであげてください」

あら……。

少し考え事をしている間に、いつものミスタ・ヴルムがやって来ていたようね。どうやら彼はカールに同行せず、帝都でエリザベートの護衛に回っているみたい。

それにしてもよく怒っているわねえ。彼はもっと落ち着いていると思ったのだけど。少し今までのイメージとは違っていたわ。

一応、ウィンドボナの治安はトリスタニア辺りとは比較にならないほど良いのだし、そこまで神経質にならなくてもいいでしょうに……でも、カールからの命令なら仕方ないのかしら。

「はあい、リッター・ヴルム。お取り込み中に失礼するわ」

「ミ、ミス・ツェルプスト……。これは、お見苦しいところを……」

今の今まで、わたしの姿がまったく視界に入っていなかったらしい。彼はこちらを見つけるなりぎよつとした表情を見せた。それがなんだかおかしくて、思わず笑みを漏らしてしまう。

「帝都の治安状況は安定しているわ。そこまで神経質になられると、

寿命を縮めてしまいますわよ？」

「しかし、ミス。私は陛下より、彼女の身の安全を守るようにとの厳命を受けています。あやうくそれを……」

「まあまあ。そんなにカリカリしないでくださいな。ほら、貴方が皆の注目の的になっています」

「なっ……」

ここはウィンドボナの中心部に位置する広場の、さらに中央付近。道行く人や、立ち止まったりベンチに座ったりしている人が多い。故に、ミスタ・ヴルムの行動は彼らの格好の観察対象になっていたのだ。

「……失礼しました。とにかく、一度このメイドは連れ帰ります。申し訳ありませんが、ここでお二人でしばらくお待ちください」

周囲を見回した騎士はそう短く告げ、メイドのシャルロッテさんを連れて広場から出て行く。後にはわたしとエリザベートだけが残され、人々の関心も別の事象に移っていった。

……中には、わたしたちそれぞれに視線を向けたままの殿方もいるようだけど。そういう危ない人には“ガン”を飛ばして追い払って差し上げるのよ。

「さて、騎士さんが戻って来るまでベンチにでも座ってしましましょうか」

「はい」

そう言葉を交わすと、わたしたちは手近なベンチに腰を下ろした。すると偶然にも、真向かいの工事現場に数人の貴族たちがやって来るのが視界に映った。

隣でちょこんとお人形のように座るエリザベートもそれに気がつ

いたのでしょうか。視線を前方に向けたまま、何かを思い出すように薄い色の唇を動かす。

「あれは……、フォン・シュタイン宰相ですね。ザクセン公も同伴されているようです」

彼女の視線の先には、数名の若い貴族たちに囲まれた初老の紳士の姿があった。その隣にはやけに体格のいい青年が陣取っている。

「えっと、宰相は真ん中のナイスミドルかしら？」

「ええ、そうです。どうやら、凱旋門の建設現場を視察に訪れたようですね……」

カール・フリードリヒ・フォン・シュタイン。奇しくもペーター三世の父君と同じ名前の帝国宰相。プロイセンを代表する改革派の政治家で、その手腕は着任と同時に国政の場で大いに揮われてきた……。

わたし自身は直接会ったことはないのだけれど、皇帝……カールからの手紙によく宰相に関する記述があり、物腰が低く穏やかな、しかし確固たる信念を持った人物であるとそこには記されている。

「改革、ね。うまくいくといいわ。本当に」

「そうですね……。でも」

「でも？」

わたしの呟きに同意したかと思うと、しかしすぐに懸念を表明するエリザベート。

「なんだか胸騒ぎがするんです。近々なにかよくないことが起きるんじゃないかって。考えすぎなのかもしれませんが……」

「わたしも、似たような予感はあるわ」

今はなにもかもが順調に思える。マリア・テレジア一派の離脱は乗り切ったし、デーン討伐もそれほどの難易度ではない。ペーター三世の治世は今のところ順調に進んでいるように見えた。

だけど。懸念はわたしたち二人の間に共通して存在しているようなのだ。

「……たとえながあっても、わたしは彼の味方でいるつもりです。貴女にはそれを強制できないけれど……。出来る限り、彼の味方でいてあげてください」

「わたしだって一応はまだ婚約者だし、そのつもりではいるわ」

カール七世によって強引に打ち消された婚約は元の状態に戻され、いつか父が仰っていたわたしたち自身の判断による結論の日は近づいている。

今のところそれを解消する意志はわたしにはない。そして彼がマリア・テレジアと仲違いをしている以上、恐らくこのまま何事もなければ自分はいずれゲルマニアの皇后となるのだろう。

そんな状況で彼の敵となるはずはない。そういう打算を一切抜きにしたって、わたしは彼と敵対するつもりは微塵もないけれど……。

「無事に帰ってきてほしいわね」

そうわたしは小さく呟き、木組みの足場に覆われた大きな凱旋門を仰ぎ見るのだった。

僕が即位と同時に温めていた軍事作戦、『シュレースヴィヒ開放作戦』が開始されたのはラドの月の終わりだった。

空軍の航空部隊による絨毯爆撃、キール軍港から出発したゲルマニア海軍の艦砲射撃、そして二万人の陸軍部隊による地上からの侵攻。

電撃的な三面同時作戦に対して、デーン王国側は防衛体勢を整える時間すら満足に得られなかった。

中には独自に抵抗を試みる現地の部隊もいたが、数に勝るゲルマニア軍の敵ではない。

さらに、ユーラン半島は全体的に起伏の少ない低地が圧倒的に多い。山地に要塞に立て籠もるという戦術を採ることは不可能に近いし、なによりこちらの航空部隊がまったくそれを許さなかったのだ。故に瞬く間にゲルマニア軍はシュレースヴィヒを奪い返し、そして一月と経たないうちに、敵の軍勢はユーラン半島から脱落してしまった。

しかし彼らが本拠地としているのは、ユーラン半島の東方に浮かぶシェラン島のケベンハウンという町だ。要塞化された屈強な都市で、ゲルマニアがこの国を長年放置してきた原因の一つでもある。

外洋に面した港町ではあるが、その戦略的な価値はさほど高い。にも関わらずケベンハウンは難攻不落の要塞と化していて、こちらから攻めるたびに手痛いしっぺ返しを食らっていた。

だけど……。奪回したシュレースヴィヒの安全を万全のものとする

るには、彼らは絶対に打倒しなければならないのである。

もう少しだ。僕は……この戦争が終わったら、シュレースヴィヒとホルシュタインを合邦させる。そして不可分の領土とするんだ。

「先ほど、ケーフェンヒュラー將軍の部隊がケベンハウンの城壁内へ到達したようです。陥落も時間の問題でしょう」

「やはり、砲亀兵がいると違うね」

「ええ。いくら屈強な要塞であろうと、あのカノン砲の直撃を受けて無事で済むはずがありません。まして、彼らはメイジの数も多くない」

シエラン島はケベンハウンの沖合いに停泊した、海軍旗艦の艦橋。親プロイセン派に属する壮年の提督と共に、僕は戦闘の経過を見守っていた。

その会話の最中にも、視界の先にある中世都市の内部で散発的な爆発が起きているのがわかった。

やはり、ケーフェンヒュラー將軍に指揮を一任したのは大正解のようだ。今回の電撃作戦が成功したのは、ひとえに彼のおかげだろう。それほど予想外に作戦がうまく進行したのだ。

提督の言う通り、デーン王国は王族などにはメイジがいるものの、軍隊には本当に一握り程度しかメイジが配置されていない。メイジ人口の絶対数の少なさが原因だった。

ゲルマニアは、トリステインほどではないがメイジの絶対数の多さ故に、相手方よりも兵力におけるメイジ比率は高い。また根本的な動員数でも圧倒している。

そこに各種の戦術兵器やケーフェンヒュラー將軍の指揮が加わるのだ。ケベンハウンの陥落は時間の問題だろう。

そんなことを考え。しばらく提督と談笑しながら時間を潰してい

たときのことだった。何かに気がついたらしい提督が、海の一方を指で示しながら言ったのだ。

「ん？ あれは……オクセンシエルナの艦艇でしょうか？」

オクセンシエルナ大公国。ゲルマニア北部に存在する小国で、老齡のオクセンシエルナ大公は反プロイセン派と目されていたが、彼らも今回の戦争には一応兵を供出していたのだ。

だけど……。なんだろう。この違和感。向かってくる三隻の巡洋艦の様子がどうもおかしい。

「なんだ。なぜオクセンシエルナの艦がこちらへまっすぐ向かってきているのだ？ 停船信号を出せ。このままでは衝突するぞ」

「そ、それが、相手はこちらの停船信号に応じません！」

「……ええい、まさか裏切ったのか？ この状況下でなにを考えている！？ そんなことをすれば、ただではすまないぞ！」

違和感は思い違いではないようだった。オクセンシエルナの艦艇三隻はこちらを取り囲むように航行し続け、配置に付いた途端に側面の砲塔を向けてきたのだ。

「どうなっているんだ。これは謀反じゃ——」

「そう。これは謀反なのだよ。ペーター三世……いや、ホルシユタイン公カール・ペーター・ウルリヒ」

いよいよ状況が緊迫し、僕が腰掛けていた席から立ち上がったそのとき。不意に背後から声がかけられ、ひんやりとした軍杖が首筋に当てられたのがわかった。

見れば、艦橋にいる多くの士官たちが、少数の士官に杖の先を向けている。それは艦隊の提督も例外ではなく、彼は自身の副官によ

って身動きを封じられていたのだ。

艦橋の内部は一触即発の様相を呈していた。ただ、この状況では数の差がありすぎるために、もはや抵抗する余地すらないのだが……。

「……どういふことか、説明してもらえるかい」

「先ほど、ロマリア教皇聖エイジス三十二世聖下より、貴様を教会から破門し、さらに『異端』認定するとの発表があった。異端とされた人間を皇帝と呼ぶことはできない。ただちに退位してもらおう」
「なっ……」

「匙加減を間違えたのだ、お前は。教会があれほど無茶苦茶な暴虐を放置するわけがない。破門及び異端の認定はもう決定されていたのだ」

『異端』？

まさか、このタイミングでロマリアが動いたっていうのか？ でもそれにしたってあまりに早すぎる。だって、まだ改革は始まったばかりなんだ。なのに……。

それに情報の伝達が早すぎる。まるで、彼らは前もって僕が異端認定されることを知っていたような、そんな口ぶりじゃないか。

「若い芽は早いうちに摘む。それが聖下の意思なのだ」

「きみたちは……、ロマリアの犬に成り下がったのか？」

「犬？ ふざけた思想に取り付かれた貴様に言われる筋合いはない。元より、貴様こそプロイセンの犬ではないか。ゲルマニアの未来のために、貴様にはここで消えてもらう必要がある。だからこうしたまでだ」

「ぐっ……」

失敗だった。海軍に所属する貴族は、その多くが僕の即位前から

残っていた。だから、彼らはそれほど僕に反抗的ではないと考えていたのだけど……。それは完全に読み違いだったんだ。

拘束されたままにも出来ずに唇をかみ締めていると、僕に杖を突きつけた士官が海の向こう側を指差し、そして言った。

「見るがいい。貴様の念願だったシュレースヴィヒの開放は成され、そしてデーン人の討伐も終わった。これで心置きなく退位できるだろう」

確かにケベンハウゲンのもっとも高い建物……。王の城の天辺に帝政ゲルマニアの双頭の鷲の旗がはためている。この状況と時を同じくして、ケーフェンヒュラー将軍が敵の本拠地を攻略したという合図だった。

だけど、その勝利はもうほとんど意味のないものになっていたのだ。

「こいつの身柄はオクセンシエルナ軍に引き渡せ。まずは帝都に送れとのことだからな……」

「は、放せ！」

冗談じゃない。こんな、こんなふざけたことがあるのか。こうなれば破れかぶれだと最後の抵抗を試み、僕は自分の腕を掴んでいた士官から逃れようとする。だが。

「黙れ、異端者が……。！ 皇帝でなければ、お前のようなガキに媚びへつらう理由などもうない！」

一瞬。拳が頬に叩きつけられ、じわっと口内を鉄の味が満たしていく。それと同時に体中から力が抜けて、わずかばかりの抵抗する気力がなくなっていく。

もはや為す術なく、反乱を起こした士官に僕は引きずられていった。いつかフリードリヒに引きずられていたときと違い、深い絶望と強い屈辱を味わいながら……。

第三十八話

運命とは、なんとも恐ろしいまでに皮肉なものだ。

自身の意思ではないとはいえ、まだ幼い親族を押し退けて皇帝の椅子に着いた私が、今度は自分の妻——私自身は別れるつもりだったが——に反乱を起こされ、こうして幽閉されることになるのは。

“彼女”が起こしたクーデターは、私がシュレースヴィヒを取り戻すために自ら軍を率いて海へ向かっていたときに起きた。

そのとき、手持ちの軍隊を使って反乱の鎮圧を行うことは決して不可能ではなかった。

だが既に配下の部隊にすら離反者が出ている状況を鑑み、私は徹底交戦の道は採れず、結局ただのうのと捕縛されたのだ。

クーデターによって、私は事実上の廃帝となった。政治の実権は“彼女”に握られ、首都近郊の小さな町の牢獄に閉じ込められた。

今の私に出来るのは、手持ちのバイオリンを演奏したり、持ち込みを許された愛犬と戯れる程度のことだけだった。

なんとも無様なものだ。これが長き歴史を築いてきた我が家の最期なのだろうか。

……いや、息子がいたか。あの子が本当に私の子なのかは未だによくわからないが。

とにかく、今回の事態は基本的に人望というものに恵まれなかった私に相応しい結末なのだろう。

悲願であったシュレースヴィヒの奪回は成されず、帝位を篡奪され……。恐らくこのまま事態が進めば、私は命を奪われることになるだろう。

それもまた運命なのだろうか……。

「よお。“廢”帝陛下。気分はどうだい？」

「オルロフ……。また私を嘲りに来たのか」

「まあ、あんたはそうされて当然だろう？」

この日、例によって無断で牢獄に入ってくる男がいた。それは“彼女”の腰巾着——オルロフ兄弟の一人である。

やつは、幽閉された私の監視役の一人だ。たまにやって来るかと思えば、抵抗の出来ない私をストレスの捌け口にしているようだった。

まったく冗談ではない。どうして、この国の人間はこう粗野なのだろうか。

こんなことから、「あの国の人間は未開の野蛮人だ」などと他国から嘲笑されるのではないか。

「……おっと、そうだ。今日はあんたに良いものを見せてやるよ」

「やめよ。必要ない」

こちらの拒絶を無視し、なにやら懷に手を差し込んだオルロフは、一丁の拳銃を取り出した。

華やかな装飾が施されたそれはまだ真新しく、どうやら製造されたばかりの代物であるようだった。

「これは俺たち兄弟が“女”帝陛下から下肢された拳銃なんだよ」

「……なにを言うか。今でもこの国の皇帝は私だ。なんの正当性もない、ロマノフの血すら引かぬ彼女が皇帝だなどと、笑わせるな」

「はっ。あんたの祖母は農民の生まれだったじゃないか。そんな人間が血統に拘るだなんて、ちゃんちゃらおかしい話だ」

「なんだと！」

さすがに聞き流すことのできない話だ。私が怒りを露にすると、しかしオルロフはより表情を歪めた。

「……それにな。皇帝になってもろくにこの国の言葉も覚えず、スラヴ人の俺たちを見下し、馬鹿にしてきたお前なんかより、たとえ生まれが違ってても懸命にこの国の人間として生きようと頑張ってきた陛下の方が、あんたなんかより遥かに皇帝の座に相応しいんだよ。自惚れるんじゃない」

「貴様。それ以上、この私を愚弄してみろ！」

「へ、何度でも言ってるさ。お前は皇帝の器じゃない。ただの力スだ。大好きなソーセージでも喉に詰まらせて天に旅立ったらどうだ!？」

ここまで言われてしまったのは、もう引込みは付かなかった。もはや我慢に耐えず、私は思わずオルロフに掴みかかったのだ。

だが、叩き上げでここまで来たやつの方が私に身体能力で勝っていた。伸ばした腕は簡単に掴み返され、そして捻り上げられてしまう。

玉座を失った私はあまりにも無力だった。これが自分の実力なのかと思うと、我ながら情けなくなる。

「氣に入らねえ。やっぱりあんたは氣に入らねえ。陛下の許しは出ていないが……」

「貴様、なにをするつもりだ！」

拳銃を後頭部を突きつけられた私は、死に物狂いで近くにあった本を掴み、それをオルロフに向かって叩きつけた。

結果としてオルロフは拳銃を手から取り落としたが、私がそれを拾う余裕はなく、すぐにやつは床に転がったそれを拾い上げる。そして、間髪入れずに引き金に指をかけたのだ。

次の瞬間、銃声と共に私の左肩に弾丸が命中する。最初は痛みがなく、ただ熱を感じるだけであったが、その状態は長続きしなかった。すぐに猛烈な痛みが走り始めたのだ。

傷口からは血が流れ、痛みは時間が経つほどに増し続ける。だが、今はそのことに注意を払うことさえ困難な状況だった。

「――の野郎！　ふざけやがって、ここでぶち殺してやる！」

オルロフは私に抵抗を受けたことに酷く激昂している。顔面は憎しみに歪み、手の先にある銃口は真っ直ぐにこちらを向いていた。

ここに至り、とうとう私は悟った。もはや自分の人生はここで終わりなのだ、と。

そして走馬灯のようにこれまでの記憶が駆け巡り……。

弾丸によって絶命する寸前。最期に私の脳裏に浮かんだのは、かつてまだ幼かった頃に父と共にキールの屋敷から眺めた、生まれ故郷の雄大な風景だった……。

「夢、か……」

僕がウィンドボナ近郊のロプシャにある要塞に軟禁されてから、数日が過ぎた朝方のことだ。

急に襲ってきた強烈な寝苦しさによって、僕は意図せずして飛び起きてしまったのである。

ふと感じた違和感に体をまさぐってみると、どうも寝汗がひどい。そんな汗を吸った衣服とは裏腹に、喉はからからに渴ききってしまった。

……まただ。

また“彼”の夢を見た。しかも、今度はとうとう殺される場面だった。

アウステルリッツで気絶したときに見た夢以来、時々こういうよく意味のわからない夢を見るようになった。

一度起きてしまうと内容がすぐに頭から飛んでしまうのだが……、なんとなく夢の中の“彼”の境遇は僕に似ていたような気がする。

どうしてこんな夢を見るようになったのか、そもそも“彼”とは誰なのか。それはまったくわからない。

この夢に関して明確に言えることはただ一つ。“まるで過去に自分が実際に体感した”ように感じるという点だった。

……とはいっても、なんとなくそう表現できるというだけだし、前世ではただの一般人だった以上、皇帝がどうか幽閉されるとか、そういう事象はまったく経験がなかった。

たぶん、今の――いや、アウステルリッツでの危機的な状況が原因で脳が混乱しているだろう。やけに長い症状だ。

そんなことを考えながら、水差しを傾けてコップに水を注いでいると。扉を叩く音がして、外から誰かが牢獄の中に足を踏み入れる。それは、僕と同じ年くらいの少女だ。彼女の名はクリスティナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシエルナ。

ハルケギニアの貴族であるにも関わらず、公然と日本刀を帯刀するオクシェンセルナ大公国のプリンセスだった。

金色の髪を頭の後ろで結び、まるで武士のような——本物の武士とはまったく違うとはいえ——服装をした、お姫様というよりは、武人みたいな子だ。

「どうしたんだ。また発作か？」

「発作という言い方はやめてほしい。ただ悪い夢を見ただけだ」
「ふん」

どうやら、彼女は幽閉した僕を監視する部隊を率いているらしい。それは父であるオクセンシェルナ大公の命令なのだろう。かなり渋々とした様子で、こうやってたまに様子を見に来るのだ。

クリスティナは僕に対して非常に辛辣な態度を取っている。あまりいい噂を聞いていないのだろうから、そこは仕方のないところではあるが。

……それにしても、どうして彼女は日本刀を持っているのだろうか？

ハルケギニアの貴族から見れば、一般に剣は平民が使う野蛮な武器だとされている。そんなものを公然と持ち歩いている彼女の行動が、僕にはどうしても不可解なものに見えてしまったのだ。

だから、それとなく刀について問いかけてみることにした。

「きみは珍しい物を身につけているね。腰の……」

「これがどうした。お前には関係ないことだろう」

「いや。日本刀を持っているなんて、珍しいなって思ってたさ」

「……今なんと言った？」

「え？」

「今なんと言ったか訊ねているのだ！」

日本刀という言葉を目にした瞬間。なにを思ったのか、クリステイナは突然僕に近づいてきたのだ。それこそ鼻と鼻がぶつかってしまいそうな、そんな距離である。

「いや、日本刀って……」

「そうだ。なぜお前がこの刀の呼称を知っている？　ロマリアの連中できえ、これがどこの物なのか正確には把握していなかったはずだぞ？」

「そ、それは……」

「言え。言わなければこの場で切り捨てる」

刀の鐔に指をかけつつ、彼女は言う。かなり無茶苦茶な要求だ。だけど、目の前の少女の瞳は真剣そのものだった。適当なことを言っただけを取り繕うとすれば、本当に刀で切られてしまいそうなほどに。

「だけど、まさか「前世が日本人だったから知っています」だなんて言えるはずがないじゃないか。せいぜい、頭がおかしいと思われるで終わりだ。」

「昔、僕には日本人の知り合いがいたんだ。もうその人はいないけど……。だから知っている」

「……嘘はついていない、か」

しばらくじっと僕の目を覗き込んだあと、彼女はそう口にした。うん。嘘はついていない。だって、その日本人の知り合いというのは父方の祖父のことだし。

クリステイナは、僕があっさり日本人という単語を出してきたことに口を開けて少々驚いていたようだが、しかしすぐに唇を真一文字に結び、表情を元のむすっとしたものに戻して問いかけてくる。

「その日本人はどこに？」

「それはわからないよ。僕も色々あって、結局どうなったのかは」「そうか……」

僕が死んだあと、祖父母がどうなったのかはわからない。ぱりぱりの戦中派の人たちで、かなりの高齢になっても元気に農業をやっていたくらいだし、まだ元気にやっているかもしれない。

僕の答えに対して、心なしか彼女はややガツクリとしたようだった。一体なにがそんなに残念だったのだろう。

「……今度は僕からいいかな。どうしてきみは日本人という名称を知っていて、その日本刀を持っているんだい？」

次は僕の番だとばかりに、まだうな垂れているクリスティナに問いかける。

すると、話すか話すまいかしばらく悩んでいた彼女は、何度か目を閉じたり開いたりを繰り返した末に、ようやく僕に向かって答えてくれる気持ちになったようだった。

彼女はこちらから視線を外し、懐かしそうに表情を緩めながら己の腰に携えた日本刀を軽く撫でる。

「わたしはな。幼いころからとある異邦人……師匠に、日本や武士道について指南を受けてきたのだ。この刀はその師匠の形見であり、わたしの頼もしい相棒なんだ」

「形見……」

「ああ。師匠は昨年亡くなってしまった。本当に、色々な意味で惜しい方を亡くしてしまったよ」

少しだけ寂しそうに彼女がそう告げる。彼女の視線は窓の外を向き、ここではないどこかを見つめていた。

と、ここで。ふと僕の中である疑問が湧き上がった。

「……オクセンシエルナ大公は、きみの父上は……。言い方は悪いけど、得体の知れない異邦人を娘の教育係にしていたのかい？」

「ああ、そうだ。父はかなり異文化に寛容な人物だ。それに、師匠の人柄は大公国の誰にも好かれたんだ」

「そういう方針の君主ということは、ロマリアとの関係は……」

「向こうがこちらに無関心だったのもあって、特段悪いということはないだろう。ただやはり、少々の軋轢は抱えているようだが」

……今回のクーデターは、恐らくはロマリアが絡んでいることのはずだ。なのに、どうしてその中核になったのがオクセンシエルナなんだろう？

もつと反乱の旗頭となるのに適当な諸侯はいるはず。大公が反プロイセン派だという事実は大きいだろう。だけど、ロマリアとの関係は決して良好とも言えない。なのに、どうして……。

小さな軋轢ならば、目障りな皇帝を潰すためという利害の一致の前には、なんの障害にもならないのだろうか？

「きみの父上は、大公はなにを考えているんだ？　僕をどうしようというんだ」

「それは……、わたしにもわからない。父はお前を見張れと言うだけで、いつまでだとか、目的だとかは教えてくださらなかった。逆に訊きたいくらいだ、わたしはいつまでここにいればいいのだと」

大公の目的をまったく教えてもらえずに困っているのは彼女も同じらしい。ひどく困惑の表情を浮かべている。……これが演技ならば、彼女は銀幕のスターになれるだろう。

一通りクリスティナから話を聞き終えた僕は、一度ベッドに腰かけた。

「それにしても、そんなに僕に話してしまってよかったのかい。一応、きみとは敵同士のはずだけど」

「う。……い、いや、訊ねてきたのはお前の方からだろう。わたしは悪くない。たまたま、たまたま日本を知っている人間と出会えたことが嬉しくて、ついつい語ってしまったとかではないからな！勘違いはするなよ！」

「そ、そうか」

「ああ、そうだぞ。……わ、わたしは武人だ。この程度ではうろたえない！」

なんて言うてはいるけど、彼女はあからさまに動揺しているのを隠せもしていない。なんだ、こんなに面白い子だったのかと僕は思った。

ここに連れて来られてから数日の間、僕はひどく絶望してふさぎ込んでしまっていた。だけど、今はなんだかそんな風に悩んでいたのが馬鹿みたいに思えてくるのだ。

——まだ、ここから脱出する道はある。自分でさえすっかり忘れ去っていた、魔法を使うという手段が。

僕の魔法の腕の悪さはゲルマニア全土に知れ渡っていた。なにせ、公式な場はもちろん、非公式の場でさえきちんと魔法を使ったことが一度もなかったからだ。

故に、どうせ何も出来ないとは判断されたのだろう。僕は杖を取り上げられていなかった。というよりは、ろくな身体検査もないまま、この牢獄に放り込まれたというのが大きな理由なのだけど……。

とにかく。今の僕は魔法を使える。政治の世界ではまったく約に立たなかった一族伝来の杖を、ようやくともに使うことになるかもしれない。

クリスティナに僕を殺す意思があった場合、逃走実現の可能性はとても低くなるのだけど、それでもなにもできないよりはマシだった。

助けは恐らくやって来ない。来るならとっくに来ているだろうからだ。だから、僕は自力で逃げ出す。

きっとあの“夢”の影響なのだろう。このときの僕は、とにかくこのロプシャの貴人牢から逃げ出すことばかりを考えるようになっていたのだ。

オクセンシエルナ大公らを筆頭とした反プロイセン派によるクーデターの発生は、すぐにプレスブルクのマリア・テレジアにも伝えられた。

その知らせを受けた彼女は激昂し、ただちに指揮下にあったパンノニア軍を率いてクーデター鎮圧を開始していた。

だが、その直後に『ペーター三世が異端認定された』という情報がマリアの元へと飛び込んだとき、彼女は今後の情勢を深く注視せざるを得なくなった。

このハルケギニアにおいて、ロマリア教皇より異端認定された人間はもはや人の扱いを受けることがない。それはたとえ皇帝であろうと同じで、このままではクーデターに参加した貴族による私刑が行われる可能性すらあった。

さらに、ウィンドボナではペーター三世の下で国政運営を担っていた宰相フォン・シュタインらを筆頭に、プロイセン出身閣僚らの

不当な逮捕・拘束が相次いだ。

故に、パンノニア軍を率いて帝都へ上った彼女は、まずエスターライヒ大公名による非常事態宣言を発令し、政府の権限掌握に乗り出さねばならなかった。

幸いにも、クーデター参加貴族はごく一部を除いて帝都に戻ってきたマリア・テレジアに恭順し、それ以上大きな混乱がさらに拡大することはなかった。

だが、しかし、ペーター三世への異端認定の件については彼女といえどもどうすることも出来ず、ひとまず自身がクーデターを起こした形にして皇帝の身柄を保護するしかなかった。

ところが、ウィンドボナ近郊のオクセンシエルナ大公の領地であるロプシヤに軟禁されている皇帝の身柄は、オクセンシエルナ大公軍が管理しており、大公はマリア・テレジアから再三に渡って出された身柄引き渡しの求めにも応じずに皇帝の軟禁を続けていた。

その理由を大公は一切回答せず、ウィンドボナ側には大きな不満が鬱積しつつある。

そして場面は、つい先日まで皇帝が利用していたホーフブルク宮殿の執務室へと移る。

一部の不満分子は皇女の上京後も反乱を続けたため、鎮圧には帝都防衛隊とパンノニア軍の一部が使用されていた。

結果として反乱は数日で鎮圧されることとなったが、その間に政府権力の掌握などに忙殺されてしまっていたマリアらは、皇帝の件に関してまったく身動きが取れていなかった。

臨時政府内ではクーデターに関わった海軍貴族の処罰に加え、オクセンシエルナ大公の処罰も検討されていたが、それが実行に移されるにはまだかなりの時間が要されるようである。

皇帝の机でマリアが手にしている今回の案件に関する報告書は、

政府内の混乱を反映して酷くとりとめのない内容になってしまっていた。

「やはり、今回も皇帝の身柄引き渡しには応じないつもりのようなすな」

「なにを考えているのでしょうか、あの方は……。身柄さえ引き渡していただければ、反乱の件はうやむやにして手打ちをすると伝えたのに」

実際のところ、この緊迫した状況下においてマリアやオイゲン公には、どうしてもオクセンシエルナ大公の行動理由がわからなかった。

ただ、大公がなにを考えていようと、一つだけ言えることがある。

それは早期にペーター三世の身柄を保護しなければ、場合によっては取り返しのつかない事態に陥る可能性があるということだった。

「皇帝奪回には我が軍の一部とホルシュタイン近衛大隊を使いました。ロプシャのオクセンシエルナ部隊はそれほど数が多くないようですし……」

ホルシュタイン近衛大隊。前身はペーター三世が皇太子時代に故郷の下級貴族などを中心に集めて創設した近衛大隊であり、皇帝即位後は“ホルシュタイン公”としてのカール・ペーター・ウルリヒに従う独立組織となっていた。

その隊長であるフォン・ヴルムは現在ホーフブルク宮殿内に滞在しているため、連絡はすぐ取れるはずだった。

そこでマリアは連絡士官を呼び出し、彼を執務室に呼び出そうとしたのだが……。

「で、殿下！ ホルシュタイン近衛大隊のフォン・ヴルムですが、彼は既に風竜で帝都を出たと……！」

「なんですって……、まさか単独で？」

「そのようです」

「ならば、今すぐ大隊の他の騎士たちを向かわせ、彼を引き止めさせなさい！ いくらなんでも単独行動は危険です！」

「りよ、了解しました！」

まさか、ヴルムは自身の主君を助け出しに向かってしまったのか。しかし一体なぜ単独で……。マリアは大きな疑問を感じつつ、報告にやってきた士官に言い付ける。

そして、屋敷に待機するよう要請していたはずのとある青年王が出奔したという知らせが届けられるのは、この直後のことだった。

——それからさかのぼること、一時間ほど前。ウィンドボナの外れ、ペーター大帝練兵場。

その中の一角、人気のない竜舎に足を踏み入れる一人のマントを羽織った青年がいた。

彼はホルシュタイン近衛大隊のフォン・ヴルム隊長。屈強な体つき、精悍な顔立ちをしたベーメン生まれの帝国騎士である。

無言のまま、ヴルムは竜舎を進み、自身の風竜が繋がれている場所まで歩く。すると、主人の来訪を察知したのだろう。若い風竜が目を開けて小さく鳴き声をあげた。そんな風竜の鼻の頭を撫でてやりながら、ヴルムは呟く。

「今日は、頼むぞ」

彼は、たった一人でこれまで自身が仕えてきた少年を助け出すつもりだった。

ウィンドボナ政府の全権を掌握したマリア・テレジアは、ペータ―三世の身柄よりもウィンドボナ市街の掌握に注力している。それでは、今はまだ無事な皇帝の身に何かが起きてても不思議ではない。だから、彼は独断で、たった一人でロプシャに向かうことにしたのだ。

ホーフブルクの政府からは、なんの命令も出てはいない。しかしヴルムはホルシュタイン公……つまりは皇帝直属の部隊の隊長であり、独立した指揮権の下に行動することが許されているのだ。

政府の全権がマリア・テレジアにある状況下でその方便は詭弁となってしまうかもしれない。それでも、それを承知の上で彼は皇帝救出に向かおうとしている。

やがて、ヴルムは風竜の手綱を引いて竜舎を出た。そしていよいよロプシャへ向かおうと風竜に跨がろうとした、そのときのことだった。

背後から、何者かがヴルムに声をかけたのである。まだ年若い、聞き覚えのある声にヴルムはその方向を振り向く。

「待ってくれ。ぼくも同乗させてはくれないか」

それはプロイセン王フリードリヒ二世その人であった。だが、彼がこの場にいるのはおかしい。反乱発生時に帝都へ滞在していた彼は、厳重な警備が施された自身の屋敷に留まっていたはずなのだ。

「私の独断行動に、プロイセンの国王を付き合わせるわけには参りません。どうか屋敷へお戻りください」

「いいや、僕は戻らない。戻れるはずがないだろう。今回、彼が異端認定され、幽閉されてしまった原因は僕にもある。なのに、自分

だけ安全圏で閉じこもることなんて出来はしない。それに……」

一瞬、フリードリヒ二世は沈黙した。そして、搾り出すようにして声を出す。

「彼は、ぼくの友人だ。……もう、友人を失うことにはなりたくない。だから、ぼくは助けに行きたいんだ。彼を……カールを」

青年の言葉の端々には、かつての苦い記憶が染み付いていた。

それは父によって裁判の結果を捻じ曲げられ、逃亡を手助けしてくれた親友ハンス・フォン・カッテを目の前で処刑されてしまった記憶。彼が王権の介入を制限し、司法の徹底的な分立を目指すきっかけとなった出来事。

カッテの死後、フリードリヒ二世はまともに外を出歩けない精神状態に陥っていたこともあった。今となってはなんとか立ち直っていたが、それでも彼の深層心理には深く癒えない傷が刻み付けられている。

もう絶対に友人を失いたくない。そう考えたから、彼は危険を承知でヴルムに同行を願い出ているのだ。

ヴルムとて、そんな若き王の心情は理解していた。それでも王の身の安全を鑑みれば、ここは拒絶しなくてはならないのだ。

しかし。

フリードリヒ二世の瞳には強い信念の色が見えたのである。彼は自分が同行を拒否すれば、自分から風竜を奪ってでもロプシャに向かうだろうということが直感的に理解できたのだ。

今は一分一秒でも時間が惜しい。ヴルムはどうとう観念し、ついに眼前の青年に手を差し伸べた。

「わかりました。貴方をロプシャまでお連れしましょう。ですが、

「ご自身の身は……」

「承知しているさ。それも出来ないなら、初めからこうやって貴君に迷惑をかけることもしない」

「なるほど……」

まったく、それがわかっているのなら迷惑などかけないでいただきたいものだ——そう内心で考えつつ、しかしヴルムは薄く笑みを浮かべる。いつも無表情を崩さない彼にしては、非常に珍しい出来事だった。

「では、しっかりとお掴みください。この不肖ヴェンツェル・フォン・ヴルムがフリードリヒ二世陛下を必ずロプシャへ送り届けましょう」

「……ああ、頼むよ！」

差し出されたヴルムの手をフリードリヒ二世はしっかりと握り、ペーター三世救出のために協力することを誓い合うのだった。

——ヴルムたちが練兵場を出るさらに数時間前。ウィンドボナ市街地の中心部、聖シュテファン大聖堂。

帝都を騒がす反乱もなんのその、表向きは中立を貫いていたブリミル教会の内部は落ち着いたもので、皆静かに今日の礼拝を行うなどとして過ごしていた。

本来、この大聖堂には帝都防衛隊から派遣された騎士が駐屯しているはずである。しかし、彼らは帝都での反乱の鎮圧のために駆り出され、今この教会の駐屯所はもぬけの殻となってしまっている。故に。今この場においてカール・アルブレヒトを制止できる者は誰もおらず、ただ彼が悠々と正面玄関に停められた馬車に乗り込む

のを見過ごす他はなかったのだ。

馬車の内部にて、カール・アルブレヒトは向かい側に腰掛けたとある老貴族を見やった。それは今マリア・テレジアらを悩ませている元凶の一つ、オクセンシエルナ大公その人だった。

普段は豪傑として知られている大公は、このときはなぜか萎縮し、しきりに周囲の光景に気を配っている様子である。

そして、元皇帝たる青年はこの老人がどのような理由をして萎びてしまっているのか理解している。それは酷く俗で、なんともばかばかしい理由なのだが……。

「貴行は、亜人と交わって生まれた子供の存在をロマリアに把握されたようすな」

「……そ、それは！」

「わかっておりますよ。私は皇帝を僭称する子供を倒すことだけが目的です。あなたが一時は恭順しようと考えた相手売り飛ばし、自らの保身を考えていたとしても、それは私の関知するところではない」

なんとも惨めで、なんとも恐ろしいものだ。自らの下半身の欲望と引き換えに、この男は皇帝という存在を売ったのだから。

まだ十代前半だという大公の正妻の娘は、自らの父が犯したその事実を知ったときどう考えるのだろうか。そんなことは限りなくどうでもいいのではあるが。

……それより真に恐れるべきは、このロマリアの異常な情報収集能力というべきか。

「ロマリアの……、ブリミル教というものは、実に恐ろしいものですよ。本当に……」

それはカール・アルブレヒトの偽らざる本心である。ブリミル教を維持するためならば、どんな姑息で残忍な手であろうと躊躇なく実行する彼らに対して、ある意味で辟易としていたのだ。

この一連の騒動が終わったあとは、なるべくブリミル教から距離を置こう。彼は真剣にそう考えるのであった。

反乱を起こされたカールが、ウィンドボナ近郊のロプシャに監禁されているという情報が入ってから数日。わたしは帝都から出るに出不らず、ただ彼の無事を祈ることしか出来ずにいた。

このとき、ウィンドボナ市街において反乱貴族たちはほぼ鎮圧されていた。元々、反乱側の数は圧倒的に少なく、鎮圧されるのも時間の問題だと父も仰っていたのだ。

城壁の外にある平民街ではまだ戦闘が続いてはいたものの、城壁内の市街地ではもう平穏を取り戻していると言ってもいい状況に思える。

急速に治安の回復も進んでいる。しかし、まだ出歩いては危険だということで、わたしたちはツェルプストーの屋敷へ缶詰状態になっていたのだ。

「あれは……」

わたしの隣で同じように眼下の道を眺めている子はエリザベートである。先日彼女と出会ったとき、わたしは少し話がしたくなって、この子をうちの屋敷に呼んでいたのである。

そんなときに不満分子の反乱が発生し、それと同時に敷かれた戒厳令に彼女は巻き込まれてしまい、もう何日もここに滞在することになっていた。

かなり慌ててしまったけれど、服は幸いにもアウグステの物があったので、とりあえずそれを着てもらっていたりする。

「見た？ 今の……」

「は、はい。あれはオクセンシエルナ大公の馬車ですね」

偶然にもオクセンシエルナ大公の馬車を目撃したのは、屋敷の二階部分にあるバルコニーで二人でカールの話をしているときのことだ。

貴族の屋敷が集中するこの地区は、普通の平民などは立ち入りを禁止されている。故に、この地区の道を通る馬車は、商人のそれか貴族の物に限定されている。

最初に下の道を見たのはなんとなく。特に理由はなく、ただ拘束されたカールがまたひどい目に遭っていないか、それを考えている最中のことだった。

よりによって、今回の反乱の首謀者とも目されているオクセンシエルナ大公の家紋が貼り付けられた馬車が、堂々とこの地区の道を走っていたのだ。

初めは思わず目を疑ってしまったものの、どうも見間違いではないようだった。そして、馬車がやって来た方角にある背の高い建物といえば……。

「シュテファン大聖堂……」

「まさか……、とは思っていたのだけど」

シュテファン大聖堂には、かつてカールを苦しめた張本人が幽閉されている。幽閉されているとは言っても、別に苦しい思いをして

いるわけでもなんでもない。

カールは、あんなに暗く臭く狭いところに閉じ込められて、人の尊厳を踏みにじるような目に遭わされたのに、どうして大赦などしたのか。わたしには未だによく理解できなかった。

それが皇帝としての彼の選択である以上、ただの侯爵の娘でしかない自分が口を出すような真似はしなかったけれど……。

——どうしても、嫌な予感が脳裏を過ぎる。

反乱が発生してカールが拘束されたと知ったときも、「また悪い予感的中してしまった」と感じたものだけど……、そうすると、今感じているこの悪い予感というものは……。

いても立つてもいられない。もし、あの男がまだカールを恨んでいるのだとしたら、取り返しが付かない事態に陥る可能性がある。

もう傍観しているだけでは駄目だ。わたしがロプシャに行って直接彼の無事を確認しなければならぬ。そういう感情に突き動かされ、バルコニーから屋敷の中へ飛び込む。

「きゅ、キュルケさん？ 一体どうしたんですか？」

「わたしはロプシャに向かうわ」

「でも。ツエルプストー侯は……」

確かに、父は屋敷から出るなど仰っている。だけど、今は非常事態なのよ。

「ぐだぐだ屁理屈を言うつもりはないわ。わたしは彼を助けに行く。それだけよ」

「……」

大急ぎで外出用の動きやすい服に着替えたわたしは、屋敷の隅に

ある馬小屋へと向かう。そして飼育員に命じ、もつとも手近な一頭の出発準備を行わせようとする。

飼育員の男性はわたしが屋敷を出ようとしていることに気がついたのだろう、抵抗するそぶりを見せる。けれど。

「いいから、さっさとやりなさい。それとも、消し炭になりたいのかしら？」

軽く杖を取り出しただけで、男性はすぐに真っ青になって準備を始めた。……少し、かわいそうなことをしてしまったのかしら。そんなことを考え、後でなにかしらの償いはしようと思っていると。背後から、軽く速い足音が迫ってくるのがわかった。

「キュルケさん」

「……エリザベート。止めても無駄。わたしは行くわよ」

「いえ。わたしもついて行きます」

「え……？」

ついて行く？ この子が？

驚き、思わず振り向くと。いつもの裾の長いワンピースではなく、いつかのようなジャケットとスカート、それにニーソックスを身に着けたエリザベートがそこにいたのだ。

「わたしも行きます。わたしも……、あなたと同じなんです。直接、彼の無事を確かめたい」

「で、でも。あなた、まだ小さいじゃない」

「大丈夫です。一応、乗馬の経験がありますし、絶対に迷惑はかけませんから！」

……困っちゃったわ。さすがに十歳にもなってない子を同伴させ

るなんて、それは出来ないわよねえ。

でも、エリザベートは梃子でも動かない様子。じっとわたしを見つめて、力強い眼差しを送ってくるのだ。それはまるで、お母さまがわたしを叱るときのような……、そういう眼差しだった。

こんなに小さな子なのに、どうしてこう凄味があるのかしら。彼女は、自分にはまったく計り知れないものを持っているようだわ。

わたしたちはしばらくにらみ合いを続けていたものの、とうとうわたしが根負けして、彼女と一緒に連れて行くことになった。

馬に跨ったわたしの後ろにエリザベートが乗り、こちらの腰にしがみつく。まだ幼い彼女は騎乗するのが大変だったようなので、わざわざ飼育員の男性に台座を持ってきてもらったようだ。

「ねえ。今さらだけど、わざわざ台座を用意してもらうくらいなら、あの人に乗せてもらえばよかったのに」

「……わたし」

「どうしたの？」

「わたし、嫌なんです。彼以外の男の人に触られるの……」

……ううん。

いつかも思ったことだけど、この子って……。やっぱり……。ロプシャについてカールを助け出したら、ちょっと問い詰めてみようかしら。

「と、とにかく。もう出るわよ。しっかり掴まっていなさい」

そう背後でしがみつくエリザベートに告げるのと同じ時。わたしは馬の手綱を引き、ツエルプストーの屋敷の入り口目掛けて馬を走らせる。

「お、お嬢さま！ 絶対無傷で帰ってきてくださいよ！ でないと、せっかく見つけたこの職を解雇されてしまいます！ 私には妻も子もいるんです！ お願いしますよ！」

「わかってるわ！ ヒンデンブルク号に乗ったつもりでいなさい！」
「……それ、この前墜落したフネじゃないですか」

背後から聞こえてくる飼育員の悲痛な叫びとエリザベートの冷静な突っ込み。彼らの言葉をその身に受けながら、わたしは一路ロプシャを目指すのだった。

最終話

通常、僕の監視はオクセンシエル大公軍の兵士を複数人使って行われているようだが、今日このタイミングに限って、外の廊下にいる見張りの姿が見えなくなっていた。

それは、先ほど牢屋の前から去っていく兵士たちの会話から推測するに、先ほどやって来たという大公の馬車に関係するものなのだろうか。

いずれにせよ、向こうは士気が落ちていることは間違いない。最初は僕を真剣に見張っていた彼らも、いつしか日本の話を聞きたがるクリスティナ以外は、かなりいい加減な監視になっていたからだ。

さて……。

問題は、いかにしてこの部屋を抜け出すかだけど……。

この貴人牢は当然ながらメイジを収容するという前提で設計されている。故に万が一、対象が魔法を使っても大丈夫なよう、かなり頑丈に設計されているようだった。

ところが、建設された年代の古さからなのだろう、本来部屋の中にかかっていたはずの『固定化』はすっかり効果が弱まり、今の僕でも突破が可能なように思われた。

ただ、普通に攻撃をしても音や振動で誰かに気がつかれてしまうだろうし、なにより僕の魔法では石材を完全に破壊できる確証はない。そして、それは僕の目の前にある鋼鉄製の分厚い扉も同じだ。

今は相手方のミスで最後の希望である杖を持っていられているものの、これを失えばすべてが終わってしまうのだ。失敗は絶対に許されない。

では、脱出をするのにもっとも確実な方法とはなんだろうか。

それを考えていたとき、ふと鉄格子で覆われた窓が目飛び込んでくる。

窓そのものはごく普通の作りだが、その周囲には頑丈な鉄格子が張り巡らされ、囚人の逃走を拒んでいた。

なんとなく、その周辺部を見回してみる。鉄格子は建物の建材である大きな石へ直に接合されているらしく、人の力ではびくともしそもない。

……ふと、さらにその外側にある石と石の境目が視界に入る。一見して石は隙間なく積み上げられ、とてもではないがそれをどうにか出来るとも思えない。

しかし——このとき、僕はふとある方法を思いついた。あまり音を立てず、かつ水のメイジである僕に相応しい方法を、だ。

水はどこにだって存在する。人や他の動物の体内は当たり前だし、今こうして吸ったり吐いたりしている空気の内にも含まれている。ただ、目に見えないだけで……。

懷から取り出した杖を手にし、それらの水の分子を窓の周囲を固める石の隙間に集めるようイメージする。

すると、最初の数秒は失敗を予感するほど何事も起きることはなかったが、それから一瞬にして積み上げられた石の隙間から水が漏れだし始めたのだ。

それから、水を鉄格子周辺の石全てに覆い被さるよう移動させていく。やがて建物の壁の内部は水で満たされ、段々と石がぐらつくようになる。

自身の支配下にある水を使い、それを操作することで、厄介な鉄格子を壁ごと剥ぎ取ってしまおうと考えたのだ。

普通、こういった建物の石壁は数層で構成されていることが多く、内側の一層を剥ぎ取った程度ではなかなか崩れることはない。まして、外壁を『固定化』で補強しているようなならなおさらに。

まるで古代の壁画を剥ぎ取るように、僕は自分の魔法で鉄格子周辺の石壁を持ち上げていった。やがてそれらすべてが剥がれると、ゆっくりと、慎重に、それらが崩れて音を立てないよう横倒しで床に置く。

魔法を解除した途端、大量の水がカーペットに染みを作っていく。……これほどの量の水を僕は一体どこから集めたのか、一瞬だけ疑問に思う。

……ま、それはとにかく。これで、作業は終わりだ。

後は窓にかかっているだろう鍵を壊し、『フライ』を使ってこの断崖絶壁に建てられた高層階から脱出するだけである。

ただ、途中で兵士たちに見つかってしまうと厄介なので、かなり慎重かつ隠密な行動が要求された。

そして、いよいよ僕が窓にかけられた最後の砦——鍵を壊しにかかった、そのとき。

「おい！ 今すぐここから逃げ——」

「くっ……」

突如として背後の扉が開かれ、かなり焦った様子のクリステイナが飛び込んできたのだ。

これは、まずいところを見られてしまったかもしれない。そう咄嗟に判断し、彼女が日本刀の間合いに踏み込む前に杖を突きつける。

「ま、待て。落ち着け。わたしはお前に危害を加えるつもりはないんだ」

「……どういうことだ？」

クリステイナに敵意がないことはわかったが、警戒は解かず、杖先を彼女に向けたまま問いかける。すると。

「やつが……。カール・アルブレヒトが、父上と共にここへやって来たんだ」

「なんだって……。？　また、あの人が？」

そんなばかな。彼はシュテファン大聖堂で幽閉されていたはずじゃないか。なぜ、このタイミングで？

「それだけじゃない。やつはお前をここで処刑するつもりだ。わたしに面と向かってそんなことを言ってきたんだぞ、あの男は！」

「そうか……」

「な、なにをそんなに冷静でいられるんだ、お前は！　これから殺されるということなんだぞ？」

人に「落ち着け」と言っておきながら、クリステイナの方が遥かに慌てていたんじゃないよ。……。まあ、彼女がこうして取り乱してくれたから逆に冷静でいられるんだけどさ。

それにしたって、なんで彼女はわざわざ僕にそんなことを知らせて来てくれたんだろうか。少し疑問に感じるし、訊いてみようか。

「なんできみはぼくにそのことを教えてくれるんだい？　ぼくは、きみの父上から見れば政敵なんだ。そんな人間に……」

「そ、それは……。……た、単に、お前からまだ日本の歴史を聞き終えていないからだ！　まだ“鎌倉幕府”の成立までしかわたしは知らない。お前の“知り合い”がいたという時代まで、まだ八百年はあるじゃないか！　死ぬならせめて最後まで話してからにしろ！」

……。なんというか、本当にこの子は日本が好きなんだな。師匠な人物とは、一体どんな人だったのだろうか。

「……それに、まだ日が浅いとはいえ、知り合った人間が目の前で殺される光景など、見たくはないんだ」

クリスティナはなにかぶつぶつと呟いていたようだったが、ぼくには彼女がなにを言っているのかはよく聞き取れなかった。

……おっと。

それより、さっさと鍵を壊してしまおう。彼女の話通りなら、彼はそう遠くなくここに来る。あるいは、僕が連行されることになるだろう。さっさと鍵を壊してしまわないと。

僕が窓脇によじ登って鍵を壊そうとしたとき、ようやく綺麗に剥がされた石の壁の存在に気がついたクリスティナが問いかけてくる。

「……そういえば、さっきからなにをしているんだ？」

「鍵を壊すんだ。元々、ぼくは今日にでもここを出るつもりだったから」

「いや、だが……。ロプシャは我がオクシェンセルナの領地だぞ。軍の駐屯地もある。単独では……」

「わかってるよ。でも、助けがない以上は自力で行くしかない。危険を知らせてくれてありがとう、ぼくはもう行くよ」

「だ、だが——むぐっ!？」

少し変な声が聞こえたが、ぼくはクリスティナに背を向けたまま、なかなか強情な鍵の取り壊し作業を続け、ついに窓を開けることが出来た。

だけど、その次の瞬間だった。

背後から、いつか聞いたことがあるあの声が聞こえてきたのは。

「まったく、この娘から事実を知らされてなお呑気に鍵を壊し続け

るか。なんとも軽薄で、なんと危機感のない子供だ」

それは間違いなく、過去に何度も耳にしたことのある声だった。父を嫌い、その父に後継者指命されたぼくを嫌い、一時期は皇帝として戴冠した男の……。

彼がなにをしてくるのかわからない以上、とにかく杖で牽制する必要があった。僕は咄嗟に振り返り、杖を構えようとした。

その刹那——唐突に、何かが弾けるような音がした。

なにが起きたのかわからないまま、胸元を見やる。すると、身に付けていた白いシャツに穴があいているのがわかった。そして次の瞬間には、穴の周囲が段々と赤くなり始め、血が吹き出ているのだと理解する。

眼前には、薄く硝煙を上げる拳銃を手にした従兄カール・アルブレヒトと、彼に押さえ込まれ、口を塞がれたクリスティナの姿があった。

「きみは持病の……そう、痔の発作で亡くなったと、我が愚妹には伝えておこう。安心するがいい」

ふざけるな、ぼくは痔なんか患ってない——この胸を撃たれたこの状況では、もうそう反論することも出来なかった。

銃弾は恐らく心臓は逸れたのだろうが、しかし左半身の上部を撃たれたことに変わりはない。血は相変わらずじわじわとシャツを濡らし、意識は朦朧とする。

やがて、とうとう姿勢が保てなくなり、上半身が窓の外に向かってぐらりと傾いた。窓の向こうに広がるのは断崖絶壁だが、今の自分にはもう窓枠に踏みとどまる力すら残されていなかった。

「さらばだ、愚かなる我が従弟。最後に勝つのは私だったな。……貴様はただの無能であったが、生まれの不幸さえなければ、少なくともこのような末路をたどることはなかったのだらうよ」

奈落に向かって落ちる直前。僕が最後に見たものは、晴れ渡るような笑みを浮かべた従兄の勝利宣言だったのだ。

……本当に、もっとマシな物は見られないのかと思うほど、ろくでもない光景だった。

——帝都にあるツェルプストーの屋敷から馬を走らせること、二時間。わたしたちはオクシェンセルナ大公領の飛び地、ロプシャへとやって来ていた。

ロプシャはドナウ川の西岸にある、パンノニア平原の中では珍しく起伏に富んだ土地らしい。

その原因は数百年前の地殻変動とか、いや風石を掘るときに過剰に地盤を破壊し過ぎてあちこち陥没したとか、どうも理由はあやふやなのだという。

実際にこの土地へ来てみると、確かにかなり起伏のある場所だというのがよくわかった。

遙か遠くには、森林に囲まれた、欠落著しい禿山の天辺に聳え立つ領主の館が見える。断崖絶壁のすぐ脇には古びた背の高い尖塔があるようだ。

……ここ、本当に帝都から馬で二時間の場所なのかしら。東方辺境と言われても納得できるくらいなのだけど。

「なんだか、辺境を思い出しますね」

「あら、あなたは辺境の生まれなの？」

「あ……。え、ええ……」

あまり話したくなさそうね。わたしは無理してまで聞き出す気はないけれど……。名前からして、てっきりパンノニア辺りの生まれだと思っていたわ。

ま、それは今重要なことじゃないわね。それよりも、馬を休ませなければいけないこの時間がとても惜しく感じてしまうの。でも、ちゃんと休ませないといけないからそれは仕方ないのだけど……。

「そろそろ、向かいましょうか」

「はい」

馬に乗りなれていないのでしょう。エリザベートは腰の辺りを押さえながら渋い顔をしていたのだけれど、少し休んだ今はもう大丈夫なようだった。

それから、わたしたちは再び馬に跨がって領主の館目指して悪路を進んだ。途中ではいくつもの橋を渡り、荒れ果てた田畑の脇道を突っ切る。

オクセンシエルナ大公がこの荒れ果てた土地を購入したのは比較的最近のことであるしく、まだまったく整備を行っていないようだった。

そして、やがてとうとう禿山の麓に到着。馬を付近の適当な木に繋ぎ、わたしとエリザベートは頭上を見上げる。

「いよいよ……。なのかしらね。でも、一体どうすればいいのかしら？」

「オクセンシエルナ大公が戻ったということは、屋敷の警備はより強化されているかもしれませんね……」

「正攻法では行かずに、あそこの切り立った崖を『フライ』上がって……ああ、それだと厳しいかも」

あいにくながら、わたしはそれほど風の魔法は得意ではない。『フライ』は自分だけ山の天辺に行くのが精一杯。エリザベートまで運ぶ余裕はない。

でも……。それはそれでいいのかもしれない。ここまでこの子を同行させてしまったけれど、さすがにこれ以上連れていくことには不安がある。

そう考え、わたしはエリザベートにここで待つように伝えようとするものの。すぐに、その考えが間違いだったと気づかされてしまう。

「では、行きましょうか」

彼女は、太股のバインダーから真新しい杖を取り外したのである。

「……あなた、魔法使えたの？」

「これでも一応、貴族の生まれなので……。わたしは水のドットです。カールには秘密で練習してきたんですよ」

なんとも意外というか、まったく予想していなかったというか。まさか、もう魔法を覚えていて、しかももうドットだなんて思ってもみなかったわ。

もうやむを得ないのかしら。とにかくなんとかカールを見つけて、わたしたちが敵に発見されないうちにここから――

「あっ……！」

そのとき。禿山のある断崖絶壁の上から、何かが落ちてくるのが見えたのだ。目を凝らしてみると、それは人型であるようにも見える。その瞬間、わたしの脈は尋常ではないほどにその速度を増した。どうやら、“その”予感がしたのはわたしだけではないらしい。エリザベートも同じように顔を強張らせ、何かが落ちていった方向を食い入るように見つめている。

「……行つて、みましようか」

「はい」

そのときのわたしは、自分の声がひどく震えていることに気がついていた。まだそうと決まっていたわけではないのに、どうしてこんなに不安でしようがないのかしら……。

——そして落下地点に到着したとき、わたしはどうとうこれまで悪夢が真の意味で現実のものとなったことを知った。

帝都から風竜に乗ってロプシャへ到達していたフリードリヒ二世とヴルムは、禿山の上に聳え立つ屋敷を目指していた。

道中、彼らはオクセンシエルナに所属すると思われる竜騎士の襲撃を受け、つい先ほどまで交戦していた。そのため、予定よりもかなり到着が遅れていたのだ。

既にヴルムの風竜の体はぼろぼろの状態に陥り、飛行速度は非常に鈍足と化していたが、ヴルムはそんな風竜に鞭を打って主君の下

へと向かっているのである。

と、そんなときであった。

ヴルムの視界の先――屋敷の敷地内、禿山の切り立った断崖の上に聳え立つ尖塔から、何かが落下していく様子が垣間見えたのである。目撃したのは彼だけではなく、フリードリヒ二世もなんとか目を凝らして落下物の正体を見極めようとしていた。

「あれは、まさか」

「見間違いの可能性もあります。まずは一度、落下したと思わしき場所へ向かってみましょう」

「そうだな……。いや、そうに決まっているか」

数騎の竜騎士たちとの戦いによって、彼らは皆疲弊していた。フリードリヒ二世に至っては、敵の風竜のブレスを自身の魔法で防御したときに衝撃を殺しきれず、片腕を複雑骨折しているほどだった。しかし彼は泣き言の一つも口にしなかった。目的を果たすまでは絶対に引かない、不退転の決意をした以上、もはや弱音を吐くような真似などするはずもないのだ。

だが、そんな彼らですら先ほどの“落下物”には非常にネガティブな感情を持たずにはいられない。それが考えすぎだと、杞憂であると考えようとはしていたのだが……。

やがて、彼らは何かが落下したと思わしき地点に到達した。風竜に近くの木に止まるように言いつけた後、ヴルムとフリードリヒ二世は『レビテーション』で地上へ向かった。

そして、そこで目にした光景は……。

「ミス・ツエルプストーリー……」

その場所は鬱蒼と木々が生い茂る森林の只中であった。周囲に折

れた枝葉が散乱する中で、まるで血のような色の髪を伸ばした少女が地面に腰を吸えている。

ならば、地面に見える赤い色は彼女の髪なのだろうか。ヴルムは一瞬そう誤認してしまうが、しかしすぐに“それ”が髪の色などではないことに気がつく。

赤い。あまりに鮮明に赤いのだ。単純な赤ではなく、真紅。人間の血の色だった。

キュルケは上半身が血まみれになった少年を抱えていた。彼女の服も血の色に染まり、かつて純白であったろうシャツには、まるで藍染めのような模様が描かれている。前髪に隠れ、彼女の表情はわからなかった。

「これは……」

さすがのフリードリヒも、もはや言葉がなかった。かつて目の前でフォン・カッテが斬首されたときとは違い、彼自身精神的に成長してはいたが、あまりにも惨いこの光景に平静を保てそうになかった。

“落下物”は人だった。カール・ペーター・ウルリヒ。つい先ほど、フリードリヒが決して死なせぬと誓ったはずの人物なのだ。

彼のシャツの左胸の部分にはぼっかりと穴が開いていた。それは、彼が銃撃を受けたという証拠だった。

キュルケと対になるような位置には、まだ幼い少女がいた。フリードリヒも何度か会ったことがあるエリザベートだ。彼女は少年の手を握り、ぼろぼろと涙をこぼしながら『治癒』の魔法をかけ続けた。

もうさすがのプロイセン王にも、この場で自分がどう行動すべきなのか判断が付かなかった。彼は、搾り出すように、かすれた声で疑問を発することしかできない。

「一体どういうことなんだ。どういうことなんだ、これは」

「……わからないの。何かが落ちてくるのが見えたから、急いでここに来たら……、こんなことに……」

赤い髪の少女――キュルケはそう答えるが、それはなんらこの状況に至った理由をフリードリヒが知ることは貢献しなかった。

「彼は、カール・ペーター・ウルリヒは生きているのか」

「……はい。まだ、辛うじて息はあります。でも……。これでは、いつまで……」

キュルケはもう答えることが出来なかった。代わって少年の手を握っているエリザベートが答えるが、彼女は慣れない体で『治癒』を使っていたため、精神力を消耗しているのが明らかだった。

「もうやめろ。このままではきみも限界が来る。ぼくが代わりに……」

「わたしは、この子のためにこの魔法を覚えたんです。最後までやります」

「……そうか」

幼い少女ながら、彼女の意思は強い。決して魔法を使うことをやめようとせず、額に汗を浮かべながら『治癒』を続ける。

その甲斐があったのか。あるいは、なにかもつと別の作用があったのだろうか。ようやく傷口からの出血が止まったとき、カール・ペーター・ウルリヒはゆっくりと目蓋を開いたのだ。

「カール！ ああ……！ よかった！」

「キュ……ル……ケ……、エリ……ザ……ベ……ト……なの……か……」

「しゃべったらだめよ。今は大人しくしていて」

もう駄目だ、死にかけていたと思っていた人間が、ようやく目を覚ました。その事実にはキュルケは思わず全身から力が抜けていく感覚を覚えた。

これにはフリードリヒやヴルムを思わず表情を明るくする。しかし、『治癒』をかけ続けていたエリザベートただ一人だけは、その曇りきった表情を変えることがなかった。

ここで、フリードリヒは少年に確認しなければならぬことがあることを思い出す。それは彼の胸に残る銃弾の跡を、一体誰が生み出したのかということだった。

「口で答える必要はない。ただ、どうしても教えてもらいたいことがある。きみを撃ったのは誰だ？ オクセンシエルナ大公か？」

そう問いかけるが、首はわずかに横に振られた。

「ならば、大公軍の士官か？」

しかし、またも首は横に振られる。そこでキュルケが割り込み、こう訊ねた。

「あなたを撃ったのは……、カール・アルブレヒト……。彼なのかしら」

「なに？」

フリードリヒはこの場にカール・アルブレヒトがいるという事実を知らなかった。否、キュルケのそれもあくまで予想に過ぎないものではあったが、彼女の考えは正しかったらしい。今度は首が縦に振られた。

——まさか、またしてもやつは自らの甥を手にかけてようとしたのか。

若きプロイセン王は内心ひどく憤慨した。もはやあの男を生かす意味などない。たとえ、この少年がそれを望んだとしても、もはやフリードリヒにはあの廃帝たる青年を許すことが出来なかったのだ。

「リッター・ヴルム。ぼくはこれから屋敷へ上がり、“あの男”を国家反逆罪及び殺人未遂で、オクセンシエルナ大公を国家反逆罪の容疑で逮捕する。一緒について来てくれ」

「……了解しました」

「後でまた会おう、カール。それまで、絶対に死ぬなよ」

去り際にフリードリヒはカール・ペーター・ウルリヒの手を握る。酷く冷たく、酷く弱々しい力で少年は王の手を握り返した。

「陛下。必ずやあの男は私が捕縛します。どうか、救援が来るまでご辛抱を」

ヴルムには確信がある。恐らく、自分たちを追って帝都の部隊がもう動いているはずだという確信が。故に、彼は主君をこの場に置いて敵を討つことを決めたのだった。

そんな長年自らに仕えてきた騎士に、この国の皇帝たる少年は静かに笑みを返す。

「……待って。わたしも行くわ」

そして、いざフリードリヒとヴルムたちが禿山の上に向かおうというとき。それまで地面に座ったままだったキュルケが立ち上がり、唐突にそんな台詞を述べた。

「だめだ。きみは女性だ。これからぼくたちが行おうとしている事に、付き合わせるわけにはいかない」

「わたしは曲がりなりにも彼の婚約者よ。……婚約者が二度もこんな目に遭わされて、黙っていられるほど温厚な性格じゃないの。わたしは」

「だが……」

「戦力は多いほうがいいでしょう。あなたがいくら数十体のゴーレムを同時生成・操作できる豪傑だとしても、相手は列記とした大諸侯の手勢なのよ」

フリードリヒは土のスクウェアメイジだ。また、彼は軍事や土魔法に関しては、あのガリアのシャルル王子ですら遥かに凌駕する手腕を持っているとさえ評されている。

しかし、それでも数十倍の規模の敵勢を相手にするには厳しい。ヴルムも非常に優秀なメイジだったが、彼もまた“個”の存在だ。あまり相手が多い場合は対処しきれない可能性があった。

「それにわたし、今ならなんでも出来そうな気がするの。わかるのよ。体の奥底から、煮えたぎるような“何か”が上ってきているのが」

一見して、キュルケはごく冷静なように見えた。穏やかな笑みを浮かべるその様は、この年齢にして一種の“凄味”を持っていると感じられるほどだ。

「……わかったよ、好きにするといい」

余談ではあるが、フリードリヒは“したたかな”女性に弱い。性格だけで見れば、キュルケは彼にとって非常に好ましい女性だった。そして実力も感じられる。この少女ならば、最低限自分の身を自

分で守ることはできるだろう。そう判断し、フリードリヒは彼女の同行を許可することにした。

「カール。待っていてね。すぐ片付けて、戻ってくるから」

最後にキュルケはそう婚約者の少年に告げ、フリードリヒやヴルムたちと共に『フライ』で天高く上昇していった。

やがて、彼らの姿は徐々に小さくなっていく。

「……ありがとう。最後に、彼らの顔を見せてくれて」

そんな、空へ昇る三人を見送りながら。

カール・ペーター・ウルリヒは、己のすぐそばにいる少女に向かって穏やかな表情で小さく礼を言う。今にも消え入りそうな、まるで灯火が失われる寸前のロウソクを思わせる声音だった。

そんな少年の様子とは裏腹に、エリザベートの顔は苦痛に歪み、もう涙が止まらなくなっていた。

彼女はもう理解していた。……否。彼女はもうすべてを悟っていたのだ。なにをしたところで、たとえば水のスクウェアメイジが『治療』をかけたところで、もう彼は助からないと。

あまりにも血を流しすぎたのだ。止血もされずに放置された時間が長すぎた。あの状態からでは、誰であっても無駄な延命を施すことしかできないのだ。

——そう。唯一の例外、ハルケギニアに住まう精霊たちの力を借りて行使される強い力、『先住魔法』を除いては。

「ごめん、なさい……。わたしがもっと、魔法を使えて……。もっと早く、ここに来られていたら……！」

「いいんだ。どの道、僕は心臓の近くを撃たれている。自分の身体

のことは自分が一番よくわかるよ……。それでも、僕は水のメイジなんだから」

「そん、な……」

「きみの魔法のおかげで、まだ時間を稼ぐことができたんだ……。謝ることなんてない」

事実、もはや少年の出血量は致死量に迫っていた。彼は最後の力を振り絞り、水の魔法を用いて体内の血流を操作している。上半身の血流を維持するため、もう脚にはまったく血が巡っていなかった。エリザベートはもう立つこともできない少年を、カールを抱き寄せる。そして、彼の頭を自らの脂肪の薄い膝の上に乗せる。

彼女は血まみれの髪を撫でた。ゆっくりと、丁寧に。“いつか”彼にしてあげたように。

「風の魔法は……『フライ』は、ずっと苦手だったんだ。でも……、ツェルプストーに行ったときもそうだったけど……、人間、命がかかっていると、なんとかなるものだね……」

カールはオクセンシエルナの屋敷から墜落したとき、咄嗟に『フライ』を詠唱することで地面に衝突する際の衝撃を和らげていた。今度は翼人の少女の手を借りず、自分だけの力でそれを成したのだ。

「最後に……。聞いてくれるかな。ただの、死に際の戯言だと思ってくれて構わない。でも、いつか誰かに聞いてもらいたいと思っていたんだ……」

ふと、なにを考えたのだろうか。カールは目を閉じ、懐かしい何かを思い出すように口を開く。

「僕にとって、今の人生は二度目の人生なんだ。記憶を保ったまま

の生まれ変わり……、なんていうとまるで御伽噺のようだけど……。僕は、実際にそれを体験したんだ。自分でも、いまいち信じきれないところはあるけど……」

カールはエリザベートが自分の話を信じてくれるとはまったく思っていない。本当に、最後の最後に言いたいことを言っただけなのだ。

だが。

「信じるわ。だって、わたしは……。わたしだって、あなたと同じだもの……」

「……！」

——ああ、そうだったのか。彼女がこの年齢にしては、やけに落ち着いていたのは……。いつまでも成長できない僕に比べて、ずっと大人じゃないか、エリザベートは……。

カールはこの少女が自身と同じような境遇にあったのだと知り、常日頃から彼女に感じていた“感覚”の意味を悟る。

「前世はこの世界の人間じゃなかった。日本ていう国の……、そう。貴族なんて、信じられない国だった。受験の合格発表が終わって、祖父や祖母がいる家に帰ろうとしたとき、僕は……」

「わたしは、病死だった。生まれつき身体が弱くて……。前世もこの世界の人間だったの」

「そっか。なら、僕の話はよくわからないだろうなあ……」

現代日本とハルケギニア。そこには、史実の中世と同じ……。それ以上の文化的な差異がある。エリザベートがカールの言うことを理解することは不可能だろう。

「は、はは……。なに言ってるんだろなあ、僕は。こんなときに……」

どれだけ魔法を使おうと、既に衰弱した人間のそれでは限界がある。もうカールの世界は暗闇に閉ざされていた。杖を握る手の力は徐々に弱まり、なんとか動かしていた口も段々と重くなっていく。

「暗いな。寒いよ……。また、終わるのかな。もう終わりなんだろ
うか。どうして、僕は………」

「……カール？」

その刹那、カールの手から杖が地面に落ちる。最後の最後まで振り絞って得た時間は、ついに終わりを迎えたのだ。

それを理解したのだろう。エリザベートは表情をより強く歪める。
膝の上にあった彼の頭を抱きかかえる。

「せつかく、また出会えたのに。こんな終わり方……。ないじゃない。
なにが始祖よ。なにが神よ……。そんなもの……。どこにだっ
ていないじゃない！」

初めてだった。

“生まれて”初めて、エリザベートは己の激しい感情を露にした。
かつて東方辺境諸侯の両親の下で暮らしていた頃も、キールに、ウ
インドボナに移ってから、彼女はずっと己を封じていたのだから。

望まずして皇帝の血族に生まれ、力不足ながら精一杯皇帝になろ
うとしたカール・ペーター・ウルリヒの歴史はここで幕を閉じるの
だった。

もはや物言わぬ少年の頬へ、大粒の涙が落ちる。そして、それと共にひらりと真っ白な羽根が舞い落ちた。

それはまるで天使の羽根のようだったと、後にエリザベートは回想している。

「カール……?」

——最後の瞬間。オクセンシエルナの屋敷の内部にしながら、キュルケは自らの婚約者の終わりを直感的に捉えていたのだった……。

エピローグ

——始祖暦六千二百四十二年。ニューイの月是中ごろ、夏の休暇前の時期。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーは、トリステイン魔法学院の二年生へと進級していた。

彼女は現時点で十七歳だ。十六歳となる年において入学することが多い魔法学院において、彼女がこの学院に入学したのは慣例からすればやや遅いと言える。

その原因は彼女が祖国ゲルマニアは帝都の魔法学院で起こした、とある事件に起因するものがあつた。彼女はその件で学院を退学となり、隣国トリステインの魔法学院へと留学してきたのである。

その詳細は、彼女やごく少数の当事者、政府関係者などにしか知られてはいない。

ただ、純然たる事実だけを挙げるとするならば。

——それは、彼女が複数の反プロイセン派貴族出身の生徒を、文字通り死の寸前まで追い詰めたという、ただ一点のみに限られるのであつた。

「ねえタバサ。あなたの風竜すごいわねえ。こんなにすごい個体、今まで見たことがないわ」

「ふふん。それほどでもないのね。きゅいきゅい♪」

ガシッ。ボカッ。風竜から人語のような物が飛び出たかと思われた瞬間、キュルケの隣に立つ青い髪の少女——タバサが、手にし

た大きな杖で自身の使い魔を思い切り殴りつけた。

そんな光景を唾然とした表情で見守りつつ、しかしキュルケは問いかける。

「いま、この子しゃべらなかった？」

「気のせい」

「でも」

キュルケがなおも食い下がると、タバサは……。

「……実はわたしの腹話術。きゅいきゅい♪」

「そう……、とってもよくわかったわ」

と。タバサが先ほどの奇怪な声のモノマネを試みるが、ぶつちやけまったく抑揚がないし、声の質自体があまりにも似ていない。完全に苦し紛れである。

微妙にこの子の将来が不安にならないこともなかったが、キュルケはそれ以上問い詰めなかった。

タバサは謎が多い少女だ。生まれがガリアであること、タバサという名が偽名であること、時々ふらっとどこかへ消えること。そして、優秀な魔法の手腕を持っていること。本が好きなこと。

彼女という人間についてキュルケが知っているのは、せいぜいがそのくらいだ。

グラマラスな肉体を持つキュルケ。一方、洗濯板とも称されるタバサ。一見なにもかも対照的な二人だが、なぜかお互いに気が合うらしい。一年の頃から、二人は親友になっていた。

「はあ。フレイムはどこかに行っちゃったし、タバサはタバサだし……。なにか、面白いネタはないかしら」

などとキュルケがぼやくと。唐突に、タバサが懷から紙の束を取り出したではないか。

「……これは？」

「新聞。ウィンドボナで発行されているもの」

「ふうん……」

新聞。ずいぶんと懐かしい物だ。一時期はキュルケも毎週のように目を通していたものだが、約二年前に起きた『ロプシャ事件』を契機に、彼女はこういった時事ニュースに関心を示すことが無くなっていた。

かえって彼女の妹のアウグステの方が新聞に興味を示し、気に入った記事を切り取ってスクラップするという趣味を始めるほどだった。

「ふむふむ……。『我がフリードリヒ帝、ゲルマニアのブリミル教会をロマリアより分離することを発表。ゲルマニア正教会を立ち上げ、ロマリアに“冷たい”宣戦を布告』——って、なにこれ！？」

「大ニュース」

記事には、即位から一年を迎えるホーエンツォレルン朝のゲルマニア皇帝フリードリヒが、つい先日大々的にぶち上げた政策が大きく報じられていた。

タバサは相変わらず無表情だったが、これは他の生徒が知ったら大騒ぎではすまないニュースである。キュルケの反応でも大人しいほどだ。

……ちなみに、この頃の新聞には、最近になって開発された新種の魔法による『写真』を掲載することが可能となっていた。さらにそこへ『東方』から伝わった高度な印刷技術が加わり、なぜかゲル

マニアの新聞は革命を起こしていたのである。

もっとも、『写真』を製造することができるのは、ゲルマニアに
いるごく一部の精鋭のみである。他国にはその技術を扱うことは不
可能で、『写真』は極めて戦略的な価値を伴うようになっていた。

ゲルマニアがその技術を独占している以上、そもそも他国の人々
には縁のない話ではあったが。

「なんだそれ？ ……へえ、ゲルマニアって写真があるのか」

「あら。サイト、あなた知ってるの？」

「知ってるよ、そりゃ。にほ……いや、俺がいたロバ・アルなんち
やらでは、あって当たり前の技術だったんだ」

「へえ……」

背後から新聞を覗き込んできたこの黒い髪なパーカーの少年。名
前を平賀才人といい、キュルケによく突っかかってくる少女が召喚
した異世界の人間だった。

彼は持ち前のスケベ心を発揮し、新聞を覗き込むのと同時に、キ
ュルケが着ているシャツの隙間から見える豊満な胸の谷間を堪能す
るという暴挙に及んでいた。

だがしかし、そんな状態で彼が見咎められないはずもなく。

「へえ。あんた、そうやって女の人のむ、むむむ胸、覗くんだ……。
し、しかも、よ、よりによってツエルプストーの女なんかを……！」

そこに現れたのは、平賀少年の“飼い主”である少女、ルイズ・
フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールである。

極めて珍しいストロベリー・ブロンドの綺麗な髪をしたトリステ
インでも指折りの大貴族の令嬢であり、なぜか平民の少年を召喚し
てしまった不運な少女でもある。

あだ名は“ゼロ”だったが、キュルケがその名でルイズを呼んだ

ことは一度もなかった。むしろ、あまり彼女と敵対することもなければ、使い魔の少年を狙ったことさえない。言わば、一方的にやっかみを受けている状態だった。

「る、ルイズ!? ……いや、俺はなにもしてない。そう。キユルケお嬢様のお胸に、イケナイ悪い気が溜まって——」

平賀少年は“ご主人様”の登場に慌て、言い訳になっていない言い訳で乗り切ろうとするが……。結論から言ってしまうえば、そんなものはまったく通用しなかった。

「ふざけるんじゃないわよっ!!」

「ご、後生だっ!」

「逃げるんじゃないわよ! きよ、今日こそご主人さまの威厳を見せ付けてやるんだからっ!」

「うわああああッ——!」

とまあ、目の前でご主人様とバカ犬のいちやいちやが繰り広げられていたが、タバサはまったく興味を示さないし、キュルケもやれやれと肩をすくめるだけだ。

それきり使い魔の主従から興味を失い、再び新聞に目を落とすと……。

シュレースヴィヒルシュタインルプ公位はペーター三世の親族であるアドルフ・フレドリクが継承したが、そんな彼がデーン人自治区であるケベンハウンを訪問したというニュースが目に入る。

次に、最近ゲルマニア軍近衛部隊の隊長職に就いたヴェンツェル・フォン・ヴルムが、出身国であるベーメン王国のクルデンホルフ王

に『ベーメン貴族功労賞』を授与されるという記事。

今は亡きオクセンシエルナ大公の一人娘であるクリスティナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシエルナが、所属する東方辺境総督府軍にて武功を上げ、表彰されたことも報じられていた。

そして今度は、フリードリヒ帝が東方辺境を訪れ、現地の『東方辺境総督府』首班のモスクワ大公と会談を行ったという一面のニュース。

元々かなりの歴史がある皇帝直轄都市のモスクワだが、昨年になって新興のロマノフ家がその統治権を得ていた。

モスクワ大公はゲルマニア皇帝によって直々に任命された存在で、その開祖に当たるのが現当主のピョートル・フョードロヴィチ・ロマノフである。

彼の出自ははっきりとしないが、どういうわけかフリードリヒ帝や MARIA・テレジア大公から絶大な支持を受け、亜人——特に翼人部族などの協力の下に、東方辺境地域の開拓を急速に進めていた。今回の新聞には、そんな若き大公の姿がばっちり『写真』に収められている。左から順に、皇帝、大公、大公の……。

「……ぶふっ!？」

皇帝と握手を交わすモスクワ大公の『写真』を目の当たりにしたとき、キュルケは思わず口に含みかけていた紅茶を噴出してしまう。そのとばっちりを受けたのは、隣に座っていたタバサだった。

「そ、そんなことが……。ちょ、ちよっと、待ってよ!」

モスクワ大公の腕にしがみつき、妙にカメラ目線の亜麻色の髪

少女。そして、似た髪の色をした背中に羽根を生やし、やはり腕にしがみついている翼人の少女。キュルケには、彼女たちに大いに見覚えがあった。

そして、彼女たちに腕を掴まれているモスクワ大公その人にも……。

「た、タバサ！ 今すぐマツハでモスクワまで飛ばして！！」
「だが断る」

キュルケはもういても立ってもいられなくなった。自身にかけられた紅茶を拭い、眼鏡を吹いているタバサに向かってかなり理不尽な要求を吹っかけた。無論、それは拒絶されるが。

「あなたのシルフィードの方が、サラマンダーよりずっとはやい！
んだからなんとかしてよっ！」

「なにか恣意的に感じる。その台詞は……。とにかく、ここからモスクワは無理。途中で死ぬ」

「頼むわ！ 一生のお願いだからっ！」
「むう……」

ここだけの話。タバサは、キュルケにお願いされると、どうしても外せない用事があるとき以外はなんだかんだで彼女のお願いを受け入れてしまうのである。故に、今回もそうなるのはまた確実であった。

「……なにしてるんだ、あいつら？」
「さあ？ そんなことより、覚悟はいいでしょうね？」
「大事な部分は、大事な部分だけは勘弁してください。ほんとお願いします……」

なんだか平賀少年は男として危機的な状況を迎えているらしい。そんなことは、キュルケやタバサの知ったところではないが。

「ふう。やっぱり、シルフィードは乗り心地がいいわね。これなら快適な空の旅ができるわ」

「……」

「どうしたの？」

「……あなたは、“彼”に会いに行くの？」

“彼”。

キュルケがそう呼ぶ存在はたった一人しかない。タバサがその存在を知るのは、ワインに酔ったキュルケがたまに愚痴交じりにそのことを話していたからだろう。

急に真剣な表情になったタバサに、キュルケも同様に真摯な表情となり、やはり真摯な声音で青髪の“親友”に向かって答えた。

「ええ、そうよ。“彼”は今でもわたしの婚約者なの。まったく、偽名なんか使っちゃって。今まで一切連絡もしないなんて許されないのよ！ 地の果てまで追いかけて問い詰めてやるわ」

「ダメンズウォーカー……」

最後にタバサが呟いた一言は、シルフィードが大きく羽根を羽ばたかせる音にかき消されてしまう。結局、その一言がキュルケという女性の耳に入る機会はないのだった……。

エピローグ（後書き）

この物語はこれで終わりです。

中断期間もありましたが、どうにか完結に漕ぎ着けられました。

ここまでお付き合いくださった方々に感謝を。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7808p/>

彼が異世界でたどる道

2011年11月13日18時10分発行